

# 大菩薩峠

椰子林の巻

中里介山



今日の小春日和、山科の光仙林から、逆三位ぎやくさんみいつたい一体が宇治醍醐だいがの方に向つて、わたましがありません。逆三位一体とは何ぞ。

信仰と、正義と、懷疑とが、袖をつらねて行くことであります。本来は、まず懷疑があつて、次に正義が見出され、最後に信仰に到達するというのが順序でありますけれども、ここではそれが逆になつて、懷疑が本体になつて、正義と信仰とが脇侍わきじであり、もしくは従者の地位しか与えられていない、ということころが逆三位一体と、かりに名づけたもので、三つ一緒に歩いているから三位の観を呈するまでのこと、内心に於ては必ずしも一体でなく、また一体ならんと予期してもいいない。

信仰がまず正義を呼んで言いました、

「ねえ、友さん、しっかりしなくっちゃいけないよ」

「うん」

ここで、まず、信仰と正義との受け渡しがありました。

女がまず口を開いて、男がこれに応じたこと古事記の本文と変りはありません。だが、ここでは巻直しにならないで、女の方があくまで押しが強い。

「お前という人は、正直は正直なんだが、信心ごころというものがあります、人間、正直はいいけれども、正直ばかりじゃ世に立てないよ、信心だね、人間のことは神様仏様がお見通しなんだから、神様仏様を御信心をして、それからの話なんですよ、今日はお前、お嬢様が御信心ごころでおいでになるんだから」

ここまで教訓した信仰の鼓吹者は別人ならず、江戸の両国の

女おんな軽業なかるわざの親方、お角さんなのです。お角さんはあれで信心者だから、仮りに三位一体の信仰のひとしらしら一柱に見立ててみたまでのこととで、その神妙な指令の受方うけかたになつてゐるのが即ち宇治山田の米友なのであります。

宇治山田の米友は正義の権化ごんげです。そこで、これを三位一体の一柱と見立てたが、信仰の申渡しに反対して、正義はあえて主張を試みないでいると、懷疑が代つておもむろに、それをあしらいかけました。

「わたしは信心者ではありません」とまず、おごそかに否定をしたのは、逆三位の本体たる懷疑者の声明としては至当の声明であります。

「わたしは、神様も仏様も信じません、では何を信ずるかと言えば、まあ自分を信ずるといふほかはないでしょう、だが、そ

の自分も信じきれないのでね、何を信じていいかわからないんですよ」

覆面をして、背たけのすらりとした美人、姿だけを見て言う、お銀様です。否定された信仰者はあえて動揺もしないで、直々に受取って、

「わからないでする信心が本当の信心で、わかつてする信心は本当の信心じゃないって、伝道師さんがおっしゃいました」

「そんなことがあるものですか」

信仰者が、逆らわずに補綴ほていを加えようとするのを、懷疑者は立ちどころにハネ飛ばして、

「そんなばかなことがあるものですか、わからないで何の信心ができますか、物の道理がわかつて、はじめて信心をする気になるのでしよう、わからないものを信ぜよと言って、信ずるこ

とができますか」

「いいえ、お嬢様、そこのとところが……そこのとところが、その何なんです……」

何か相当の抛りどころはあるらしいが、口の上せてはつきりと補うことができない、そこに信仰者の悶えがありました。ハネ飛ばされてもしよげもしないし、反撥もしないところに、信仰に於ける相当の自信があることはあると受取れるのですが、さて、立ちどころにその反撥に応酬して、相手を取って押えるだけの論鋒が見出せない、その悶えをかえって懷疑者が補ってやるという逆三位。

「いいんですよ、親方のは親方のでいいんですよ、お前さんは信心者なんだから、それでいいのよ、鯛の頭も信心から、つて言うでしょう、それは軽蔑して言うんじゃないやありませんよ、鯛の

頭をできえ信じきれぬ人が結局エライんです、鯛の頭をできえ信じ得られる人が、人間を信じなくてどうするものですか、人間を信じ得られる人は、神をも、仏をも、信じ得られる人なんです、それは幸福です、偉大できえあるんです、ところが、わたしときた日には何もものをも信じ得られません、悲惨ですね」

ここに至つて、女軽業の親方はグウの音が出ませんでした。

相手から逆十字がらみに抑え込まれたのですから、抗弁の仕様もなく、さりとて納得しきるには頭が足りない。こうして女軽業の親方は、いつもこの暴女王ばかりが苦手にがてなのです。

なるほど、お角さんという人は、信心者は信心者に相違ないけれども、その信心たるや、あまりに広汎にして色盲に近く、その祈念たるや、あまりに現実的にして取引に近いだけのものです。それは熱田神宮へ参詣して、そつと茶店の女中に耳打ち

して、「この神様は何にきく神様なの」とたずねて女中を面喰わしたことでもわかります。ドコの荒神様こうじんさまを信心すれば金談がまとまるとか、ドコの聖天様しょうてんさまは縁結びにあらたかだということとは、江戸府内ならば大抵は暗記していて、おのおのその時と事件に合わせることを心得ての信心ですから、いわば神仏に信心を捧げて置いて、それからお釣を取ろうという信心なのです。そうかといって、その信心を捧げた神様仏様がお釣をくれないからと言って、それを怨むうらようなことは微塵みじんもなく、それはちやうどこの時分に、神様が御不在であつたり、さらずば自分の信心の仕方に足りないところがある。己おのれの信心の誠意は自ら疑うことはないが、その作法に何ぞ神様仏様のお気に召さないことがあつて、それでお聞入れにならないから信心が届かない、こゝう信じているのだからかえつて己なほれを直くすというわけで、こ

の点では、やはり功利以上に超越した信心者の名を許して、さしつかえがないと言わなければなりません。

二

かくて、この三位一体は、山科から醍醐だいにごへの道を、小春日をいっぱいこうばいに浴びて、悠悠閑々ゆうゆうかんかんと下るのであります。道は勾配こうばいになつてゐるわけではないが、さながら満帆の春風を負うて、長江じゅうりやうに柔艫じゅうりやうをやるような気分の下に、醍醐へ下るのであります。

お角さんは、称して、お嬢様は御信心のために醍醐へいらつしやるのだと言う。御当人は、それを排して、わたしが醍醐へ行くのは信心のためではありませんと言いきつたが、それでは信仰以外の何の目的を以て行くのか、それは言いません。さり

とて、今はその時でないから、醍醐までお花見と言つてもそれは成り立ちません。單純に散歩の気分ならば、なにも特に醍醐を指定する理由もなからうと思われるけれども、それを問いただすことをしないのが、お角さんの気象でもあり、信心者の大らかさでもあり、且つまた、この暴女王をあしらいの勘所かんどころでもあると思ひますから、お角はあえてそれ以上には押すことなく、また押すべき必要もないと口をつぐみます。

しかし、本来を言えば、お嬢様の醍醐をたずねる目的は、三宝院の庭と絵とを見んがためでありました。

それをそそのかしたのは不破の関守氏でありまして、関守氏は、つい昨晚、お銀様に向つて、こんなことを言いました——  
「醍醐の三宝院へ参詣してごらんなさいませ、あそこの庭が名作でございます、しかし、庭よりもなお、その道の人を驚かす

のは、国宝の絵画彫刻でございました、その絵画の数々あるうちには、ことに異彩を極めたのは大元帥明王の大画像でございました、大元帥だいげんすいと書きましても、帥すいの字は読まず、ただ大元明王と訓よむのが宗教の方の作法でございしますが、あの大画像は、いつの頃、何者によつて描かれたものか存じませんが、いずれは一千年以前のものでございましょう、幅面の広大なること、図柄の奇抜なること、彩色のけんらんなること、いずれも眼を驚かさぬはありません。但し、眼を驚かすために描かれたのではなく、密教の秘法を修する一大要具として描かれたものに相違ございませぬが、絵そのものが、たしかに素人しろうとをも玄人くろうとをも驚かさずには置きませぬ、実にめざましいグロテスクを描いたものです。大元帥明王——そのいかにグロテスクであるかは一見しないものにはわかりませぬ、宗教的にはなかなか以て神秘幽玄

なる見方もあるに相違ございませんが、これを単に芸術的に見てですな、芸術的に見て、実に筆致と言ひ、墨色と言ひ、彩色と言ひ、全体の表現と言ひ、すばらしいものです。ことにその彩色が——彩色のうち、人目を奪う紅あかと朱しゅの色が大したものです。なにしろ千年以上の作というにかかわらず、朱の色が、昨日硯けんを発したばかりの色なんです、今時の代用安絵具とは違います、絵かきが垂涎すいえんしておりますよ、こんな朱が欲しいものだ、ドコカラ来た、舶来？ 国産？ いかなる費用と労力をかけても、それを取寄せてつかつてみたいとの心願を致しますけれど、あんな朱はドコで求めることもできません、科学者は研究をはじめましたが、今以て、その原料が何物であるかわからんそうです、動物質か、植物質かさえもわからないのだというのですから——つまり、千年の昔に悠々として使いこなした顔料を、

千年後の今日の科学で解釈がつかないというんですから、現代の科学も底の知れたものです。あれはぜひ一見の必要がありま  
すな」

こう言つて説き立てたものですから、お銀様が、その明日と  
いう日に、この通り醍醐詣でとなつた始末であります。随行に  
選ばれたのはお角と米友、これは不破の関守氏の当然の見立て  
でもあり、本人たちも納得したところであります。

山科から醍醐までは下り易い道です、歩き易い距離でした。  
道は平坦だが、前に言う通り、流れに棹さして下る底の道であ  
ります。ほどなく、逆三位一体は、醍醐三宝院の門前に着きま  
した。

お銀様とお角さんが三宝院のお庭拜見をしている間、米友は門前の石橋の欄てすりに腰打ちかけて休んでおりました。そこへ、六地蔵の方から突然に、けつたいな男が現われて、

「兄あにい、洛北の岩倉村に大賭場おおとぼがあるんだが、ひとつ、かついで行かねえか、いい銭になるぜ」

と、いったい、藪やぶから棒に、誰に向つて、こんなことを言いかけたのか、米友としても、ちよつと途方に暮れて、忙がわしく前後左右を見渡したけれども、自分のほかに手持無沙汰てもちぶさたでいる人つ子はないから、多分、このおいらという奴を目にかけて呼びかけたんだろうが、それにしちやあ、人を見損つてるぜ。

「兄い、どうだ、行く気あねえか、いい銭になるぜ、洛北の岩倉村ぜんでえみもんに前代未聞の大賭場があるんだから行かねえか」

同じようなことを繰返して、今度は、ひたと自分の眼の前へ足を踏みつけて突立ち止つての直接じかだんぱん談判だから、もう思案の問題ではありません。

「おあいにくさまだよ」

と米友が言いました。

「おあいにくさま、いやはや」

と、けつたいな男は苦笑いをしたが、それで思い止まるとは見えない、ニヤリニヤリと笑いながら、米友の前におつかぶさるような姿勢あいきようになつて、

「そんなお愛嬌あいきようのねえことを言わねえもんだ、やびなよ、やびなよ」

「やばねえよ」

「やびなよ」

「やばねえてばなあ、しつこい野郎だなあ」

ここで、やべとやばぬの押問答になりましたが、やべというのは「歩め」或いは「歩べ」という急調な訛なまりでありまして、ところにより、俗によつて使用されるが、必ずしもこの辺の方言とは思われない。ただ、やびなよ、やびなよ、と言うのは、先方の希望であり、懇願でなければならぬし、やぶと、やばぬとは、こつちの勝手であり、権能でありますから、断じてそれを強要すべきではありません。しかるに、このけつたいな男は、懇願と強要との区別かおがつかないらしいから、米友は改めて、このけつたいな男の面を見上げてうんと睨にらみつけたが、そのとき気がつくつと、このけつたいな男は、肩にしこたま背負いものを背負っている。袋入りの米ならば五升も入りそうなのに、米ではなくて米より重いもの、袋の角の突っぱりでもわかる、この

中には銭という人気物がしこたまつめてある。そこで、米友も、このけつたいのけつたいなる所以ゆえんを覚らないほどのぼんくらではない。よくある手だを見て取つたのは、渡る世間によくあるやつで、つまり、ばくち打ちの三下さんした、相撲で言えば関取のふんどしをかつぐといったやからと同格で、貸元のテラ銭運搬がかりというものがある、そいつだな、そいつが、どうも己おのれの責任が重くてやりきれねえ、そこで路傍のしかるべきルンペン子を召集して、自分の下請をさせることはよくある手である。今、おれをその下請のルンペンに見立てやがったのだ、ということをおれが覚つたから一喝いっかつしました。米友から一喝されても、その野郎はなおひるまず、

「二貫やるぜ、二貫——洛北の岩倉村まで二貫はいい日当だろ  
う」

「お気の毒だがな、おいらあ主人持ちだ、こうして、ここで、ひとりぼっちで、つまらねえ面かおをしているようなもんだが、職にあぶれてこうしてるわけじゃねえんだぜ、頼まれておともを仰せつかつて、御主人がこの寺の中へ入っている、おいらはここで待つてるんだ、だから、誰に何と言つて頼まれたからつて、御主人をおつぽり出して銭儲ぜにもうけをするわけにやあいかねえ」

米友として、珍しく理解を言つて、おだやかに断りました。

これほどまでに理解を言つて聞かせたら、いかにしつっこい野郎とても、そのうえ強しいることはあるまいと思つていると、そのけつたいな男が、突然きよろきよろと四方あたりを見廻して、落着かないこと夥おびただしい。今まで米友を見かけて口説くどいていた眼と口とが、忙がわしく前方へ活動をして、面の色さしまで変つたのは拳動はなはが甚だ不審です。米友も解げせないと思つて、その男の

落着かなくなる目標の方を見やると、笠をかぶった二三人連れの人はこちらを向いて、徐々に歩んで来るのです。距離としてはまだ一丁の上もあるから、親の敵かたきにしたところで、そう今から狼狽するには及ぶまいと思われるのですが、この男の体勢はいよいよ崩れて、ほとんど腰の据えどころがありません。

先方の動静を見ると、この男を狼狽せしむるような、なんらの体勢を示しているのではない。いわば先方は、こちらに、けったいあ在ることも、グロ在ることも一向知らず、平常の足どりです。来て来るとは、その姿形だけを見て、このけったいをして身の置きどころなきを感じしめるほどの権威が、先方に備わっているから見なければなりません。つまり、あれは十手取縄をあずかるお役人なんだ。その途端、何と思つたか、けつたいな野郎は、背中の上のしこたま重い錢袋を、米友の頭から投げつけて置

いて、自分は一散飛びに飛んで横丁の竹藪たけやぶの中へ飛び込んでしまいました。

「危ねえ——」

と叫んだのは、けつたいな野郎でなく、米友の声でありました。

#### 四

「危ねえ——」

これは米友が叫びました。全くあぶないのです、五升袋へ詰めた錢を、まともに頭からブツつけられた日には、たいていの面はつぶれてしまう。米友なればこそたい体をかわして、錢の袋は後ろへ外したけれど、余人ならば相当の怪我です。だが、出来事は、それっきりの単純なものでありました。

目標の笠は、ほどなく米友の前へ、ずっしずっしと通りかかりましたけれど、何の騒がぬ面色、足どりで、そのうちの一人が、チラと米友を横目に見ただけで、その前を素通りしてしまつたのですから、けつたいとも言わず、葉袋やぐたいとも言わず、何事もなく素通りをしてしまつたのですが、その一行は山科方面から来たには来たが、六地藏の方へ向けて行くかと思うとそうでなく、米友の眼の前を素通りして、すぐに鍵の手に曲つたのは、三位一体の二体がすでに入門したと同じく、三宝院の門に向うのでありました。

宇治山田の米友は、しばしそれを見送つていたが、二三子の姿は三宝院の境内けいだいに消えても、竹藪に飛び込んだ、けつたいな野郎は容易に二度と姿を見せません。

時が経つうちに、米友もようやくやく退屈を感じ出してきました。

退屈を感じはじめると、この男は生来短気なのです。短気が癩癩かんしゃくを呼び出して来るのが持前なのですが、ようやく少し焦れ出すと共に、後ろ捨身に投げられた錢金袋に目がつかないわけにはゆきません。これが米友でなかった日には、何事を措いても、このしこたまのテラ錢が気になつてたまらないはずなのですが、今になつて、ようやく草むらの中に、かつぱと伏している袋に気がついたのは、無慾は感心としても、この男の神経としては鈍感に過ぎる。

「やつけえなものを置いて行きやがつたな」

試みに、草むらの中へ分け入つて、その袋に諸手もろてをかけてみました。重い。幸いにしてこの男は稀代の怪力を持っている。

かくて、この金袋を抱き起してみたが、さてこれからの処分法が問題です。

実は問題でもなんでもありようはずはない。およそ、盗難や遺失物は交番へ届けさえすれば、それで済むことなのです。当時まだ交番が出来ていない、出来ているとしても、その近所がないというならば、これに代る一時の手段はいくらもあるべきはずなのです。これを米友が、重大なる問題かの如く悩み出すのも、この男に限って、交番へ届けるといふ簡単な手続を、極めておつくうがる理由があるようであります。

届ける分には何もおつくうはないが、届けた後には必ず住所姓名を問われるにきまつている、その住所姓名を問われるということが、今日のこの男にとつては苦手なのです。

彼は、自分で自分を隠さなければならぬ不正直さはどこにも持っていない。また自分で自分を韜晦とうかいせねばならぬほどの経国の器量を備えているというわけではない。それなのに、天地の

間かんに暗いことのない精神を持ちながら、天地を狭められたり、行動を緊縛されたりするというのは、何のわけだか、自分で自分がわからない。ただその度毎こうむに蒙る不便、不快、不満というもの、いかばかりか、ややもすれば生命の危機に追い込まれることも今日まで幾度ぞ。

そうかといつて、一身の危険を回避せんがために、公道の蹂躪じゅうりりんを敢えてしてはならない。正義の名分をあやまらしめてはならない。届け出て、住所氏名を問われるが、いかに個人的に不利、不益、不快、不満であっても、遺失物に対して相当の責任を取るべきことは、免れ難き人間の義務である。

かくて、五升袋の錢塊を前にして、米友が、とつおいつと思案に暮れました。

宇治山田の米友が、門前に於て、かくばかり当惑している時に、お銀様とお角さんとは、三宝院のお庭拝見をしておりますた。

二人の東道役をつとめるのが、院に子飼いと覚しい一人の小坊主でありましたが、最初からこの坊主に気を引かれたのは、女軽業の親方だけではありません、お銀様でさえが、玄関に現われたその瞬間から、ハツとした思いです。

というのは、この小坊主が、別人ならぬ宇治山田の米友に生きうつしなのです。違うところは、米友よりも年まわりが一まわりも違うかと思われるほどの幼年ですから、背丈も、本来高くもあらぬあの男をまた一けた低くしたようなもので、これが

友、しゅうの弟でなかったら、世に米友の弟はないと思われるばかりです。

そこで、お銀様とお角さんが、思わず眼と眼を見合わせてうなずいたのは、二人ともに、ぴつたりと観るところが一致したので——これは一致しないわけにはゆきません、一致もこの程度になると、啐啄そつたくどうじ同時のようなもので、言句を言わないで眼だけでよくわかる。

「よく肖にていますねえ」

「よく肖にているわねえ」

言語に発して、しかして後、呼吸を合わせる程度のものではなかつたのです。昭和現代の支那事変のつい近ごろ、日本で、ある映画会社がフィルムに製造すべく、かの憎むべきしょうかいせき蒋介石のモデルを、一般に向つて募集したことがありましたそうです。そう

すると、四国かドコかの山中から現われた一人の応募者があつたそうです。テストに現われた係員が、まず呆氣あっけに取られたのは、この応募者が、蒋介石に肖あやていること、肖あやていること、そつくりそのまま以上、本人よりもよく肖あやていたそうです。斯か様にようして求めさえすれば、日本の中にさえ蒋介石よりも蒋介石によく似たという人間も現われるものなのでありますが、ここでは求めざるに不意に現われたものですから、さすがの暴女王様も、お角親方も、舌頭を坐断されてしまつて、うなずき合うよりほかに言語の隙を与えないほどでありました。

もし、ところがこうしたところではなかつたら、お角親方は、啖たんか呵かを切つて叫んだかも知れませんか——「これは友の舎弟なんですよ、間違いつこはありません、本人よりもよく友に似てるんです、もともとあいつも上方の生れと聞いていました、家も

あんまりよくないもんだから、藁わらのうちから別れ別れにされて、一匹は関東へ、一匹はこつちへお弟子に貰われたんですよ、友を呼んで見せてやりましょうよ、生別れの兄弟の名乗りをさせてやろうじゃありませんか、ほんとうに当人よりもよく似ていますよ、これがあの男の弟でなかったら、世間に弟というものはありやしません」

こう言つて、親方まる出しのけたたましい叫び声を立てて、権柄で友を呼び込んで、否も応も言わず、兄弟名乗りをさせたかも知れません。しかし、ここはところからですから遠慮をしました。ところがらをわきまえて遠慮のたしなみがあるところ、さすが女親方の取柄で、本来自分が字学が出来ないし、身分に引け目があるところから、場所柄によつては必要以上におびえ込み、謙遜以上に謙遜してしまうことが、この女性の美德

といえは美德の一つでありますことがまた、ここでけたたましい叫びを立てなかつた一つの理由なのであります。

そこで、二人がうなずき合つただけで、この奇遇的小坊主の案内を受けて、玄関からめいさつ名刹の内部の間毎の案内を受けようとする途端、これはまた運命のいたずら悪戯！ とまでお角さんをおびえさせて、一時、いつときその爪先をたじろがせたほどの奇蹟を見ないわけにはゆきません。

本人よりもよく米友に肖にているこの小坊主が、先に立つて案内に歩き出したところを見ると、どうでしょう、これがびっこ跛足なのです。

「まあ、お嬢様！」

と今度は音に立てて、さしもの親方が、オゾケを振つて一時立ちすくんだのは無理ありません。暴女王でさえが覆面の間か

ら鋭い眼をして、この小坊主の足許を見定めたほどであります。あしもと  
世に遺伝ということはあつて、子が親に似ているのは当然中の当然。親が頭がいいから、子も頭がいいというのも不合理ではない。子の体格のいいのは、親の譲りものというのも無理はないし、悪いのになると、悪疾の遺伝、悪癖の遺伝までも肯定されるが、跛足が遺伝するということは、あまり聞かないことです。

親が跛足であつたから子が跛足、兄貴が跛足だから、弟の跛足に不足はないということは言えないのです。賢愚と、不肖と、性格と、体格には、遺伝があり得るけれども、怪我というものは後天的なものだから、兄貴が負傷して跛足になったからとて、弟まで怪我をして跛足になり得るといふ遺伝はないのです。

おつちよこちよいと

おつちよこちよいが

夫婦になれば

出来たその子が

また、おつちよこちよい

これは、ふぎけたような口合い唄でありますけれども、また一面の真理たるを失わない。

おつちよこちよいの倅せがれに、おつちよこちよいが生れるという

ことは有り得ることおうこうしようしようあにしゆで、王侯将相豈種あらんやというは、それ

は歴史上を均ならして、幾千億万分の一の特例であつて、標準とす

べくもありません。百姓の子は百姓になり、大工の子は大工に

なり、町人の子は町人になることに、わけて階級制度のやかま

しい日本の国では、滔々とうとうたる世間並みのおきてになつてゐるが、

跛足びっこの子が跛足であり得ること、兄が跛足なるが故に、弟も跛

足という常識はありません。

腕の喜三郎親分（前の政友会総裁鈴木喜三郎氏のことではない）は、兄貴が喧嘩で片腕を失ったから、おれも両腕があつては面白くねえと言つて、自分で自分の片腕を切り落して、兄貴と同格になつたという特例はあるが、あれは遊侠のする気負いです。これは運命の悪戯いたざら！ と、さすがの両女傑が、案内の小坊主を見て一時、立ちすくんだのも無理はありません。

六

だが、お角さんとしても、驚くべきものは驚きもするけれども、驚いてそうして、度を失うお角さんではありません。直ちに平常心を取戻して、案内役の小坊主を、ちよつと杉戸の蔭に小手

招きして、耳うちをしました、

「兄さん、御苦勞さま、あのね、わたしのお連れのお方はね、少しわけがあつて、お怪我をしていらつしやるんだから、あの通りかぶり物を取りません、ね、それを承知してね」

と言つて、その途端に、ふところ紙でおひねりを一つこしらえて、この小坊主に持たせようとなりました。

これは、お角さんとしては常識の手法の一つで、悪い意味ではない一つの軽少なる賄賂わいろ、あるいは最も好意ある鼻薬！　む

しろ儀礼の一つであつて、お角さんの社会で普通に行われるのみならず、世界的に公認の闇取引——ではない、計算書にまで公然と記入して来られる、記入して来られた方が来られないよりも、むしろ気持のよい世界的の社交関税、通称を「チップ」と呼ばれるところのものの労力に対する報酬、ある場合には敬意

を含めたところの意志表示なのでありましたが、この小坊主は、前のかぶり物御免に対しては相当の黙認を与えたけれども、後者の関税閣取引に対しては、断然それを拒絶して、お角親方の好意を無にしてしまいました。つまり、同行の女性が特殊の事情によつて、面かおに覆面を施しながら間毎を通過するという特権を黙認したのは、これは一種の同情心がさせるわざなのであります。儀礼を重んずべき女性として、あえてこの無礼を忍ばなければならぬ事情というものは、他よりは本人が苦痛とするところではなければならぬ。それを押しで行こうという事情には、よくよくのものがなければならぬ。そこに小坊主も暗黙の間の同情心が發揮されたと見えるが、白い紙でこしらえた社交関税は、すげなくお角親方の手から拒絶して、押しつけるその手先をかいくぐるようにして、早くも先に立って、お庭先の舞

台の方へ逸出してしまいましたから、さすがの親方も、すっかりテラされてしまいました。ぜひなくお角さんは、せつかくこしらえたおひねりをそのまま帯の間へ突込んでしまつて、そのあとを追いましたが、この時、もはや女王様は、廊下舞台の欄干に立つて、一心に三宝院のお庭をながめているところであります。

三宝院の庭は、京都に於ける名庭園の一つであります。いや、日本の国宝の一つとして、世界的に名園の一つであります。音に聞いてはじめて見るお銀様には、大なる興味でなければなりません。名園の名園たる所以ゆえんの常識は、お銀様の教養の中には、もうとうに出来ている。お銀様が余念なく、自分の眼と頭によつて余念なく名園を觀賞し、解釈しているところへ、お角さんの社交的儀礼をすぎなく、すり抜けて来た小坊主が、早くもそち

らに立つて滔々と説明をはじめました——

「これなるは有名なる醍醐の枝垂桜、しだれざくらこちらには表寝殿、あおい葵の間、

襖の絵は石田幽汀の筆、いしだゆうてい次は秋草の間、かのうさんらく狩野山楽の筆、あれな

る唐門はからもん勅使門でございます、扉についた菊桐の御紋章、桃山

時代の建物、勅使の間——襖の絵は狩野山楽の筆、竹園におしどり鴛鴦、

ソテツの間、上げ舞台、板を上げますと、これが直ちにお能舞

台になります、中の間、狩野山楽の草花、柳の間——同じく狩

野山楽の筆、四季の柳をかかれてございます、こちらの廊下の

扉、この通り雨ざらしになっておりますが、これに松竹の絵の

あとが、かすかに残ります、同じく狩野山楽と伝えられており

まする、これから奥寝殿、この屏風は、びよふう醍醐の百羽鳥として有

名な長谷川等伯の筆、こちらがもんざき門跡の間でございます、あの違

棚が、世に醍醐棚と申しまして、一本足で支えてございます、そ

の道の人が特に感心を致します、あの茶室がこれも名高い『舟入茶室』松月亭と申します、太閤様がお庭の池の方から舟でこの堀をお通りになつて、この茶室へお通いになりました、太閤様お好みの茶室、これは桜屏風、山口雪溪の筆、これからが三宝院の本堂、正面が弥勒仏みろくぶつ、右が弘法大師、左が理源大師の御木像でございます、これが枕流亭……

さてこれからお庭でございます、このお庭は太閤様御自作のお庭でございます、あれが名高い藤戸石、一名を千石石とも申します、錦の袋に入れて二百人でこれへ運びました、天下一の名石でございます。

これが琴平石、平忠度の腰掛石、水の流れのような皺しわのあるのがなんか石、蝦蟇石がま、あの中島の松が前から見れば兜松かぶとまつ、後ろから見れば鎧松よろいまつ、兜かけ松、鎧かけ松とも申します、向うの

小山の林の中に小さく見えます祠ほくらが、豊臣太閤をお祀り致して  
ございます、なぜ、あんな小さく隠してあるかと思ひますと、徳  
川家の天下の御威勢に遠慮をしたのでございます、この名園に  
一つの欠点がございます、それはあの二つの土橋が同じ方面へ  
向けてかけてあることが一つの欠点でございます」

名園の名園たる来歴を一通り説明してのけた上に、その欠点  
をまで附け加える小坊主の口合いは、そういうことをまで附加  
せよと教えられているのではなく、案内しているうちに、誰か  
その道の者があつて、立話にこんな批評を加えたのを小耳に留  
めて置いて、その後の説明の補足に用いているものと思われま  
す。

この滔々とうとうたる説明を、小坊主の口から一気に聞かされたこと  
に於てお銀様とお角さんが、再び眼を見合わせたのは、今度は、

弁信法師に似ている、今までは宇治山田の兄いに肖に過すぎるほど肖にていたのが、今度は、あのお喋り坊主のお株をも奪おうとする、重ね重ね、怖るべき運命の悪戯だと思わないわけにはゆかなかつたからでしょう。

しかし、この点は前ほどに、二人をおびやかすに至らなかつたことは、この程度の雄弁は、いわゆる門前の小僧の誰もよくするところで、あえて天才の異常のさせることではないのです。口癖にのみ込ませて置きさえすれば子供でもすることとて、ここに行われるのみならず、他のいずれでも行われる。また、素材をとつつかまえて来て、もつと誇張した吹込みをして、世人の好奇心の前へ売り物に出すことは、むしろお角親方の本業とすることだから、こういうのには、さのみおびえるには及ばなかつたのです。

つまり、弁信法師の怖るべき舌堤の洪水は、超絶的の脳髓がさせる、千万人の中の天才の仕業ですが、この小坊主のは、そんな手数のかかるものではない。この場合、またよく似ている、あんまりよく似ている、さきに米友で、あれほど人をおびやかしながら、またもお喋り坊主のお株にまで手をのぼそうとする、このこましゃくれが面憎くなつたからであります。

七

お庭拝見が済むと、お銀様だけが改めて、弥勒堂後壁の間へ案内されました。

弥勒堂後壁の間というのは、建築が極めて高いだけに、光線の取り方が充分でありませんから、室内はなんとなく暗陰たる

色が漂うております。けれども、古風な建築としては、相当光線の取入れには注意がしてあるらしく、明るいとところから、急にこの一室へ入ったのですから、その当座こそ視覚の惑乱がありませんけれども、落着いてみれば、掛物を見て取るに不足な光線ではありません。見上げるところの正面に、とても広大なる画幅がかかつていて、その周囲には、この脇侍わきじをつとめるらしい一尺さがった画像があるのであります。これらの脇侍の画像とても、その一枚一枚を取外して見れば驚くばかり広大な軸物に相違ないが、正面の大画幅の大きさが、すぐれてすばらしいものですから、脇侍が落ちて見えるのは、ちょうど、奈良の大仏の仁王門の仁王が、それだけを持出せば絶倫るしやなごつの大きさのものです。なにしる大仏の本尊の盧遮那るしやなごつ仏が、五丈三尺という日本一の大きさを誇っている、その前ですから、仁王として

は無双の仁王が、子供ぐらいにしか見えず、ただ、その芸術の優秀なことに於て前後を睥睨へいげいしているのと、案内人が遠慮会釈もなく、「これが有名な東大寺大仏殿の仁王、右が運慶うんけい、左が湛慶たんけい——」と言つて、作ということを言わないから、仁王尊そのものの右が運慶尊、左が湛慶尊になりきつて、本体と、作者が、見事に習合せしめられている。識者はそれを笑い、愚者はそれに感歎する。案内者自身はまた、右が運慶尊、左が湛慶尊と信じきつて、眼中に信仰と芸術の差別なきところが、お愛嬌のようなものであります。

そこで、お銀様はじつと立つて、この特異の大画を上から下へ、下から上へ、見上げ見おろしてじつと立ちました。

この怪異なる、人ともつかず魔ともつかぬ大画像は、いったい何を意味しているのか、不幸にしてお銀様にはこれがわかり

ません。

ただ見るところは、不動尊以上の不動尊の形相ぎようそうを呈しているが、不動のような赤裸のいつわらざる形体を誇っているのではない、身辺はあらゆる紅紫絢爛たる雑物を以て裝飾され、彼の如く、しかく単純に剣と縄との威力を誇示するには止まらない。なるほど、不破の関守氏から予備知識を与えられた、これが三十六臂びの形式というものでしょう。一つの形体から三十六の手が出て、それがおのおの方向に向って、おのおの武器を持っている。世には千手せんじゅかんの観音という尊像もあるのだから、三十六や七は数に於て問題でないが、その生血の滴る現実感の圧迫にはこたえざるを得ない。

五体を見ると、逞たくましい黒青色の黒光り、腰には虎豹の皮を巻おびたき、その上に夥おびただしい人間の髑髏どくろを結びつけている。背後は一面

の鮮かな火焰で塗りつぶされている。よく見ると、その火焰の中に無数の蛇がいる。おお、蛇ではない、竜だ。夥しい小竜大蛇がうようよと火の中に鎌首をもたげているのみではない、なおよく見ると、あの臂ひじにも、この腕にも、竜と蛇が巻きついて

いる。  
顔面はと見ると、最初は、正面をきつた不動明王のようなのばかりが眼についたが、その左右に帝釈天たいしゃくてんのような青白い穏かな面かおが、かえって物凄い無気味さを以て、三つまで正面首の左右に食くつついている。なおよく見ると、その三つの首のいずれもが三眼で、その眼の色がいずれも血のように赤い。その口には、牙をがつきと噛み合わせた大怒形だいにぎよう。

なお、その振りかざした三十六臂のおのおの持つ得物得物を調べてみると、合掌するもの、輪りんをとるもの、槩さくを執るもの、

索さくを執るもの、羅らを握るもの、棒ぶを揮ふるうもの、刀やを構えるもの、印いんを結ぶもの、三十六臂三十六般の形を成している。

再び頭上を見直すと、さきには忿怒瞋恚ふんぬしんいの形相のみが眼に入つたが、その頭上は人間的に鬢髪びんぱつが黒く、しかもおごそかな七宝瓔珞しつぽうようらくをかけている——

物ものに怖おそじない暴女王の眼も、このまま見上げ見下ろしたただけで消化するには混乱しました。その時、お銀様は甲州の家にあつた「阿娑縛抄あさぼしやう」一部を惜しいものだと思ひ出さないわけにはゆきません。

甲州の家には文庫が幾蔵もあつた。お銀様は、それを逐一風を入れて虫干をしたことがあります。ゆくゆくは残らず、それを頭に入れるつもりでありましたけれども、その時は一通りの風入れでありましたが、「阿娑縛抄」百八冊を手がけてみたの

も、その時のことでありまして、この大部の書のあらわすところは何物であるかに齒が立ちませんでした。他日必ず読みこなしてみせるとは、この女王の氣象でありましたが、その時は、一種異様な大部な書物である、内容がなかなか食いつけないのは、その中には夥<sup>かた</sup>多異様の彩色絵で充たされている、その彩色絵が一種異様なグロテスクのみを以て充たされていて、いわゆるさしえの常識では全く齒が立たない。何を書いてあるものか知ら、これぞ世間に言う「真言秘密の法」を書いた本に違いない、ということをし、その時にお銀様が感じました。

「真言秘密の秘伝書」——これは研究して置かなければならぬ、と心がハズンだのは秘密そのものの魅惑で、この女王は秘密を好むのです。その時は秘密の法は即ち魔術の一種で、超自然力以上の魔力の秘伝がこの本に書いてある、この本を読んだ

人が役えんぎようじやの行者になれる——というような世俗的魅力がお銀様をとらえたのですが、その直下じきげにこれをこなすの機会と時間とを与えられなかつたから、いつか「阿婆縛抄」を読み解いてみせるとの心がけだけは失われていなかつたのですが、それがあの時の火事で、すっかり焼けてしまいました。そのことを今になつて、くやむの心がお銀様の胸に動いて来ました。

お銀様は剛情です。わからないことはわからないとして、知らざるを知らずとして問うことは、この女性のよくするところではありません。また、こんな人おどしの仏像の存在の理由を、おの己れを空しうして教えを乞うてみたところで、無用無益なりとの軽蔑さえも起りました。

画像そのものは、この女性を、昏惑こんわくから来る反感へ導いて行くのですが、その表現の色彩だけは、それと引離して、多大の

躍動と、快感とを与えずには置かないのであります。のつけに見せられた素人しろうとに向つては、何の色が幾つだけ、どの部分に点彩され、使用されているかというような、複合の観察は遂げられませんでしたけれども、まず打たれるのは、その赤と朱との与うる燃ゆるばかり盛んなる威力と、快感でありました。

これとても、不破の関守氏から、特に力を入れて予備知識を与えられていた点でありますけれども、そういう予備知識が全然与えられていないにしてからが、この盛んなる燃ゆる色には、いかなる素人も魅せられざるを得ないものが確かに有ると信じました。絵は千年を経ているけれども、色彩、ことに赤は、昨日硯海けんかいを飛び出したほどの鮮かさである。そうして、その道の丹青家をして垂涎すいえんせしめる。この色を出したい、いかにしてこの色を出せるか、そもそもこの清新なる色彩の原料は何物であつ

て、いずれより将来し来れる——といふことが、古来、専門家の間の疑問であつて、今日に至つて、なお解釈されていなくといふことに、お銀様は、最初から最も大きな期待を持っていたのです。信仰の上からしても、芸術の上からしても、画像そのものを特に拝するといふ気分は、そんなに切迫したものではありませんでした。古来未だ知られず、今人なお発見し難き色彩の秘密が、お銀様の意地を煽りました。そういうものを見てやりたい、見て見破つてやりたい、といふほどの反抗心を、異常なるもの、難解なるもの、威圧なるものに対することに起されるこの女性の通有癖であることに過ぎません。だが、その難問に体当りをして行くには、科学が足りないことは省みずにはいられない。問うことを好まないこの女性が、ここで僅かにくちばしをきつたのは、

「この絵は、いつごろのものですか、時代は」

ただ、それだけの質問を発しました。質問を受けた当の案内役は、以前のこましやくれた、肖にている小坊主ではありません、しとやかな学僧の一人で、且つ、極めて無口の若者でありました。

「は、吉野朝時代でございます」

ただそれだけ答えたのみで、更に知識の先走りをしなないのは、知らないのか、知つても言うことを好まないのか、それはわかりません。とにかくに、拝観人から、それだけの質問の口火を切れば、それをきつかけに、学僧によっては、滔とうとう々と知識を振蒔ふりまいて見せる、諄じゆんじゆん々と豪者を啓みちびく的態度を取つてみたりする学僧もあるのですが、この学僧には絶えてそういう好意がなく、銜てら気もありませんから、お銀様はそれ以上に知識を要求するの

機会を失いました。

だが、吉野朝時代でございませぬ、という簡単な応答に対して、お銀様をして相当の考証に耽ふけらしめた余地はありました。この点は少々、不破の関守氏の与えた予備知識に不足がある、不足でなければ放漫がある、不破の関守氏は千年以上の作と言ったが、吉野朝ではまだ千年にならない。

そこでお銀様の、年代記のうろ覚えを頭の中で繰りひろげてみると、徳川氏が二百年、織田、豊臣氏が五十年、足利氏が百有余年と見て、どのみち五六百年の星霜には過ぎまいと思いましたが。

もしかして、吉野朝と言ったのが、浄見原きよみはらの天皇の御時代とすれば、これは、たしかに千年以上になりましたが、ここに吉野朝と言ったのは、足利氏以前の南北朝時代の吉野朝時代の

ことに違いないと思われるから、そうしてみると、どう考えても五六百年以前には溯さかのぼらない、しかし、古い物を称して千年と言うのは、一種の口合いなのですから、それはさのみ咎とがめるには及ばないとして、千年を経て、その朱の色が昨日すずり硯を出でたるが如しという色彩感さうしきかんは、さのみ誇張でも、誤算でもないということを、お銀様も認めました。

本来は、そういう質問や、そういう認識だけで、この画像二を卒業してしまおうというのが無理なので、そんなことよりも、まず最初に問わなければならぬことは、「大元帥だいげんみん明王みょうおうとは何ぞや」ということなのであります。これが解釈なくして、この画像を、色彩と年代だけで見ようとするのは、縁日の絵看板のあぐどい泥絵だけを見て、木戸銭を払うことを忘れたのと同じようなものなのです。

お銀様がそれをしらないということは、不幸にしてそれを知るだけの素養を与えられていないという意味であります。

八

それはそれとして、お銀様が後壁の間に参入した瞬間に、お角さんとしては、これに追従を試むことを遠慮しました。というのとは、後壁の間に参入、大元帥明王に見参ということとは、お銀様だけの志願であつて、お銀様だけに許されたというよりも、お角さんにとつては、よし、もし許されたからといつて、猫に小判のようなものなのであります。特別に教養のあるものだけに許される特権でなければならぬし、特別に教養の無いものが、それに追従することは、不敬であり、不遜であることを自

覚しての、お角さんとしての遠慮なのです。

そこで、明王に特別謁見の間を、お角さんは、次の間というよりも、奥書院の廊下に立って待受けておりました。そこに立っている、またも本庭の余水の蜿々たる入江につづく「舟入の茶屋」を見ないわけにはゆきません。お角さんは、太閤様お好みの松月亭の茶室に、じつと見入っている。が、それとても、大元帥明王の画像の前に立つお銀様と同様の、色盲ならぬ色盲をもつて、木石の配置だけを深く見入っているような恰好かつこうをしているけれども、内容極めて空疎なるは致し方なく、お茶を知らない、寂さびを知らない、わびというものを知らないお角さんは、ただ眼の前にあるからそれを見ているだけで所在が無いから、これにお場所柄であるから、枉まげて、つつましやかにしているだけのものなのです。

その時、廊下の彼方かなたで、高らかに経を読む声が聞えました。多分お経だろうと思われる。お寺へ来て朗々と読まれる文言を聞けば、お経とさよとつてよろしい。お経は何のお経だかわからないが、その読み上げている主は門前の小僧であることが、お角さんによくわかります。門前の小僧ではない、本当は門内の小僧なのですが、さいぜんから門前の小僧にしてしまっているあの薄気味の悪いほどよく似た、びつこの小僧の読み立てる声に紛れもないと思いました。

全く、お角さんの思うことに間違いなく、たしかに右の門前の小僧が、廊下の一端に膝小僧を据すえて、朗々と音を挙げていることは確実なのですが、それは、正式に机を置き、経文を並べて読んでいるのではない、膝小僧と談合式に、上の空で暗誦を試みているものであります。何を読み上げているのか。注意

して聞けば、次のような文章を読み上げているのです。

「鎮護国家ノ法タル大元帥御修法ノ本尊、斯法タルヤ則チ如来

ノ肝心、衆生ノ父母、国ニ於テハ城塹、人ニ於テハ筋脈ナリ、

是ノ大元帥ハ都内ニ八十供奉以外ニ伝ヘズ、諸州節度ノ宅ヲ

出ヅルコトナシ、縁ヲ表スルニソノ靈驗不可思議也」

音をたどればそういうような文言を読み上げているのだが、お角さんには、そのなにかがわからない。ただ、お経を読み上げているとのみ聞えるのですが、わからないのはお角さんばかりではない、読んでいる御当人もわかつているのではないから、ただ音を並べているだけなのが、そこが即ち、お角さんの言う門前の小僧が習わぬ経を読むもので、こうして無関心に繰返しているうちに、説明となり、密語となつて巻舒けんじよされることと思われます。

お角さんは、そのいわゆる、習わぬ経を繰返す門前の小僧の咽喉のどが意外にいいことを感づくと同時に、これをひとつものにしてみたら、どんなものであろうという気がむらむらと起りました。

ものにするとは、何かお手のものの商売手に利用してみても、ろうじやないかという謀叛むほんぎ気なのであります。このお寺の納所なっしょよで、案内係である小坊主を腐らせてしまうのは惜しい。惜しいと言つて、なにも惜しがるほどの器量というわけではないけれど、米友でさえも、利用の道によつては、あのくらい働かして、江戸の見世物の相場を狂わしたことがある。いまさし当り何という利用法はないが、一晚考えれば必ず妙案が湧く。第一、あのお経を読んでゐる咽喉がステキじやないか、咽喉が吹切れてゐる、あれを研といで板にかければ、断じてものになる——とお

角さんが鑑定しました。

発見と、鑑定だけでは、ものにするわけにはゆかぬ。人間を  
買い取るに第一の詮索せんさくは親元である。親元を説くことに成功す  
れば、人間の引抜きは容易たやすいことだ。ところで、あの小坊主の  
親元ということになってみると、存外うち埒が明くかも知れない。  
というのは、いずれもあの年配の子供を寺にやるくらいのもの  
に於て、出所のなごやかなるは極めて少ない。いずれは孤児で  
あるとか、棄児すてこであるとか、そうでなければ、身たとえ名門良  
家に生れたにしてからが、放たれ、棄てられたと同じ月日の下  
に置かれた人の子が、こういうところへ送り込まれるのだ。あ  
わよくば名僧智識にもなれようけれど、それは千万人に一人。  
そういうわけだから、存外、この買出しは楽かも知れない。そ  
んなような謀叛気がお角さんの頭にむらむらと湧いて来たのは、

実行の如何いかんにかかわらず、商売商売の冥利みょうりだから仕方がありません。

だが、それともう一つ異つた人情味に於て、お角親方は、あの小僧をつれ出して、友公と引合わして兄弟名乗りをさせてやりたい、そうすれば二人も喜んで、こつちも功德になる——なんぞという人情味も大いに湧いているのです。これとても独断千万なこと、似ているからといって、それが兄弟ときまつたわけのものではないが、さすがのお角さんの頭も、今日の瞬間には、想像と実際とが混乱していると見える。

## 九

三位一体を醍醐だいごへ向けて送り出して後の不破の関守が、がん、

り、きの百蔵を端近く呼んで、こう言いました、

「が、ん、ち、ゃ、ん、や、洛北の岩倉村に大バクチがあるが、行ってみる気はねえか」

「そいつは耳寄りですねえ」

と言つて、が、ん、り、き、の百が、耳から先に、関守氏の膝元へ摺りつけて行きました。

普通の青年ならば、バクチなどという言葉を聞いてさえ苦々しく思うのですが、そこは、が、ん、り、き、の百ちゃんのことですから、それと聞くや、耳よりだと言つて身体からだを摺りつけたのは浅ましいものです。それと知りながら、浅ましい心に誘惑をかけた不破氏の拳動も、断じて君子の振舞でないと言わなければなりませんまい。

「行つてみな、お前は今まで関東のバクチは相当に功を積んで

いるとのことだが、こつちの方の大バクチは見たことがあるまいから、後学のために見て置きなせえ」

「有難い仕合せ」

ますますよくないたくらみです。後学のためにも、前学のためにも、バクチなどは見学して置かなくてもよろしい。むしろ、そういう見学は避けた方がよろしい、避けしめるのが、先輩のつとめというものだが、ここで喉けしかけるようなことを言う関守氏は、その言葉つきからしてわざと下品に碎けて、

「行くなら行ってみな、資本もとでとしてはたんと、もねえが——ここに二十両ある」

胴巻ぐるみ、百の前へ投げ出したのは、いよいよ怪しからぬことで、行って見ると喉けた上に、資本金までも供給するので、すから、シンパ以上の、むしろ共謀に近いほどの不逞ふていなのです。

ところがが、んちゃん、否やに及ばず、早速二十両の胴巻を頂戴に及んで、

「善は急げ、これから早速飛んで参りましょう。ところでその洛北岩倉村てえのはいつたい、どっちの方向で、当日のトバの貸元てえのは、どういう顔でござんすかねえ、そこんところをひとつ、伺つて置きてえもんでござんさあ」

ロクでもない片腕で、早くも二十両の胴巻ぐるみ懐ろへ捻込ねじこみながら、中つ腰になつて、善は急げと来たが、その善なるものを急ぐにつけても、善戦をしなければならぬ。善戦をするには、彼を知り、我を知らなければならぬ。そこで相手方の地の理と、相手方の親分大将の身分について、相当の知識を持たなければならぬというのは、この男として相当の心づかいでありましょう。

「うむ——洛北岩倉村というのはな」

そこは不破の関守氏も抜からぬもので、が、ん、り、き、の百のため  
に、洛北岩倉村の地理を説くことかなり詳つまびらかなものであります。

その説くところによると、これから、日岡の峠を通つて蹴上粟田口けあげあわたぐち

へ出るが、三条橋は渡らずに、比叡山の方へとずんずん進んで、

それ、名代の八瀬大原はせおおはらの方へ行く途中のところはその岩倉村と

いうのがある。そこの岩倉村は岩倉中納言の領地で、大バクチ

はその中納言殿の屋敷の中で行われるのだ——という説明を皆

まで聞かずに、が、ん、り、き、の百蔵が、急に白かおけきつた面をして開

き直り、

「へえ、上方じゃあ中納言様がバクチを打つんでげすかエ」

「いや、中納言殿がバクチを打つのではない、その岩倉村の山  
ふところにある中納言殿のお屋敷の中で、大トバの開帳が行わ

れると言うのだ」

「へへえ、考えやがったな、江戸でも御老中の屋敷の中なんぞで、そいつが、しよつちゆう御開帳になるんですよ、仲間や馬丁ちゆうげんが、寄つてたかつて御老中のお馬屋の中で、しやそじようこてやつをきめこむんでさあ、御老中でさえその位なんだから、中納言様ときちやあ豪勢なもんだろう、フリにこつちとらが行つたつて齒が立つめえがなあ」

と、いささかゲンナリしたのは、が、ん、り、き、の百に、中納言は少し食過しよくすぎる。中納言の方でも、が、ん、り、き、の百などはあまり食いつけまい。そこで、百が、つまり位負けがしてしまつた様子を不破氏が見て取つて、

「中納言だからつて、そんなにふる慄えるこたあねえぞ、百五十石の中納言様だ」

と言つて聞かせました。

「百五十石でげすか、位は中納言で、お高が百五十石でげすか、そんなこたあござんすまい、そりやあ間違いでござんしよう」

「間違いではない、攝家筆頭の近衛家このえけだつて、千石そこそこだ」

「セツケはそうかも知れませんが、中納言様が百五十石なんてえな受取れねえ、水戸も中納言でござんしよう、三十五万石でげすぜ、仙台も中納言でござんしよう、六十四万石でげすぜ、百五十石ではお前さん、馬廻りのごくお軽いところじゃがあせんか、そんなはずはございませんよ、おからかいなすつちや罪でござんすぜ」

「からかうわけではないが、まあ、そんなことはどうでもいいから、行つてみろよ、そのトバへ。とても面白い面が集まるんだぞうだ、全国的にな。全国的にそのトバへ面の変つた鼻つぱしの

強いバクチ打ちが集まつて、ずいぶんタンカを切るそうだ。だから、行つてみな、変つた人相を見るだけでもためになるぜ。手前も甲州無宿のがんりき、の百とやら、相当啖呵の切れる男じゃねえか、なにも中納言と聞いて、聞きおじをするような柄でもあるめえ」

不破氏に、こんなふう<sup>に</sup>油をかけられて、がんりき<sup>の</sup>百がまた躍起となりました。

「ようがす、行きますとも、そう聞いて後ろを見せた日には、甲州無宿が廢り<sup>すた</sup>まさあ、一本だけ不足だががんちやんの腕のあるところを、その洛北岩倉村というので見せてやりてえ、さあ出かけましょう」

ここで、張りきつて力み返つたのは現金なものです。

「まあ待て、今からでは遅いから、今晚は泊つて明日」

この時、もう日の暮れ方で、関守氏は炉辺の火を取つて、座あんどん右の行燈に移し入れました。

十

逸はやるが、んりきを控えさせて置いてから、不破の関守氏は、醍醐から帰つたはずの女王様の御機嫌伺いと本邸の方しこうへ伺候しました。が、ほどなくわが庵いおりへ戻つて来てから、改めて控えのが、んりきを呼び出して、わが庵の炉辺の向う際へ据すえつけ、さて言うよう——

「明日は、しつかりやつてくれ、が、んりきなだい名代の腕を上方衆に見せてやつてくれ、頼むよ。時に、その前戦まえいくさの小手調べに、ひとつそのバクチというやつの本格を、拙者に見せてくれまいか。

拙者通俗の概念というはあるが、実際の経験というはない、予行演習をひとつこの場で見せてもらえんものかなあ」

「合点でござんす——ずいぶん、が、ん、り、き、の腕のあるところをお目にかけてやしよう」

と言つて、が、ん、り、き、の百は、いま一方だけの手を懐ろの中に差し込んだと見ると、ズラリ引き出した自前の胴巻、それを逆さにふると、一つの小箱が飛び出しました。小箱の大きさ全長が一寸五分、幅が一寸足らず、関守氏が拾い上げて見ると、「下方屋」と書いてある。が、ん、り、き、が受取つて、パチンとその小箱の合せ目を外すと、コロがり出した賽粒さいつぶというものが大小四個。大小というが、その大なるも三分立方はなく、以下順次四粒、中なるあずきと小なるはそれに準じて、小豆しろものに似たような代物まであります。

「イヤに、ちつぽけな賽ころだねえ」

と関守氏が言う。百はそれをもとのように小箱に並べながら、「これは商売人の懐賽くろうと ふところざいつてやつで、駈出しには持てません、さて早速ながら本文に移りますが、バクチというやつも、その種類を数え立てると千差万別、際限はねえんですが、まず丁半ちようはん、ちよぼ、一というやつがバクチの方では関せきなんで、それにつづいて花札、めくり、穴一あないち、コマドリ、オイチョカブ……そこで、丁半を心得ていれば即ちバクチを心得てるも同様というわけなんです。先まず以て、物の数というやつは、たとえ千万無量の数がありましようとも、これを大別して丁と半とにわけると、丁でない数は即ち半、半でない数は即ち丁、世間に数は多しとも、この二つのほかに種はございません。これを人間にたとえて申しますと、人間の数は天の星の数、地に砂の数ほど有るにし

ましてからが、種をわければ男と女、この二つに限ったもので  
げす。すなわち男でない人間は即ち女、すなわち女でなければ  
即ち男、というわけで人間の区別には、この二色しかござんせ  
んよ、たまにや、ふたなり、なんていうのがあるが、あれは出来  
そこないなんで、本来は有るものじゃございませぬ。ところで  
数というものも、天地の間に、丁と半とこの二つだけに限った  
もので、それを当てるのが即ちバクチの極意ごくいなんでございます  
ねえ」

が、んり、きが講釈をはじめました。これは驚くべきことで、手  
の人、足の人であつたこの野郎は、今晚は口の人に転向してし  
まつて、まかり間違えば、ここでもお喋り坊主の株をねらう奴  
が、やくぎの中から現われようとは、ところからとはいえ、ふ  
ざけた野郎と言わなければならぬ。これを、

「ふん、ふん」

と聞いているから、この手のふざけた野郎が、いよいよいい気になつて、

「さあ、これは数の取引でござんすが、今度は物でござんすよ、この賽つ粒というやつが、バクチの方では干将莫耶かんしょうぼくやの剣つるぎでござんしてな、この賽粒の表に運否天賦うんぶてんぶという神様が乗移り、その運否天賦の呼吸で黒白こくびやくの端的たんできが現われる」

「大したものだ！」

関守氏が気合を入れたもので、が、ん、り、き、が、い、よ、い、よ、乗気になり、

「ごらんなせえな、額面が六個あつて、一から六まで星が打つてある、一をピンとも言ひ、六をキリとも申しやす、さてまたこのピンからキリまでに、天地四方を歌い込んで、一天てん、地六ち、

南三、北四、東五、西二とも申しやす、まずこの六つの数を、丁と半との二種類に振分けること前文の通り、丁てえのは丁度ということで、ちようど割りきれぬ数がとりも直さず丁、割って割りきれぬえ半端はんぱの出るのが半——つまり一は割りきれぬえから半、二は割りきれぬから丁、三が半で、四が丁、五が半ならば六が丁、という段取りなんで、おつと待ったり、このほかに五の数だけはごと言わずにぐと申しやす、五の目めというやつで——こうして置いて、この賽ころを左の手にこう取って、右に壺をこう構える、手が足りぬえから恰好かつこうがつかぬえ、旦那、その湯呑を一つお貸しなすっておくんなさい」

と言つてが、んりき、は、炉辺に飲みさしの関守氏の九谷の大湯呑に眼をつけました。

「よし来た」

関守氏は異議なく、その茶がすを湯こぼしに捨て、が、ん、り、きの前へ提供してやると、が、ん、り、きの百は、左手に隠した四個の小賽を、左の耳元で、巫女みこが鈴を振るような手つきに構えたが、関守氏は、その構えつぷりを見て感心しました。

## 十一

こいつ、ロクでもねえ奴だが、さすがにその道で、賽を握らせると、その手つきからして、もう堂に入ったものだ。

四粒はための天地振分けが、その中に隠れているのか、いないのか、外目はためで見てもわからない、軽いものです。もとより商売人の賽粒のことだから、軽少を極めて出来たものには相違ないが、それにしては軽過ぎるほど軽い、その手つきのあざやかさに、関

守氏がある意味で見惚れの価値が充分ありました。

そこで、耳元で振立てると、はつと呼吸が一つあつて、振一振、左の小手が動いたかと思えると、天地振分けを四箇まで隠した五本（？）の指がパツと開きました。その瞬間、四粒の天地は、早くも五倫の宇宙から、壺中の天地に移動している。つまり、はつという間に四つの小粒が、今し関守氏から借り受けた湯呑の中へ整然として落着いているのです。これまたその手つきのあざやかさに、またも関守氏の舌を捲かせ、

「うまいもんだ」

と言つて、思わず感歎すると、がんだりきは、こんなことは小手調べの前芸だよと言わぬばかりの面をして、

「本来は、この壺皿を左の手にもつて、右で振込むやつをこう受取るんですが、手が足りねえもんですから、置壺おきつぼで間に合

せの、まずこういうったもので、パツと投げ込む、その時おそし、こいつをその手でこう持つて、盆ゴザの上へカッパと伏せるんでげす、眼に見えちゃだめですね、電光石火でやつでやらなくちやいけません」

左で為す<sup>な</sup>ことを右でやり、右で行うことを、また引抜きで左をつかつてやるのだが、一本の手をあざやかに二本に使い分けで見せる芸当に、関守氏が引きつづき感心しながら、膝を組み直し、

「まあ、委細順序を立ててやってみてくれ給え、ズブの初手<sup>しよて</sup>を教育するつもりで、初手の初手からひとつ——いま言ったその盆ゴザというのは、いったいどんなゴザなんだ、バクチ打ち特有のゴザが別製に編ましてあるのか、いや、まだそのさきに、この場では湯呑が代用のその本格の壺というやつ<sup>つ</sup>の説明も願いた

い」

「壺でげすか、壺は、かんぜんより、でこしらえた、さし渡し三寸ばかりのお椀わんと思えば間違まちがいごさいません、雁皮がんぴを細く切つてそれを紙撚こよりにこしらえ、それでキセルの筒を編むと同じように編み上げた品を本格と致しやす、それから盆ゴザと申しやしても、特別別製に編ましたゴザがあるわけではごさいません、世間並みのゴザ、花ゴザでもなんでもかまいませんよ、それを賭場とばへ敷き込んで、その両側へ丁方と半方が並びます、そうすると壺振が、そのまんなかどころへ南向きに坐り込むのが作法でござんさあ」

「まあ、待ち給え、いちいち実物によつて……時節柄だから代用品で間に合わせるとして、ここにゴザがある」

と言つて関守氏は、つと立つて、なげしの上から捲き込んだ一

枚のゴザを取り出して、それをがんりき、きの前で展開しました。

「結構にござんす、それじゃあひとつ、盆ゴザを張って、本式に稽古をつけてごらんに入れやしよう、いいでござんすか」

「相手に取って不足ではあるが、拙者が君の向うを張るから、本式に、稽古と思わず勝負のつもりで、一つやってみてくれ給え、つまり、君が丁方となり、拙者が半方となる、では、君が半方を張り、拙者が丁と張るから、一番、委細のところを見せてもらいたい」

「ようがす、そのつもりで、手ほどきから御教授を致しましよ  
う」

と言つて、がんりきは、座を立ち上ると、盆ゴザの中央のところへ、前に言った通り南向きにどつかと坐り込みました。

盆ゴザの中央へ坐り込んだ途端に、がんり、きの百が、無けなしの片腕を内懐ろへ逆にくぐらせたを見ると、パツと片肌をぬいでしまい、それと同時に着物の裾をひんまくつた源氏店、つまりこれが俗にいう尻をヒンマクル形だと関守氏が、見て取りました。今時は芝居でよく見る形、悪党がかけ合いをする時の常作法、尻をマクルというやり方を舞台では見るが、本場はこれをはじめ、下品極まる伝統的作法ではあるが、下品のうちにも作法は作法、こうしたものかと見ていると、

「まず壺振りの芸当始まり——こうして諸肌ぬぎの、本式は諸肌なんです、ここは片肌で御免を蒙りやすよ、こう尻をヒンマクル、これ壺振りの作法でござんして、つまり、こりや野郎

のみえでするんじやございません、さあ、この通り潔白、頭のとつぺんから、毛脛けずねの穴まで見通しておくんなせえ、イカサマ、インチキは卵うの毛ほどもございやせん、という、潔白を証抛立てるヤクザの作法の一つなんでさあ——」

と説明を加えたことによつて、関守氏がまた改めて覚りました。

大肌ぬぎになつたり、尻をヒンマクつたりすることを、このやからのみえであり、強がりの表示であるとのみ見ているのは誤りで、なるほど、頭のとつぺんから毛脛の穴まで見通してくれという、潔白表明の作法から来ているのかな、一挙一動でも、その出所には名分が存するものだと感じたものです。

そこで、が、ん、り、き、の百は、代用品拝借の湯呑を取つて、それに紙を敷き、最初の形式で置壺に構え、これも最初の形で左の掌で軽小に一振り、眼にも留まらぬ天地振分け、賽さいはカラリと

壺に落ちたか落ちないか、その瞬間、左の手は早くも壺の縁に飛んで、壺は天地返し——カッパと盆の上へ伏せられたものです。

「さあ、旦那、お張りなせえ、丁方なりと、半方なりと、氣の向いた方をお張りなせえ」

「よし、丁と張った」

「勝負！」

と言ったが、んりき、きの百は、その壺皿を引起こすと、関守氏の眼で四つの小粒が行儀よく並んでいるだけ。

「さあ、持っておいで」

と言つてが、んりきは、その粒を消してみました。

賽を見せられただけで、どつちが勝ったか負けたかわからない。つまり場面には丁と出たのか、半と出たのか、けじめがつ

かないうちに賽を消され、眩惑された関守氏が、

「いつたい、どつちが勝つたんだ」

「はは、そりや素人衆しろうとにやわからねえ、今のは丁と出たんですが、四つじやあおわかりになりますまい、二つで真剣にやりましょう」

と言つて、小粒を握つた手を耳もとへ軽くあてがつた形で、が、んりきが言いました、

「四粒でやるなあ、玄人くろうとに限つたもんで、素人しろうとには見わけがつかまません、二つでやりましょう、二つで……ごくす、ろもう、というところで伝授しようじやございせんか。伝授にしてからが、素手すてじやあ息が合いませんから、何ぞ賭かけやしよう、コマを売りやすから、張つてごらんなさい」

「コマというのは何だ」

「コマ札というやつがあつて、貸元からそれを買つて張るのが定法じようほうなんですけど、そういうことはこの場では行われませんか、まあ、ようござんす、何ぞおかけなさい」

「よし、何ぞ無いかな」

と言つて関守氏は——あたりを見廻す途端に裏小屋で、烈しく吠え出したのは、例の電光石火のデン公に相違ない。

十三

犬の吠える声を聞いて、人の近づくことを知り、その人もうろんな人ではない、犬係を志願した米友が、犬小屋の前を通過したことによつて、犬が挨拶をしたに過ぎないということに関守氏が知ると、まもなく、ガタピシと裏戸を開いて、米友がそ

こへ現われました。

「どつこいしょ」

と言つて入り込むと同時に、肩にかけた何か特別に重味のある一個の袋を、土間の俵の上へ、ずしんと卸おろしてしまいます。

「何だい、めつぼう重そうなものをかついで来たね、南京米ナンキンまいじゃあるまいな」

と関守氏がききますと、

「持つて来るには持つて来たが、置場所に困つてるんだ、お前さん、こいつを預かつてくんか」

「何だよ、いつたい、品物は。南京米でなけりや、じゃがいもか」

「そんなあ、不景気なもんじゃねえんだぜ」

と米友が、汗を拭き加減に、今そこへ取卸した至極重みのかか

る袋を、伏目に見ながらの応対です。

「何だか、中身を名乗りなよ」

「当ててみな」

と、米友としては変に気を持たせるような返答ぶりでしたけれど、ワザと言うのでないことは、すぐに自問自答で底を割ってしまったことではわかるのです。

「<sup>ぜに</sup>銭だよ、こん中に、銭がいつぺえ詰つてるんだぜ」

「そいつあ驚いた」

と、関守氏と、が、ん、り、き、と、二人が思わず音<sup>ね</sup>を上げました。

代用食類似の不景気な品ではなく、銭とあってみると、たとえ<sup>びた</sup>鏢にしてからが、天下御免のお宝である。それを質<sup>いかん</sup>の如何にかかわらず、ともかく、袋にいつぱい包んで、小柄のくせに怪力を持つこの野郎が、汗を拭き拭きかつき込むというその重量

は大したもので、「お気の毒」（一厘錢の異名）にしてからが莫大の実働である。それを人もあろうに、ぜにかね錢金にはあんまり縁の遠かりそうな男が、不意にかつぎ込んで来たのですから、大黒童子が戸惑いをして来たようなものです。

二人が呆氣あっけに取られている間に、米友は素早く、何故に自分が重たい思いをして、この袋をここへにな荷きたい来たかということの因縁を、手短かに物語りました。

それによると、今日、この男は、暴女王のおともをして醍醐へ赴いたが、その三宝院の門前で、他の二体がお庭拜見をしている間を待合わせている時に、変な奴が来て、このおれを見かけて、袋をかついで洛北岩倉村へ行けと言う。いい錢になるから行けと言う。いい錢になろうとなるまいと、こつちはこつちの果すべき職務がある、人は同時に二人の主に仕えるわけには

いかない、それをいくら説いて聞かせても、このけつたいな野郎が、強引においらを誘惑する。それを虫をこらえてあしらっているうちに、かんじゆじ観修寺の方から役向と覚しい二三の両刀がやつて来ると、何をうろたえたか、このけつたいな野郎が、この金袋をおいらにほう抛りつけて一目散に逃げてしまった。役人は素通りをしたが、その野郎はかえつて来ない。いつまで経つても取戻しに来ない。

そこで、米友はさんざん考えさせられたが、本来は、なにも少しも考えることはない、手取早い話が、交番へ届けなければいのである。交番がその辺にまだ設けられてなければ、しかるべき役向へ、土地の人を介して届けてもらいさえすれば、事は簡単明瞭に済むのだが、今日、米友の場合、それがなかなか簡単明瞭には済まない。盗んだ物とすれば盗んだ奴に罪はあるが、

拾った者に罪があるはずがない。拾って、しかしてこれを隠せば当然罪になる。拾ってそうして我が物とすれば、これは猫婆ねこばばというものであつて、泥棒に準じた罪に置かれることは米友もよく知つてゐる。

ただ、米友の場合、困るのは、拾い主には拾い主としての義務がある、責任もあるというその心配なので、まず第一に、自分の住所氏名から訊ただされる、これが苦手であること。領分は変り、国境は違つてゐるのだけれども、いったん生梟いきぐらしにまでかけられた自分の古瑕ふるきずが、不必要なところであばかれた日には気が利きかねえやな。

いやだなあ！　そこで、米友は一気にあきらめてしまつて、その金袋を、通行人の隙をうかがつて、三宝院の境内やぶの藪の中へ投げ込んでしまつたのです。

そうして置いているうちに、暴女王と女親方<sup>三</sup>の方の宝物拝観も、御庭拝観も済んで、また三位一体となつて、この光仙林へ立戻つて来たには来たが、またも、あの金袋で苦勞する。金で苦勞するのは、大抵の場合は、金の欠乏で苦勞するということになるが、米友の場合は、金があり過ぎて苦勞をする。ああして置けば早晚、誰か発見する、発見された日のお取調べという段になると、結局は、探りさぐつて、このおいらが呼出しということになつてみると、どうでも事がうるさいよ。

ちえッ！　いくたび地団太を踏んだことであろう。ここへ戻つたものの、今のさききまでそのことを苦心して落着かなかつたのですが、とうとう思いきつた決断としては、とにかく、ここまです持つて帰つて、不破の旦那に相談をして、その知恵を借りるに越したことはない。

そう思つて、夜中に、またまた醍醐まで、びつこ足を引きずり引きずり立戻つて、藪の中をさがしてみると、まだあるある、いい気持ですやすや眠つていような形で、袋が藪の中に横たわつてゐる。そいつを、御丁寧に抱き起した米友は、重いやつを、えつちらおつちらとここまでかつぎ込んで、この始末です。「そういうわけだから、こいつは、おいらの金じゃあねえ、洛北の岩倉村というのへやるのが筋道だ」

「洛北岩倉村」

「うん、そこで賭場とばのお開帳がある、そいつの貸元へ納める金らしいぜ」

「そいつは、いよいよ運うん否ふてん天賦ふのめぐり合せだ」

とが、んりきの百も、頭でのの字を書いて、横目に金袋を睨にらんで、口にはよだれという体ていは、全く以て授かり物、渡りに舟と言お

うか、一方の旦那は、喉けしかけて資本を貸して洛北岩倉村の賭場へ推おしやろうとするのに、一方の野郎は、場錢を一袋かつぎ込んで、おれに使えと言わぬばかりだ。人間、運のいい時はいいもので、鴨が葱ねぎを背負つて、伊丹樽をくわえ込んだようなものだ。

このところ、がんだり、すつかり有卦うけに入つて、天下の福の神に見込まれた、この分じや明日の合戦も百戦百勝疑いなしと、むやみに勇み立ちました。

#### 十四

米友は、金の袋を置きっぱなしにして、そのまま出て行つてしまう。

そのあとを、関守氏は引きつづいて、がんだり、きからバクチ術の实地教授を受けて、丁半、ちよぼ一の何物なるかを、ほぼ了解しました。その間にも、がんだり、きの百はしきりに勇みをなして、明日の合戦幸先さいさきよし、上方では初陣ういじん、ここdeg、がんだり、きの腕を見せて、甲州無宿の腕は、片一方でさえこんなもの、というところを贅六ぜいろくに見せてやる。

そういう心勇みで、しきりに浮き立っていたが、いいかげんにバクチのコーチも切上げて、はなれた控間で一睡を催すと、その翌朝、早くも宇治山田の米友と連れ立って、洛北岩倉村へと遠征に出で立ちました。

この場合、何のために米友が同行するかというに、それは言わずと知れた金の袋の運搬用のためであります。あえてがんだり、きの百の随行というわけではない。

本来、米友としては、こんないけ好かない野郎との同行を好まないのです。

暴女王お銀様の尊大倨傲そんたいきよごうは快しとしない点もあるが、ドコか意気の合うところもあるし、なんにしても、女王と立ててあるところに寄留をしていけば、主人でないまでも、家主であるから、これに服従、と言わないまでも、頼まれればイヤとは言えない、行ってやるという気分にもなる。女軽業のお角に就いてはどうしたものか、ほとんど唯一と言ってよいほどに米友の苦手で、天下にこの女にばかりは頭が上らない。頭が上らない弱味はないのだが、それに押されて、この女に臨まれると身がすく竦むというの、全くがらにないことで、米友自身にもナゼだかわからない。駒井能登守に対してさえポンポン啖呵たんかの切れる米友が、お角さんの一喝を食うと縮み上つてしまう。お角さんには、

友公、友公と言つて叱り飛ばされるけれども、道庵先生でさえが、友さん、友さんと立てなければ用を弁じないことが多いのに、お角さんばかりには無条件で御せられるぎよ。それほど米友だから、が、ん、り、き、の野郎を好まないのは勿論もちろんです。こんな、いけ好かない野郎のおともなどは以ての外、同行をさえ嫌つてゐるのだが、今日はこの、いけ好かない野郎に同行するのではない、この金袋と同行するのだ。性のいい金か、悪い金か、それは知らないが、この金の行きどころは洛北岩倉村にあるので、山科光仙林に置くべきものではない、在あるべきところへ在らしめるように働くのはおよそ人生の義務であるという建前から、いけ好かない野郎と同行の不快を忍んで、金かつぎの役目に廻つた次第です。

ですから、途中、一言も利ききません。いけ好かない野郎が、し

きりにおてんたらを言つて御機嫌を取ろうとするのを、うるさいとばかり素気なく、一言も口を利いてやらないのであります。

いけ好かない野郎にしてもまた、このグロテスクの氣象を先刻御承知だから、できるだけその御機嫌を取結んで、いけ好くようにしようとなつとめるのだが、さつぱり利き目がありません。「兄さん、団子を買つたが食わねえか、それともお饅頭まんじゅうの方がよけりあ、お饅頭にしな」

と言つて、日岡の峠茶屋で甘い物を振舞おうとしたが、米友は根っから受けつけません。

「食いたかねえよ、おいらは食いたけりや自分の銭を出して食うよ、お前に買つてもらつて食うせきはねえ」

と、この時に米友がはじめて応答したぐらいのもです。かく応答するかと見ると、自分は汚きんちやくない巾着を出して、手早く鳥目

を幾つか並べると共に、茶屋の大福餅を鷲掴みにして、むしやむしやと頬張りました。

そういうわけで、がんりきもあきらめたのです。こいつは買収もできないし、懐柔も利かない。触らぬ神に祟り無しだと、神様扱いにして道のりを進め、粟田口から三条橋は渡らず、二条新地をずんずん北に取って、八瀬大原の方へと急ぎます。

十五

ほどなく、洛北岩倉村に着きは着いたが、さて賭場の在所がわからない。

トバはドコだ、トバはドコだと聞いて廻るわけにはゆきません。なあに、広くもあらぬ山ふところの岩倉村だ、やがて嗅ぎ

つけてみせると、が、ん、り、き、は、が、ん、り、き、の意地で、里人に物をたずねようともせず、そこここと嗅ぎ廻ったが、相当この道に鋭敏なはずのが、ん、り、き、の鼻が利かないのは不思議なほどです。

少々たずねあぐんだ時に、ふと小ぎれいな垣根越しに見ると、庭にうづくまつて植木いじりをしている一人の老人を見かけました。

「モシ、お爺さん、ちよつと物をたずねたいんですがね」と、が、ん、り、き、が猫撫声で問いかけると、垣根越しに、

「何だ！」

と言つて、頭を上げた途端にこちらを睨にらんだ眼つきに、が、ん、り、き、が思わず慄ふるえ上りました。

「これは飛んだ失礼——」

と、やみくもに頭を下げたのは、お爺さんなんぞと呼びかけて

みたが、これはまだお爺さんといふべきほどの年ではない、四十歳の前後でしょうが、その人相が、今まで見たことのないほどの異相を備えているということが、が、ん、り、き、をおびえさせたので、つまり威光に打たれたというような気合負けなのでした。見てみると、色が黒くて頭が人並外はずれて大きい、そうして、その頭の結い方を見ると、武家にも町人にも見られない形。そうかといって、お公卿くげさんのようでもあり、還俗げんぞくした出家のようでもあり、どうにもちよつと判断のつけようがない人柄ですが、その眼光の鋭いこと、人品におのずから人を圧する威力というようなものがあつて、が、ん、り、き、の野郎などは一睨みで、危うくケシ飛んでしまいそうなところを危なく食いとめたが、食いとめてみると、「おどかしやがんない、やい」といったような反動で、こいつにひとつ、しつこく物をたずね返してやろうという

気になったところが、が、ん、り、き、の意地です。そこで、

「ええ、少々ものをおたずね致したいんでございますが、この辺に中納言様のお屋敷てえのがございやしようかねえ」

「中納言の邸、やしき知らん」

「その中納言様には用があるわけじゃございません、中納言のお邸で、何かお慰みが行われるそうでござんすが、それをひとつ御案内を願たくまいたいたいものでござんす」

と猫撫声を逞たくましうしたが、今度は手ごたえがありません。手ごたえの無いのは軽蔑してやがるんだ、癩しやくなおやじめと、が、ん、り、きはややかさにかかつて、

「早い話が、そのお邸の中をお借り申して、関東関西のあんまりお固くねえ兄あにいたちが集まって、お慰みをやろうてえんでございませうが、なんとお心当りはございますまいか」

「……………」

やつぱり、手ごたえが無い。そこで、がんだり、ききが意地になつてなおも畳みかけて、

「ええ、手取早く申し上げちまえば、つまりその賭場が開けるんだそうで、そういう噂うわさを、道中でふと承つたから、三下冥利さんしたみょうりにお尋ねしたようなわけなんで、噂に聞くと大したもので、なんでも北は会津から、東は水戸、南は薩摩の涯はてから、赤間ヶ関の親分までが、ズラリと面を並べる凄すげえんだそうですが、来て見ると、見ると聞くとは大きな違い、ドコにそんな大親分がいらっしゃるか、ドコに天下分け目のトバが御開帳になつていか、てんで烟けむりも見えやしません。もしやこの山の上か、谷の底か、そんなところに本陣が据えてお有りになるんじゃないませんか。土地のお方に伺えばわかると存じまして、おたずね申

し上げるんでございますが、そんなような気分場所は、この近辺にございませんかなあ」

が、ん、り、き、が、こ、う、言、つ、て、イ、ヤ、に、含、み、声、を、鼻、に、か、け、た、が、相、手、は、全、然、取、合、わ、な、い、。

「外で何ぞ物を言う奴がいる、追い返せ」

と、奥に向つて人に命ずる気色ですから、が、ん、り、き、が、テ、レ、も、し、狼、狽、も、し、こ、い、つ、は、お、歯、に、合、わ、な、い、と、そ、の、ま、ま、ほ、う、ほ、う、の、体、で、そ、の、垣、根、を、立、ち、の、い、て、次、へ、と、移、り、ま、し、た、。

こ、う、し、て、広、く、も、あ、ら、ぬ、岩、倉、村、を、が、ん、り、き、と、米、友、と、は、次、か、ら、次、へ、と、お、と、の、う、て、歩、き、ま、し、た、け、れ、ど、も、中、納、言、の、お、邸、と、い、う、の、は、見、当、り、も、せ、ず、聞、き、当、て、も、せ、ず、ま、し、て、丁、々、発、止、の、ト、バ、の、気、分、な、ど、は、こ、の、男、自、慢、の、鋭、敏、な、鼻、を、以、て、し、て、も、嗅、ぎ、つ、け、る、こ、と、が、で、き、ず、結、局、う、ろ、う、ろ、し、て、再、び、舞、い、戻、つ、て、来、た、の、は、

さいぜんの垣根越し、あの癩にさわる、威光のある親爺おやじから追  
払われた、その垣根から屋敷の周囲をめぐるって見ると、とにか  
く、村中きつてこれだけの構えの家はない。なにも驚くほどの  
宏でも壮でもないけれども、作りに奥行があつて、なにか物々  
しい屋敷といえ、これほどのものはほかにない。

ということ、が、ん、り、き、が再吟味してみると、はて、こと  
によると、今のあの色の黒い、頭のでっかい、眼の光るおやじ  
が、あれが中納言かも知れない。

してみると、たずねる山は、このお屋敷かな、その気になつ  
て見ると、どうやら少々臭いぞ、だが——ここは大トバの開か  
れるキボでねえと、が、ん、り、き、の鼻は直ちに否定してかかっただけ  
れども、それでも念のためと、今度はひとつ、表門から正式は  
憚りはばかがあるとして、裏門の方からこつそり探りを入れてみよう

じゃないか。

その気取りで、が、ん、り、き、は垣根をグルリと一めぐり、裏門の方へ向つたが、どうも、ややともすると胸がドキついてならない。敵を見て、人見知りをするような兄さんとは兄さんが違つと、自分で力んでいるのだが、なんだか胸がドキつくというのは、考えてみると結局、あの今の頭のでつかい、色の黒い、眼つきの怖ろしく光る、あのおやじの眼つき、面つきが、変に頭に残つてならない。

どうも、あのおやじは只物でねえ、人にんによつて威光というやつはあるが、一眼であんなに睨みの利く奴にでくわしたことがねえ、どうもあれが魔をなすんだな。あの眼で、「何だ！」と言つて、一睨みされた時から、おこりをわずらつた。なんだか、この屋敷は怖こわいよ、見たところ、下屋敷でべつだん用心の構えも

厳しいというわけじゃあねえが、ちつとばかり犯し難いな、犯し難え気がするよ。

こいつは一番、不破さんにからかわれたかな。関守先生、あれでなかなか業師わざしだから、何か所存あつて、が、ん、り、き、め、を、おとりに使用したために、わざわざこんなところへ反間の手を食つたかな。だが、タカの知れたこのヤクザ野郎を、かついでみたところではじまらねえ話さ。よしんば、かつがれたところでおれはいいが、この同行の兄さんに気の毒だ。昨日から重い荷物をかつぎ通し、これが自分のものになるじゃなし、あつちへかつぎ、こつちへかつぎ、いかげん御苦勞さま——という気持で、思わず米友を見返つたが、その途端、それぞれ、この金袋が物を言うよ、不破さんがおつしやるだけじゃねえ、この金袋が物を言う、こいつも洛北岩倉村を目にかけて来たお金だ、すいきよ

うで大金を餅につく奴もあるめえじゃねえか、事は正真いつわり無し。

金の袋を見てまた巻直しという心で、この屋敷の裏手へ廻つたが、やつぱり何となしにドキつく。水を汲んでいる姉さんに、そつと物をたずねて――

「姉や、この屋敷はいつたい、どなたのお屋敷なんだエ」

そうすると、大原女おはらめが答えて言うには、

「岩倉三位いわくらさんみさんのお邸やしきどすえ」

「岩倉三位――中納言様とは違いますかねえ」

が、んりきの百には、三位と中納言のさかがわからない。中納言にも、百五十石から六十四万石まであるのだから、たいがい戸惑いしているところへ、三位ときた日にはまたわからなくなつた。

そこで、がんだりきの百が、狐につままれたような面かおをして、岩倉三位の門前を、振返り、振返りながら退却に及ぶと、それと行当りばつたりに、一つの団隊と衝突しました。衝突というわけではないが、危なく摺違すれちがつて、見ると、これは穏やかならぬ同勢でありました。都合十人も一隊をなして、いずれも肩を聳そびやかし、一種当るべからざる殺氣みなぎを漲らして、肅々と練つて来たのでありますが、その風体ふうていを見ると、今の流行の壮士風、大刀を横たえたのが数名、それに随従する無頼漢風のが数名。先頭に立った一人が、恭うやうやしく三宝を目八分に捧げて、三宝の上には何物をか載せて、その上を黄色のふくさと覚しいので蔽かくしている。

がんだりきの百が危なく体をかわず途端に、  
「コレコレ、岩倉三位の屋敷はドコだ」

それが、あんまり粗暴で横柄なたずね方ですから、が、ん、り、き、の百もいい気持がしない。顎あごを突き出して、唇を反そらして、たつたいま新知識の岩倉邸の門を、つまり顎で指図して教えてやると、先方は、ちよつと妙な面をしたが、相手にせず、すぐさま立て直つて、が、ん、り、き、に顎で教えられた通り、門をめざして肅々と繰込んで行きます。

が、ん、り、き、は、御大相な奴等だ、いったい何をかつぎ込むのかと、一行の後ろ影を見送っていました、はつと気のついたことは、そうだ、そうだ、うっかり釣り込まれて、本職を忘れていたわい。

こつちは、中納言様、中納言様と下手したてにばかり出て来たが、あいつらは、岩倉三位、岩倉三位と、大きそうに出やがつて練込んで行くが、結局、帰きするところは一つで、東西きつての大

賭場が開けるといふその貸元をたずねて行く奴なんだ。こつちの符牒ふちようが間違っているから、グレ通しだが、おいらと同じ目的のため、ああして乗込んだにちげえねえ。こいつあ、うっかり口をあいて見ているばかりの場合でねえぞ。あの尻尾をつかまえてやれと、百は早くもそこを合点したものですから、忙がわしく米友に向つて、

「兄さん、おいらが、きつと突留めて来るからお前、そこんとこでひとつ待つててくんな、首尾がよければ、あの門の前で手を挙げるから、この手が挙がったら、お前、物言わず門の方へやつて来てくんな」

こう言つて、米友を小蔭に休らわせて置いて、自分は抜からぬ面で、いま顎で教えてやった一行の後をくつついて、再び岩倉三位の邸前まで取つてかえしたものです。

十六

そうして、動ようす静ずいかにと窺うかがつていると、この物々しい一行は、玄関へかかると、恭しく、先手が承つて捧げた三宝を式台に置き、おごそかにその錦の覆いを払つて、それから、一同はこれより三歩さがつて、土下座をきりました。

「岩倉三位殿に献上！」

「岩倉三位殿に献上！」

こう言つて、土下座をきつて跪かじこまつた一同が、異口同音に呼ばわつたかと思うと、そのまま突立ち上り、踵きびすを返して、さつさと来し門外へ取つて返すものですから、ここでも、が、ん、り、きの百が、すっかり拍子抜けがしてしまいました。

これは、てつきり、こちとらと目的を同じうした東西のお歴々、壺振、中盆なかぼん、用心棒、の一隊と見て取つて、直ちに諒解があつて、玄関へ通されるか、裏手へ廻されるか、こつちの方もそれに準じてと、固唾かたずを呑んでいると、案に相違して、かくの如く、献上物を捧げつぱなしにしたままで、さつきともと来た道へ帰つてしまふ。賭場の仁義にこんなことはない。

そもそも、献上物ならば献上物のように、捧げる方ばかりの片仁義というのはなく、受ける方にも相当の応接がなければならぬのに、置きつぱなしの献上物というのが、どだい礼儀に叶かなわねえ、いってえ、何を献上に来やがったのかと、がんに、きの百が、二つの眼を使いわけて、その玄関の式台に置据えられた三宝の上の錦のふくさと覺しいのを払つた献上物というやつすの現物を一眼見て、この野郎がまたしても、三斗の酢すを飲ま

せられたような面をしました。

「えッ……」

何だ、何だ、何だてえんだ、ありやいって、人間の片腕じやあねえか、イヤに当てつけやあがるぜ、人間の生腕なまうでが一本、三宝の上に置いてあるんだぜ、いってえ、何のおまじねえだ、当てつけるなら少々お門違いのようなものだが、あいつらの言つた今の口上は、「岩倉三位殿に献上!」「岩倉三位殿に献上!」と吐ぬかして、決して、「が、ん、り、き、の百様へ進上!」「が、ん、り、き、の百様へ進上!」とは聞えなかつた。あの献上物なら、こつちが欲しいくらいなものだが、さて、また何の由で、岩倉三位ともいわれる御仁ごじんが、あんな献上物を持込まなければならぬのか、また何の由であの奴らが、こんな献上物を持込んだのか、何が何やら、煙けむに捲かれ通して、居ていいか、立っていいかさえわか

らない。今日は幸先さいさきがいいと思つて出て来てみると、現場へ来てはカスの食い通し。こんな日にや、出る目も出ねえ、ちえツ面白くもねえと、が、ん、り、き、が唾を嚙かんでやたらに吐き出しました。

そうすると、後ろ手の方で、またしても喧々囂々けんけんごうごう、人の罵ののしる声、騒ぐ物音、さあまた事が起つたぞ、喧嘩だな、喧嘩となれば、てつきり今の物々しい奴等、してまた、その相手は、待てよ、ことによると、おいらの御同行のあの気の早い、あ、ん、ち、ゃ、ん、じゃあねえかな。こいつ事だぞ、あ、の、あ、ん、ち、ゃ、ん、と、き、た、日、に、や、相手かまわずだからなあ、事だぞ！

が、ん、り、き、は、宙を飛んで駈けつけて見ると、果して、宇治山田の米友が、石の上に腰をかけて、大地を指さしながらたんかを切っている。それを取りまいて、いきり立っているのはたつた

今、岩倉三位へ献上物の一行に相違ありません。

いつたい、何がどうしたと言うんだ。何が行きがかりで、こ  
うなつたんだい。つまらねえいさかいをしなさんなよ。

が、ん、り、き、は、加勢のつもりではない、取和とりなだめのつもりで、例  
の馬力で一足飛びにその現場へ戻って見ました。

十七

大地を指さした宇治山田の米友が、生腕なまうで献上の一行を相手に、  
何をたんかをきつているか聞いてみると、

「そんなら証拠を出しな、証拠を出してから物を言いな、なる  
ほどと思う証拠がありさえすりゃあ、この場でおいそれと渡し  
てやるよ、証拠がなけりゃあ、誰が何と言つたつて渡さねえよ、

たしかにこの袋が、お前<sup>めえ</sup>たちのもんだという証拠を見せてくんな、お釈迦様に見せても承知のできる証拠を出してみねえな、そうすりゃ、この場で文句を言わずに渡してやるよ、証拠がなけりゃ、誰が何と言ったって渡すこっちゃあねえ！」

と啖<sup>たんか</sup>呵をきっている米友。これと正面对して、青筋を立てているのは、さいぜん、生腕献上の先手を承つて、三宝を目八分にささげた若い髯<sup>ひげ</sup>むじやの浪士風の男であります。

「黙れ、証拠呼ばわりすべき性質のものじゃないぞ、その袋は、我々の仲間が昨日醍醐の三宝院の門前へ預けて置いて来た品じゃ、袋と言ひ、中味といい、これに相違ないから申すのじゃ、その方は、黙つてこちらへ引渡して行けば、それでよいのだ、仔細ないから置いて参れ、つべこべと物を申すに於ては、眼を見せて遣<sup>つか</sup>わすぞ」

と、右の浪士風の男が、つとめて抑損して、馬鹿をさとすつもりで言ったようですが、相手が宇治山田の米友ですから通じません。

「お前の方は仔細なかろうが、おいらの方はそれじゃ済まねえよ、当然渡すべき人に渡さなけりやあ、義理が済まねえんだ」

「その当然渡すべき人々が我々なんだ、我々の所有物を、我々が受取ろうというのだから、これより以上の当然はなかろう」

「だから言わねえこつちやあねえ、お前さんたちが、当然受取るべき本人なら、本人のような証拠を見せてくれと言つてるおいらの理窟がわからねえのかい」

「証拠というて、貴様に受取を出すべき筋はない、どだい、貴様は誰に渡すつもりで、その金袋を持って来たのだ、貴様は、さいぜんから、渡すべき人に渡すと言っているが、その渡すべき

人というのは、いつたい誰だ」

「うむ、そりゃあな……」

と言つて、さしもの米友が、ここで少し口籠くちどもつたのは、当然の所有者に渡してやるべきつもりで、ここまで持つて来たには相違ないが、その、当然の当然とすべき本人が何者であるかは、御当人にもわかつていないのです。これから、その御当人を探し当てて、返すところへ返してやるというつもりで、目下捜索中なので、返すところから、こればかりは、さすが米友の正義を以てしても即答がなり兼ねて、不覚にも言葉尻が濁るのを、相手は、ソレ見たことかと鋭く突込んで、

「それ見ろ、それは言えまい、本来、貴様らの持つべき筋合でないから言えないのだ、悪い了簡りょうけんを出すもんじやない、さもない心を起すもんじやあないぞ、物が欲しければ、相当の筋道を踏

んで持つべきものだ、さあ、素直に我々の手に返せ、戻せ、わかつたか」

「わからねえ！」

米友が決然として言いきつたのは、この場合、正道がかえつて、わからずやのように受取られるのみならず、拾得物を横領の悪漢のようにも受取れるものですから、かんにんぷくろ堪忍袋の緒を切りました。どつちが堪忍袋の緒を切つたのだか、わからないところがお愛嬌だと、が、ん、り、き、が、ん、り、きの百はせせら笑つたが、笑いごとではない。この時、浪士の右の足が撥はねたかと思うと、米友の胸板むないためがけて、肋あばらも砕けよと蹴りが一つ入つたものです。普通ならば、これだけで事は解決してしまうのですが、

「何をしやがる！」

と米友は、蹴りを入れたその足を、両手でがつきと受留めて、

こぐら返しに逆にひっくり返したものですから、蹴りはきまらず、浪士の身体が横ざまにひっくり返つて、あつぷ、あつぷと言いました。

その事の体ていが、今まで、さげすみ半分ぶんぶんに、処分をこの一人に任せて、傍観の体勢でいた献上の一行を、残らず沸騰させてしまひ、

「こいつ」

「この野郎」

「この馬鹿野郎」

「この身知らず」

「こいつ、気ちがいだ」

「泥棒だ」

「胡麻ごまの蠅ばちだ」

寄つてたかつて袋叩きの乱戦になると、こうなると、宇治山田の米友が本場です。

こういう喧嘩にかけては、相手の拳こぶしを受けて立つような男ではない。相手の一つの拳が来る前に、ぱた、ぱた、ぱたと三つ四つは、こつちから打ちが入っていて、あつ！　と言わせる間に素早く飛びのいて、例の金袋を引つかつぐや否や後ろへさがつたのは、逃げるつもりではない、足場をつくるつもりらしい。

十八

そこで、梨の木を一本、後ろ楯だてに取つて、袋をかこい、蟠わだかまつた米友は、例の手練の杖槍を取つて、淡路流に魚鱗の構えを見せるかと思うと、そうでなく、後ろにかこつた金の袋の結び目

へ手をかけて、

「面倒くせえから、それ、欲しけりやあくれてやらあ、手を出すなら出してみな、面つらでも腕でも持つて来な、目口から押出すほど食わしてやらあ！」

袋の結び目を手早く解いて、その両手を袋の中に突込むと、すくえるだけのザクぜに銭をすくい上げ、

「そうれ！」

と言つてバラ蒔まきました。バラ蒔いたその当面は、呆あつけ氣に取られた献上隊の目と鼻の間です。

「あつ！」

と、これにはまた事実上の面喰いで、予期しなかつた目つぶし。相手にこれほどの飛道具が有ろうとは思わなかつた。

さて、それから、花咲爺が灰を取り出して蒔くように、掴つかん

では投げ、掴んでは投げる。

何といつても、盲滅法めくらめつぼうに投げるのではない、十分の手練に、

二分の怒気を含めて投げるのですから、敵いかに多勢なりとも、  
面おもてを向けることができません。面を向ければ、多武とうの峰の十三

重の塔と同じく、向いたところが満面銭で刻印されてしまう。

額へ当れば額、頬つぺたへ当れば頬つぺた、縦に來た時は篋深のぶか  
に肉に食い入ろうというのだから、この矢面には向うべくもな  
い。加うるに、この弾丸はなかなか豊富で、むやみに掴投げ  
にしてさえこの一袋は相当の使い度があるのに、これを適度に  
使用されてはたまらない。左に持った一掴みの中から、右手で  
一枚を抜き取つて、その片面にしめりをくれる。

「総花ねらいうちにフリ撒まいてやるといふのに、そう遠慮するなら今度あ、  
狙撃ねらいうちだぞ、それその前につん出た三びん野郎！ こつちへ向け、

そうら、手前のお凸でこの真中へ、一つお見舞

と言つて、はつと気合をかけると、予告の通り三びん氏の額の真中へ、寛永通宝子がびつたりと吸い着く。

「そうら見ろ、お次ぎはこつちの三下野郎、イヤにふくれた手前の赤つ面の頬つぺたに一つ——こんにちは」

と言う言葉の終らぬ先に、なるほど、三下氏の頬つぺたに吸いついた文久通宝子、まるまっちい蝙蝠こうもり安やすが出来上る。

「その昔の、おいらの先祖の鎮西八郎ちんぜいはちろう為朝公ためともじゃあねえが、お望みのところを打つて上げるから申し出な、頭痛、目まい、立ちくらみ、齩齒むしばの病、膏藥こうやくを貼つてもらいてえお立合は、遠慮なく申し出な、そつちの方の大たぶさの兄あいが、イヤに物欲しそうな面つらあしておいでなさる、ドレ一丁猷あじやしようか、そうら！」

空を切つて飛んだのは、今度は名代の当百とうひやく。以前のよりは少々重味があつて、それが物欲しそうな大たぶさの耳の下をかすめて、鬢びんつけの中へ、ダムダム弾のようにくぐり込んだのだからたまらない。

「あつ！」

と、自分で自分の髪の毛をかきむしつてとび上りました。

「そうら、こちらの方でも御用とおっしゃる」

今度は一つ掴み、数でこなしてバラ蒔いて、

「あちらの方でも御用とおっしゃる」

指の股へ四枚はさんで、四枚を同時に振り出すと、それが眼あるもののように飛び出して、相手四人の顔面へ好みによつて喰いつこうというのだから、眼も当てられない。

「こちらの方でも御用とおっしゃる」

恵方えほうを向いた年男。

「あちらの方でも御用とおっしゃる」

蛤はまぐりをつまみ上げた長井兵助。

これを見て、が、ん、り、き、の百の野郎が、手を拍うって嬉しがりました。

「寛保二年、閏十月うるうづの饑饉ききん、武州川越、奥貫五平治おくぬぎ、施米ほどこしまいの型とござあい——」

頼まれもしないに寄つて来て、袋の結び目から、受けなしの片手をさし込んでの一掴み、口上交りで米友の手伝いをはじめました。

「下総の国、印旛いんぱの郡こおり、成田山ではお手長お手長」

いい気持になつて、人の懐ろで施しをはじめ。友兄いほどにはないが、こいつもまた、相当の曲者で、投げる錢に眼はつ

けないが、鼻ぐらいはくつつけて飛ばすから、受けきれない。

さしもの献上組も、これには全く辟易へきえきしていると、頃を見計らったが、りきの百蔵が、米友を顧みて、

「あんちゃん、物は切上げ時が、かんじんだぜ、この辺で見切りをつけようじゃねえか、お前は跛足びつこで、おいらは足が早いんだから、お前、ひとつおいらの背中へ飛びつきな、猿廻しの与次郎とおいでなさるんだ、お前を背負って、おいらが走る分にああ、ドコからも文句の出し手はあるめえぜ」

「合点がってんだ」

その時の米友は、感心に人見知りをしません。投げるだけ投げた手を、ぱたぱたとはたき上げたかと思える間に――

袋はそのまま杖槍は腰に、猿が猿まわしに取つつくように、が、り、き、の、背、中、へ、御、免、と、も、言、わ、ず、に、飛、び、つ、く、と、心、得、た、も、の、で、

が、んり、きの百が、そのまま諸もろに肩をゆすり上げて――

「あばよ！」

と言つて、献上組を尻目につけ、足の馬力にエンジンをかけると、その迅はやいこと。

「あれよ、あれよ」

と献上組、あとを追わんとする者なし。

十九

駒井甚三郎の無名丸が、東経百七十度、北緯三十度の附近にある、ある無名島に漂着したのは、あれから約二十日の後でありました。

漂着というけれども、むしろこれは到着と言つた方がよいか

も知れぬ。

船がある一定の航路を持っている限りに於て、それが誤れば漂着であり、それが正しければ到着であるが、駒井の船は到着すべき目的地を持ちませんでした。

海上は、天佑てんゆうと申すべきほどに無難でありました。

無難とはいうが、なにしろ、一葉の自製船を以て、世界の太平洋中に約一カ月を遊弋ゆうよくしたものですから、その苦心と、操縦は、容易なものではないが、運よく、颱風の眼をくぐり、圏をそらして、世の常の漂流者が嘗なめる九死一生の思いをしたということは一度もなかったのですが、それだけ、駒井船長の隠れたる苦心というものが、尋常でないことがわかります。駒井甚三郎でなければ、頭髪もすでにこの一航海で真白になっていたかも知れません。

東経百七十度、北緯三十度の辺に一島を見つけて、ようやくこれに漂着したとはいふものの、これはあらかじめ、駒井が測つたところの地点であり、予期したところの一島でありました。

いずれにしても、この辺に島がなければならぬ。人の住む島か、鬼の棲む島か、ただしは、人も鬼も全く棲むことなき島か、その事はわからないが、この辺に島嶼とうしょが存在することを予想して、そうして、針路をそちらに向けたところ、果してこの島を発見したのですから、極めて好条件の漂着であつたことに相違はありません。

「それでも、この辺の海上は至極無事なのです、天候はいずれの海上へ行つても予想はできませんが、地理と人情はたいいていわかります、この辺には、人を食う種族の住む島はなく、人の船を襲うて荷を奪う海賊というものも、あまり現われないので

す、支那の近海とは違つて、<sup>アメリカ</sup>亜米利加へ近づくほど海賊が少ないのです、土地が豊かで、天産物が多く、そうして、人間の数が少なければ、人は人の物を奪わずとも、天与の物資そのものを目的とします。与えられたものが即ち運命なりとすれば、とにかく、あの島が、最初に我々を迎えてくれたのですから、あれに我々の運命をかけてみることも天意かも知れません、全員総上陸の用意を命じていただきたい」

駒井甚三郎は、遠目鏡を離さず、船橋の上に立ちながら、相並んで島をながめている田山白雲に向つてこう言いました。

ほどなく、総上陸の用意が整えられた時、駒井甚三郎は、みなに命じて大砲を一発打たせてみました。この航海で大砲を使用したのは、これで二発目です。一発は鯨の群の遊弋ゆうよくに向つて試みてみました。今度は島へ向つて礼砲のつもりです。その、

轟然たる響きを聞いても、島のいずれの部分からも、人獣の動揺する姿を認めることができなかつたものですから、駒井は遠目鏡を外して、また田山白雲に向つて言いました、

「無人島です、人間は住んでおりません、もし相当多数の住民がありとすれば、船がここまで来る間に土人の舟が現われるはずですが、舟がちつとも現われない上に、人も現われて来ない、人間の使用品の類も漂うて来ない、煙も揚らない、人間の住んでいる気配はありませんから、一同揃つて、このまま上陸ができることは幸いです。しかし、一方から考えると、人間が住んでいないということは、人間の眼の発見から逃れていたという意味にもとれますが、同時に、人間がすでに見つけたとしても、土地そのものが住むに堪えないから、それで放棄したものともし解釈がつくのです。総員上陸の用意はして置いて、下検分のた

め一応、先遣隊をやる必要がありますね、誰彼と言わず、わたしとあなたとで、検分を試みてみようじゃありませんか、船夫せんどうを二人連れて、バッテリーで漕がせて、もう一枚、ムクを加えて行こうではありませんか」

駒井からこう言われて、それを拒む白雲ではありません。

「至極妙です——早速手配をしましょう」

ここで、駒井と白雲とが、一人の船夫せんどうをつれて、ムク犬をも乗

組に加え、小舟でこの島に上陸を試むことになりました。残された船員一同は、そのいずれにも不安を感じずるということがなかったのは、出で行く人は、自分たちの頭ではわからぬ用意周到の船長であり、それと行を共にする田山白雲は、世に珍しい豪傑の一人ですから……それに、船長は精良なる銃器を持っているし、白雲は有力なる日本刀の二本を差している。船頭二

人はこの道の熟達者であるし、ことにムクという奴が、未知未開の蛮地へ入り込んで、必ずや人間以上の本能を發揮するに相違ない。たとえ鬼が出ようとも、引けは取らない——という信頼が充分だし、また船に残る者も、残された者も、僅かの航海の間に相互の協同精神が熟しきつている。ことに、七兵衛入道の肝煎きまぶりいりというものが無類です。動かす必要のない船を預かる場合に於て、水も洩もらさぬ用心が、この入道の胸にあることも、船中の信頼の一つでありました。

## 二十

それから清澄の茂太郎が、逸いち早はやくメイン・マストの頂てっ辺ぺんに打ちのぼつて、本船を離れて行く船長と白雲の一行を、視覚の及

ぶ限り監視の役をつとめている。

船の甲板では七兵衛入道が、やがて総員上陸すべき人員の点検と、陸揚げすべき資材の整理に大童となつておおわらわいる。

七兵衛のその後のいでたちを見ると、いったん入道した形を決して変えない。あれ以来、絶えず船中で、頭へ剃刀かみそりを絶やさないと見えて、入道ぶりがもはや堂に入つているところへ、潮風で磨きがかかつて、地頭そのものがいつそう自然の形に見えるようになりつつあります。

その着物も、またそれに応じて、日本木綿を縫い直して筒袖にし、それに駒井形のだんぶくろをつけて、船員としても板についた形になっている。

かくて、全員総上陸の点検の上、物資は物資でこれを大別して、船に残すべきものと、陸上に持つて上せるべきものとし、と

りあえず衣食住を保証すべき物資と、その用具の取揃えにかかりながら、七兵衛が言いました、

「まず第一が水ですね、水の手がなければ人が住めない、井戸を掘るとか、水口を取るとか、鶴嘴つるはしと、鍬くわと、鎌と、鉈なた、鋸のこぎり——そういったような得物を、ここへお出しなせえ。それを束たばにして、がっちりとここへ並べて置きなせえ。それから、煮炊にたぎをする鍋釜、米と塩、鯉節と切干——食料は、よく中身を調べて、この次へこうしてお置きなせえ。とりあえず野陣を張る天幕はいかかね、張繩から槌つち、落ちはないかね。それから医者さんの道具と薬箱、これは潮水に当てねえように、雨にかからねえように、桐油とうゆをかけて、細引にからげて、取扱注意としておくんなさいよ。めいめい足を忘れねえように、蛮地の山坂を歩くには足が大事だよ、足が——沓くつに慣れた者は沓、草鞋わらじ草履ぞうりの用意、

二足でも、三足でも、よけい腰にブラ下げるようにして、水筒には、それぞれ湯ざましを入れて、これも腰から放さねえことだ。陸おかへ上つたら、直ぐに飲める水が有るか、ねえか、そこのとこの用心だ、時候がわりの土地へ来て、うっかり悪い水を飲んじやあ、取返しがつかねえぜ」

さてまた、婦人と小児の周旋は、お松が承つて、これを担当する——

婦人といつても、監督のお松と、それから乳母ばあや、七兵衛入道が押しつけられて来た南部の生娘きむすめのお喜代——番外としては、ほとんど監禁同様に船室に留められている兵部の娘、それだけのもの、小児としては登少年たった一人——清澄の茂太郎は、小児扱いをすることはできない。

男子はすべて、総上陸の用意をしているが、婦人と小児は、必

ずしもそうは急がない。というのは、果して、あの島に安全生活の保証が立つか立たないかは、船長と総監（白雲のこと）が帰つて来てでなければわからない。よし、人間の生活に堪えることが充分に保証ができたとしても、婦人小兒連は当分の間、野宮同様の空気に曝さらされるよりは、この船の中を当分の住居としていて、陸上に相当の住宅準備が出来て後、本上陸ということにしても遅くはない。よつて、これら婦人部隊は、比較的に動揺が穏かです。

幸いにして、婦人部隊に至るまで、いずれも健康に恵まれている。恵まれているというよりも、船長の周到なる用意と知識とが、船上衛生に抜かりなからしめている。その上に、食糧から医薬に至るまでの準備が潤沢であつた——等々の条件が、船員のすべての健康を保証していたので、健康以上に張りきつた

精力に溢あふれて見えるのさえある。

してみると、ここまで、世間の漂流記にあるような極度の欠乏や困苦から、この船員はすべて免らされて来ている。天候と言ひ、健康と言ひ、珍しいほど好条件に恵まれているもので、ある意味では、世界周遊の遊覧船に乗せられて、たまたまこの地に船がかりをしたような気分をさえ与えられるのであります。が、前途のすべてが、こんな洋々たる気分ばかりではあるまい、ということには誰にも予想されるのです。

ことに船長の身になってみると、現在の好条件がかえって、未来の多難を暗示するような考慮もないではない。それをまた本当に思ひやっているのが、船長についてはお松です。白雲は豪放で、それらの点には、さのみ頓着はしていないようです。

お松は、一通り甲板から各船室を見舞つた上に、ひとり船長

室へ来て留守をつとめていながら、眼の前に浮ぶ島と、それに向つて漕ぎ行く駒井と白雲一行の小舟を、窓の内から見送つて、希望と心配とに張りきつておりました。

二十一

ここにもう一つ、隠れたる功績をうたわなければならぬことがあります。

それは、メイン・マストの上にいる清澄の茂太郎であります。

この少年は出鱈目でたらめをうたい、足拍子を取り、また興に乗じて踊り出すことに於て、船中の愛嬌者とはなつていますが、愛嬌者以上の実用の功力くりきを認められたこと、今度の航海の如きはありません。それは何人よりもまず、駒井船長に認められました。

というのは、時に感じては、逸早くメイン・マストへ攀じ上つて、出鱈目の口上を口走るが、その出鱈目のうちに、驚くべき天気予報を感知したのが駒井船長でありまして、今日は無事であること、明日は降るであろうこと、曇るであろうこと、または即今、南の方から低気圧が捲き起ること、北の方の潮の色が変っていること、そういうことが出鱈目の口うらのうちに含まれているのみならず、彼の音声の変化だけでも、氣象に合わせ科学的に考慮してみると、経緯度ごとに音節の変調を来たしているやに見える。それを最も早く見て取り、聞き取った駒井船長は、船室のうちから、その研究を統計に取りかかりました。その結果が、その少年の声によって、氣象の変化をある程度まで識別し得られる——船の針路が、ある程度まで暗示せられ得る、ということを見出して、有力なる航海指針のうちに加えま

した。それで、この航海が、漂流に似て漂流にあらず、初心の航海者が当然受くべき苦難から、きわどい潮さきによく逃のがるることを得て今日に至ったということと、今日に至つてこの島へ安着したその予感も、この少年の感覚に負うところが多いのであります。

もちろん、人間のことだから、機械のように固定した正確を得ることはできない点もありますけれども、観察の如何いかんによつては、生きた気象台であり、生きた羅針台であり、生きた航路案内者となり得ることを、駒井船長が見て取つたものですから、これを観察し、これを利用することを怠りませんでしたけれども、それが評判に上ることによつて、船中の要らぬ好奇心を加え、当人の鋭敏な感覚に無用な刺戟を与えてはいけなから、誰にもそのことを知らせずに、当人にのみほしいままに歌わせ、

ほしいままに躍おどらせて、その純真性をつとめて保護して置かなければならないと思ひ、誰にも言わないうちに、ただ一人、お松にだけには、相当の暗示を与えて置きました。

それですから、船長が島に渡つた後のお松は、船長室を守ると共に、マストの上なる茂太郎の言動挙動に、それとなく注意を払つておりますけれども、今日の茂太郎は、歌うべくして歌わないのが不思議です。陸に着いたら真先、サンサルヴァドルの歌を歌うべきはずになつていたのが歌いませぬ。

茂太郎がこの島を歌わないということが、お松にとっては、この島が人の住むべき島でない、人が住むことに、何ぞ障壁のあるべき島だということの暗示にならないでもありません。

それよりもなおいけないのは、万々一、そんなことは予想するさえないやで、また予想するほどの必要が微塵みじんもないことです。

けれども、島の検分に赴いた船長さんと田山さんの一行の上に、何かの異変が——というようにまでもお松は念を廻めぐらして見るのであります。

そこで、身は船室に於て、船長なき後の船の一切の機密をあずかると共に、耳は高くメイン・マストの上に働いて、今にも起るべき、予報と、合図を待つことに集中されているのであります。

幸いにしてやや暫く、歌うべきものの歌う声がありました。お松は福音を聞き貪むさぼる如く、その声に執着すると、その歌は——

ダコタの林の中に

小屋を作り

パンを作り

泉を飲み

大地と岩と

五月の花をながめ

星と

雨と

雲とに驚けば

ものまね鳥が啼<sup>な</sup>く

山鷹が飛ぶ

わたしは

新世界のために歌う

脚には聖なる土

頭の上には太陽

地球は廻転する

偉大なる哉、先人<sup>かな</sup>

ここに女性と男性の国

魂はとこしえに

海よりも遥かに偉大に

満ちては退く

退きては満つる

わが魂もて

不滅の詩を歌え

国々に起る

海と陸との

英雄

私は悪を歌おう

悪というものはないもの

現在に不完全なものはない

未来に不可能なものはない

ごらんなさい

大地は決して疲れなから

例によつて出鱈目の歌だが、その出鱈目にも相当に根拠はあ  
るのです。

どう根拠があるということは、当人には無論わからないが、  
駒井船長や、田山白雲の会話を聞き、また船長から口うつしのお  
松の筆記の席に侍し、そんなこんなで、うろ覚えが興に乗じ  
て、前後左右、交錯したり、焼直されたりして、飛び出して来  
るのですが、今の歌もまさしくその反芻はんすうに相違ない。お松もそ  
の歌詞をそっくり受取ったわけではないが、その音節を聞いて  
いると平和であり、その歌調の表現は、悲観でも失望でもない、  
むしろ、積極的に、大地と自然とを謳歌おうかする歌になっているも

のですから、お松は、この島が豊かな土地であり、船長はじめ検分の一行も極めて無事満足に探検を進めて、希望に満ちているということをも、この歌が暗示すると認められたものですから、ほつと安心しました。

二十二

上陸して島内の最寄りを一応視察した駒井甚三郎は、同行の田山白雲に向つてこう言いました、

「水も掘れば出て来る見込みは充分だし、土地も開けば耕作の可能性がたしかです。ただ川がないから、水田は覚束おぼつかないと思うが、陸稻及び麦、しからずば蕎麦そばなどは出来ましよう。そのほかに、この地特有の食糧を供する植物があると思います。とも

かくもここへ我々の根を卸してみましよう、相当生活してみても見込みがなければ、また手段方法を講ずる余地が有りそうですねものです。それにこの島は、周囲せいぜい二三里のものでしようが、必ずや遠からぬ附近に、これに類似した大小幾つかの島が存在すべき見込みがあります。ひとまずここを足がかりとして、近き海洋を視察している間には、我々に与えられた最も適当な楽土を発見するかも知れない、約束せられたる土地としようなものがないとは限らない——左様、東経は百七十度、北緯は三十何度の間、ハワイ群島はミッドウェイ諸島に近いところ、或いはその中の一部に属しているかも知れません。これらの島々は、まだ名あつて主のなき島と謂いうべきだから、我々に先取権が帰着すべき希望も充分あります。では、船へ帰つて、この旨、一同に申し告げて、総上陸ということを決行しようで

はありませんか」

白雲がこれを聞いて頷うなずき、

「結構ですね、そうして、いよいよ総上陸ということになりますと、まず第一に住居地の選定をして、上陸早々、住宅の建設に取りかからねばなりません、図面を一つ引いて行きましようかね」

「そうして下さい、とりあえず海に近いところ、あの辺か、或いはこの辺がいいでしょう、材料は、近辺の、成長するあらゆる植物を、利用のできるだけ利用することですね」

「設計図は任せて下さい、拙者が、原始的で、そうして気候風土かなに叶かなう様式を創案してみますから」

「そう願いまししょう。それから特に注意しなければならんことは、気候はこの通り温かいのですから、霜雪の難はありません、

大河湖沼が乏しいから、洪水の憂いというものからも救われましょう、唯一の心配は風ですね、海洋の中の一孤島ですから、風当りは相当強いものと見なければなりません。しかし、波は岸を洗うとも、島をうずめるようなことはありません、海嘯つなみだけは用心しなければなるまいから、単に海岸の舟つきの部分だけを念頭に置かず、半ば岩穴づくりにして、堅固に掘立てを構えることですね、風の当りさわりを本位にして」

「そうでしょう、強風暴風に堪えると共に、この通り暑いところですから、風通しをも考えなければなりませんな」

「それともう一つ、大家族主義で行くか、分散主義で行くか、それも重要な構図のうちです、つまり、海の生活を直ちに陸にうつしたような方式で行くか、或いは陸は陸のように、おのずから個性を尊重する建前で行くか、その建築方式を、あらかじめ

きめて置いてかからねばなりませんまい」

「それもありますな。しかし、あれだけの人数が、いちいち一戸を持つなんぞということは、今日直ちにできることではありませんから、当分は大家族主義を取るほかないでしょう」

「しかし、物は最初がかんじんです、最初にその様式を整えて置かないと、後日改良をしようと云つても、容易なものじゃないです」

「いつたい人類生活は、大家族主義が本当ですか、個々分立主義が正しいですか。日本でも、飛驒ひだの山中へ行きますと、一棟に四十家族も包容する大家族主義が現に行われていますが、我々の将来も、あれで行けるものか、或いはまた一人一家、少なくとも一夫一婦毎に一棟を分つという近代の行き方のつとに則らねばならないか、我々の植民第一に、その方針を決定してかかる必要

はたしかにあります。あなたの趣味は、いつたいどちらですか」と田山白雲から尋ねられて、駒井が相当確乎かっこたる所信を以て、次のように答えました。

「私は一人一家主義です、ここに一人が独立の生計を与えられれば、必ず独立した一家を持たなければならぬという論者です、いわんや結婚生活者に於てをやです。かりに我々の仲間で、結婚以外に行き道がないものは、大家族主義を捨てて、独自の生活を営ましめるようにありたい、飛驒の大家族主義の如きは、自然生活にはかなっているかも知れませんが、私は個人の確立のためにそれを取りません、結婚者は当然独立した一家庭を持つべきは勿論、結婚した後にも、男女ともに別々に一家を成してさしつかえないと考えているのです、そうする方が合理的になるのじやないかと考えているのです」

白雲には、駒井のこの論旨が、よく呑込めませんでした。結婚生活者にはぜひ一家庭を持たしめよということとは聞えるが、結婚した後に於ても、おのおの別々に生活するがよろしいという論理は、そのままでは甚だ不透明だと思ひました。

二十三

しかし、この場合、そういうことに議論を逞たくましうしているべきでない。白雲はそれを追究せず、そのうちに乗つて来た小舟のあるところに到着すると、一行がこれに取乗つて、本船さして漕ぎ戻る極めて無事な光景であります。

船へ帰ると駒井甚三郎が、船員全体を上甲板に集めて、次のような申渡しをしました。

「さて、我々はこの島へ上陸して、今後、この島の主となると共に、この島に骨を埋める覚悟で働かねばなりません。ここは我々だけの国であり、おたがいだけの社会でありますから、今までの世界の習慣に従う必要もなければ、そむ反くおそれもありません。もしこの島の生活を好まぬ時は、いつでも退いてよろしい。生活を共にしている間は、相互の約束をそむいてはなりません。ここには法律というものを設けますまい、命令というものを行いますまい、法律を定める人と、それを守る人との区別を置かないように、命令を発する人と、命令を受くる人との差別を認めますまい。仮りに私が先達せんだつでありとしましても、それは諸君を治めるという意味の立場でなく、諸君に物を相談するという立場でありたい。この故に、我々だけの国とはいうもの、我々の国には王者がありません、治める人と、治めらるる

人とがありません、従つてこの国には賞というものがなく、罰というものがなく、ことになります。賞という以上は、それを賞する者がなければならず、賞するというのは、一段高いところおに立つて、そのことのぜひ善悪を鑑別して後にこれを推す者になるのですから、批判の地位になります、批判が正しい時はそれによろしいが、もし批判が間違っている時は、賞にその権威がなく、軽蔑が起るのですから、人世と人とを推進せんがため、賞というものがかえつて世道人心を紊みだるの結果ともなるのであります。罰もその通りでありまして、社会が罰というものを設けるのは、これによつて善をすすめ、悪を抑おさえんためであります、それもやはり罰する人が正しければよろしいが、罰する人が誤つていた日には、罰を与えていよいよ人心を危うくするばかりです。よつて、ここの国では賞も行わず、罰も行わ

ずという建前にしたい。では、善いことはせんでもよい、悪いことは仕放題で罪がないかと申しますと、それは大いに有ります、おたがい同士仲よく生きて行くために害を為す<sup>な</sup>ことは悪い、それを滑<sup>なめ</sup>かにするものは善い、とこう定めて置きましよう、そうすれば、おのずからこの島に於て為さねばならぬことと、為して悪いこととがわかるはずです。まず第一に、生きて行くには食物がなければなりません、空気と水は天地が与えてくれますから、これは人間の骨折りはいらぬ、その他の食物は、一切人間の手で、人間が作らなければなりませんから、人間の活<sup>い</sup>きて行く善事のまず第一のものは、食物を作ることです。これとても人間の力だけで出来るものではありません、米を蒔<sup>ま</sup>くにも、田畑というものがなければなりません、幸いに、私共がただいま実地検分して参りました結果によりますと、この島には、食

物を生産すべき可能性が充分にあるのであります、人力を加え  
さえすれば、立派な耕地となる面積があるのであります、種子  
物の類は、豊富に船の中に貯えて持参してありますから、上陸  
早々、まず雨露を凌ぐ<sup>しの</sup>ところをこしらえて、それから耕地のこ  
なしに取りかかりましょう、これが私たちの最初の善事であり  
ますから、皆さん、応分の力をこれに添えて働いて下さい。み  
な働くと申しても、皆さんの力が平均しているわけではありま  
せんから、誰も彼も鋤<sup>くわ</sup>を取り、鎌<sup>ふる</sup>を振って、荒仕事ができるもの  
ではありません、女子供はましてそうですが、力の足らぬもの、  
経験の乏しいものは、見よう見まねに、仕事の成績には関係せ  
ず、努めてやってみようという心がけが大切です。また、労力  
相当の軽い仕事から始めて、助けて行くのもよろしいです。そ  
うすれば、これだけの人数で、五町や十町の開墾は苦もなくで

きます、それに種子をおろせば、まだ土が珍しいから、肥料なくして大抵の作物は出来るはずです。種子をまいて半年なり一年なりすれば、この人数を養うだけの収穫は必ずあります。故に、皆さんは、まず食物を作ることを第一の善事だと心得て下さい。それを妨げるもの、妨げないまでも、その助力を惜しむものが第一の悪事だと心得て下さい。それからです、我々は決しておたがいにお過大の労力を課することを慎みましょう、出来ないものに無理に仕事をさせることのないように、出来る者にも、なるべく多くの余裕を与えて、人間というものは食って行くだけの世ではない、食って行くのは、つまり、皆々の持合わせた天分を、最上に発揮するためだということをお心得て、おたがいの修養と、発表とを、怠らぬように致したい。そこで当分は、半日働いて、半日はおのおのの思うままのことをしてよろ

しい、本を読みたいものは本を読む、絵をかきたいものは絵を描く、歌をうたいたいものは歌をうたう、大工をしたい、細工をしたい、というおのおのの好み好みのことを、存分におやりなさい。半日は食物のために働き、半日は趣味のために生くるということ、これをこの島のおきてと致しましょう。それから、万々一、おたがいの中に我儘わがままきままが昂じて、他の害悪をなす場合には、他の世界では、直ちにつかまえて牢へ入れたり、首を斬つたりするのですが、ここでは一切、そういう刑罰は用いませぬ、刑罰の代りに遠慮を申し渡しませう。我々の生活がわかつてさえもらえば、好んで周囲を悪くするものはないはずですから、万々一、そういう人は、この社会を離れてさえもらえぬばよろしい。と言つてもここは大洋の中の孤島ですから、めいめい勝手に離れて行きたいところへ行くというわけにはいきま

せんから、この島のうちで別世界をこしらえて、そちらへ移つてもらおう、そうして、そちらで自分の好きなような生活ぶりをやってみるがよい、当分の間、食うべきものは、こちらから分けて上げることにして、それ以後は勝手な生き方で生きてみるようにする。なおこの新しい生活を共にして行く間には、今までの世界で起らなかった問題も相当起るかも知れませんが、その時は、おたがいに相談の上で善処することと致し、とりあえず右のような意味で、食物を作ることと全力を注ぐということ、天地に誓いましょう、これには御異存はござるまいと思ひます」

駒井甚三郎が、じゆんじゆん諄々として、かく申し渡した時に、誰も異議異存のあらうはずはありません。一同無条件に同意して、略式を以て天地に誓うの形式を取りました。

ここに駒井甚三郎が、その理想の王国を作るの第一歩に踏み入ったわけですが、これは胆吹の山で、暴女王が行わんとしたところのものと、期せずして異曲同工なのであります。

暴女王は専制の王国を打立て、力を以て、思い通りの小社会を作ろうとして失敗しました。

駒井甚三郎は、力を以てせずして、自由を以て、人間生活を最善に伸ばそうとするところに相違がある。

彼女の気象が烈しかったと反対に、これの行動は極めておだやかでありますけれども、その徹底を求めてやまざる意志の強烈にはあえて甲乙なしといふべきでしょう。

果して、治者なく、被治者なき社会の存立があり得るや。命令と、法律と、その後に強力がなくして多数を統御し得るや。これは、これだけの少数同志ならばとにかく、この形式を、何

千何万倍の人数に及ぼし得る可能が有り得るや否や。駒井甚三郎は身を以て、これが実験にとりかかり得たものと見なければなりません。

総員はみな無条件に聴従したけれども、この中の誰が、駒井の本心に共鳴し得るや。田山白雲すらが、その深い洞察はできない。聴従はするが、共鳴はないのです。そこに駒井としては、無上の希望があると共に、無限の淋さびしさがあるというものです。

## 二十四

かくて、田山白雲の設計図により、附近の木石を利用し、船中からも相当の資材を持ち出し、かなりの新館が、忽たちまちに出を上りました。

船は島蔭の程よき所に廻航して、そこに据附けの形となり、多くは小舟によつて往来しつつ、そこを宿所として工事に働きに出ましたが、ほどよく新館が出来てみると、船に留つて守るものと、新館に移動する者と、交代に手分けをしなければなりません。

それから、附近を詮索<sup>せんさく</sup>して水道の工事があり、やがて開墾にとりかかつて、草木を焼き、或いは伐<sup>き</sup>り、開くあとから種を蒔<sup>ま</sup>きはじめました。幸い、農事にかけては七兵衛入道が万事本職で、熟練した指導ぶりを見せていますから、仕事の捗<sup>はかど</sup>ること目ざましきばかりです。

そのうちにも、休息と、慰安の時間は多分に与えられて、仕事の余暇は、おのおのその楽しむところを發揮するの自由を与えられましたから、ほんとうにすべてがトントン拍子で、幸先

は決して悪いものではありません。

駒井甚三郎は新館の一室を書斎とし、一室を寢室とし、食事は多勢と共に食堂兼用の広間ですることあれば、書斎に取寄せて済みますこともある。駒井の次の一間は、秘書役のお松の部屋です。

お松は、駒井の秘書と、内政と、その事務の助手のすべてを兼ねて、なくてはならぬ人です。

駒井が研究に没頭して事務に遠ざかる時は、お松でなければ駒井に代って取りしきる人ありません。田山白雲は豪放磊落ちらいらくを以て鳴り、このごろは、その附近の異風景の写生に専らもっぱで、義務として開墾に応分の力を出すほかには、細務に当るの余暇がない。時としては、島めぐりに日を重ねて帰ることさえある。

いちいち、駒井船長の指揮を仰ぐことの代りに、お松さんに

相談すれば、大抵の用は足りる、というところから、お松の地位が、責任と繁忙を加えて来るのはぜひがありません。

駒井は、お松の才能を見て、得難き人を与えられたることを心ひそかに感謝している。この娘には万事を任せて間違いがな  
いと信じていることは、いつも変らない。異常なる興味と、熱  
心と、忠実とを以て、自分の身のまわり一切の処理をしてくれ  
る、その勉強ぶりをじつと見ている駒井の眼に、いつか涙のに  
じむことさえある。

「ああ、この子も娘ざかりなのに、考えてみれば自分は、この娘  
の未来を無視しているのではないか、自分は自分で趣味に生き、  
理想に生きて行くのだから、どんな山海万里の涯はてに果てようと  
も厭いとうところはないが、考えてみると、それだけの趣味も理想  
も持たぬ人たちを、強しいてこつちの趣味と、理想に引張り込ん

で、世間並みの希望と快樂を、すべて奪つてしまふにひとしいことになりはしないか、ことに娘ざかりのこの子たちを、今はこうして、自分というものに引きずられて、無我に働いてくれるようなものの、いつか眼がさめて、幻滅の悲しみに泣かすことはないか、眼がさめた時は、もう盛りが過ぎた時で、女の一生が色のあせたものになつてしまつて、一生を老嬢の淋さびしさに泣かすようになった日には、その罪は誰が負う、本来ならば、年頃になつたような娘は、早くしかるべき相手を求めて、とにかく一人前に納めてやることが先輩の義務であらうのに、自分はまだいい秘書を求め、助手を求め当てたことだけに満足して、それで済むか、今の忠実を見るにつけ、後の心配をしてやるべき責任は自分にあるが、こうなつてみると、世間並みの家庭に納めて、世間並みの肩身を広くさせてやることができな

い、体ていよく、こちらの犠牲として一生を廃すたらせてしまふことになるのだ、その点は気の毒に堪えない」

駒井は、お松の仕事ぶりを見ながら、つくづくそれを感じて、つい、深い感慨に陥つてといきをつくことさえある。今日も、朝のうちから、皆の者は開墾に出て、駒井は研究室で、地図と海図をひろげて調べている、その机の一方で、一心に記録をうつしているお松を、横からながめて、またも、うつとりとその感謝と、悔恨に似た心で満たされて、思わずホツと息をついた時に、ペンを置いて、インキの壺を満たしかかったお松の眼とぴったり合いました。

駒井もハツとしましたが、お松も思わず胸を轟とどろかせました。地図を見つめて研究に耽ふけつておいでになるとぼっかり信じきっていた主人が、今までじつとわたしの方を見つめておいでになつ

た。しかも、その眼の中には、解釈のできない深い思いが籠こもつていて、ただ研究に疲れたお眼をそらすために、あらぬ方を向いておいでになったものとは思われない。たしかに自分というものに視点を注がれて、じつと思ひ込んでおいでになったそのお心持は、不意にわたしの眼とかち合つたあの瞬間の狼狽ろうばいぶりでよくわかる。

お松はその時に、思わず面が真赤になりました。

今まで、尊敬すべき主人として、二心なく働いていたし、また、こういう御主人の下に働き得ることに、精一杯の満足を捧げていたのですから、いかに接近して、いかに立入つたお仕事の相手をしようともし、自分としては、ちつとも心の動揺を感じたことはなし、また殿様も、女性として、人間として、わたしをごろんなさるほどに人情に近い方ではないから、単に、この中

で最も役立つ女という実用一方のお取扱いとのみ信じていたから、そこになんらの隔意というものはありませんでしたが、この時は違いました。

お松は何の故に、駒井の殿様が、今更あんなにわたしを御注視なすつていらしたか、その心のうちを知るに苦しみました。そうして、その瞬間に、使われ人としての自分でなく、女性としての己れおのを発見したものですから、我知らず狼狽して、ホッと上気してしまったこの心持が、自分ながらわからない。恥かしいとは思いましたが、ただ恥かしいでは隠しきれないバツがあつて、そこは賢い女ですから、取紛とりまぎらすように心を立て直し、言葉を改めて駒井に向つて言いました。

「殿様、御気分でもお悪いのでございますか」

さし止められている殿様という言葉が、この時、思わず口を

突いて出てしまったことは、その心が、昔の思い出に占められていたからです。秘書としてのお松ではなく、処女としてのお松でありました。

「いや、別に気分が悪いことはないが、少し考えさせられることがあつてね」

「まあ、お考えあそばすことは、あなた様の始終のお仕事ではございませんか、いまさら考えごとをあそばすと、おつしやるのがおかしいわ」

と、お松はつい語尾を碎けて言いきつて、自分でなんとなく胸を躍おどらせる心持を加えたのが、自分でわかりません。

「いや、研究の考えごとと、人情の考えごととは、同じ考えごとでも性質が違うからな」

「考えごとにそんなに幾つもあるものでございますか、人情と

は何でございます」

「人情というのは、人間の情合いのことなのだ。学問というのは、情合いをはなれた理性というものです。学問の考えは、深ければ深いほど落着くが、人情の考えというものは、深ければ深いほど乱れてくるものだ」

「では、殿様には、何かお心を乱すような人情の思い出が、お有りあそばしますか」

「有るとも、大有りだ」

「伺いとうございますね」

「言わん方がいいだろう、言えばいや増す思いというものだからな」

「では、わたくしが代つて申し上げてみましょうか、お君様の

ことを、お思い出しになったのでございましょう……」

「うむ……いや、違う、あれはもう忌明いみあけだ、思い出せば不憫ふびんと

思いやられぬことはないが、いつまでも愛惜あいじやくを追うのは、それ、

冥路よみじのさわりというものでな、今では、さっぱりとあきらめて

いる、いまさら思い出して、心を傷いたましむるということもない

のだ」

「では、奥方様のことを……」

「いや、あれは愛情がない、権式があるばかりだ、正直に言う

と、結婚以前から冷たいもので、今もその通り」

「では、どなたのことを思い出しておいでになったのでござい

ますか」

「実はな、お松どの、君のことを考えて、つい思いに沈んでし

まったのだ」

「まあ、勿体ない<sup>もったい</sup>」

と言つて、お松がまたも真紅になつて、うろたえる心を抑える<sup>おさ</sup>ことができないほどです。

二十五

ただ単に自分のことを考えていてくれたということとは、感謝すべきことであつても、狼狽すべき事柄ではありません。それなのに、お松の狼狽ぶりのあわただしき。自分ながら、今日に限つて、何でこんなにあわてなければならぬか、その理由がわかりません。

「お松さん、私は、つくづく君に濟まないという考えが、このごろ漸く<sup>ようやく</sup>起りました、遅いことでした」

「何をいまさら改まつて、そのように仰せられますか、わたくしにはわかりませぬ」

「あなたが忠実に働いてくれればくれるほど済まない、思えば、私は、あなたを忠実な秘書であり、助手であるとしか認めていませんでした、お松どのという存在は、ただ駒井の研究を助けてくれる得難き道具として——道具というのは少し言いすぎかも知れませんが、最も善い意味で、そういう取扱いが当然だという心得のみで、それ以上には考えることもしませんでした、今、考えてみると、あなたも女でした」

「何とでも仰せあそばせ」

お松は、駒井の率直な言いなりに、挨拶の言葉を見出せなかつたのです。駒井は、言葉をつづけて言いました。

「あなたも女です、今ここに女性として、私の親近の一人を見

ていますと、その女性は、娘盛りという、人生に二度とない花の時代でした、ああ、それを自分は、ただ自分の助手としてのみ、便利有用なる道具としてのみ認めて、女性として、娘ざかりとしての、あなたというものを見て上げることができなかつた、むしろ、その余裕を今日まで持ち得なかつたということに、大きなざんぎ慚愧を感じました、己おのれというものに熱中している間に、知らず識しらず人を犠牲にしていた大きな罪を、覺らずにはいられません、それを、今という今、痛切に責められたものですか、思わず歎息となりましたのです」

「何をおっしゃいますか、わたくしには聞えませぬ」

とお松も、つとめて冷静を保つ、心で駒井の言い分に対応をして、「女としての私が、お傍に働いてお気に召さぬならば、いつでも引下らせていただきます、微塵うらお怨み申し上げる心などはご

ざりませぬ、幸い、わたくし、子供の時から骨折仕事にも慣れておりますから、明日からでも開墾の皆様と御一緒に、草も刈りましょう、水も運びましょう、その方が、わたくしの身にも相応しているに違いありません」

駒井は、それを押しなだめて申しました、

「そういう意味に取ってもらつては迷惑します、今ここから君に離れられては、君に代るべき人がない、人がないから、やむを得ず君に働いてもらうのではない、たとえ幾人の適任者がありませんとも、君を措おいて、助けてもらえる人は現在の駒井にはないのです、拙者が濟まないと思うのは別の意味ではありません、女性の一人を、女性として扱うことをせずに、単に便利なる使用人として一生を廃すたらせてしまうその責任が、この駒井にありはしないか、世が世ならば、そなたのために、よ

き連合いを求めて、立派な家庭の人として仲立なかだちして上げるべきはずなのに、それをせず、こうして、いい気になつて、娘むすめばかりをあだに過ぎさせ、今後とても、そういう希望を以て、君を世に出して上げることが覚束ない、それを思うと、自分の罪に戦おのかすにはいられないのです。人というものは、己おのれの理想に熱中していると、知らず識しらずその家庭に大きな犠牲を作るものだということを、今ごろ、つくづくと考えさせられた次第なのです。そこで、そなたの身が不憫ふびんでならなくなりました、今までは、物としての人を見たのですが、今は人としての女を見たのです、自分の心の弱き部分が綻ほころびて、血を出したようなものなのです、深く気に留めないで下さい」

物やさしく言う駒井の言葉が、今日はなぜかお松の心を動かすことが深く、いつも、はきはきと答える言葉が、今日はまと

まらず、この深甚しんじんな、異例の言葉に対して、何と挨拶すべきか、お松はぼつとしてしまいました。声が、やがて、卓の上に泣き伏してしまいました。声を揚げて泣いてしまいました。

二十六

その時から、駒井甚三郎とお松との間の感情が、平静を失いました。

お松は、駒井にとつて唯一の秘書であり、助手であることは変りはありませんけれども、今までの虚心であることができません。この人に近づくことに、心を置かなければならなくなりました。駒井としては、あの時、言い過ぎたとも思う様子はなく、更に言い足そうとする気配もなく、依然として、威と恩と

を備えた主人とし、船長としての態度を保つことに変りはありませんでしたけれど<sup>四</sup>も、ひそかに見やるお松の眼には、痛々しいものの映ることを止めることができません。

威厳の人としてのこの主人に、お松は物の哀れをはじめて見出しました。それは甲州以来の昔の思い出が、今までは人の身の上のようにしか思われなかつたものが、今は、わが身の上のような気がしてなりません。

そうしてみると、あの朋輩<sup>ほうばい</sup>としての不幸薄命なお君さんとい

う女性の運命の絵巻を、ここに再び繰りひろげて、それを哀れなりと思う心が、泉のように甦<sup>よみがえ</sup>つて来ました。本当に自分とし

ては、お君さんを気の毒だと思ひ、できる限りのお世話はしたつもり。またお君さんの方でも、わたしというものを、本当に唯一無二の、心の底までの打明け相手として許しておりました。

その時分のお松は、駒井の殿様は、殿様として尊敬はしていたけれど、それは有つても無くてもよい存在のようなもので、お君さんだけがなければならぬ人で、その人のために、身を尽し心を尽して尽したつもりですけれども、ついにその効かいがありませんでした。自分の無力を歎くと共に、お君さんの不幸な一生を、歎いても歎き足りない氣でいます。その時の自分の心には、宇津木兵馬というものだけがあつて、そのほかの男性のことはありません。この世で、いちばん縁のありそうな人で、その実、いちばん縁のないのが兵馬様であります。紙一重かみひとえの違ちがいが、いつでも千里の外にされる、それをお松は、運命というもの、いつもこうしたものだ、と、雄々しくもその時に思いあきらめて、更に新しい仕事を、新しい勇氣を見つけては、ここまで進んで来ました。

海上の生活から、今の役目が重くしていそがしいために、このごろは思い出すこともなく、お君と、兵馬のために、心の痛手を病むことが少なくなつて来ていました。それを、このごろ再び、物思ふ身となりました。昔は人の身、今はわが身というような、言い知らぬ心の痛みが、お松を悩ますもののようなです。ある時は、お君さんに濟まない！ というような夢心地になつて、ハツと我にかえることさえありました。お君さんの運命が、今日となつて、わが身に降りかかろうとは、それは夢の外の夢のような思いに堪えられませぬ。

それから、お松はなるべく、主人の室に遠ざかつて仕事をしようと思いました。わざと次の間に持ち出してみたり、今まで心置なく物をたずねたり教えを受けたりすることも、この頃からなるべく口を利かぬきように、物を言わぬように、できるならば、

ひとりだけ離れて船の中にいたいというような気分に迫られて来たのが、自分でもわかりません。

駒井もまた、気のせいか、態度に変わりはないとは言いながら、お松に向つてする口の利き方が鈍くなって、少なくなつたように思われます。お松は、この心の間の裂け目を悲しいと思ひましたけれども、その悲しさのうちに、何か甘いものが、重い心の躍動というものがあるのを感じずにはいられません。

それから幾日の間、こんなようにして、二人は、外見は少しも変わらずに、助けつ助けられつして過しましたが、その間にも、先日のような突つこんだ話は少しも出ませんでした。

駒井は冷静な科学者の立場で研究をつづけている、その変らぬ面の、すずしい中のきびしきを見ると、あの時の、あの言葉が、通り魔のように、何ものかのいたずらがさせたことではな

いかと感ずるばかりです。

それから一週間ばかり経って後のある日、開墾の方が予定よりもずっと速すみやかに進んだことのお祝いを兼ねて、慰労の催しをすることがありました。その主唱者は七兵衛で、また委員長も七兵衛であります。取って置きおきの食糧を整理して、赤の御飯を炊たく、手づくりの諸味もろみの口を切る、海でとった生なまきのいい魚、陸で集めた自然の野菜、バナナ、パイナップル、それから信天翁あほうどりを料理した肴さかな、そういつたような山海の珍味を用意して、折柄、その晩は大空に皎々きょうきょうたる月がかかり、海上千里、月明の色に覆われて、会場は椰子やしの葉の茂る木の間まに開かれてありました。勇ましき開墾の凱歌を唱えて、一同が飽くまで、この月に酔い、海に躍るの興は、世界に二つとない、ここまでの苦を慰めるに余りあるもので、全員がみな十二分に飲を尽し、歌うもの、

踊るもの、吟ずるもの、語るもの、さまざまに發揮して、島一つ浮き上るような景気でした。

七兵衛は、自ら樂しむと共に、司会者としての用心に抜かりなく、白雲は酒を呑んで、ひとり嘯うそぶいて豪吟をはじめ、それについて清澄の茂太郎が、身振りあやしく踊つて倦あきないものですから、田山も歌つて疲るるといふことを知りません。茂太郎の踊りは一座の花であると共に、他の船頭たちもまた、これにそそられて芸づくしがはじまります。白雲は興に乗じて、それらのお国芸をいちいち審査審判して廻りました。

ウスノロのマドロスまでが、大はしゃぎでハーモニカを持ち出すと、それがまた一座の人気を呼ぼうというものです。

そこで興がいよいよ亢こじて、尽くるといふことを知りません。

駒井甚三郎は酒を飲むことをせず、また唄うことも、踊ることも、いずれも興味を持ち得ていないけれども、ただ、衆がたわいなく喜び興ずること、そのことを興なりとして、やがて、自分ひとりこつそりと椰子やしの葉蔭から海岸の方へと歩みを運んで、上氣した頬を海風になぶ翱らせ、かがやく汀みぎわの波に足許を洗わせながら、歩むともなく歩んで行きました。

お松も同じ思いです。皆の楽しむことは嬉しいけれども、茂太郎のように踊ることもできず、白雲のように唸うなることもできない。今日は七兵衛入道が、船夫せんどうを指揮して万端の座持をしてくれますから、自分が立入って働かなくてもよい。駒井の殿様と同じように、客分のような地位に置かれましたが、やがて、椰

子の葉蔭から高く月を仰いで、むらむらと、場外の夜気に打たれてみたくなりますと、地上に楽しむ人も面白ければ、この大海原おおうなばらの月の夜——何というすばらしいながめでしよう。ついで一足二足と歩いて、海岸に出てみます。海はいよいよ遠く、月はいよいよ高く上つて、千万里の波につらなる、大洋の面のかげやかしさは、今日まで海には見飽きた眼を以てしても、すばらしいと思わないわけにはゆきません。

甲州の山で泣いた月、松島の浜の悩ましい月も思い出の月ではあるけれど、この豪壮で、そうして奥に限りのない広さから来る言いようのない淋しさに似た心地、それが何とも言えない。お松は、漸く海と月とに酔うては進みつつ行くと、ふと行手に人影を認めました。

それはたつた一つ、自分と同じように、この海岸を歩んで行

く人影。この島に、ほかにその人が有ろうはずはないから、あれもわたしたちの仲間の一人、わたしと同じように席を外して海風の風に吹かれに出た人。誰でしょう——とお松は、それを訝るより先に、自分の胸が轟きました。

誰と言うまでもない、あの席を外して、ああして、ひとりお歩きなさるのは、駒井船長様のほかにはない。いつのまに殿様は、お外しになったのか、気がつかなかった、とお松はそれに胸を轟かすと共に、重い鉛を飲まされたように心がわくわくして、踏む足もとが、しどろに狂う風情です。ぜひなく、そこに立ち尽して彼方かなたの人影を、じつと見つめたままでおりました。その時には天上に月もなく、海上に波もなく、お松の心がたつた一つの人影にとらわれて、進んでいいか、退いていいかさえわからなくなりました。

彼方の人影もまた、汀なぎさのほとりを、あちらへ向いて進んでいるのか、こちらを向いて引返しておいでになるか、それもわかりません。絵のような海岸に、ぽつちりと一滴の墨を流したように、人ひとりが立ち尽しているのを見るばかりです。

しばらくして、お松は月を避けるもののように海岸の砂をたどると、道はいつしか椰子の林の中に入っていました。お松は、まともに月を浴びることが心苦しくなつて、木蔭に忍ぶ身となつたらしい。けれども、その足もとは、夢を追うように、海に立つ彼方の墨絵のような一つの人影を追うています。

彼方の人影も、もはや、それより先へは、行つて行けないことはないけれども、あとに会場を控える身にとつては、単独の行過ぎになることを虞おそれて、とある着点からおもむろに、踵きびすを返して戻るものようです。その時には、もうはつきりと、そ

の進退の歩調がわかりました。そうして、こちらがじつとしていさえすれば、あちらの戻りを迎えることになるという進退がはつきりとわかりました。お松は椰子の木蔭に息をこらして、人を待つ姿勢となりました。

それとも知らぬ駒井甚三郎が、当然そこを折返して来たのは、久しく待つ間のことではありませんでした。

「誰、そこにいるのは」

と言葉をかけたのは、待機の女性ではなくして、そぞろ心で月に歩んでいる独歩の客でありました。

「はい、わたくしでございます」

とお松は、きつぱりと言いなから、存外わるびれずに、木蔭から身を現わして駒井の方へ近づいて来ました。

「ああ、お松どの、そなたも月に浮かれて来ましたか」

「はい、ちよつと、海へ出て見ますと、あんまりすばらしいお月夜でございますものですから」

「まだ、みんな騒いでいますか」

「ええ、皆さん、大よろこびで、あの分では夜明しも厭いといますまい」

「そうですか、それは本望です、そういう楽しみをしばしば与えてやりたいものだ、我々がいると、かえつて興を殺そぐこともあるかと、実はそれを兼ねて少々席を外してみたが、外へ出ると、またこのすばらしい光景なものだから、つい、うっかり遠走りをやり過ぎて、いま、戻り道に向つたところですよ」

と駒井は、いつもの通り沈重ちんちゆうに釈明を試みました。その時にお松は、この場の悪くとらわれたような羞恥の心が、自分ながら驚くほど綺麗に拭い去られて、ずつと駒井の傍へ寄ることを懼おそ

れようとしませんでした。

そうして、駒井の後ろに従うような気分でなく、それと相並んで歩きたいような気持ちに駆かられました。

「殿様、どうして、わたくしがあの木蔭にすることがおわかりになりましたか？」

「ははあ、それはわかるよ、こうして月に浮かれてそぞろ歩いているとは言いながら、なにしろ、はじめての無人島だ、環境の事情から、自衛の本能から、前後左右に敏感に神経が働くから、注意すまいと思っても、物影の有る方に注意は向くよ、植物と人間とを見誤るほどに、わしは酔うてはいないのだ」

その返答を聞いて、なるほど、夢のように、そぞろ歩きをしながらも、人をあずかる身になると、油断というものはあり得

ない、という心のたしなみをお松がさとりました。男子は外へ出れば七人の敵がある、という諺ことわざなども思い当るし、何の苦もなかりげに見える人に、かえつて断えざるの苦があるというよ  
うな同情を思い出しました。

「あまり夜露に打たれてはお毒でございましょうから、お館やかたへお帰りあそばせ、あの人たちは、あのまま、あの人たちにお任せになった方が功德にもなるでございましょうから、このままお帰りあそばしてはいかがでござります、わたくしがお供を致します」

とお松が言い出でたのを、駒井は素直に受入れました。

「なるほど、それもそうですね、夜露が毒とも思わんけれども、帰って、仕残しの仕事もある、そなたの言う通り、だまつてこのまま引上げた方が、多数の興をさまたげないで済むというも

のだ。では、一緒に帰るとしましよう」

「そうあそばしませ」

駒井はお松を伴うて、椰子の林の木蔭を、新館への帰途につきました。

その時に、お松は、なんとも精一杯に自分の胸が躍動するよ  
うな心持になりました。

この主人を、送り迎えに立ったことはこれまで幾度、室を共  
にし、事を共にし、職務以外には何の雑念もなかつた身が、今  
宵は躍る心おどが怪しくも狂います。

お松としては、今までにほとんど感じたところのないほど  
の、強い充実味にぐんぐんと引きしめられる。ただ何とはなし  
に生いき甲斐ががあるというよ  
うな心持、女としての充実した喜びが  
海の潮のように迫るを感じずにはいられません。今までは、い

つも神妙に、後ろに従つて主従の謙遜を忘れなかつた身が、今晚はぐんぐん押しきつて、この人と並んで語りた、押並んで歩きながら、思う存分に話したい、という気分あふに満ち溢れていました。

駒井甚三郎もまた、踏む足がおだやかではありません。思ひなしか、その白い頬の色が、木の間のま月に輝いて、この人としては滅多に見ることのできない血の気を湧かせているやに見えないことありません。お松の思い上つた、不遜に近い歩みぶりを、決して不快なりとはしていません。決していいようです。

かくて、二人は椰子の木蔭を、かの新館なりと覚ゆる方面に向つて、無言で歩きました。それは主従相伴うて歩むのでなく、二個の人間が相携えて行くものようです。

椰子の林をわけて行くといつても、それは熟地に見るような

簡単なものではないのです。蛮地ではないけれども、多年の無人島ですから、たとえ隣から隣へ行くにしても、道というものはないところなのです。そこへ、心あたりだけの道をつけて進むというよりほかに、進む道はないのです。自分たちの住む新館は、たしかあちらの方と、漫然とした道方角を選んで歩いても、それがそのままに通じ抜けられるかどうかはわかりません。で、二人は、方向の目的はきまつているが、その径路のことは忘れていたようでありました。

無言で、ずんずん歩み行くこと、そのことだけに気が張りきつて、到着の時と、ところと、そんなことは忘れてしまったのではないか。

「お松さん、わたしはここで、一つ、あなたを驚かすことを言ってみたい」

と、ある地点へ来て、駒井は足をとどめて、椰子の大木の一つに身を釘付けにしたようによりかかつて、こう言いかけられたお松は、全身の鼓動を覚えたけれども、それでも度を失うようなことはなく、むしろ、待っていましたというような大胆な心をもつて、駒井の前に立ちはだかりました。立ちはだかったというのは、不作法千萬な振舞でありますけれど、お松としては、それほど大胆になり得た気分を、自分ながら誇りたい心持で、「何を仰せられましても、驚きは致しませぬ」

「本来は、驚かすつもりもなく、驚くべき何事もないのですが、少しもわたしを知らない人は、狂気の沙汰さたと思うかも知れませ

ん」

「殿様、あなたはわたしの唯一の御主人様でございます、御主人から仰せを蒙こうむつて、それで驚く家来はございません、この場で命を取るぞと仰せられましても、それに驚くような家来は、家来でございませぬ」

「いいえ、そなたは、わたしの家来ではない、わたしはもう疾とうの昔に、人の主人たる地位をのがれた、同時にただ一人の人をも家来とし、奴隷とするような僭せんじょう上を捨てた、わたしを殿様呼ばわりするのは、それは昔からの口癖が、習慣上から廃すたらないのだから、急に咎とがめようとも思わないが、本来、わたしはもう疾とうに昔の殿様を廃業している、こうして涯かぎり知られぬ海上をうろつく、これが本当の浪人じゃ、浪人という字は浪という字を書く、陸上にさまよっているのは、あれは浪人ではなく、牢

人と、人を囚とらえる牢という字を書いたものもあるが、海上から見ると、陸にいる人は牢にいる人と同じかも知れない、陸にははいくら自儘わがままだといつても窮屈じゃ、限度という格子に必ず突き当るが、そこへ行くと、海上は無制限だ、海上には、海上の自由があるな、たしかに。だから海上に漂う身になってみると、真の浪人の味はわからぬものだ、つらいことも無制限だが、楽しいことも無制限だ。人間として、人間の制限を受けるのはいやなものだな、お松さん、そうは思いませんか」

「それはおっしゃる通りでございます、陸にいますと、海にいますとでは、人間の気象が自然に違つて参ります」

「制限のなき世界、制限なくしておのずから節度のある世界、節度を人から強しいられず、自ら楽しんで傲おごることなき、そういう世界が望みで、わたしはこの船の旅に出ました、わたしはもう

人の上に立つことはしない、人の下に忍ぶこともしない、お松さん、君が、もしまた、このわたしを主人と思い、己おのれの立場を家来と思つているとしたら、それはおたがいの誤解であるばかりでなく、おたがいの不幸です、この道理が、あなたにはよくおわかりのはずです」

「毎々つねづね、そのように承つておりますが、それは道理だけのものでございます、誰ひとり、あなた様を、自分の同輩だと思つものがございましょう、思おうとしても思われません、それだけに備わるものがございますから。それだけ企て及ばないものがあるのですから」

「おたがいに身を以て解釈しなければならぬ、昔のままの頭を以て、今の生活をしようというは無理ですよ、わたしたちが千辛万苦をしてなりとも、異境の土になりたいというのは、今

までの生活がいやだからです、その生活を土台から築き直すためには、歴史と、習慣と、恩義というようなものを負うている国では、それができないから、わざわざこうして、天涯に土を求めていているのに、昔のような頭で、昔のような生活に帰るつもりなら、おおよそそれは無意義なのです、その様式をすっかり打ち直すと共に、その心持を全く入れ替えなければならぬ。船のうちでは、そうしようとしても許されないものがありました、こうして自由なる国土の形式が、とにもかくにも出来上つた上は、その実行にうつらなければならぬのです——それを、わたしは、ここへ来ると同時に、ひそかに決心しました、考えるだけは考え尽して、もはや決心の時代も過ぎて、実行の時代に入りました、その実行の第一として、誰よりも先に、お松さん、お前を驚かさなければならぬ。実を言う今日まで、その機

会を冷静に見つめていましたが、今晚という今晚が、その与えられた機会だと思わないわけにはいかない、もう、これ以上に論議を費す必要はないのです、物を言つて説明ときあかする必要はないのです、わたしは極めて平静の心を以て、これを言いますが、お松さん、あなたはわたしと結婚しなければなりません、駒井甚三郎は改めて、お松どのに結婚を申し込むのです、秘書として、助手としてではない、妻として、あらゆるものを駒井に許すのです、それをわたしは今ここで、あなたに要求したい」

駒井甚三郎は、つとめて平静をよそおい、また平静の心を以てこれを言わなければ、言う意味をなさないことを感ずるかの如く、こう言いきつて、そうして、お松の表情を、月に照らして、爪の先までも見落すまじと見入つたのです。

しばらくの間、たぎり流るるような烈しい沈黙が、無人島の、今は無人でない処女嶋の、椰子の林の木の間につづきました。

駒井のかくまで、技巧ならぬ技巧をこらして打ち出でた応対に、お松としては返事がありません。返事ができないのです。できないのは、あり余つて、そうして、その言葉を見出すに苦しむのでありましょう。

全くこれは、この純良忠実なる処女を驚かすに充分なる申し出でありました。尋常の場合、当然の立場でいてさえ、女性として、この申し出に触れた時は人生の最高潮であつて、これに動揺しない婦人は一人もあるべきはずでない。驚くなど言つても、驚かすにはいられないはずのものです。お松の心の激動と、

その激動を持ちこたえるものごしは、駒井に正面から見下ろされてのがるる由がありません。生憎あいにくにも、木蔭を洩もるる月の光が、また直下にこの処女に射向いて、絶体絶命の手づめを見せているのです。

こうなつた時に、お松は、これこそ驚くべき勇気を以て、少しもたじろがずに駒井の面かおを見上げて、それに劣らぬ平静を以て答え得られたことが意外です。何か力あつて、この女性を後ろから喉けしかけるもののように、

「承知いたしました、わたくしは、あなた様のお申出でを、このまま素直にお受入れ致します」

「うむ——」

と言つて、駒井甚三郎が、その足を大地に踏みこたえるように立て直して、

「有難い——よく承知をしてくれました、今晚から、あなたは、わたしの妻です」

「かような、これより以上の大事はないお申出でを、そのまま、この場でお受けする気持になった、わたくしというものの我儘わがままをおゆるし下さい、わたくしは自分で、もう自分のことがわかりませぬ、無条件で、なんでもかでもあなた様のお申出でに従うよりほかに道がないことを犇ひしと身にこたえました、本来ならば、充分に考えさせていただいて、せめて今夜一晩なりとも、静かに考えさせていたいただいてから、最後の御返事をしなければならぬのに、それをしないで、この場で、こんなに手軽く仰せに従う、わたくしというものの軽佻かるはずみを定めてお心の中ではおさげすみになつていらつしやるかと存じますが、わたくしは、もうさげすまれようが、賤いやしまれようが、左様なことを考えてい

る余裕はないのでございます、今晚一晩考えさせていただいたに致しまして、明晩、明後日、一生涯考えてみましたとても、このお返事は考えてはできません、それ故に、この場で、あなたのお心に従います——それが、僭上であるか、男女の道に外れているか、いないか、世間態のために、あるべきことか、なかるべきことか、そんなことも、以前のわたくしならば、充分に考えている余裕がありましたでしょうが、今のわたくしにはそれがありません、あなた様が、当然のこととして、それをお申し出でになったように、わたくしも当然のこととして、それをお受入れ致します、誰が何と言つても、もはや怖れません、誰に對して済まないことになるか、済むことになるか、そんなことも一切はここで忘れ去ってしまったております、この、はしたない、慎しみのない女を、お憐あわれみ下さいませ」

畢生ひつせいの力を振ふるつて、こう言つたお松の舌は雄弁ゆうべんでした。平静

に、平静にとつとめながら、その間から迸ほとばしる熱情が、火花のよう

に散るのを、駒井は壯さかんなものをながめるかの如くに見つめて、

「有難い、わたしは今まで、いかなる女性からもそういう強い愛情を受けたことはありません、女性が男性の要求を受ける場合に、抵抗がなくて、それに成功のあることは絶無です、積極にか、消極にか、抵抗を受けてその後には征服があるのです、結婚というものの原始の形式はそれでした、それが進歩して、その間に、あやというものだけが残っている、一旦は拒むものです、許す気持を以て争うものです、よい意味の芝居をしないで、男の要求を受入れる女というものはありません、それをお松さんだけがしない、これは偉大なる強さです、この抵抗のない抵抗の何という強さ、今晚、駒井甚三郎は、生きていくという喜

びを感じました」

「わたくしも、初めて、女として生れ甲斐があつたということ  
を、今こそ欺あざむかずに申し上げることができるのでございます。  
駒井甚三郎様、男として、あなた以上に依頼のできる人が、あ  
なたのほかにはございません、あなた様もまた、女として、友  
として、同志として、わたくし以上に信用のできる相手を見出  
し得ようということは、もはや、わたくしが許しませぬ、許し  
たとでも、それは見出すことが不能でございましょう、どんな  
海の果て、陸の末までも、わたくしは、あなたと運命を共にす  
る唯一人の女でなければならぬと、それは、ただ張りきつた  
一時の感情で申し上げるのではございません、あの時から、運  
命がそうさせたのでございます。この大きな力をごらんくださ  
い、もはや、わたしの身であつて、わたしの身ではございませ

ん、この大きな力に押され、大きな力に引きずられてゐるわたしを、お憐み下さい、わたくしは、もう自分の力で自分をささえることができません、自分で今何を言つてゐるかさえわからなくなりました」

この時に、お松は身を以て駒井の上に倒れかかりました。

全く、自分で自分を支えることができない。今まで堪こらえに堪えていたけれども、もう持ちきれないこの重味を、持ちかけられるのはそこよりほかにはありません。その怖るべき力を、真面まともに受けた駒井甚三郎は、よろよると、それを受留めながら、これも自分の力で自分の足もとを支えることができず、最初から楯たてに取つていた椰子の大木に支えられて、そこで、烈しい泣き声が、駒井の胸の中にすつかりかき埋められて、それでも井堰いせきを溢るる出水のように、四方にたぎるのを如何いかんともすることが

できません。

身を以て泣く女の力、駒井はその力が、雷電の如く火花を散らす強さを知りました。

三十

この時以来、二人の身心に大革命が行われたということ、誰も知ったものはありません。

聡明にして叡智なるこの二人は、その秘密を誰にも知らせようとはせず、また知らせてはならないことだと感じました。

二人の間が、今までと変つて、二つのものでなく、完全に溶け合つてしまつて、しかも、その情熱は白熱の情熱で、土をも、金をも、あらゆるものを溶かし尽す盛大なる力を、秘密の中に

生かし置く二人の人間としての慎みが、また強大なりと言えるかも知れません。

それが、二人を偽善に導かず、壮快なる活動力となり、人に疑惑を持たせずして、信頼を加えるように嶋の人からもてなされていることは、今日が昨日に優ろうとも劣ることはありません。

それなのに、二人は、この秘密の知らるることを怖れました。相戒めて、よそよそしく振舞わなければならぬことを申し合わせたのは、それは、こういう疑惑が人心を迷わすことのためか、に大きいかを、二人ともに、経験の上からよく心得ているのです。

人心を得るも、失うも、その機微に存することを、飽くまで味わって来た駒井甚三郎、世間の苦勞をしつくして、人心の反覆を知り過ぎるほど知っているお松は、二人の評判が、この僅

かな同志の間にも異様に立ちのぼった時は、それは二人同志の身心の革命が、血を流さずして行われたことのように容易なものでないことを、熟知しているからであります。

人心が離れる、離れないということは、男女の間の疑惑から起つて、予想だもしない危険があるということに、相戒め、節制をつとめる二人の間は、偽善ではなくして、誠意でありました。

二人の間を、異様な眼を以て見るものは一人もありません。船にある時、優良なる船長であつた主人と、その最も忠良なる侍女、或いは秘書としてのお松を、虚心平気で見る以外の眼を以て見るものは一人もありませんでした。

二人の革命は、無事に二人だけの破壊と組立てを完了している。その勝利というような甘い感じが、ややもすれば、この聡明にして警戒深い二人の世界を、動かそうとすることもないと

も言えないが、二人の世界は、二人だけの世界で、何者といえども、これに触るるを許さないとところのものでありました。

その甘きに酔うべき秘密を、二人は、厳肅に、犯されざる垣の内に保ち得たりとする、そこに、誠意もあり、警戒もあるが、また、免るべからざる弱さもありました。その弱味が、蓋ふたを取つて物を見るように見られていることを感づかない二人の心に、充分の隙間すきまがあり、愚さがあるということを感じつかないでいるところに、また二人の善良さもあるというものです。

事実、秘密は保たれている——と信じきつたところに過あやまちはなかつたもので、今も現に、一人として異様な眼で見られるものはないのは、まさに相違ないのですが、たった一人の者に、その秘密を見破られてしまつていく——ということに、二人が気がつかなくなつたというのは運の尽き——いや、それが結局、喜ぶ

べきことかも知れません。この同志の中のたった一人が、早くも二人の秘密をうかがい知ってしまいました。

その一人とは誰。神秘に属する官能を与えられた無邪気な清澄の茂太郎か。いいや、そうではない。茂太郎は鋭敏な天才に似ているけれども、まだその世界を知るまでには、年齢の力が許していない。つまり、それを最初に見破ったのは別人ならず、七兵衛入道なのであります。

七兵衛は、もう翌日の朝、二人の間を見破ってしまいました。

朝の御機嫌伺いを兼ねて、事業の進境の相談をするために、真先におとずれた時に、平静を極めた二人の、常と少しも変らぬ態度とあいさつのうちに、どこをどう見つけたか、心のうちうなずに肯くものがあつて、そこはやっぱり狸ですから、二人がなにくわぬ表情をしている以上に、この男は尋常な面つきで、いん

ぎんに聞くべきを聞き、述べべきを述べて、天幕の中へ引下つて来たが、まだ働き手は誰も出動していないテントの炉の前で、煙管きせるを一つポンとはたきながら、七兵衛入道は変な面をして、思わずこう言いました、

「お松も、いよいよ女になつたなあ」

駒井甚三郎も、お松も、この人に会つては、皮をかぶること  
はできないのです。

だが、そういつた七兵衛入道の面には、いささかも意地の悪い表情はなく、それが結局、二人の喜びまさに勝るとも劣ることなき、躍動を抑えて、ほほえむかの如き含蓄の深い色を漂わせて、

「縁は異なるものとはよく言つたものだ、あの子が駒井の殿様のも  
のひとりじめになるうとは思わなかつた、駒井能登守を、こつそりと独占  
にする凄腕すじうでを持つていようとは思わなかつた、さて、おれが仕

込んで、おれ以上の腕になったというものか、全く以て小娘は油断ができない」

と、こひとごとう独り言を言いながら、ほくそ笑みをつづけましたが、その笑顔は、我が子の手柄を親としての自慢と誇りに堪えないような笑顔でないと誰が言います。事実上、七兵衛は、わがこと成れりというほどに、そのことを喜んでるのは確かです。

お松についても、駒井についても、知るだけを知りつくしている七兵衛入道は、今さら、「縁は異なるものとはよく言つたものだなあ」と、ひたすら、その縁という異常なることに感じて、その正しいか、正しからざるかは考えていないらしい。考える暇もないらしい。もし、少々でもその余裕があつたとしたならば、彼は第一に、このことが宇津木兵馬というものにとつて、いいことか、悪いことか、そのことだけでも一応は考えなければ

ばならないはずなのです。

七兵衛としては、一日も早く兵馬に本望を遂げさせて、そのあと二人を一緒にしてやる、これが一生の願いで、これまで陰に陽にそのことに力を入れて来たのですが、ここで、そういう結構が、すっかり打ちこわされてしまっていることを知った以上は、お松に対して苦言を言わなければならず、駒井に対して直諫ちよつかんもしなければならぬところなのですが、これがすっかり消滅して、

「お松もいよいよ女になった、これで、おれも安心だ」

という安心と満足でいっぱいなのは、どうしたものでしょう。こうして七兵衛が、大安心と満足で満ちきっているところへ、天幕の外から、

「おじさん、来ているの？」

これも、うら若い女の声でありました。紛まごう方かたなき奥州の南部で、七兵衛入道がむりやりに押しつけられて来た、お喜代という村主の娘の声に相違ありません。

三十一

「お喜代坊か」

と七兵衛が言ったので、

「おじさん、一人？」

と答えて天幕の中へ現われたのは、湯の谷の温泉で、きわどい時に拾い当てた山方の娘のお喜代であります。

お喜代は、紺こんがすり飛白のさっぱりした着物をつけて、赤い帯をしめ、手拭を髪の上に垂らして、手てっこうきやはん甲脚絆のかがいしいでた

ちで入つて来ました。その張りきつた体格と、娘でありながら、まだ子供のような無邪気な初々ういういしさが、思わず七兵衛を見惚みとれさすものがあります。

「ああ、わしは今、駒井様へ行つてお指図を受けて来たところなんだが、もう、みんな働たきに来るだろう、喜代ちゃん、そこへ火を焚たきつけておくれよ、お湯をわかしといてもらいてえ」

「はい、承知しました」

極めて柔順に、この子は、七兵衛の言いつけを聞いて、急ごしらえの築立つきたて竈かまどの下へ、薪たきぎを折りくべて火をたきつけ、やや遠いところの水汲場へ行つて、バケツへ水を満たして来て、釜に入れたりなど、まめまめしく働く。その働たくさまを、七兵衛は、こちらから煙草をのみながら、じつとながめておりましたが、「ああ、ここにも娘盛たけりがいる」

と言つて、何か深く考えさせられたものがあるようです。

お喜代は、あんなにして七兵衛が貰い受けて来たというよりも、変つた意味の前世の約束で、無理に背負わせられて来たのだが、こうなつてみると、有力な拾い物であります。有力どころではない、求めても得られない、珍重な拾い物をしたと思わずにはいられません。

その当座こそ、この娘は、さんざんに泣きもしたし、故郷を恋しがつたりして手がつけられなかつたけれども、今は慣れきつてしまいました。これが与えられた生活であるという希望が、ようやく芽を出して来たのは、上陸して後にはじまつたではありません、船の中が好きになりました。海上生活が好きになつたというよりは、この中の同志が物珍しくて、そうして、いずれも内容があつて、親切であることが、単純な山の中の人と共に

生きてゐるよりは、なんとなしに豊かなものであることを知つて、この人たちと共に暮すならば、海の涯はて、山の奥、どこまでもと言いたい気分になつてゐるのでした。それから、この植民地が出来るにつけても、女としては唯一無二の働き手です。お松も働き手ではあるが、それは上局の部分に属して、主として船長附きになつてゐるから、開墾そのものと、その生活の世話に、手を下して助力するといふことはできません。その不足を、お喜代ひとりが補つて余りあるのです。この娘は山方でも、家柄のいいところへ生れたのですが、労働を厭いとわないのみならず、労働に慣れておりましたから、ほんとうにここでは三面六臂さんめんろっぴの働きをします。口数が少なく、働くことは三人前もしますから、この点に於ても申し分はありません。そうして、張りきつて何不足なく働くものですから、体力もみるみる実が入つて、

はちきれそうな肉体の豊かさを、紺飛白の着物の下から、唐ちりめんの赤い襷帯締の色から、甲掛脚絆の外れから、惜しげもなくはみ出して見せるところに、七兵衛が思わず見とれて、そうしてまた思いました、

「ここにも娘盛りがいる、今はまだいいけれども、そのうちに、と言っているのでは遅くなる、何とかしなければならぬ、何とかしてやらなければならぬ、何とかするといつても、もう世界は限られているようなものだから、いずれは、この組の中の誰かに合わせてやらなければならぬ、そのうちに当人が誰を好くとか、誰ぞがぜひにとか望んで来るものがあるに相違ない、打ち出してそう言えないうちに、それを見てやらなければならぬのは年寄の役だ、だが、危ないものだなあ」

と七兵衛が、年寄心で、それからそれと取越し苦勞ふけに耽つて行

く。

「危ないというのはほかではねえ、この国には男が多くて女が少ない、少ないというよりは、まだ男の数は、そうと、十三人を数えるけれども、約束済以外の女とっては、まあこの娘と乳母ぼあや——は、これはもう一度卒業したんだから、明いているといえは明いているが、初物はつものとは言えねえのだ、してみると、取引のできる女というのは、お喜代坊ひとりだけなんだ、十三人の男に一人の女、しかもそれが、はち切れそうな娘盛りと来ていちやあ、これは只事じゃあ済まねえなあ、こいつ、この国での一番の考えごとだぜ」

七兵衛の苦勞は、そこまで及びましたけれども、それはただに取越し苦勞ではない、火がそこまで燃えさかつて来ているよ  
うで、おっつけ、この女の持主というものを確定してやらない

ことには、その暗黙の競争者で火花が散る。苦労人の七兵衛は、この問題を、島に於ける最初の、しかも最大の難問題のように思われ出してきました。

競争者が出来た時に、一方に与えて一方に与えなければ、すぐに生命いのちがけの問題になる、ということをも、苦労人の七兵衛が考えないわけにはゆきません。そうしてみると、今のうちに、すっかりこの娘の持主をきめてやって、他の者は手が出せないものだという観念を、みんなに持たせてしまわなければ事が遅い。これは考えている時じゃない、眉まゆに火のついた問題だと、七兵衛はせき立ちました。

お松の方は、あれで大安心。いいか、悪いか、それは知らないが、もうあの女の運命はきまつたから、あれは、これ以上に心配してやるものはない。これからはこの娘だ、今夜は一晩、

寝ずに考えてやるぞ、と七兵衛が、じつと思ひ入れあつた時に、どやどやと皆が出動して来ました。

三十二

その晩、七兵衛は、無名丸の方へ廻つて船番がてら、船で一夜を明かすことになりました。

広い船室の中に、たった一人で、思う存分考えてやろうとしたのは、今朝、天幕の中でじつと見据みすえた、あの体力のハチきれそうな、おぼこの娘の身の上のことでした。

それを考えると、自分というもののこし方も、おのずから考えられるので――

「ああ、おれも考えてみると、女房では苦勞をさせられたんだな

ア、苦勞をさせられたというより、女房のために一生を誤られたと言つてもいいかも知れねえ。なあに、そんなことがあるものか、自分というやつの手癖足癖が悪いから、こうなつたに相違ないが、かかあ嬢が良かったらこうならず済んだかと思われるのも、まんざら愚痴じゃあるめえ。あいつお土産つきでおれのところへ来やがつたんだが、そいつはおろしてしまつて、次のやつが出来ようという時に、男と逃げた、それから、おれがグレ出したというようなもんだが、女というやつは、どつちへ廻つても油断がならねえなあ。その後、おりや、女という方にはさつぱり綺麗に、よくもここまで通して来たもんだ、悪い事あするが、その悪いことも性分でやつてるので、意地でやるわけじゃねえんだ、因果なことに、盗むのが面白くつて面白くつて、世間が隙すきだらけで隙だらけで、だまつて見ていらねえから、つ

いちよつと手が出る、手が出ると、足が物を言うので、ツイツイここまで盗みを商売にしては来たものの、その上り高で、道楽を一つするじゃなし、お妾めかけを一人置こうじゃなし、時たま旨え酒を飲んで、旨え物を食つてみるくれえが関の山なんだ。女房のほかには、女てやつにさつぱり慾がなかつたなあ、今日までそれで通して来たんだ。考えてみると、おれは盗人ぬすつとさえしなければ、聖人のようなものだ、盗人にならなけりや、相州の二宮金次郎になつていたかも知れねえ。だが、おれの初手しよての嬢は、あいつは今どうなつていやがるかなあ、嫁入前に男をこしらえて、お土産つきで来るような奴だから、娘時分には、男も一人や二人じゃなかつたらう、どうせ、水呑百姓のおれんとこへ、まあ、鄙ひなには珍しいというくらい、浣皮のむけた奴で、おれのとこへ来るのだから、何か仕、く、れ、え、があつたに違えねえ。おれ

も面白くねえから、あんまり大事にしてやらなかつたが、やつぱり前の男と切れなかつたのか、また別のをこしれえやがつたのか、ああして追出おんでてしまやがつて、その後は、さつぱり消息たよりを聞かねえ、聞きてえとも思わねえし、聞きたくもねえのだが、ロクなこととはあるめえよ、本木もとぎにまさる末木うらぎなしでなあ、人間、一ぺん夫婦となつた以上は、どつちにどういふ間違まおとこいがあつても、離していけず、離れていけねえ、間男まおとこをしようとも、やぐざをしようとも、そりや亭主の器量が足りねえんだとあきらめて、嬢ゆるは免ゆるしてやることだ、一生可愛がつてやることだ、おれはそう思うよ。あの時に、おりや、もう少し嬢を可愛がつてやるんだつて。苛いじめもしなかつたがな、面白くねえから、いい顔を見せなかつた、朝晩いい面を見せられなけりや、女房は辛いよ、女房だけが悪いたあ言えねえ、亭主にそれだけの徳がねえから、

女房が悪いこともするということになるんだ。だから、若い娘にはいい亭主を持たせてやりてえ、なるべく早く、なるべくいいところへ、物心のつかねえうちにかたづけしてやるのが、年寄役のつとめなんだ、いい御亭主になれなかつた罪滅ぼしに、おれは、せめていい世話人にだけはなつてやりてえ。さあ、その手詰めの試験台があの娘だ、あの娘を罪滅ぼしの試験台に、おれは仲間での出雲の神様になりてえ、そうでなければ浅草の衆ぐもの平内へいないだ、おれをふみつけ、さえすれば、男女の縁は結んでやる、とこういう功德の神様になつて、罪滅ぼしをやりてえもんだが、さて、その小手調べが、どうなるものかなあ」

七兵衛は、こういうことに思い耽ふけつて、早速明日から、この島のうちで、誰にあの娘を授けてやったらいいか、その品定めにとりかかろう、物好きな品定めではない、当りがついたら、い

やおうなしに縁を結ばせて、あの娘の持主をはつきりきめてしまうのだ。

こういう心持で、船の中の乗組、船頭、水手、楫取かんどりのすべての面を頭に浮べたが、どうも考えてみただけでは、これはと思わしい相手が思いつかない。あれは実直だが、老人だし、二十、三十の若い者があるのに、四十がらみの船頭にも持つて行けないし、若いのをへたに選んだ日には、一方に恨みの種を蒔まくようなものだし、はてさて、一回のうちに誰を見立てたものか、ほとほと七兵衛の頭が乱れます。

冗談じゃない、ではいつそ、七兵衛おじさん、お前の物にしちまったら……もともと、お前に授かったのじゃないか——全く冗談は言ってもらいますまい、第一、この坊主頭にてえして、そんなことができずかい、それに、今日まで男後家を立て通

して来たといえは二本棒だが、聖人の道を守つて来たこのおやじを、今となつて人間道に引卸すなんては罪だよ、考えてもいけねえ、そういうことは口走るもんじゃねえよ、と七兵衛は自問自答して、嚴肅に打消してしまつたりしていましたが、一晚考えてみても、なんら目当てはつきません。

物事はそう取越し苦労ばかりするもんじゃねえ、神仏がいのようにして下さらあ、縁は異なるもの味なもので、人間業に行つて行かねえやつなんだ、早い話が、甲府勤番支配駒井能登守が、この大海原の真中の離れ島の椰子の木の下で、おれの娘分のお松と出来合うなんていうことが、仏様だつてあらかじめ御存じのある事じゃあるめえ、それと同じことに、あの娘だつて、どうしようの、こうしようのと、おれがここでやきもき思つたからとて、どうなるものか、冗談は言いつこなし、いい年をして、そ

んなことができるかい、そんなことをしようものなら、みんなの示しがつくと思うかい、なに、駒井の親玉でさえもあれじゃないか、お前のはそれよりもつと素姓がいいんだぜ、村方総出で許されて来たんだぜ、あの時、村方の者が何と言った。

あの村のならわしで、いったん男に肌を見られた女は、もうよそへお嫁に行くことはできない。

村の昔からの習わしでございまして、娘のうちに、男に肌を見られたものは、どんなに身分が違いましたようにとも、年合いが違いましたようにとも、その男よりほかへは行つてはならねえことになつているのでございます、見たもの因果、見られたもの因果でございまして。

そういう習慣でございます、そうしてその娘は、あの場で、こちら様に、すっかり見られてしまったんでございますから、も

う嫁にやるところもございませぬ、婿むこを取るところもございませぬ。

それのみじゃございませぬ、怪我にでも一人の女の肌を見てしまったものは、否が応でも、その女を自分のものにして、面倒を見なけりやならねえおきて、になつていたのでございます、それをしなけりや村八分、いや、荒神様の怖ろしい祟りたたがあるの  
でございまして。

わしらが方では、名主様のお嬢様がお湯に入つているところを、雇人の作男が、ふと見てしまつたばかりに、そのお嬢様は、隣村への縁談が破談になり、その作男を夫に持たなければならなくなつてしまつたことなんぞもございます。

何を申しまして、村の昔からのおきて、なんでございまして、このおきて、を破ると、孫子の代まで恐ろしい祟りたたがございます、

そうして、現在この子は、あなた様のために、あの通りの目に会いました、善い悪いは別に致しまして、これがこの子の運でございませぬ、もうこの娘は、あなた様よりほかに面倒を見ていただく人はございませぬから、御迷惑さまながら、どちらへでもこの娘をお連れなすつていただきたくないのでございませぬ。

もし、あなた様が、この娘の面倒を見て下さらなければ、この娘は死ぬよりほかは行き場所のない子なんでございませぬ。

そういうわけで、押しつけられたのだ。

そりゃ、それに違えねえけれど、それは土地の迷信というものだ。土地の信仰を無にはできねえから、一時、おれはそれに随つて来たが、船つきの都合で、暫く方向をかえて、疫落しやくおとしをやつてから、娘をまた里方へ帰すつもりで引受けて来たんだぜ、それをそのままいい気になつて、わがものにしてしまおうなん

て、考えても考えられねえことだ、縁というやつは、なるようにしかならねえものだ、神仏にお任せ申して置きあ、いいようにして下さらあ、人間、人のために思うのはいいが、思い過すと、かえつてためにならねえ、人間の運というものは、人間にはわからねえんだ、縁は異なるもの味なものさ……いい人はいいようにして下さらあ、納まるべきものは納まるころへ納まるさ、そう、くよくよしたもんじゃあねえよ……

三十三

こういう意味で七兵衛は、この問題に未解決の解決を与えて、それでひとまず打切りとしました。

朝起きて見ると、兵部の娘が、思いの外にきちんとした身だ

しなみで、パンとお茶とを持って来て、七兵衛のために朝飯をととのえてくれました。マドロスはと見ると、一心に船の掃除をつとめている。この二人は、ほとんど常住の船の番人です。上陸してその部署につかないこともないではないが、船を守ることを本業として、陸に来ることは、ただ自分としての割当ての縄張を見て置くだけといったようなものです。

見るに、気のせいか、マドロスも、ウスノロぶりがだいぶ引きしまつてきたようです。兵部の娘の何となく甲斐甲斐しく見え出したのと同じ見えますが、見損いでない限り、二人の気分の改まりは、環境のもたらす一つの好感化かも知れません。というのは、今や他の船員はことごとく陸上に安定の地を求めて一生懸命です。が、この二人だけは船に置かれて、これまた、船を安定の地として残されている。周囲の嫉妬もないし、憎悪ぞうおも

遠のいたし、そこで心の僻ひがみが取れたせいもありましょう。それともう一つは、この一組の仲は、あらゆる船員の憎悪の的でありましたが、七兵衛だけは異った同情を持っていたのです。マドロスが検束なきふしだらで、この娘一人を独占し、女も女で、人もあろうに、あの眼の碧あおいウスノロのどこがいいのだと、さげすまない者は無いが、さて、これほど侮られ、にくまれながら、この二人の存在を如何ともすることができない所以ゆえんは、船の舵かじをこの男が握っているからで、この男無き限り、他の船員に、まだ知らぬ大洋を安全に行き得る自信がない。他のあらゆる事情に於ては否定すべき存在であるのに、そのことのただ一つの技術のために、彼の不検束が許されている。それが許されている間は、女のふしだらもまた許されている。こういった唯一の条件の下にのみ、二人の存在は許されているのですから、

その以外には、あらゆる冷たい眼を向けられているのに、ひとり七兵衛だけは、二人の間を、一種の同情を以てゆるしておりました。

出来ないうちはともあれ、出来た以上は仕方がない、出来たにしても、どちらか一方に不満がある時は、またそれはどうか手段があろうけれど、毛唐であれ、ウスノロであれ、出来てしまっている上に、二人とも、憎くない、好き合っているということになってみては、もう、文句の無いところだ、許してやるさ、明るく二人を扱ってやることさ、少なくとも、冷たい扱いをしないで可愛がってやるがいいさ……こういうように、同情心を以て対するものですから、二人も、七兵衛の温かい心に非常な感謝の念を持っているのです。

この感謝の心が、かくも行動となって現われて、七兵衛に対

する限り、もてなしぶりが違うのです。そこで二人も七兵衛の来ることを喜ぶし、七兵衛もまた、二人以外の船の目附めつけとしては、その老巧から言っても当然その人ですから、ほとんど隔晩には船へ泊りに来て、船は、今やこの三人だけの世界のようになっているのです。

時たま、田山白雲が、船を見舞に来ることもあるが、これはウスノロにとっては最も苦手で、この人が来るとウスノロは、船室の中にすくんで扉を閉して出て来ません。兵部の娘の姿が見えると、白雲が何かとからかうものだから、娘も恥かしがつて、なるべく姿を見せないようにしている。それだから船も白しらけて、さすがの白雲も、ここへやつて来ることに気が向かない。画の資料を取寄せる際の極めて必要の場合でない限り、船へ来ることは稀れです。

駒井甚三郎も、最初のうちは、ちよくちよく来て見たけれども、これは、二人を叱りも、からかいもしないけれども、二人の方で気が置いて、やつぱり姿を見せないことにつとめているし、駒井もまた、二人の存在を無視して、仕事を片づけては行くものですから、ほとんど没交渉のようなものです。それさえ、この数日間は姿を見せない。毎日一度は来た駒井船長が、船へ姿を見せないことによつて、陸の方の事務がそれだけ忙しいことがわかります。忙しいというよりは、それは、あの晩の事あつて以来のことですから、お松を必要とする限りに於て、駒井はその新館の一室から、助手を手放すことを好まない。ほとんど終日を二人は、一室のうちに扉をおろし、カーテンを卸して研究に耽<sup>ふけ</sup>ることさえあるのです。このごろは、開墾地の見舞をさえも怠りがちになることすらあります。

「船の中でも、そうでしたが、よくまあ、あれだけ根こんがつづくものですねえ、朝から晩まで本を読んで、調べものをなさって、それでお飽きになるといことがない、お手助けをなさるお松さまも、学問がお好きの道なればこそで、ほかの者ではつとまることではございません、殿様もよく勉強をなさるが、お松さまの仕事も、ほかの人でつとまりつこはない、お好きの道とは言いながら、よくもあんなに精がつづくものでございますね」と、無邪気なお喜代が、同情のあまり、七兵衛に向つて感謝して言いました。七兵衛は、

「人間、好きな道には命さえ投げ出すよ、仕事というものは、外はたで人の見るほど苦になるものじゃない」

駒井がここへ来て、新しい研究に熱中の度を加えたとの評判は、お喜代の眼にばかりではない、誰の眼にも、舌を捲いて感

歎するものがありましたけれども、それを何でもないことに解  
釈するのは、七兵衛入道ひとりだけに過ぎません。

三十四

神尾主膳は、上野へ行つて輪王寺の門跡について、覚王院の  
義観僧都ぎかんそうずを訪ねましたけれど、その日は面会ができませんでし  
た。

それでも、ひるまずに竜王院の執当をたずねてみたが、それ  
もおりから不在とのことでした。

そこで、憤然として山を蹴つて出づべきだが、今日の主膳は、  
左様な侮辱にひるまないで、更に、輪王寺の重役、鈴木安芸守すずきあきのかみ  
をたずねて、ここでは意外の珍客としててもてなされたものだけか

ら、いくらか溜飲を下げて、そこで、久しぶりに安芸守信博と対面をしました。

本来、今の神尾の身で、供もつれずに、覚王院や竜王院を突然に訪ねてみたところで、げいか 猥下へ通すまでもなく、玄関子がよろしく取計らつてしまうことは、わかりきつたことで、神尾主膳としても、その辺の常識は無ければならないのですが、いささか覚悟の前であつたのでしよう、そこで山に於ては、前二者に次ぐ役人としての有力者、鈴木安芸守にぶつつかると、直ちにりょうかい 諒解されたのみか、意外の珍客としてもてなされる気色さえあつたものですから、神尾も、こうなければならぬと、昔の自尊をいささか取戻したらしい。それも、一つは安芸守自身が居合わせて、取次から、珍しくも神尾の名のりを聞いたものですから、それでこの良会があつたもので、さもなくば、やはり

玄関子の取計らいを蒙こうむつたに違ちがいなと思おもわれる。

今の神尾は、人に訪ねられる身分でなく、ましてや人を訪ぬる身でない。悪友以外にまじめに訪問を試みたということとは、甲府勤番の役向を別としては、何年にも絶無のことでありました。

それでも覚王院に於ても、竜王院に於ても、あえて癩癩かんしやくを破裂させなかつたというものは、本来、今日は私心あつての訪問ではない、いささか誠意あつての義勇心（？）といったものから出でたのですから、私の侮辱に平然として屈せぬ面の皮がありました。

役の出先、かみしも袴をつけたままで鈴木安芸守が、神尾主膳に對面して、

「これはこれは神尾主膳殿、珍しいことではござらぬか」

「いや、津の国の、何を申すもお恥かしい次第だが、今日、かくの通りにぶしつけに推参いたしたのは」

先<sup>まづ</sup>以て、財物の無心に参ったものではござらぬという安心を、

先方に与えなければならぬほど、神尾の立場は気が引ける。

「その後、お噂<sup>うわさ</sup>を承るのみで、一向に御消息を存ぜぬことでしたが、御無事で何よりめでたい、どちらにお住いでござるか」

安芸守の言うところには温か味がある、それが何かしら神尾<sup>やわ</sup>を和らかにするものがありました。この安芸守は年配に於て、

十も主膳の先輩ではあるが、旗本としての門地は、今は知らないが、以前は遙かに神尾より下でした。今の神尾としては、誰

ひとり振向くものもなし、振向くものの面<sup>かお</sup>は冷たいと思つて、

僻<sup>ひが</sup>むところを、こういうふう<sup>ひが</sup>に温かに取扱われると、悪い気持

はしない。まして、たつた今、覚王院や竜王院で、お取計らい

を食つて出て来たその余勢ですから、神尾もここで、故旧になぐさめられるような温かな味、近来受けたことのないものを受けました。

「いや、ドコにしていると名乗るほどの安定はない、刑余の亡命者でござるがな、今日は、どういうものか、虫の居所が少し違つていると見えて、じゃんじんの鐘を聞くと、急に上野の地が恋しくなつたようなわけで、山へ登つてみましたよ。とりあえず、竜王院と覚王院をたずねてみたが、見事な門前払い、なるほど、今の神尾ではかくもあらんかと腹も立たなかつた、今日という日は、妙に虫の居所が辛抱強い、それにも屈せずして御門を叩いてみると、ここの御門前は極めてすべりがよろしい、かくばかり滑らかになめ通されて、温かいお言葉に接することは、神尾の身にとって、近ごろ絶えて無いこと、よろこばしう存ずる。た

だし、好意に甘えて、御多用の時間を長くおさまたげすべきではないから、手つとり早く申し述べたいが、いったい、今の徳川の天下は、どうなっているのござる、これから先々、どうなるといのでござる、それを、一言、お洩もらしが願もらいたいのじゃ」

神尾としては、今日はまた舌も存外滑らかで、情理明晰じょうりめいせきにすらすらと述べました。

「何かと思えば、改まった御質問、さもありなん御心底もお察し申すが、なにしろ、そのことは重にして大、なかなかここで寸秒の座談に尽すというわけには参らぬ、拙者も門跡へ出仕の身でござるによつて、ただいま打寛うちくわんいで物語りを致す時間を持ち合あわさぬ故に——それではこう致そう、貴殿の、その発心を、拙者はここで冷ますことを致したくない、よつて、明晩と言わず、今晚、いささか二三子の会合もあるによつて、苦しからず

ばその席へ、貴殿の再出馬を願いたいものだが、いかがでござるな」

「よろしい、承知仕った、すでに会うまじき昔の人に、会わんとして会うた以上は、尽すところを果さなけりやならぬ、今晚なりと、明日なりと、貴殿のお引廻しにあずかりたい」

「いさぎよいお言葉、では、今夕七ツをお約束仕ろう、再度、これまで御足労を煩わしたい——参集の二三子とても、いずれも心置きなきものばかりでござる」

鈴木安芸守の碎けた応対、ちつとも我を侮らぬ扱いがいよいよ頼もしい。それというのは、この人も幕府の一人には相違ないが、城下にいること少なくて、山に住むことが多いものだから、世間のことにうとく、従つて、昔の神尾あるを知つて、その後の神尾を知らない。さしも持崩して千瘡万穴の、この神尾

の醜骸を、まだ取りどころのあるものとして、手を触れてみてもくれるだけでも頼もしいと、神尾が一応、不覚の涙を催したというのも無理はないでしょう。

## 三十五

その夜、再び鈴木安芸守をたずねると、鈴木は、客間に杯盤を設けて、打ちくつろいで神尾を迎えたが、その座上に連なる二三子というのも、意外に皆、打碎けた気風で、御家人もあるが、いささか伝法な肌合いもあるが、幸いに神尾を見知っている者は無く、鈴木もまた、神尾の何者であるかを説明せずして、同じく待遇したものですから、場所がらと役目に似合わず、打解けた会合ぶりでありました。

その座上も、かなり和やかで、主客の間に、ずいぶん忌憚きたんのない時代評も行われましたが、大局の帰するところは同じようなもので、どのみち、徳川家の末路の傾いて来たのは、時の勢いでぜひがない。東の衰える時は、即ち西に勢いの附く時である。それは、少なくとも関ヶ原以来のバランスだ。西の方で中心となるは、大藩のうちでも、薩摩、長州が動かなければ本當の幕府の脅威とはならない、それが現に動いている。動き過ぎるほど動いているが、ただ、薩長の勢力が動いたからとて、それだけではないかに動いても、天下の大勢をひっくり返すわけにはいかない。朝廷というものが中央においでになる、その朝廷の御稜み威いを借りて事をなさなければ、為すべき名分も、手段も立たぬ。よつて薩長あたりが躍起となつて策動している……

ここまでは誰も見る通りの時勢なのであるが、これからの観

察と、解釈とが、この一座のものとして聞くのと、巷ちまたで聞くのとは大きな相違がある。鈴木安芸守はこういうように言うのである、

「策動はしているが、結局はモノになるまい、蛤門はまぐりもんの失敗を、再三繰返すのみに過ぎまい、過激の壮士共や、変を好む浪人共と違い、朝廷におかれても、心ある堂上公卿は、内心みな徳川とくがわびいき鼻屑じや、徳川家の悪いところは悪いで改めて行き、やつぱり三百年の重しのかかった勢いでないことには、この内外の多難は救われぬ、たとえ、建武の中興が成つたとしても、帰するところは、やはり武家の世だ、かりに、徳川家に代つて、薩摩あたりが勢力を張ろうとしても、長州が許すまい、幕府がある間は薩長相提携もしようが、徳川退くならば彼等の間に当然の同志討ち、いずれの勢力も、徳川家の多年の威望には及ばない、と

すれば、彼等の為すところは、朝廷を擁して、その御稜威の下に権柄をわが手に占めて行こうとする策略があるのみだが、そうなつてみると、堂上公卿が得たりとばかり手を拱きょうしてはいないのだ、位倒れで実力の無い公卿勢力を、左様に見くびつてはならない、力は無くとも、歴史を持つてゐる彼等の情実というもの、なかなか侮り難いものでな、武家の力だけでは如何とも致し難いものがある、そこで、四方八方の因縁がからみつくから、たとえば、徳川衰えたりといえども、一朝一夕で、天下の形勢が変わるといふことはまずあるまい」といふのが、鈴木安芸守の結論らしい。

これは関東方としては、しかるべき見方であり、また事実その通りに信じているのであるけれども、以て、天下の輿論よろんの帰向とは言われまい。さりとて、神尾主膳にはそれに異議を試む

るほどの見識が出来ていない、黙して聞いているよりほかはない。また、今晚は黙して意見を聞くためにここへ来たので、己おのれの所見を述べに来たのではない。そこで神尾は神妙に沈黙していたが、鈴木がこの大体観を中心にして、集まる二三子が、かなり思いきった反駁はんぱくを試みたり、同意を表したりすることが、また大いに学問になりました。

しかし、この座では大体に於て、鈴木の見解に一致するので、それ以上に、徳川の余力を買いかぶつて、薩長共の蠢動しゅんどうが結局、徒勞に終ることを冷笑する空気が圧倒的でありましたが、最後に、最悪の場合を覚悟するとして、関西の勢力が朝廷を擁し、関東と相對峙あいたいじするような形勢となると、輪王寺門跡のおわすこの上野の山が関東の王座となつて、江戸城は、その衛城であることと京都の二条城にひとしい。この意味から上野は守らなければ

ならぬ、上野が関東の最後の、かつまた江戸での最上の本地となるのだという意見には、誰も異議はない。

それから、朝暮と、各藩各勢力の有する人物評判などに及んで、こういう時勢に於ては、おのおのその有する各藩の人物の如何いかんによつて、興廢の運命が決するといふものだ。ところで、鈴木安芸守が人物論について、次のような傾聴すべきことを言いました。

「京都に於て、公卿で第一に怖るべき人物はというと、それは岩倉三位だ、あれが容易ならぬ曲者で、薩長といえども、まかり間違えば、岩倉のために手玉に取られない限りもない、あれはにら睨みが利きく、薩長の何人といえども、岩倉三位に対してだけは、正面から押しのの利く奴が無い」

と、きつぱり言いました。岩倉三位に対して、ともかくもこれだ

けの認識を持つているというのは、鈴木安芸守が、やんごとなき御方の、おつきの養育係を命ぜられて四年間、京都に留まつたその経験がさせることと思われまますから、いずれも耳を傾けました。今の関東では、やれ長州に高杉があるの、薩摩に西郷がいるのと言つても、てんで取上げはしない。旗本たちにとつては、薩摩や長州の藩主そのものでさえが、己れと同格以下に心得ている伝統的の自尊心があるから、そのまた下の軽輩共などが眼中にあらうはずはない。それは浮浪人同様のもので、月旦げつたんの席へは上せられない。かりに上せられても、一刷毛ひとほけで片づいてしまう。しかし朝廷を擁する公卿となると、実力は問題にならないとしても、その門地の物言う勢力が、彼等をして軽視を許さない。そこで、公卿の人物観に於ては、存外、身を入れて聞くのでありますが、鈴木の岩倉観には、是非共に一言をさし

はさむことができない。その代りに、

「では、関東方で、その岩倉に匹敵する人物は誰じゃ、西の岩倉と組んで、引けを取らぬ東の関は何の誰だろう」

岩倉にケチをつけてみたいが、つける知識の持合せが無い、その反動として、東でこれに対抗する人物ありや、と伝法の一人が質問を発したのは、将を射んとして馬を射るの戦法に似たものがあります。そうすると、鈴木安芸守がこれに答えて次のように言いました、

「京都の朝廷に岩倉三位があるように、輪王寺の門跡に覚王院義観僧都がある、京都に於ける岩倉三位を向うに廻して、これと相撲の取れるのは、覚王院義観僧都あるのみだろう」

これは意外な見立てと言わなければならぬ。会津とか、桑名とか、譜代の誰々、旗本に於て少なくとも小栗とか、勝という

ものが、口の端はに上らなければならぬ場合に、意外にも、一人の出家僧を以てこれに答えた鈴木安芸守も、山におればこそ、わが田に水を引くのではない、わが山に水を上せるものだ。今日の天下に、朝廷を擁し、大藩を向うに廻して、覚王院とやら坊主一人で、どうして相撲が取れるものか、と言わば言うべきであるが、この人には、それほど反感が無い、というのは、覚王院の威望が隠然として大きいのと、西の比叡ひえいに対する東の東叡山の存在が、ある意味に於ては、柳營以上の位にいるという頭があるからです。

神尾主膳は、とにもかくにも、今日会わんとして会えなかつた覚王院の義観なるものが、それほど傑物であるかという印象の下に、更に鈴木に向つて、ぜひ一度、その覚王院に面会したいから紹介してくれと頼みました。

三十六

そこまでは無事でしたが、その会談が七ツ下りの時分に、二  
三子のほかに、もう二人、新面しんがおの客がはせ加わったことが、神  
尾主膳にとつて運の尽きでありました。

「これは、これは」

と言つて、双方ともにテレたのは、こつちは神尾主膳だが、相  
手は土肥庄次郎であつたからです。

「珍しや、神尾主膳殿、御壮健で」

「これは土肥庄次郎、その後はどうした」

この男だけが、初対面でなかつたのです。いずれは神尾に近  
づきのあるくらいだから、相当のシロモノではあろうけれども、

昔の悪友という因縁ではない。実はこの男の祖父は、一橋の槍の指南役で、この男も祖父に就いて槍を学び、槍に就いての交りもある上に、その当時、悪友としてのよし、みも浅からぬ方であつた。

土肥庄次郎の父を半蔵と言ひ、祖父を新十郎と言ひ、これは御旗奉行格大坪流の槍の指南役であつた。その仕込みを受けて、あつぱれ免許皆伝の腕となり、槍を取つては、神尾のいい稽古相手であり、同時に悪所通いにかけても、負けず劣らずの腕を振つていたものだが、土肥は遊ぶことに於ては、神尾に引けをとらないが、神尾ほどアクドイことはやらない、いわばお人好しの方であつた。

そのうちに土肥庄次郎は、長崎へ行くようになってから、二人の交りはパツタリと絶えて幾久しい間、ここでめぐり会つた

というものだから、相当入魂じゅつしんであるべきだが、実は土肥はその後の神尾をよく知らず、神尾もまたその後の土肥のことはあんまり知らずにいて、ここへ来たものだから、再会のようでも、実は生面せいめんにひとしい。

しかし、ともかく、蛇じゃの道を心得た昔の悪友が来た日には、この帰りはただでは納まらない。土肥庄次郎と、もう一人のために、神尾は誘惑を受けて、まず広小路の松源へ引っぱり込まれ、そこで飲みはじめました。

土肥庄次郎が同行の一人というのは、ずんぐりと肥った伝法な男で、これは大師堂五郎魔であります。庄次郎と五郎魔とは、後おくればせに、ちよつと来て、主人鈴木安芸守を呼び出して、ちよつと耳打ちをしたかと思うと、立ち際の一座と共に、慌あわただしく帰りましたから、勢い神尾と門前で挨拶をし合わなければならぬ、

その機会が松源への誘惑となったのですが、それを辞退する神尾でなかったのは、相手が相手だからでしょう。

松源の二階で、神尾主膳と、土肥庄次郎と、大師堂五郎魔とが、三人で飲み合いました。

酒を飲み出すと、興にのつて、土肥庄次郎らがこういうことを口走りました。これは極々の秘密事項だから、断じて口外はならんが、拙者と五郎魔が、今晚、鈴木重役へ相談に行ったのは、当時流行のスパイ一件のためであるということ、それはこのごろ、上方から間諜かんちようがこの上野の境内へ入り込んでいる、ドコにどういふ奴が幾人入り込んでいるか、そのことはわからないが、その目的だけは、はっきりわかっている、それは輪王寺宮御所蔵の錦の御旗を盗み出さんがためである、無論、盗まんがための盗みではなく、西国方の廻し者であつて、宮のお手

元に錦の御旗を置くことは、何かにとつて危険極まりがないから、それを盗み取つて、善処しなければならぬという、そのたくらみの目的だけは、庄次郎が聞き込んでゐる、それを警戒のために鈴木安芸守に耳打ちに来たのだが、今度、我々に於ても抜かりなく、そこへ眼をつけて、やはり、間者を取つて押えなければならぬということだ。

これは土肥庄次郎の打明け話で、次は大師堂五郎魔の実験談  
ついでに、つい昨晚のこと、五郎魔が、お茶の水の首縊くびくくりまつ松の下を通ると、若い奴が一人、今にもブラ下がろうとしているから、五郎魔が直ちに抱き留めた。

ところが、その若い奴が、死なねばならぬわけがあるから、どうかこのまま死なせて下さいと、泣いて頼む故ゆえ、それほど死

にたいとは、よくよくのことだろう、では、快く死ねと言つて、繩を松の枝へかけてやつて、そのまま塾へ帰つて来たという。

塾というのは伊庭いばの塾のことで、塾へ帰ると同門の岡野誠一郎をとつつかまえて、今、首くくりを助けて来てやった、とその由を語ると、正直な岡野が面の色を変えて、それは助けたんじやない、殺したんだ、事情は何とあろうとも、生命いのちより大事なものは無い、そういうのは生かして助けなければならん、話の具合では、まだ息がありそうだ、行つて見よう、二人で見届けに行こうと、岡野が焦じれているものだから、おれも案内して、以前のところへ来て見ると、その若いのはブラ下がっている、もう駄目だ、息がたえている。

誠一郎が、大息してなげいて言うには、この首縊松というやつが名代になっている、この松で今まで幾人首をくくつたかわ

かりやせぬ、いわば人殺しの松だ、憎い松だ、手は下さないけれども、人命を奪う奴、所詮この松があればこそ人が死にたがるのだ、ことにこの枝ぶりが気に食わぬ、こいつがにゆうとこつちの方へ出しゃばつて、いかにも首をくくりいいように手招きをしていやがる、こいつが無ければ人は死ぬ気にならないのだ、怪しからん奴、憎い奴、と言つて、岡野は君子人だが、その君子人が刀を抜いて、首くくり松の首くくり松たる所以ゆえんの、そのくくりよく出ている松の枝を切りかけたんだ。

そこで、おれが、あわてて、これこれ岡野、松はういもの辛いつらものというから、松を憎がるのはいいが、その松は世間並みの松と違つて、公儀御堀の松だぜ、一枝いっしを伐きらば一指いっしを切るといふようなことになるぜ、めつそう重い処刑に会うんだぜ、それがいやだから、みんな松は憎いけれども、伐るのが怖い、よつ

て今まで、こうして人命殺傷をほしいままにしつつのさばっているのだ、君にしてからが、めつそうなことをすると、前途有為の身体からだに縄がかかるぜ、と言つて聞かせると、岡野が、

「なあに、お咎めとががあるならばあれ、いやしくも人命を奪う植物をそのままには差置けぬ、罪はおれが着るから、貴様も手伝え」と言うから、よし来た！ と刀を抜いて、枝をブチ切つてしまつたよ。もう、首が括くれない、あれへ来て死神に招かれる奴もあるまい、いい人助けをしてやつたぜ。

だが、岡野には感心したよ、おれが助けた奴を、またわざわざ助けに来る義心がエライ上に、あの君子人のくせに、刑罰を覚悟で悪魔払いをしようてんだから見上げたもんだ——五郎魔は五郎魔らしい身の上話をして、座興が湧いたから、第三次としてこれから吉原へ行こうと言ひ出したのを、無論、それを断

わる神尾ではあるまいと見てみると、案外にも、今宵はこれで御免を蒙ることうむ、ほかに待っているのがあるからと言って、首を横に振ったのには、土肥庄次郎も、大師堂五郎魔も呆氣あつけに取られました。

三十七

ほかに待っているのがあると言って、吉原行きをことわつて引返して来た根岸の侘住居わびずまい。

これでは神尾もすでに老いたりだ、だが、他に待っている者があるとの口実が、いささか気がかりではある。

いつたい、誰が、この化物屋敷に神尾を待っている？

待っていると云うたとて、ほかの者が待っているはずはない、

先代ゆずりの、お絹という肌ざわりの相当練り上げられたのが、縮緬ちりめんじわ皺をのばして待つているくらいのもの。これが待つているからとて、附合いを外してまで戻つてやらねばならぬほどの、姉ねえや思いの神尾ではないはずだ。姉やの方でもまた、一晚や二晩よりつかなかつたからとて、おいたをしてはいけません、という程度のもの、きついお叱りがあるうはずはない。

それでも神尾は、夜のおそきを厭いとわず、御行おぎようの松の下屋敷へかえつて来て、戸を叩くと、まだ寝ていなかつたらしいお絹が、直ぐに戸をあけてくれたのを見ると、今日は、でかでかと大丸髻おおまるまげのしどけない姿。毛唐の真似まねをして、束髪、女洋服ですましてみたかと思うと、もうがらり變つて、おやじをあやなした時分の大時代の姿で納まり込んでゐる。気まぐれな奴だと、神尾は横目で、じろじろと丸髻をながめながら通ると、お絹は自分の

部屋で、ひとりギヤマンを研みがいでいたらしい。

幾つものギヤマンをそこへ並べて、その傍らには中形の壇びんがある。ちやぶ台の上へそれを置いて、

「よくお帰りになりましたね」

「ああ、感心に帰つて来たよ、ほめてもらわなくちゃ」

「賞ほめて上げますとも、坊やはこのごろお行儀がよくなりました」

「全くその通り、実は鈴木安芸守をたずねたまでは至極無事だったが、あれから計らず悪友に逢つてな……」

「悪友——でも、あなたに善友というのもありましたか知ら」

「ばかにするな、今日は善友も善友、輪王寺の執当を二人までたずねた上に、重役の鈴木安芸守と真剣な話をして来たのだ、真正銘しょうじんびの精進日なのだ、ところがきわどい時に昔の悪友、土肥

庄次郎というのにつかまつて、松源で一杯飲まされた」

「それから？」

「それからお定まりの吉原へ誘惑を受けたが、待つてる人があると言つて、きつぱり断わつてここへ歸つて来たのだ、どうだ、有難い心意気だろう」

「それはまあ、全く珍しいお心がけでした、ほんとに賞めて上げる価値ねうちが多分にありますね。でも、待つている人つて、そりや誰でしょう、それが気がかりだわ」

「は、は、は、お婆さんが一人で淋さびしがつてるとは、言えなかつたよ」

「お気の毒でしたねえ、姉さんとでも、おつしやればよかつたのに」

「奴等、変な面つらをしやがつたよ」

「あなた、御病気になるといけませんよ、あなたはあなたらしくなさらないと、かえつて病気になるますわ、敵に後ろを見せるようになっては、神尾主膳もすた廃りじゃありませんか」

「そんなことあないよ、今日は精進日だから、そういうところへ行きたくなかつたんだ、それに姉さんが、ひとりで、根岸の里にお留守居だから、お淋しかろうと思いやつたばかりじゃない、当節柄、女一人を置いては、全く危険だからな、心が落着かないよ」

「嘘にも、そうおつしやつていただくことが嬉しいわ」

「うんと賞めてもらいたい」

「ごほうび御褒美に上げようと思つて、この通り研いておりました、さあ、坊や、一つお上り」

「何だ、それは」

「ギヤマン」

「ギヤマンはわかっているが、この油のようなのは何だ」

「これはね、ブランと申しましてね、西洋あちらのきついお酒なので

す、あなたに一口上げたいと思つて待構えておりましたの」

「そうか」

と言つた神尾主膳は、じつとそのギヤマンの小コップに盛られた黄金色を見つめたまま、手に取ろうとしませんでした。

いつもならば、こちらから催促して、キュツとひっかけるは

ずのところを、今日は妙に手を出さないものだから、お絹が、

「どうあそばしたの、イヤに御遠慮をなさるのねえ」

「うむ」

「何をそんなに考えていらつしやるの」

「今日は精進日だ」

「そんなに精進というものは附いて廻るものですか知ら、わたし、気になりますわ、そんなに精進精進とおっしゃられると、わたしまで気が滅入めいつてしまいます」

「いや、悪く取るなよ、実は飲みたいんだ、咽喉のどから手が出るほど飲みたいんだが——これを一杯飲むとあとを引く」

「たんとお引きなさいな、そんなに幾つもいただけるお酒ではありません」

「一杯あとを引けばまた一杯——しまいにはお前を夜通し寝かさなさい」

「そんなこと、苦になりませんよ」

「それだけならいいが、拙者の病が出る、久しく酒乱の見せ場を出さなかったが、こいつは急に自分を誘惑する、手つかず人を酒乱に落しそうな酒だ、今晚は我慢しよう」

「そうおつしやるなら、免ゆるして上げましょう、今晚はあなたの精進をさまたげないで上げましょう、では、わたしが代つて」と言いながら、小さなギヤマンについだブランと称する黄金水をとつて、お絹がグツと呷あおつてしまいました。そうして、仰山に眉根を寄せて、火の玉でも呑み込んだ思い入れで、胸を揉もむ形が可愛らしいお婆さんだと言つて、神尾をよろこばせました。そうして、精進にはじまつて精進に終つた神尾が、その夜は無事に閨ねやに入りました。

## 三十八

寝についたが、妙にかんが高ぶる。今晚の鈴木邸の会談が骨となつて、それにさまざまの想像の肉が附こうというものです。

それでも暁方あけがたになると神経が鎮しずまって、それから熟睡しずに落ちて、朝日の三竿さんかんに上る頃にやつと眼をさしました。こんなことは、いつもの習いですが、昨晚の昂奮は内容が日頃と違つたまでのことです。

不承不承に起き上つて見ると、お絹が台所で何かと小まめに働いているらしい。こんなことも珍しいもので、起きて見ると、おめかしの最中であつてみたり、どうかすると置いてけぼりを食つて、一日を焦じらされてしまうこともおきまりのようなのに、今日はお台所で甲斐甲斐しく立働いている物音が、なんだかくすぐつたいような氣持がさせられて、それでも、一軒の家で主婦がまめまめしく台所で働く物音は、悪い感じは与えないものだと思ひました。

それから、茶の間へ入つて見ると、どうでしょう、おびただ夥しい御

馳走が、ちやぶ台の上狭きまでに立てならべられて、膳碗も、調度も、取つて置きのを特に持ち出したような体ていたらくですから、神尾が、いよいよよくすぐつたいような気持です。

まもなく二人がお膳についた時に、大丸髻のお絹が、きちんと身じまい薄化粧にまで及んで、たいへんな澄まし方でお給仕に立つのが、あんまり現金で痛み入るくらいのものでした。

「何もございませんが、今日はお婆さんの手料理ですから、たくさん召上つていただきます」

「お手料理かなあ、それは痛み入ったよ」

「お酒は差上げません、精進を妨げるとお悪いから、お酒は差上げません、その代り、お気に召しましたら何なりと」

「どうしてまあ、今日はこんなにもてなされるのかなあ、あとが怖いようだぜ」

「あとの怖いものは、今日はすっかり取上げましたから御安心くださいませ」

と言つて、お絹がお鉢を取つてお給仕に当りました。

神尾としては、この女のもてなしで、こんな晴れやかな気分  
に置かれたことはない。

どういう了見で、今日に限つて、こんなにまでしてくれるか、  
わからない。自分の誕生日でもなければ、父母の命日でもない  
のにと、うす気味が悪いほどだが、それでも悪い気持はしない  
のです。

「あなたが昨夕ゆうべ、どこへも行かずに、おとなしく帰つて下さつ  
たから、そのお礼心なのですよ」

と言つたから、神尾がははあと感づきました。なるほど、ゆう  
べ、お世辞にも、待つてゐる人があるからと言つて、吉原附合

を断わつて戻つて来た、それがこの女は嬉しいのだよ。一人で置いて留守が心配だから、夜更けを押して帰つて来た、その心意気を買つてるんだ。買われたこつちはくすぐつたいものだが、買った当人の心意気は殊勝でないとは言わない。

女というものはこういうものなんだ。したい三昧ざんまいをしつくしていても、べつだん悪い面はしなかつたが、そのしたい三昧をあきらめて、お前のために帰つて来た、と言われると、女は嬉しいのだ。何よりも嬉しいと見える。だからこの海千山千しろものの代物が、貰いたての女房みずしのような心意気を見せて、この不精者が、おしろいの手を水仕みずしに換えて、輸入のテン屋を排撃して、国産を提供して、おれに味わわせようというのだな。

女というものはこれだ。あんまり現金過ぎて、くすぐつたいけれども、可愛いところがあるよ。なるほど、女は喜ばすべき

ものだ、女を喜ばすには、金をやることもいいし、品物をやることもいいが、一番いいのは、お前に限ると言つてやることだ。言つてやるだけではない、実行に現わして見せることだ。昨夜おれが吉原行きを断わつて戻つて来たのを、放蕩者ほうとうものに似合わな  
い、敵に後ろを見せるは名折れだとひやかしたが、本心はやつぱり、おれが吉原を断わつて、待たせてある人のために帰つて来てくれた、それがこんなに嬉しいのだ。

そう思うと、この女も存外、女だ、女というものは憎めないものだ、神尾も身に沁しみる一種の愛情といったようなものが、油のように滲にじみ出して来ました。

こうして睦まじく、食事を終ると、神尾主膳が、

「また今日も上野へ出かけて、坊主に面会して来る、話が長くなるかも知れんが、たとえどんなに遅くなっても帰って来るから、お前も、なるべくよそへ出ないでうちにいてくれ」

「ええ、よろしうございますとも、あなたさえ帰って下されば、どんなに遅くまでもお待ち申しておりますよ、悪友がおすすめに なりましても、昨晚のように待っている人があるからと言って、御免蒙つていらつしやい」

「今日のは悪友じゃない、坊主に会つて来るのだから、いよいよ安心なものだ、その坊主も只者ただものではない、エライ豪傑坊主だということだから、こつちが望みで会いたいのだ」

「何でもいいから、エライお方にはお目にかかつてお置きなさい、つまらない人にはなるべく会わないように、己おのれに如しかざ

る者を友とする勿<sup>なか</sup>れつて言いますから」

「いやはや、世界は変わるぞい、お前から論語を聞くようになった。じゃ、行つて来るぞ」

「行つていらつしやい、お早くお帰りなさいよ」

こうして、すっかり身なりをととのえてやり、ポンと一つ背中を叩いて、出してやりました。

神尾主膳の行く先のエライ坊主に会いに行くというのは、覚王院の義観のことでしょう。覚王院も、竜王院も、その昔から知らぬ間柄ではない。世の常の坊主と思つていたら、このごろになつて、その評判がばかに高い。ことに昨夜の鈴木安芸守の見立てによると、京都の公卿の岩倉三位というのと匹敵する人物だという。岩倉がどのくらいの人物か知らんが、朝廷において、薩摩や長州の首根つ子を取つて押えるというのだから、相当な

ものに相違あるまい。それが西で事を挙げると、こつちは東にいて相撲が取れる相手は覚王院の義観だという見立ては、当るにしても、当らぬにしても、後学のために会って置いていい坊主だ、そういうような気分で神尾主膳は、程遠からぬ、根岸からつい一足上りの上野の山へ今日も出かけて行きました。

その留守には、お絹がおとなしく待っている。

誰も来ないとなると、閑の閑たる根岸の里。お絹はおおまるまげ大丸鬻に

手拭を着せて、主膳の居間の掃除をはじめました。

神尾主膳の居間は、らんみやくです。王おうぎし義之もいれば、褚ちよすいりよう遂良

もいる、佐さり理、道とうふう風もいるし、夢酔道人も管くだを捲いている。自

叙伝のようなものと、このごろ書きさしたその原稿も散らばっているし、そこらあたりは、さんざんの体であります。これは主膳が、ことわつて、うっかり手をつけさせなかつたという

理由もあるけれど、二人ともに無精ぶしよぞろいのさせる業でもありませんでしたが、今日は、すっかりそれを掃除して、一点の塵もとどめぬようにこの一間を清算してしまいました。

掃除ということに、こんなに身を入れたことは、お絹としては、生れてはじめてのようなもので、掃除をきれいにしてみると、室がきれいになるばかりではない、身心も何だかさっぱりして、若々しい気分になり、まだ本当の意味では味わったことのない新所帯の気持、どうやら新婚の気分といったようなものに浮き立つのも、いまさら気恥かしい。

夕方になると、約束よりも早く立戻った神尾主膳。

お絹に賞ほめられること、そうして、その日の晚餐も、睦むつまじく、お絹の待構えた手料理とお給仕で快く済ましてから、食卓の談はなしがはずむ。

「聞きしにまさるエライ坊主だよ、あれだけの見識とは思わなかつた、実際会つてみると談論風発、当代の人豪顔色無しだ、なるほど、あれなら輪王寺を背負つて立つて、関東のために気を吐くこと請合い、ちよつと、あれだけの大物は無いなあ、坊主にして置くは惜しい、政治家にしても、軍人にしても、大仕事のできる奴だ」

と言つて感歎の声を惜しまない。お絹も煙にまかれて、

「そんなにエライ坊さんが、今時、上野にいらつしやるのですか」

「いるとも、いるとも、あの坊主の説を聞いて、おれの頭の中は一変したよ、勝や小栗のことは知らないが、まあ、あいつらに勝るとも劣るものではあるまい、あれだけの奴がこつちにいれば、よし江戸の城は明け渡しても、上野の山で持ちこたえる、あい

つが軍師で、輪王寺の錦の御旗を押立てて起たてば、徳川の旗下が挙こぞつて上野へ集まる、本来、ここまで来ないうちに、もつと早く、こちらから積極的に上方へ乗出したかつたんだ、あんな坊主を上方へ向けて置いて、あつちで策戦をすれば、今時、こんな後手ごてを食わずに済んだものだろう、そこは、あの坊主も、内心残念がつているようだが、なんにしても、あの坊主を坊主で置くは惜しい」

「そんなにエライお方を、坊主坊主と呼捨てになさつて罰ばちが当りはしませんか、何という御出家様でございましたかねえ」

「輪王寺の執当職で覚王院義観というのだ、学問があつて、胆力があつて、気象が天下を呑んでいる、会つてみなけりやあ、あいつのエラさはわからん、山岡鉄太郎や、松岡万あたりも、あれの前へ出ると子供のようなものだそうだ」

「お山にも、そんなエライ坊さんがいらつしつては頼もしいことでございますね」

「そうだ、義観のほかに、竜王院の堯忍、竹林坊の光映などというところは、覚王院とは異つた長所を持つエラ物ぶつだという噂だが、とにかく、覚王院一人に逢つただけでも意を強うするに足るものだ」

神尾主膳は、よほど覚王院義観に参らされて来たようで、口を極めて感歎の舌を捲くが、お絹はバツを合わせるだけで、人物論などには興味を持ちません。そこで、神尾は覚王院礼讃はいいかげんに切上げて、さて声を落して言うことには――

「時に、話は別になるが、ここに、ちよつと耳寄りな、聞いて甘いような辛いような口が一つあるのだが、お前、乗ってみる気はないか、お前が乗れば、わしも乗る」

と調子が変わつたものですから、お絹も人物論よりは乗り気になり、

「甘い口なら、いつでも乗りましょう、おつしやつてごらんあそばせ、あなたが甘いとお思ひになつても、わたしには辛いかも知れません」

「話は至極甘いのだ、いわば葱ねぎに鴨という調子に出て来ているのだが、さて、それに乗るといふことになる、相当の決心が要るよ」

「まあ、おつしやつてみてごらんあそばせ」

「実はな、ひとつ、京都へ行く気にならないか、お前が行く気

なら、おれも行くよ」

「京都へ？」

「うむ、上方だ、今は江戸の舞台が、あつちへ移っているのだから景気は素敵だ、それに江戸と違って、千年の都だからなあ、見るもの聞くもの花の都だ」

「上方見物——ようござんすねえ、お恥かしながら、わたし、この年になって、まだ京都を存じません」

「そうだったかなあ、親爺おやじの代に行つて置けばよかつた、惜しいことをしたねえ」

「行くつもりなら、いつでも行けると思つて安心しているうちに——年をとつてしまいましたのよ」

「いや、これから一花ひとはなと言いたいところだろう、どうだい、思いきつて、花の都住居をしてみる気はないか」

「ないどころじゃありません、大有り名古屋のもつと先なんでしょう。いったい、何でそんなに急に京都風が吹き出して来たんでしようね」

「まあ聞け、こういうわけなんだ、どの方面と名は言わないが、このおれにひとつ京都へ出張でつてみないかという話が持ちかけられたんだよ。気の早い話だ、今日という今日の日、人もあろうにこの神尾を見込んで、ひとつ京都へ乗込んで、一遊び遊んで来ちゃどうだという、甘い口がかかったんだ」

「まあ、それはどうした御縁なんでしょうねえ、また悪友にそのかされておいでになったんじゃないやなくて？」

「いいや、これも悪友ではない、第一、悪友どもにこの神尾を見立てて京都へ行けというほどの実力ある奴がいるか。京都へ行けば、自分、遊びたいだけの遊びをしていいという軍費が出る、

何一つ不足をさせない、その上に、仕事といつてはただ遊んでいさえすればいいというのだから、神尾主膳あたりには打つてつけの役廻りだ」

「今時、そんな茶人があるものですかねえ、ほかならぬあなたをお見立てして、京都で思うさま遊ばせて上げようなんて、そんな有り余るお宝の持主がありますかねえ」

「それが有るのだ、有るべき道理あつて有るのだから、やましいことがなく、しかも遊んでさえいれば、それが立派な御奉公になろうというのだから、まず近ごろ、これ以上の耳よりな話はないさ」

「そんなら、あなた、お考えになるまでもなく、早速お受けになればよいに」

「いや、それも一人じやいやだよ、誰か面倒を見てくれる人が

附いていくれなくちやあな、神尾もそうそう、若い時の神尾じゃないから、花の都へ上ったからとて、そう無茶な遊びもやれない、誰かついて行つてくれればいいがと考えたから、お受けもせずに戻つて来た、家に待っている人があるとは言わないが、心当りへ当つてみてから挨拶をする、と言つて帰つて来たのは別儀ではない、私の姉さん、お前、一緒に京都へ行つてくれるかね、お前が行つてくれれば、これも一期いちごの奉公だと心得て、おれは京都へ乗込むよ」

「参りましょう、あなたのおともをして、京都へ参りましょう」「いいかい、ただの京都見物じゃないよ、次第によると永住の形式になるかも知れないぜ、よく考えて返事をしてくれ」

「考えれば、条件も出て参りましょうから、考えないでお返事を致しましょう、あなたが、わたしのために家へ帰つて来て下

さるようになったお礼心で、わたしはあなたのいらつしやるところならば、海の中でも、山の奥でも」

「本気かい、本気でそれを言ってくれるのかい」

「あなた、このわたしの心意気がおわかりになりませんの」

「わかる、わかる、では、おれは明日にもまた折返して、京都行きを承知して来るよ、いいかい？」

「御念には及びませぬ、今日からでも、おともを致します」

「よし、話はきまつた」

と言つて神尾主膳は、出陣の前ぶれのように勇み立ちました。

四十一

それから、神尾が突込んだ打明け話をして言うことには――

今度の京都市行きの話は、どこから出たかその出所はわからない。またわかつて、それは誰にも言えないが、だいたいに於て、こういうことになっている――

相当の体面を保つだけの手当は、それはもとより充分に出る、その上に交際費はつかい放題とは言わないが、機密によつてはかなり潤沢に許される、誰が今時、何のためにそんな無用な金を出して、無用な人を遊ばせるかと言え、遊んでいながら、京都の内外の様子をすっかり偵察して、それを時に応じて、こつちへ知らせる役目だ、表面の辞令をただかかないお目附めつけだ、悪く言えばかんちよう間諜、ペロで言えばスパイというやつかも知れないが、決して下等な仕事じゃない、柳生但馬もやれば、石川丈山もやつた仕事なんだ、徳川家のために、公卿と西国の大名どもの監視をしていようというのだ、その役廻りにこの神尾を見立てたの

は、誰とは言えないが、見立てた奴も、見立てられた奴も、まず相当なもんだろう、そこで、話はいよいよ早い、なんでも京都の北の方に鷹ヶ峰というところがある、そこに「光悦寺」という小さな山寺があつて、その昔、本阿弥光悦という物ずきが住んでいた、その寺がぁいてゐるから、そこへ入つて坊主になれというのではない、閑居の体ていにしていて、気が向いたら、京都なり、大阪なり、好きなところへ泳ぎ出して、好きなように遊んでよろしい、出仕の場所の指図は受けないし、時間というものも制限がない、およそ、この神尾の勤め口としては絶好だろう、今もちよつと口に出たが、板倉周防の仕事をしろというのではない、柳生但馬とか、石川丈山とか——あれの仕事を当世で行くんだ。石川丈山と言へば、お前は名を聞いていないかも知れないが、戦場の行賞の不平をたねに、知行を抛なげつて京都の詩仙

堂というのへ隠れたのは表面の口実、実は徳川のために、京都のかくしめつけ隠目附をつとめていたのだ。おれは但馬守ほどに剣術は使えないし、丈山ほどに漢詩をひねくる力はないが、遊ぶ方にかげちやあ、ドコへ行つてもヒケは取るまい、近頃は、遊ぶに軍費というやつがこかつ涸渴しているから、遊びらしい遊びは出来ないが、今度のはれつきとした兵糧方がついている、なんと面白かりそうではないか——行つて落着く住居までが、もう出来ているのだ、身一つではない、身二つを持って行きさえすれば、ここの生活が、直ちにそこへ移せるのじゃ、その上に、昔のようには及びもないが、再び神尾は神尾としての体面が保てる、お前にも苦労はさせないだけの保証があるのだ、異人館の方に未練もあるだろうが、京都での一苦労も古風でたんの味の味はあるに相違ない、同意ならば、善は急げということにしようじゃないか。

その晩のうちに、二人の腹がきまつてしまいました。お絹としては、まだ見ぬ花の都を見飽きるほど見て帰れるし、それは、れっきとした後ろだてがあつて、体面が保てて、生活が安定するのだから、ほんとうにこの辺で納まるのが何よりという里心にもなつたのでしよう。

こつちに未練といえ、ずいぶん未練もあるし、異人館の方だつて、大味もこれから出て来ない限りもないが、それも、本当を言えば、こんな生活から逃<sup>のが</sup>れて、老後が食つて行けるように何かのみいりが欲しいから、引眉毛で出てみたようなもので、そんな仕事をせずとも、安心して暮せるようになりさえすれば、もうこの辺で年貢の納め時、と言つたような満たされた心があるものですから、お絹は一切の未練や、たくらみも、かなぐり捨てて、無条件で神尾に捧げてしまおうというのです。もう、こ

れからは浮気もすっかり納めて、いちずにこの若主人を守り通そうという心が、昨夜あたりからこつそり水も漏もらさない仕組みになりきつてしまっているのです。

そこで神尾主膳主従は、京都市の腹を固めて、今までになり新しい勇氣に酔わされて、心地よい一夜を明かしたというものです。

翌日になると、そのお受けのためにと言つて、神尾が悠々として出かけました。

お絹は、身だしなみをする、取片附けをする、それが直ちに出立の身ごしらえ、荷ごしらえにもなるので、お嫁入でもするよくな若々しい気分もくせいに浮かされて、障子にはゆる、小春日和、庭にかおる木犀もくせいの花の香までが、この思いがけない鹿島立ちを、やいのやいのとことほぐかのようにおいませす。

## 四十二

宇津木兵馬は北国街道を下つて、越前と近江の境を越えるま  
では何事もなかつたけれども、長浜へ来ると、ふと、路傍で思  
いがけないものを見つけました。

それは、長浜の市中を横に走るところの、素敵に足の早い旅  
人を、遠目に見かけると、それが、が、ん、り、き、の百という見知越  
しのやくざでない限り、ああいう気取り方と、ああいった走り  
道具を持ったものはないということでありました。

果して、あいつが、が、ん、り、き、の百である限り、あいつの通過  
するところに、草の生えたためしがない。転んでもただでは起  
きて行かない奴である。本街道を外れて、わざわざ長浜の町を

突切るくらいだから、何かこの土地にからまるべき因縁があるに相違ないと感づいたのです。

そこで、逸いちはや早く彼を取っつかまえて、泥を吐かせようと、かけ出してみたのですが、足に物を言わせることにかけては、こいつに敵かたいつこはない。見る間に、その後ろ影を町並の角に見失ってしまいました。兵馬は齒がみをしたけれど追っ付きません。空しくその走りくらましたあとについて急いでみると、琵琶の湖畔に出てしまいました。いわゆる臨湖の渡しであります。そこまで来た上は、この先はもう、湖であります。左へそれたか、右へ走ったか、そのことはわからないが、あいつの目ざすところが、北でも、東でもなく、西に向っていることに於て、当然、彦根、大津、京都の本街道を飛んで行くものに相違ないと思いました。

そうでなければ、この地にとどまつて、何か、あいつ相当の謀叛むほんを企てる、もうこの上は長追いは無益である、あのやくざがこの界限に出没しているということを基調として調べてみれば、存外、獲物があるかもしれない、そう思つたものですから、兵馬は臨湖の岸まで来て、急がず、湖上遙かに見渡して、その風景に見慌みとれてたたずイんだが、それからおもむろに湖畔を逍遙の体で歩んで行くと、ふと岸の一角に、まだ新しい木柱の一つ立つのを認めました。

「為有縁無縁衆生施餓鬼供養塔」

墨色もまだあざやかに、立てたのは昨日今日の特志家の善業であること申すまでもありません。

その大きな供養塔の木柱が立っている、その下の、波の寄せでは返す岸辺を見ると、そこに雛卒ひなそとば都婆が流れている、その卒

都婆もまだ新しい。波になぶられて、行きもならず、戻りもならず、漂うている、その墨の文字さえが、供養塔の文字とほぼ同時同筆を以て書かれたように、あざやかに読めるものですから、兵馬がそれを見やると、

「無明道人俗名机竜之助帰元」

と書いてあるので、蛇を踏んだようにハネ返つてその卒都婆を拾い上げました。

見事な筆蹟である上に、これはまさしく女の手筆しゅひつだと見ないわけにはゆきません。しかも、その女の手筆というものが、たしかにどこぞで見たことのある筆蹟のように思われてならないのですが、その筆先しらべはあとのこと、「無明道人俗名机竜之助」の文字が兵馬の腹にグザと突込みました。

誰がこういうことをした、眼のあやまちではないかと、篤とくと

見直したけれども、そのほかのなんらの文字でもない。

兵馬は、これを取り上げると、もう一つ、それと上になり下になって漂うていたもう一つの同形のものを取り上げて読むと、

「淡雪信女亡霊供養」

と、同じ手筆で、同じ筆格に認められてある。

この二つが供養塔の下に並んで、波に戯れているのは、謎とは思われない。何人か心あつてしたこと、心なくてはできない手向け草たむぐさ、念が入り過ぎている。ことに人力ではなく、運命の悪戯いたずらというものがからまつて、この波が今も二つをなぶるように、二つの魂がなぶられている。それをまた後の、いたずらの心から、さる人によつて、この供養が営まれた。いずれをいずれにしても、倒逆の葛藤かつとうを免るることはできません。

だが、ここにこれがある以上——もはや、戯れの底も見えた、

と兵馬は小躍りこおどしつつ、汀みぎわの砂地を踏み締めて、人やあるとあたりを見渡すと、漁師の老人が一人、櫂かいを手にして、とぼとぼと歩んで来る、それをこの柱の下で待受けて問を発しました。

「その供養塔は誰が立てたのですか、何のために、何という人がこれを、いつの日ころにたてたものですかね」

「はい、それはなあ、ついこの間で、こちらから舟を乗り出して、この湖の真中のどこかで、情死しんじゆうを遂げた男と女がござりましてな、男の方は三十幾つかの年配、女子おなごの方はまだ十七八でござんしようかな、月夜の晩に、お月見だといって、浜屋の裏堀から舟を乗り出しましてな、この湖の中で、どんぶりと情死を遂げてしまいましたとかでござんす、舟だけが浮び流れ流れて、こつちの岸につきましましたが、中には主がござりませぬ、遺書かきおきのようなものもござりませなんだ。舟が漂いついたので、こつち

ではじめて騒ぎまして、いろいろたずねてみましたが、さつぱり当りがつきません、なんしろ竹生島の方に参りますると、金輪際まで突通しの水の深さ、周囲を申しますと日本一の大湖でございますから、手のつけようもございませんでしたが、二人はとうに腹を合わせて心中の覚悟が出来ていたんでございませぬ、毛氈もうせんも、お重じゅうも、酒器も、盤も、宿からの品は一品も失いませぬ、二人の身体だけが、水に沈んでしまいましたげな。お歳が少し違い過ぎて、男の方が上過ぎたのに、女子がまだ娘ざかりでございました、かわいそうに、そそのかされたわけではござんすまい、心を一つにしたあいたいじに相対死に相違あひだござんすまいが、今様お半長右衛門だなんて、悪口を言っていたものがありました。ですが男の方は町人ではございませぬ、苦にがみ走ほしった、芝居ですると定九郎といったような人相で、あれよりずっと瘦やせた人柄、

病み上りのように蒼白あおしろい、なんでも人の言うところによると、眼が不自由であつたと申しますが、どんなものでござんすか」

そこまで聞けば、もう充分以上のものではあるが、兵馬は、ただただ不安で、聞き済ましてはいられない。

「そうして、この二人は、それっきり浮き上らないのですか——今日まで、後日物語はありませんか」

「全くお聞き申しませぬ、あれっきり浮いて来ないのでございましょう、まあ、いつそ、心中でもしようというには、その方がよろしうござんすな、なまじい浮き上つて来ない方が、功德でございます——」

「では、この供養塔と卒都婆そとば、これは誰がしたのですか、縁もゆかりもない人がしたとしては、いささか念が入り過ぎています」

「それは、胆吹山いぶきやまの上平館かみひらやかたの女王様とやらの、なされた法事で

「ごぞいます」

「胆吹山の女王——」

兵馬は、それからそれと、眼がまわり舌がもつれるほどの思  
いですが、臨湖の老人は、おだやかに、

「くわしいことは、浜屋へ行つてお聞きなさいませ、あそこの  
お内儀かみさんが、委細を御存じのはずでございます」

「浜屋というのは、二人の泊つた旅籠屋はたごやですか」

「左様でございます、あの通りを上へ真直ぐに廻り、少し左へ  
鍵の手に折れますと、太閤様時代に加藤屋敷といわれた広い地  
面で、二階壁には蛇じゃの目めの紋が打つてありますから直ぐにわか  
ります、そこの若いお内儀さんが、委細を御存じのはずで——」

浜屋へ投宿して、一室に通された宇津木兵馬。その一室が、が、ん、り、き、の百が小指を落された一室であるということは知りません。

少し、土地柄のことについてお聞き致したいことがあるが、御亭主にお目にかかりたいと申し入れると、亭主でなく、若いおかみさんが御挨拶に来ました。

湖岸の供養塔のことを話題としての宇津木兵馬の質問に答える、若いおかみさんの返答は、親切にして且つ詳細なものでありました。第十一の巻に現われた通りを裏から見たおかみさんの返答であります。その見るところに見足りないところはあつても、その答えるところに駈引はありません。兵馬にはいちいち納得のゆくことばかりであります。

そうして、お内儀さんの最後の断案も、浜辺の老漁師の下し  
たと同じことで――

今様お半長右衛門のような二人の心中は、完全に遂げられて、  
その亡骸なきがらは絶対に浮んで来ないことを信じている。けれども、  
その善後策に就いては、まだ人の知らない新しい事実を教えて  
くれました。

それは、二人が完全に、湖中に入水じゆすいを遂げたと知ったその日  
に、二人の供養があゝの臨湖の湖畔で営まれたこと、そうして、こ  
の供養の施主せしゆというのが、疑問の一人の女性であつたというこ  
とです。

兵馬は、それを訝いぶかしいことにも思い、また、なるほどと合点  
することにも思いました。というのは、湖畔で拾った卒都婆の  
文字が、たしかに女文字と睨にらんだからであります。その点は符

合するが、そんならば、何の縁あつて、右の女人が出しやばつて、この二人の亡霊の供養をしなければならぬか、その女性は何者か、心当りはないか、という押し立ての疑問に答える浜屋のおかみさんの返答は、極めて要領を得て、そうしてまた要領を得ないものでありました。

その女の方は、やはり、手前共に暫く御逗留ごとうりゆうをなさいました。胆吹山からおいでになりましたそうでございます。なおよく承りますると、胆吹の山に住む女豪傑の大將だそうでございます。なに、女豪傑の大將——それは、けつたいなことだわい、してまた、その女豪傑の大將が、何の縁あつて、男女二人の心中の供養をしなければならぬのか、その因縁については、お内儀かみさんの返事は漠として夢を掴つかむようで、ほとんど要領を得られません。

だが、噂うわさに聞くと、その女豪傑の大將はステキな女丈夫で、むろん女豪傑といわれるのだから、女丈夫の一人には相違あるまいが、多くの手下をつれて胆吹山に籠こもっていたが、この心中の二人も、その胆吹山の山寨さんざいに居候をしていたのだそうです。そういう縁故から出向いて来て、あの供養をして上げましたのだそうです。

なるほど、何か胆吹にからむ因縁があるのだな。して、その女豪傑の大將といわれる婦人の方を、あなたは見ましたか。ええ、ようこそそれをお尋ねになりました、どのような風采ふうさいを致しておりましたか、はい、ちよつと一目うかがっただけでは、世の常の女の方に少しも違つたところはございません、せいはいすらりとして、品のよい大家のお嬢様、そうでなければ若奥様といったようなお方で、芝居で致しまする鬼神のお松のような、

金糸銀糸の縫取を着た女賊のようにはさらさら思われません。あれで女豪傑の大將で、たくさんの手下を自由自在に扱ひ、このほど起りました百姓ひやくしやういつき一揆の大勢ですらが怖れて近よらなかつたと申します、そんな威勢はドコにも見えませんでした。全く人は見かけによらぬものと申し上げるよりほかはござりませぬ。ただ、たった一つ——そのお方が世の常の女の方と違つておいでになつたのは、入るから出るまで、昼も、夜も、しよつちゅう頭巾ずきんを被つてかぶおいでになりました。いついかなる場合にでも、あのお方が頭巾をお外しになつたのをお見かけしたことがござりません。でございますから、お面かおつきや、御縹緞ごぎりようのほどは少しもわからないのでございます——なに、しよつちゅう頭巾のかぶり通し——はてな、兵馬が氣ぜわしいうちにも頭ひねを捻つて、考えさせられたのは、誰と思ひ當つたわけではなく、その点に、

右の女性の性格の重点があると感じたのでしよう。

では、ひとつ、わしは少し心当りのことがあるから、明朝早速、胆吹へ上つて、その女賊の大將にお目にかかつて、お聞き申してみましよう。

それはおよしあそげ、ちよつと見ては、左様なおしとやかなお方でございますけれども、その悪党は底が知れぬ。気に入らぬものはみんな縊くびり殺して、穴蔵あなぐらの底に投げ落してしまふのださうでございます。現に、幾人かの人の屍しかばねが、胆吹の奥の山の洞穴の底に埋もれて、夜、青火が燃えさかるといふ話。構えてお近づきにならぬがよろしうござんす——何をばかな、今の世にそんなばかばかしいことがあるものか、ぜひ、ひとつ、明日はその胆吹の御殿をたずねてみにやならん。

お言葉ではございますが、よし、鬼などのことは嘘と致しまし

て、これから胆吹へおいでのことはお見合せになつた方がよろしかろうと存じます。そのわけは、その女のお方は、もう胆吹にはおりませぬ、胆吹を飛んで、大江山の方へお出ましになつてしまつたそうでござります。

なに、大江山へ——いよいよ話が<sup>おおじだい</sup>大時代になつた。でも、鬼のいない胆吹へひとつ乗込んでみよう、その棲所<sup>すみか</sup>のあとを調べてみるだけでも無用ではない。

こう覚悟をして、それから話題を改めて、浜屋のおかみさんに向つてこれから胆吹へ上る筋をくわしくたずねました。

#### 四十四

主婦の諫<sup>いさ</sup>めを用いず宇津木兵馬は、その翌早朝に出立して胆

吹へ上りました。

長浜から僅かに三里、上りとはいえども、程度の知れた道、まもなく胆吹の麓について、よく聞きただした上平館の一角を探し当てたのは容易いことです。

いたりついて見ると、案外にも門は閉ざれて、全く人の気配がありません。

推せど、叩けど、おとなえども、応と答えるこだまはなく、全く無人の境と思ひましたから、兵馬は、身軽く塀へいを乗越えて、上平館の境内へと侵入してみましたけれど、誰とて咎とがめるものはありません。

はて、この分で見ると、ここははや解散したあとだ。つい近頃までは人の出入りの相当繁かつた気配は充分ですけれど、現在には全く引払って、さらに人跡をとどめていないことは、小徑

に生ずる草、立てこめる気分の荒涼さでもよくわかります。およそ人の住むべき家に、人の住まないほど、すさまじい光景はないものの一つです。本来、未開の地には未開の処女性があつて、人の官能をいさぎよ潔くするものですけれども、一旦、人が住んで、そのまま住まざらなつて打棄てられた光景ほど、うたた物の荒涼と悲哀とを漂わせるものはありません。

その氣分に打たれた宇津木兵馬は、ははあ、もうこの一味は解散したのだな、人は解散したけれども、家屋敷はもとのまま、足を踏み入れるに従つて、あちらに一棟、こちらに幾軒というほどに、建築の生なまなのに較べて、宏壯な規模が徒いたずらに住み残されてしまつてゐる。さながら大本教と、ひとのみちの廢殿の中に入るようなものです。これほどの結構をし、これほどの屋敷を構えながら、かくも無慘に住み捨てるというのはみょうり冥利を知ら

ぬ業だ、逆らつて入るものは逆つて出でる道理、大きく言えば、城春にして草青む、といったすさまじさが兵馬の胸を打つ。とにも、かくにも、行き尽すところまで侵入を企てよう、もし、その中に人臭いにおいでもあれば見つけ物、引つとらえて物を言わせてみよう、右に左に足を踏み入れたが、いよいよ深く行くにつれて、いよいよ荒涼なものです。絶対無人の境だということを確認しました。

浜屋の若いお内儀かみさんは、胆吹の女大将の話をして、まだこの館に一味が留まつているということを保証し、決して退却したとも、解散したとも言わなかったが、案外に来て見ればこの始末。

してみると、あのお内儀さんは、一味が解散したことをまだ知らないのだ。あの辺の人まで伝達されないうちに散じてしまつ

たとすれば、それはかなり最近でなければならぬのに、この荒れ方は、太古の昔のような面影がある。

ほんとうに、人間の住むべき家に人間の住まないほど、荒れ方の早いものはない。人間の家には、人間が住むべきものだと  
いうことを、兵馬は繰返してつくづくと感じました。

さて一応見めぐり見きわめてみると、もう夕日が湖上の彼方、かなた比良、比叡の方と覚しきに落ちてゐる。さて、今宵、兵馬は思  
いきつて、この境内の内の一棟へ参入して、そこに宿を求めよ  
うとしました。そうしてこの幾棟かの家屋のうちの、最大の、  
最良の、御殿屋敷風なのを選んで、戸を排してみると厳しく釘  
づけになっているが、それを合点がてんの上で兵馬は、無理に押破つ  
て、御殿の中へ参入しました。

相馬の古御所——といったような気分です。御簾みすがかかつて

おり、蜘蛛くもの巣が張られてあり、晝は、ちゃんと高麗縁こうらいべりがしきつめたままだが、はや一種の廃気が湧いて、このまま置けばフケてしまう。

兵馬はこの御殿の最も奥の間へ参入して、旅の荷物をそこに打ちおろし、その中から小提灯こちようちん、火打よろしく取り出して、早くも提灯に火を入れて、それをかざして間毎間毎を調べてみました。

調度を取払ったというだけで、畳建具は依然として人の住める時のそのままで、取残された形跡は一つもありません。それに戸棚という戸棚、押入という押入のたぐい、いずれをも押し試みても、がっちり錠じょうが下りている、そうでなければ釘付けです。

そこで、兵馬が思うには、これは必ずしも解散とは言えない

わい。いずれ家主は、そのうちここへ来て住むつもりか、そうでなければ出直して引取りに来るつもりなのだ。戸棚という戸棚、押入という押入が、この通りがっちりしているのは、いずれこの中が何物かで充実している証拠なのだ。してみると、これは空家とはいえない。人がいないだけで、まだ完全に住宅権が存在している。そこへ無断侵入を試みた自分というものは、家宅侵入の罪に問われる資格は充分ある。しかし、この場合、そういう遠慮は無用である。よろしく、覚悟の前、この戸棚のうちの一つ、最もめばしいようなのを一つ押破ってみてやろうではないか。一つでたんのうできなければ、全部をいちいち破壊してみてもやろうではないか。さし当り、今晚これに旅籠はたごを取るからには、夜の物が欲しい、なければないで済ませるが、すでにこの通り多数の物入があつて、それをそのまま死蔵せしめて

置くは、宝の山に手を空しうするも同じこと。誰を憚はばかる、要らぬ遠慮——

と兵馬は決心して、その戸棚の中のめぼしい一つを、力を極めて押破つてみました。

別に一ツ目小僧も出ては来なかつた、これは確かに夜のもの、夜具蒲団やぐふとんの一団と認定のできた大包み、それを引出して解いて見ると、果してその通り、絹紬きぬつむぎのまだ新しい夜具が現われる。

とこうして、兵馬はついに、その新しい夜具を豊富に打着て、就眠の人となりました。

働いているから眠りに落つることも早い。

肉体は疲れているから、眠りに落つることははやかつたけれども、神は納しんまつていないから、睡眠が必ずしも安眠というわけにはゆかない。夜半、兵馬の胸を推おすものがある、うつつにながむれば、

「無明道人俗名机竜之助之墓」

それは湖畔の木標ではなく、まだ切立ての一基の石塔であります。一方を見ると、同じような石塔が比翼の形に並んで、それに、五

「同行淡雪未開信女之墓」

とある。

この二つの石塔が、どことは知らぬ荒草離々たる裾野の中に、まだ石鑿いしのみのあとあざやかに並んでいる。近づいて見ると、その後ろに墓守が二人、しきりに穴掘りをしている。傍らには布で

巻いた二個の棺を据えて、しきりに墓穴を掘っている。それを覗き込もうとすると、墓と墓との間の丈なす尾花苧萱おぼなかるかやの間から、一人の女性が現われて、その覆面の中から、凄い目をして、吃きつと兵馬を睨にらみつけて、

「ここへ来てはいけません、あなた方の来るところではありませんせん」

その睨む眼の険しいこと、兵馬は、たしかに胆吹山の女賊の張本に相違ないと思ひました。

夢うつつは、その程度、それ以上、深刻にも精細にもなりませんでしたけれども、醒さめた宇津木兵馬は、怖ろしいよりも、その暗示性の容易ならぬことに心が乱れました。

かくて、いったん、破れた夢が、またあけ方まで無事に結び直されましたが、日の光、鶏の声が戸の隙から洩もるるを見て、

兵馬は立つて、一枚の雨戸を繰ると、満山の雪と見たのは僻目ひがめ、白いというよりは痛いほどの月の光で、まだあけたのではありません。

それから、兵馬の頭に來た、何の抛よるところとてはないけれど、ひしひしと迫る暗示は……

机竜之助はもう死んでいるのではないか、死んでいるとすれば、確かに殺されて、この世に亡き人の数に入っている、彼を殺した人は何者、それは右の覆面の女賊のほかのものでありようはずはない、少なくともこの胆吹山まで來て、ここで竜之助は殺されてしまっているのだ。

という暗示が兵馬の胸に食い入りました。湖中で心中というのは嘘だ、こしらえごとだ、でなければその女賊が、なんでわざわざ、まだ死骸も、水の物か陸の物かわからない先に、先走つ

て供養塔などを立てるものか、それは世を欺く手管だ、本来は、竜之助はここで殺されている、その死を装わんがためにわざと湖上で死んだようにもてなしているのは、女賊の張本の芝居である。

机竜之助は、すでに殺されているのだ、胆吹の山の女賊の手にかかつて亡き人の数に入っている、それに相違ない、そう思われてならない、そうだとすれば哀れな話だ、彼に憐れみを加える余地は微塵みじんもないが、あれがこんなところで、女の手にかかつて一命を果す、それも無惨や縊くびり殺された、なぶりものになつて縊り殺されたとは何という悲惨な、そうして、何という醜態だ。

そうだ、してみると、これより後の自分は、彼の亡骸なきがらをたずねて歩くより道がない。

兵馬は、どうも、こんな暗示が胸いっぱいになって、竜之助ははや完全にこの世の人ではない、今後存在するとすれば、それは亡骸であり、亡霊である、これから自分の魂がそれを追いかけて歩くだけのものだ、力が抜けた、張合いが抜けた、というような気分で、兵馬の心が底知れず滅入<sup>めい</sup>り込んで行くのであります。そうなると、夜が明けるや、一刻もここに留<sup>とど</sup>まっている気がなくなつて、長浜まで一気に走り帰つて、例の蛇<sup>じゃ</sup>の目の浜屋へつくと、若いお内儀<sup>かみ</sup>さんが、なつかしそうな色を面にたたえて、よくまあ戻つてくれたという好意に溢<sup>あふ</sup>れて迎えてくれて、前夜と同じ部屋へ案内を受けました。

「いや、胆吹の女傑のあとをたずねて見ましたが、館<sup>やかた</sup>はあるが、人がいませんでした、人っ子ひとりおりませんでしたよ、解散したのでしよう。解散したとすれば、あの一味はドコへ行つた

ものでしょうか」

「多分、大江山でしようと思いますが」

またしても大時代——胆吹山でなければ大江山、兵馬はこれにも、げんなりせざるを得ません。

さりとして、これから突留めなければならぬのは、机竜之助の身柄よりも、むしろ問題の女賊そのものの身性みじょうである。これは物が物だけに、存外早く手がかりがつくだらう。大江山というは、この女性のロマンがかりで、もつと近いところに、別生活に入りつつある。そういうことが想像されるものですから、更にここでその手がかりを求めなければならぬ、けれども、この若いお内儀さんにこれ以上を求むるのは無理だ、ということをと、昨日ありしところのかの木標みぎわはなく、卒都婆みやまもありません。

砂の上には供養塔を立てたその痕跡さえなく、汀の波には卒都婆を弄ぶ波の群れのみ昨日に変わりありません。  
もてあそ

何者か抜き取って、木標は湖中に捨ててその行方を知らず、卒都婆は流れ流れて人の拾うものもなし。昨日まざまざと見た臨湖の景色が夢で、胆吹の夢に見たまぼろしに、かえって真実なりと欺かれる。兵馬はたよりなき感覚の幻滅を歎くことに堪えられない思いです。

四十六

机竜之助は胆吹の女王のために殺されたり、という宇津木兵馬の幻覚は、幻覚に似たる真実でないということはありません。ある意味では、竜之助が、女王の手に殺されているのは胆吹

に始まつたことではない。

殺すということは、生命を奪うことで、生命を奪うということとは、生命を亡くすることではないのです。単に生命の置きどころを変えたというにとどまるもので、かりに竜之助が暴女王の手にかかつて殺されたりとすれば、それは女王が竜之助の生命を取つて、自身の生命の中に置き換えたということの変名であつて、竜之助そのものは、お銀様の中に生きている、お銀様は彼の肉体が無用になつて、その生命の置場所になやんでいるのを見てとつて、彼の生命を掴つかみ取つて、自分の体内に置き換えてやつたという意味になるのですから、斯か様な殺し方は慈悲心の一種でさえある。形骸としての机竜之助が、柳は緑、花は紅の里を、いかなる形式でさまよい歩こうとも、それは夢遊病者の行動を、映し絵としてながめるだけのもので、彼の真の生

命は、他のところに置き換えられて生きています。今後のお銀様は即ち竜之助であり、竜之助の更生が更にお銀様でないとは誰がいう。

今や、お銀様の存在は一つの恐怖です。この女王は、剣を以て人を殺すということをしなさい、血を見て飽くという手数を尽さない、けれども、人を殺して血を見るといふ性癖は一つです。その一念がようやく増長しつつあるように見受けられる。

この女王様の第一の利刃りじんは軽蔑です。この女王は、ほとんどあらゆる現象に対して、この女王が発する最初の挨拶は軽蔑であつて、最後の辞令も軽蔑でないといふことはない。いかなる種類の人でも、この女王の軽蔑に値こたしない人はなく、いかなる種類の物象ぶつざうでも、この女王の軽蔑を蒙こうむらぬ物象はない。

胆吹さんさいの山寨は、今や彼女の軽蔑のために吹き飛ばされてしま

いました。自ら築いたものを、自ら軽蔑するのだから、これは手の付けようがありません。

今や、第二の光仙林を造つてはや、これをも軽蔑せんとしている。国宝級、重美系の芸術も、ようやく彼女の軽蔑から逃れ難く、光悦を集めながら、はや光悦を軽蔑しきつている。

物を見に行くというのは、彼女にあつては、物を軽蔑しに行くのです。意志と感情を発散せぬものに対してすらそれですから、悪呼悪吸、もしくは愚呼愚吸のほかの何ものでもない人間共の存在に対する軽蔑が、骨髓を埋めているのも、まさにその道理でしょう。

今日この頃は「易」を軽蔑せんとして未だ成らず、「密教」を軽蔑せんとして、新たに発足をはじめたようなものです。

醍醐<sup>だいがく</sup>三宝院の庭を見て、この女は豊太閤を軽蔑せんとしまし

た。

甲州の人は、徳川家康を恐れぬ、我が信玄に十に九ツも勝味かちみのなかつた家康を軽蔑せんとする、家康を恐れぬ人は、秀吉の重んずべきを知ることにも極めて浅いのであります。徳川家康という人が、武田信玄に十に九ツまで勝味のなかつた人であることを知っている甲州人は、その秀吉の唯一の勝利者としての、徳川家康を見ている。家康に勝味のない秀吉は、それに圧倒的な信玄より遙はるかに強きことを得ない。且つまた、信長という人は、武田を亡ぼした人であるけれども、信玄存する限り、その武を用うることができなかつたのみならず、その部下としての秀吉は、未だ曾かつて甲州陣の心胆を寒からしめんに、熱からしめんに、甲州というものに対して、その武を用いた経験がないではないか。故に甲州の人は家康を恐れぬ以上に秀吉を恐れ

ない、最初からこれらの軽蔑すべき所以ゆえんを知っている。さてまた、この暴女王に限って甲州そのものを軽蔑すべき所以を知っている。父祖伝統の甲斐の国、武田よりも古い家柄を軽蔑して、その富ともろともに振捨てて悔ゆることを知らない暴女王は、豊太閤そのものを怖れずして、まずこれが趣味を軽蔑せんとして、醍醐の庭を見に来たかのようにさえ疑われる。

ただ一つこの暴女王が、容易たやすく軽蔑しかねているのが、現にいま住む山科の安朱あんしゅの地点なのであります。

この暴女王も山科の地形だけは、憎まんとして憎み得ないものがあるらしい。軽んぜんとして軽んじ難い愛着を残しているものか。これは或る意味では当然過ぎるほど当然で、人というものは、過去に対してと、未来に対しては、かなり強硬にあり得るもので、過去というものは、再び現在を追っかけては来な

い、過去は、いかに苦しかったことも過去となれば、すなわち現在への強迫区域を離れている、これを追懐しようとも、これを軽蔑しようとも、その脅威のおそれはないのであります。未来は当然来るべきものにしてからが、来らざる間は痛痒つうようの感覚から離脱している。ただ現在だけは怖るべきです。人がもし現在の政治に反抗した日には、逆賊の取扱いを受けなければならぬように、現在の住ましめられている地点を軽蔑しては、所払いの刑罰を受くることを覚悟しなければならぬ。いかに暴らなぐために暴を趣味とする女王といえども、現在の立脚点をだけは軽蔑し得られないという約束に縛られて、しかして山科という輪郭に暫し追従を試みているかというに、必ずしもそうではないのです。

山科の地形が、甲州に似ている。山河襟帯さんがきんたいの中間に盆地を成

すの形勢が、何となしに甲州一国を髣髴ほうふつさせるのが山科の風景である。山科を大きくして、その盆のくりがたをさらに深くしたのが即ち甲州であるとは言えるかも知れないが、すでに故郷の地形にあこがれを持たないこの女性が、改めてその雛形を珍なりとすべき理由はない。

「山科」という地が、おのずから一天地を成している。その整ったただずまいが、この女王のお気に召したらしい。山科十六郷はよく整った一国の形成を成している。京都の郊外の山科ではなく、京都に附属した山科でもなく、たとえ小規模ながらも、一天地を成しているところに山科の妙味がある。山科は小さき甲斐の国というよりも、小京都といった方が当るかも知れない。山河の形成が、僅かに十六郷を含めたなりで独立している。そうして、その独立が、お銀様の住むのにちようど手頃である。

胆吹は氣象が少々荒びていた、ここの空氣は淘げよなられている。できるならばこの山科全部をソックリ買いたい、これをソックリ買取つて我が屋敷として住みたいと望み得るほど、この地形全体が少なくともこの女王にとって、手頃の地形を成していたからです。

胆吹の女王となるよりも、山科の地主でありたい、そんなよくな愛着を、お銀様が山科そのものの地相に持ち得られたということが、即ち山科を輕蔑し易やすからずとする所以なのであります。

四十七

胆吹の女王が、今や、山科の地主にまで脱皮しつつあるとい

うことを突きとめたのは、宇津木兵馬として、骨の折れることではありませんでした。

自然、宇津木兵馬は、長浜から、この山科まで道を急ぎました。近江から山城は地つづき、山城の内にあつて、山城以外に立つというべき山科は、近江の国からの取っつきであります。長浜から直行にして十余里の道、この間に、なんらの瘴煙蛮地しょうえんばんちはありません。

兵馬が山科に来て、まず草鞋わらじをぬいだのは、同じく大谷風呂でありました。

それとなく探りを入れてみたが、案ずるがほどのものはなく、さらさらと解答が与えられます。

あれは、三井さんのお嬢さんで、今度、この山科の安朱あんしゅの光悦屋敷というのをお求めになりました。あれを地面、家屋敷ぐる

み、そっくり居抜きでお引取りになつて、御家来方と一緒にお住いでございます、と明瞭に答えてくれる。三井さんのお嬢様、それは少し変だ、長浜では女賊の張本でもあるように言い、こへ来ては三井さんのお嬢様呼ばわり。前のが誇張であつたように、ここのは仮定であると、兵馬がさとりませう。つまり、三井さんのお嬢様と言つたのは、三井家にも匹敵するような大金持のお嬢様ということなので、この場合、三井家というのは大金持という代名詞に使用されているまでのこと、戸籍の如何いかんは問うところでない、と、兵馬がさとりませう。

さて、その三井家のお嬢様の本当の戸籍であるが、それが知りたい、それを知るにはこの女中づれではダメだ、すでに金持のお嬢様だから、三井の名で呼びかけるほどの女だ、重ねて問いかえせば、ではこゝのいけ鴻池さんのお嬢様だつしやろ、と答えるくら

いが落ちであるから、ここでそれを糾明きゆうめいするわけにはいかないが、ナンとその三井家のお嬢様に、ちよつとでもいいからお目にかかつてお話ができませんいものか。

そういうところからさぐりを入れてみると、それはダメでござります、とても気位の高いお嬢様で、めつたな人とはお会いになりませぬ、極々ごくごく親しい間の御家来衆でなければ、決して人をお近づけになりませぬ、宿におりましたも、御主人様でさえお顔を見たものはござりませぬ、朝も、晩も、頭巾を召してはずさないほどのお方でござりますから。

なるほど、気むずかしいには気むずかしいらしいが、朝に晩に頭巾を被かぶつてははずすという時がないということは、長浜の見方と相一致する。

さて、それではぶしつけにおしかけてもダメだ、さりとしてし

かるべき紹介を求めるよすがなどが、この際あろうはずがない、  
どうしたものかと兵馬も迷いましたけれども、いずれにしても、  
相手は妖怪変化ようかいへんげではない、胆吹から大江山へ飛んだ女賊童子の  
一味でもないし、正体も居所もすっかりわかったのだからと、  
この上は手段を尽して、面と相向つてぶつつかるばかりだ、相  
手が人間であつてみれば、難事であつても不可能事ではない、  
ということに確信を持たしめられたことは喜ばしい。

なんの、暴女王の暴女王たる正体を知りさえすれば、兵馬に  
は昔なじみの人、まして兵馬に対してはすくなからぬ同情者の  
一人であり、兵馬の行動に同情者であると共に、その行動に、  
好意の妨害を試みていたほどの強情もの。甲州の有野村の女王  
であることに、何の不思議もないのですが、人というものは迷  
う時は方寸も千里の闇に似て、闇の中で摸索すればするほど正

体を暗いところに押しやってしまふ。この分で、正面から押せば押すほど遠くへ押しやるにきまつているが、どう考えてもこの際、押しの一歩よりほかはないと兵馬の苦心焦慮した行き方も、また無理のないものがあります。光仙林の門のところまで来て、さて、これから堂々と門を叩いていいか、悪いかに惑いました。正面からぶつつかつて、かえつて後日のことこわしに落ちはしないか、ということも思案してみました。

そこで、二の足を踏みながら、万一その女王が、外出でもする機会はないか、女王でないまでも、つかまえて物を尋ねるキツカケをつくつてくれる御用聞のたぐいでもと、暫く、行きつ戻りつしてみたが、あいにく、人の出入りはほとんど打絶えた門、ほとんど開かずあの門かと疑われるほどでしたが、「光仙林」とものした表札の、目立たぬけれども新しいことによつて見ても、

最近に人が住みつつあるということは、疑うべくもありません。胆吹は完全に人の住み捨てたところ、ここは人が有るべきところで、人のなきは、なきにあらずして留守なのだ。

それも道理、この日、宇治山田の米友はが、んり、きの百蔵と、洛北岩倉村へ出向いて不在。

不破の関守氏は、その隠宅でしきりに小物の表具を扱っている。もとより素人しろうと経師きょうじだが手際が凡ならず、しきりにかきあつめた小美術品の補綴ほてい修理を、自分の手にかけて、あれよこれよと繕いに余念がない。

女王は、安朱谷あんしゅだにの雲深きところに鎮座ましまして、人をしてその片鱗をうかがわしめることをゆるささない。臨時かしずきの役を承っているお角さんは、供待部屋を己おのれが本拠として、すやすやと昼寝の夢をむさぼっているというていたらくですから、

さしも広大な光悦屋敷が、さながら人あつてなきが如くなるも道理です。

兵馬は、それがために、あぐね果てて空しく門前を行きつ戻りつしているが、無人境の一得には、いくら行きつ戻りつしたからとて、べつだん怪しげな目を向ける人もない。それが有つてくれる方が、かえつて所望だと言いたいくらい、取合われな  
いのが物足らぬこと夥おびただし。ここで思いきつて門内に進入し、過日、胆吹山の廢墟で試みた手段をとろうかと決心して、さすがに思い煩う途端、初めて表門の四辺がザワついて、ひゅうと風を切つて走り出したもののあることに目をみはり、

「あ！」

と兵馬も驚いたのは、熊にあらず、ひぐま熊にあらず、この国ではめつたに見ることができない、というよりも、太古以来絶えて存在

を許されていない種類の動物、唐国からくにの虎という獣に似たやつが一頭、まっしぐらに門の中からおどり出したからであります。

「虎！」

と叫んでみたが、虎でない。

「彪ひょう！」

と呼び直してみたが、彪ひょうでもない。全身斑まだらにして、その身体は虎彪ひょうに匹敵して、しかもそれよりも勇んでいる。

兵馬はそれに警戒を加えざるを得ません。心得は有り余るけれども、相手に覚えがない。一時はどうあしらっていいかに迷いましたけれども、虎はおろか、象でも鬼でも一ひしぎと、和藤内わとうないの勇気を取戻し、身構えをして見ると、それはやつぱり犬の一種だということがわかりました。

犬ならば、いかに猛犬なりといえども、猛獣ではない。しか

もその豪犬の首には、太やかな縄を引きまとい、それを引摺り、こつちへまつしぐらにやつて来るのを、兵馬はやり過して簡単にその縄を引止めると、同時に犬は猛然として兵馬に飛びかかつて来たけれど、それは、危害を加える意味の抵抗ではなくして、人間に対する挨拶としてもたれかかつて来たということが、直ぐにその気合でわかります。これはいい授かりものが迎えに来てくれた、一番これをおとりにして、門内へ入り込もう、逸走した邸やしきの番犬を繋留して連れ戻って来てやるということになれば、家宅侵入の罪名に触れること決してこれなく、且つまた、感謝をもつて受入れらるること、これも相違なし。

そこで、兵馬は、その大犬の轡くつわを取りつつ、徐々そろそろと光仙林の門内へ進入して、林にわけ入り、道なきかと思われる跡をたどつて、ついに草にうずもれた不破の関守氏の隠宅の前へ来て、改

めて柴折戸しおりどを叩くと、直ぐに内から声があつて、

「お角さんかね」

「旅の者でござりまするが」

「旅の衆！」

と言つて、不審がつて小窓から面かおを現わしたのは、不破の関守氏であります。それを見て兵馬が、

「御当家の御飼養と覚しき見事な畜犬が、路傍に去来しておりましたから、引連れて参りましたが」

「それは、それは」

と言つて、不破の関守氏に諒解があつて、急ぎ庭下駄を突っかけて、カラリコロリとやつて来る音が聞えます。

その翌日、駒井甚三郎は、鉄砲を肩にして、従者としては船乗の清八ひとりだけを伴い、島めぐりのためと言つて、早朝から出かけました。田山白雲も、毎日、島めぐりのために出発しますけれども、これは島めぐりというよりも、写景を目的として、任意に出て任意に帰るのです。

駒井のは、この島の地理学的研究のための実地踏査の第一歩です。

広くもあらぬ島でもあるし、気候風土ともに、危険のおそれなきことを確認しての上の出立ですから、特にそれらの準備というようなものも必要なしと見て、日一ぱいに行つて戻れるだけに、充分のゆとりを見て、一人で行き一人で帰る、いわば散歩気分の外出に過ぎません。

開墾地の留守の支配は、七兵衛入道ひとりをして以て足れりとし  
ます。このぐらい適当な管理者というものはなく、自ら働くこ  
とに於て模範の腕を持つのみならず、人を働かせる上に於て非  
凡な人情味を持ち、その上に、睨にらみを利きかせる威力というもの  
が相当に備わっている。まだ、手を下して、人を懲こらしたという  
ことはないけれども、まかり間違つて、この入道の怒りを買つ  
た日には、なんだか底の知れないような刑罰が下りそうだ。刑  
罰というよりも、復讐が行われそうだというような凄味がドコ  
かにあると見えて、これが人を威圧、というよりも、圧迫、或い  
は脅迫する圧力がある。そういうわけで、ニヤリニヤリと脂下やにさが  
る好人物としての入道には幾分の親しみもあるが、人を狎なれし  
めない圧迫感もある。それに、ムク犬というものが、お松の命  
令と意志を分身のようによく守る。曾かつて敵視した七兵衛に向つ

ても、牙を向けるというような気色が衰えました。

お松は、駒井の不在中の官房をあずかること、その在舎中と変りはありません。田山白雲は、白雲の去来するように、自由な行動を許すよりほかはない。そこで、駒井は、もはや留守には何の心配もなく、外出が自由であります。

駒井は東南の海岸線から跋涉をはじめました。今日は、この海岸線を行き得られるだけ行き、内側方面の踏査は、いずれ相当の人数を伴うて、測量式に行く時があるべしとして、今日はまず海岸の瀬踏みのようなものです。

行くことおよそ二里と覚しい頃に、この島が予想したよりは奥行のある島だということに気がつきました。二里にして行手に一つの岩山を認めます。海岸に沿って北に走り、この島の分水嶺というほどではないが、テーブルランドを成しているらし

いという地勢に駒井が興味を持ち、あの最も高い地点に立つと、他のどこよりも展望の自由が利くことを認め、そこで望遠鏡をほしいままにしようと思いついて、それに向って行くこと約半里、いたりついて見ると、予想ほどに高くはなく、高いと思つて来て見たところに、凸凹があつて、最高地点を求めている間に、また勾配が均ならされてしまふ、その間に一つの入江がある、入江ではない、相当の湾入があつて、自分たちの着いた海を北湾入とすれば、これは東湾入ともいふべき形勢であつて、駒井甚三郎は、この地勢を見ると、どうやら人間臭いと思わないわけにはゆきません。

そこで、駒井甚三郎は望遠鏡を取り上げて、上下四方をほしのままに見てみました。それから湾入の海岸線には特に心をとめて望見したけれど、人臭いという感触のほか、現に人が住

んでいるという形跡は更に認められないのです。しかしながら、この島に船がかりを求める人があるとすれば、自分たちのついた湾入か、そうでなければ、この地点を選ぶに相違ないと思わないわけにはゆきません。

一応、望遠鏡の力によつて、観察をほしのままにした後、駒井は清八を促して、その湾入の海岸へと下つて行きました。すでに海岸に立つて、駒井は、いよいよ以て人臭いという感じを禁ずることができないのです。どうも、人が住んでいる、現に住んでいなければ、遠からぬ昔に人が住んでいたに相違ない。住んでいたといえれば土人か。土人ならば、相当部落を成して住んでいるに相違ないが、その形跡はない。僅かの小舟でここに漂着したとか、或いは、やや沖合で船の難破に遭い、そのうちの幾人かがこの辺に泳ぎついて、ここで暫く生活をしていた、

といったような思いがするのです。太古以来、人間の息のかからぬ地点と、一度でも人間が通過した土地とは、痕跡は消しても、空気が残る。駒井甚三郎は直覚的に、それを感じている時に、清八が突然、

「船長様、熊がおりますぜ、熊が——」

#### 四十九

駒井が、人間臭を感じていた時に、清八は異様な動物を認めました。

熊が——と言ったのは、果して、日本人が認める熊であるか、何物であるかを確認したのではなく、何かの動物を、この男が見出したものですから、一概に、「熊が——」と呼んでみたの

だ。駒井は直ちに否定しました。熊のいるべき風土ではないということ、反応的に受取ったから、熊が、ということとは信じなかつたけれども、この男が、たしかになんらかの動物を発見したという信用は失うことはありません。

「あ、熊が、あそこの岩かげから、コソコソと出て、また隠れてしまいました、御用心なさいませ」

駒井の手にせる鉄砲を目八分に見て、報告と警戒とを加える。

駒井は、その言うところを否定もせず、肯定もせず、

「では、行つて見よう」

その方面に向つて自分が先に立ちました。

「人間だよ、熊ではない」

「人がおりますか、人間が、土人でございますか、土人」

熊であるよりも、人という方がかえつて無気味なる感じでは。

土人、と繰返したのは、土人の中には人を食う種族がある、鬼に近い人種がいる、或いは鬼よりも<sup>どうもう</sup>獰猛な人類がいることが、空想的な頭にあるものですから、兇暴なる土人の襲撃の怖るべきことは猛獣以上である。猛獣は<sup>おど</sup>嚇しさえすれば、人間を積極的  
に襲うことはまずないと見られるが、土人ときては、若干の数があつて、何をするかわからない。

「見給え、あそこに小舟がある」

「舟でございますか、ははあ、なるほど」

それは小舟です。しかもその小舟が、半分ほど砂にうずもれながら波に洗われつつある。最初は岩の突出かと思いましたが、なるほど、舟だ、その舟も、どうやらバツテイラ形で、土人の用うるような<sup>くりぶね</sup>刳舟でないことを、かすかに認めると安心しました。

この<sup>すておぶね</sup>捨小舟をめざして急いでみると、それから程遠からぬ小

さな池の傍の低地に小屋を営んで、その小屋の前に人間が一人、真向きに太陽の光を浴びて本を読んでいる。黒い洋服をいっぱいに着込んでいるから、それで最初に清八が熊と認めたとそれなのでしよう。こちらが驚いたほどに先方が驚かないのです。駒井主従が近寄つて来ても、あえて驚異の挙動も示さず、出て迎えようともしないし、来ることを怖れようともしていないのが、少し勝手がおかしいとは思いつながら、危険性は少しも予想されないから、そのまま近づいて見ると、先方は鬚ひげだらけの面をこつちに向けて、じつと見つめていることは確かだが、さて、なんらの敵意もなければ、害心も認められない。

いよいよ近づいて見ると、原始に近い姿をしているが、その実、はなは甚だ開けた国の漂流者と見える。駒井がまず、英語を以て挨拶を試みてみました、

「お早う」

先方がまた同じような返事、

「お早う」

駒井の英語が、本土の英語でないように、先方の発音もまた借りの発音らしいから、英語を操るには操るが、英語の国民ではないという認識が直ちに駒井の胸にありました。

けれども、英語を話す以上は、その国籍はともあれ、時代に於ては開明の人であり、或いは開明の空気に触れたことのある人でないということはありません。英国は海賊国なりとの外定義はあるにしても、その個人としては、直接に人を取って食う土人でないことは確定と思うから、ここで三個の人間が落合つて、平和な挨拶を交し、これからが駒井とこの異人氏との極めて平和なる問答になるのです。

駒井甚三郎は、まず、初発音に於て、この異人氏が英語は話すけれども英人でないことを知り、話してみると、この土地に孤島生活をしているけれども漂流人ではないということも知りました。誰も予想する如く、船が難破したために、この島へ漂いついて、心ならずも原始生活に慣らされている、早く言えば、ロビンソン漂流記の二の舞、三の舞である、とは一見、誰もそのように信ずるところだが、少し話してみると、やむことを得ざる漂流者ではなくて、自ら好んで单身この島へ渡つて来て、また好んでこういう原始生活を営んでいる生活者であるということ、駒井甚三郎が知りました。

これが駒井にとつて、一つの興味でもあり、好奇心を刺戟すると共に、研究心をも刺戟して、これに会話の興を求めると共に、この異風の生活の白人を研究してみなければ置かぬ気持ちにもさせたのです。今日の開明生活を抛なげうつて、何しに斯か様な野蛮生活に復歸したがっているか、それも、やむを得ずしてしかせしめられているなら格別、好んでこういう生活に入り、しかも、一時の好奇ではなく、もはや、あの小舟が朽ち果てる以前から来ており、今後、この島にこの生活のまままで生涯をうずめる覚悟ということが、驚異でなければなりません。

駒井甚三郎と異人氏の、おぼつか覚束ないなりの英語のやりとりで、しかも、相当要領を得たところの知識は、だいたい次のようなものでありました。

この白人は、果して英国人ではない、本人は、しかと郷貫きょうかんを

名乗らないけれども、フランス人ではないかと駒井が推定をしたこと。

年齢は、こういう生活をしているから、一見しては老人の如くに見ゆるが、実はまだ三十代の若きであること。

学問の豊かなことは、ちよつと叩いてみても、駒井をして瞠目どうもくせしむるものが存在していたということ。

そこで、つまりこの青年は、三十代と見ればまだ青年といつてもよからう、一見したのでは五十にも六十にも見えるが——この青年は、何か特別の学問か、思想かに偏することがあつて、その周囲の文明を厭いとうて、そうして、わざとこの孤島を選んで移り住んでいる者に相違ないということが、はつきりと判断がつきました。

そういう類例は、むしろ東洋に於ても珍しいことはない。日

本に於ても各時代時代に存在する特殊の性格である。こういう隠者生活というものは、東洋がその本家であるかを見ると、西洋にもあるのだ。いわゆる文明国にも、現にこういう人が存在する、ということをも駒井がさとりました。

異人氏の方でもまた、この珍客が、教養ある異邦人で、自分の思想生活を<sup>みた</sup>紊す者でないことがわかつたらしい。特に興味を以て、駒井との会話を辞さないようです。

そこで、駒井甚三郎は、清八をして持参の弁当を取り出させ、その小屋の庭前の自然木の卓子テーブルの上に並べさせ、そのうち好むものを、異人氏にも勧め、且つ食い、且つ談ずるの機会に我を忘れ、また今日の任務をも忘れんとします。

ここに於て、駒井はこの島に、自分たちよりも先住者が少なくも一人はいたことを知り、島の面積、風土のなお知らざると

ころをも聞き知り、もはや、これ以上には人類は住んでいないことなどをも知りましたが、個人として、この異人氏の身辺経歴等を知りたいとつとめたが、容易にそれを語りません。

「あなたは、この島に猟に来たのですか」

と異人氏がたずねるものですから、駒井が、

「いいえ、猟に来たのではないのです、あなたと御同様に、この島へ永住に来たのです」

「エ？」

と言つて、異人氏がその沈んだ眼をクルクルとさせ、

「永く、この島にお住まいになるのですか」

「そのつもりで、仲間を引きつれて来て、これから三里先に開墾を始めています、以後、おたがいに往来して、お心安く願いたいものです、これを御縁に、たびたび、わたくしも、こちら

をお訪ねしたい、どうぞ、我々の方も訪ねていただきたい」

駒井がこう言いますと、異人氏は感謝するかと思いの外、みるみる失望の色が現われて、

「そうですか、あなた方二人だけではないのですか」

「二十余人の同勢で来ています」

「男ばかりですか」

「女もおりますよ」

「そうですか」

と言った異人氏には、失望のほかには、不快な色さえ現われて、それからは駒井の問いにはかばかしい返事をしませんでしたが、急に立ち上って、

「わたくし、あの小舟を修繕しなければなりません」

つと立つて行ってしまったものだから、駒井も引留めようが

ありませんでした。

ぜひなく、清八と二人だけで食事を済まし、しばらく待つてみたが、容易に再び姿を現わしません。立つて四方をさがしてみたけれども、どうもその当座の行方がわからない。ぜひなく二人はそのままに取りかたづけて、ここを出て前進にかかりましたが、途中、心にかけてたけれども、この異人氏の姿が再び眼に触れるということはありませんでした。

駒井は、それを本意なく思ったが、なんにしても、最初のうちは極めて好意を以て会話に答えた異人氏が、終り頃、急に失望不快の色を現わしたとと、そのまま席を立つて、再び姿を見せなかつたことに、何か、感情の相違があるものだとみないわけにはゆきません。では明日改めて、单身、ここまで出向いて来て、この遺憾いかんの部分の埋合せをしようと思ひ定めました。そ

の日は、その程度の観察、往復の途中、地質と植物の標本を集めたくらいのところ、開墾地へ立帰りました。

お松に向つて、その日のあらましを物語り、明日はひとつあの異人氏の訪問を主目的として、また出かけてみるつもりだということをお話します。

七兵衛の報告を聞いて、開墾事業が着々として進んでいることを知り、多くの希望と愉快のうちにその夜を眠ります。

五十一

その翌日、駒井甚三郎は、三里の道を遠しとせずして、今日はたった一人で、昨日来た異人氏の草庵を訪ねてやって来ました。来て見ると、その有様、昨日に異ならず、戸は別に塞ふさいでも

ないが、人はありません。二度、三度、呼びかけてみたが返答もありません。その様子では、昨日立って行つたままに、立戻らないようにも見えるが、いったん戻つて、また出かけたものとも察せられる。

あけ放された室内へ、駒井が入り込んで見廻すと、数多くの書籍がある。卓の上には、書きさした紙片が<sup>うずたか</sup>堆く散乱している。駒井は一わたり書棚の書物を検閲したが、英語と覚しいものは極めて乏しい。一二冊をとつて<sup>ひら</sup>披いて見ると、文字は横には印刷されているが読めない――

そこで、駒井はまた一旦、室外へ出て待つてみたが、到底埒<sup>らち</sup>が明かないと見て、ともかくも近いところを歩いてみようとして、小径をそぞろ歩きすると、まもなく海岸へ出ました。海岸へ出て見ると、何のことに、探索に苦心するまでのことはなかつた、

つい眼のさき、尋ねる人がいるのです。海岸へ乗捨てられた小舟をコツコツと修理していたのは、昨日見た異人氏以外の人でありようはない。

そうだ、昨日も立ち上りざま、舟を修理をしなければならぬと言つて出た。最初から、こつちを探せば何のことはなかつたものをと、駒井はその心構えで、ツカツカと近寄つて来て、

「昨日は失礼——また尋ねて来ました」

「はい」

「舟をなおすのですか」

「はい、舟を修繕しています」

「だいぶ古くなっていますね」

「なにしろ、三年前に乗捨てた舟ですからね。もう二度使おうとは思わなかつたですが、また手入れをしなければならぬで

す」

「新たに漁でもおはじめなさるのですか」

「いや、漁ではありません、沖へ出なくても魚は捕れます」

「では、急に何の必要あつて」

「海へ乗り出すのです、新たなる征服者が来たから、先住民族は逃げ出さなければならぬです」

「待つて下さいよ、新たなる征服者というのは我々のことですか、先住民族というのは君のことですか」

「そうです、あなた方は侵入者であり、征服者であります、新たなる征服者が来た時は、先住民族は逃げなければなりません、逃げなければ血を流します」

「これは奇怪なお説です、誰が君を殺すと言いましたか、誰が君の血を見たいと言いましたか」

「当然です、誰も言わないが、それが移住者の約束です」

「そういう約束をした覚えもない」

「人間同士の約束ではない、天則です、でなければ歴史です、人類相愛せよということは、猶太の<sup>ユダヤ</sup>大工さんの子だけが絶叫する一つの高尚なる音楽ですね、相闘え、相殺せ、征伐せよ、異民族を駆逐せよ、しからずばこれを殲滅<sup>せんめつ</sup>せよ——これは、歴史だから如何<sup>いかん</sup>とも致し難い、そこで、わたくしは殺されないさきに逃げます」

「驚くべき誤解ですねえ、我々も、まず平和と自由とを求めて、この地に來たのですよ、歴史の侵略者とは違いますが、海賊ではありません、紳士です」

「歴史の原則の前には、海賊も紳士もないです、あなた方は、平和を求めつもりでこの島へ來ても、それがために、わたくし

の平和が奪われます」

「奪いません、おたがいに和衷協同して、相護つて行き得られるはずですよ」

「そんなことができるものか、現に、わたくしの平和が、こんなに乱されていることが論よりの証拠——やがて、わたくしが殺される運命は必然ですよ」

「左様な独断に対しては、もはや議論の限りではない、ただ、東洋人ということが、野蛮と好戦の代名詞のように心得ている君等白人のびゅうけん謬見からただしてかからなければならんのだが、それには相当の時間を要する、少なくともその理解の届くまで、君の出発を延期してはどうだ、果して、君が憂うるところの如く、我々は君を殺さずには置かぬ人類であるか、或いは存外、君と平和に交り得る人種であるか、その辺の見当がつくまで、出発

を保留して置いてはどうか、そうして、いよいよ危険と結論が出来たその時でも、立退きは遅くはあるまい、その担保として——これをひとつ君に預けて置こうじゃないか、これは我輩の唯一の護身武器だ、安全の保証だ」

と言つて駒井甚三郎は、肩にかけていた鉄砲を取つて、彼の前に提出し、同時にその帶革の弾藥莢だんやつきょうを取外しにかかる

「いや、違います、違います、あなたの觀察が違います、わたくしは、あなた方を怖れるのではないです、歴史を怖れるのです、東洋の人を、野蛮だの、好戦だのと輕蔑するほど、西洋の人は文明を持つてはおりません、大きな宗教、大きな哲学、大きな科学、みな東洋から出ました、今、西洋だけが文明開化のように見えるのは、それは表面だけです、西洋の文明開化は短い間の虹です、やがて亡びますよ、わたくしは、欧羅巴ヨーロッパに生れ

たけれど、欧羅巴が嫌いです、それで、国々を廻つてこの島へ来たです、が、これから、ここを逃げ出して、またどこか自分のくらしい土地を求めて行きます」

五十二

吃々<sup>きつぎつ</sup>として、こういう釈明をする間にも、異人氏は小舟の修繕の手を休めない。銃器を取外した駒井は、そのやり場に苦しむような手つきで、ふたたびそれを持扱いながら、これと対した石の上に腰を卸して、異人氏の言うところを言いつくさしめようと構えている。異人氏は、ここまで来ると、必然の論理を通さねばならぬかの如くに、ねちりねちりと問わざるに答えるのである。

「欧羅巴ヨーロッパの文明というものは間違っているです、蒸気が走り、電気が飛び、石炭が出る、機械がどよめく、それで、人が文明開化だといって騒いでいるだけのものです、蘊蓄うんちくということを知らないで、曝露ばくろするのが文明だと心得違いをしています、陰徳というものを知らないで、宣伝をするのが即ち文明だと心得違いをしています、ごらんなさい、今に亡びますよ、今に欧羅巴人同士、血で血を洗う大戦争をはじめて共倒れになりますから、わたくしは、そういうところに住むのが嫌いですから、もつと広い世界へ出ました」

「君は文明開化を否定している、人類の進歩というものを呪のろっているらしい、それが欧羅巴の文明というものを究め尽きわしての結論だと面白いが、ただ偏窟な哲学者の独断では困る」

「わたくしは偏窟人です、世間並みの風俗思想には堪えられま

せん、それだからといって、わたくしの見た欧羅巴文明観が間違っているとは言えますまい、そもそも、欧羅巴が今日のように墮落したのは……彼等は墮落と言わず、立派な進歩だと思いつて世界に臨んでいるようですが、わたくしに言わせると、彼等より甚しい墮落はありません、何がかくまで欧羅巴を墮落させたかと言え、それは鉄と石炭です」

「ははあ、妙な論断ですね、羅馬ローマの亡びたのは人心が墮落したからだということ、よく聞きますが、鉄と石炭が欧羅巴を墮落させたという説はまだ聞きません」

「学説ではなくて事実です、まず欧羅巴というところが、世界の中でどうして特別に早く開けたかといえ、それは食物を耕作する良地に富んでいたからです、土地が肥えていて、人間が食物を収獲するのに、最も都合がよかった、というのが第一条

件であります、これは勿論もちろんであります。欧羅巴でなくても、穀物をよく生産する土地に人間が第一に寄りつきます、欧羅巴が開けたのは、その第一の条件に恵まれていたその上に、第二の条件が最もよろしかったからです、その第二の条件というのは、鉄が豊富であつたからです、鉄を掘り出して使用することの便利が、他の多くの国土よりも恵まれておりました。人類は、最初にその鉄で鋤くわを作りました、鋤すきを作りました、そうして耕作力に大きな能率を加えました、そこで、人間に余裕も出来て、人間の数も殖ふえました、それまではよかつたです。ところが、人に余裕が出来、その数が殖えてくると、争いが起りました、そこで、鋤を作る鉄で武器を作りはじめました、欧羅巴の墮落はそこから始まりました」

「それは墮落ではない、当然の進歩というものだ、人類が進歩

し、社会が複雑になればなるほど、おのおのの防備を堅固にしなければならぬ、大きく言えば、国防というものがいよいよ切実となる、弓と矢を用いる代りに、鉄を利用して国防の要具を作ることは、当然の進歩ではないか」

「進歩とか、複雑とか言いますけれども、その進歩と複雑が、人間に何を与えましたか、眩惑げんわく以上のものを与えましたか、眩惑から逃れて真実の生活を営みたいものは、欧羅巴文明から離れなければならぬ、そういうわけで欧羅巴を墮落させたもの、第一は鉄であります、いや、人が鉄の使用を誤らせたことから墮落が起りました、その次に、欧羅巴文明を墮落せしめたものは、石炭です、なぜ、石炭が欧羅巴を墮落せしめたかと言えば、そのもととは蒸気の発明から起つたです、蒸気が発明されると、大船が大洋の中を乗りきつて、世界のいづれの涯はてへも自由自在に

往来ができるようになりました、人間はそれを称して、人力が海洋を征服したというけれども、実は人間が自制心を失って我慾に征服されたです、従つて、この蒸気船に乗つて世界を行く国人が海賊となりました、海賊とならざるを得ないです。たとえ未開野蛮の地というとも、先住民のいない国土はない、新入者と先住民との争いが当然起ります、先住者のないところには、新入者同士の争いが起ります。石炭が大きな船を動かさなければ、なかなかそういうことは起らなかつたです。いまに、ごらんなさい、世界中がみな海賊の争いになりますよ、鉄と石炭を多量に持つている国家が、海賊の親方になります、そうすると、それを羨む<sup>うらや</sup>他の国家が、割前を欲しがつて、その海賊の大将を亡ぼそうとします、そこで、海賊の大将へ総がかりという大戦争が起りますから、見ていてごらんなさい、鉄と石炭が欧羅巴

を進歩せしめたというのは、近眼の見ている虹です、やがて、これがために亡びますよ、いったい、土地に埋蔵してある天与の物質を掘り出して、それを人間同士殺戮さつりくの道具に造るなんていうことが、罰が当たらないで済むものですか、やがて、欧羅巴がいい見せしめです、東洋の方々よ、東洋は欧羅巴に比べると、遙かに偉大なる宗教、深遠なる哲学を持っています、この産物は、鉄と石炭の産物とは比較にならない、東洋人はその偉大なる宗教と哲学に従って行けば、安全なのです、決して、鉄と石炭の文明に眩惑されてはなりませんよ」

こう言われて、駒井甚三郎は、何か自分の弱味に籠手こてを当てられたように感じました。この立論が偏窟であるにかかわらず、ただ何かしら、自分の弱点を突かれでもしたように感じました。

五十三

こういふ頭から出て、とどまると言い、出ると言う以上は、力を以て引留めることの限りではないと、駒井甚三郎もややにさとりました。

そうして、暫く沈黙して考えさせられざるを得ないものがありました。

「君が欧羅巴文明を否定するのは、君一個の意見として聞いて置き、拙者もいざれ考えてみたいと思いますが、東洋に、より優れたる偉大なる宗教があり、深遠なる哲学があるというのは、それは買いかぶりではないか、ドコの国も同じように似たり寄つたりなもので、人間というやつは、みんな、眼前だけを標準とし

てしか行動ができない動物なんじゃないか、世界の人類一様に、みんな、やがて消ゆべき虹を見て騒いでいるんじゃないかな」

「そうでないです、西洋の人は虹をだけしか見ることができないです、たまにそれ以上を見る人は、ただ、虹は何で出来ている、虹は水蒸気である、七色は光線の分解であるというだけを見るのが頂上です、ところが東洋人は、水蒸気を見ない、七色を見ないで、空くうを見ます、空くうというのは虚無ではないです、つまり、色しきを見ないで空くうを見るです、西洋人には、色しきを見ることだけしかできないで、空くうを見ることができません」

ここに至ると駒井甚三郎は、もはや、自分の領分外だということををさとりました。もはや自分の力では、こなしきれないということをを自覚せざるを得ませんでした。

そこで、また暫く沈黙の後、次のように言いました、

「考えさせられます、トモカク、我々の方で、君を引留める何物の力もないということがわかり出したようです、この上は、君の自由の行動と、意志の行動に干渉すべき限りではない。では、一日、我々の新開墾地に客に来て見て下さらぬか、我々が食人種でないことがおわかりならば、一日の来訪は危険を伴わないし、また君の将来の行動のさまたげとなるべきはずもないから、新入者が先住民に敬意を表わすの機会と、先住民が新入者を迎えるの機会と、それから新入者が先住者を送るの礼と、その三つの機会を同時に、我々の新開地で作ってみることは許されな  
いか」

「そういうわけならば、一日の暇を作りましょう、明日にも、あなたの植民地へ行きましょう」  
「それは有難いです——では」

駒井甚三郎は、明日の約束を以て、この場の会見と会話を打ち切りました。順路をよくこの異人氏に教えて、自分のもと来し路へ引返します。出立の時は、今日は、もう一足でも先へ前進してみるつもりでしたが、ここで会見の時を過ぎしてみると、もう進む気が起りませんでした。

来た路を引返しながら駒井甚三郎が思う様、この孤島へ来て、さかさまに、白い異人から東洋哲学を聞かせられようとは思わなかつた、ドコの国、いずれの時代にも、その時代を厭いとう人間はあるものだ、称して厭世家という。そういうことは、いずれの時代にもあるが、いつも世間には通用しない。当人も無論、通用されないことを本望とする。世間の滔々とうとうたる潮流から見れば、一種例外の変人たるに過ぎない。一人や二人そういう変人が出たからとて、天下の大勢をどうすることもできるものでは

ない。また当人も、一人や二人で天下の大勢をどうしようの、  
こうしようのと考えているのではないから、別段、問題にする  
には当たらないが、どうかすると、そういう変人の中に、驚くべ  
き予言が語られたり、達観が行われたりするもので、あらかじ  
め、そういう声を聞くと聞かないでは、国の興亡が定まること  
さえあるものだ。言う者に罪なし、聞く者以て警むるいましに足る。

だが、それはそれとして、こんなところで、こんな人種から、  
東洋哲学を聞かせられて、これに充分の応答ができない、まし  
て、逆に彼等にこれを説き教える素養を欠いている己れおのという  
ものを、駒井甚三郎が反省せざるを得ませんでした。

日本に於ては、おこがましいが、自分は当時での最新知識で  
あり、有数の学者と我も人も許していたのだ。それが、ややも  
すれば金椎キンツイに虚を突かれたり——孤島の哲学者に逆説法を食つ

たりするのは、事が自分の研究の職域以外としても、光栄ある無識ではないのである。自分の究<sup>きわ</sup>めてい<sup>る</sup>のは、今の哲学者の見るところによると、欧羅巴文明の糟粕<sup>そうはく</sup>かも知れない。かの糟粕を究めつつ、自家の醍醐味<sup>だいごみ</sup>も知らないということになると、いい笑い物だ。

学問、研究、知識は、いよいよ広く、いよいよ大きい、この海洋のようなものだ、というような反省が駒井の心に波立ちました。

#### 五十四

その翌日、約束の通り、異人氏は駒井の植民地へやって来ました。これを迎えた駒井は、一応植民地を見せた上で、己れの

舍宅へ案内して、ここで、椅子をすすめて相對坐しての會談です。この時に異人氏は次のように言いました、

「駒井さん、あなたの理想はよくわかります、地上に理想郷を作ろうという企ては、今に始まったことではないです、昔からよくあることです、欧羅巴では、哲学者プラトーなども、その理想の先達せんだうの一人です、実行はしませんでしたけれど、プラトーは、その理想を持っていました、最近では、ロバート・オーエンという人が、それを実行しました、あなたと同じように同志を集めて、全く新しい一つの社会を作りました。プラトー氏は、ただ理想家だけでしたが、ロバート・オーエンは、徹底的に実行しました」

「そういう人が、最近、西洋にありましたか」

「ありました、ロバート・オーエンは、英吉利イギリスのウエールとい

う所の山の中に生れた人です、子供の時は呉服屋の小僧などを  
して、それから成功して大きな紡績工場を持つようになりまし  
た、幼少から艱難かんなんをして、世の中を見たりして、どうしてもこ  
れではいけない、ひとつ、模範の世界を作ってみるといって、自  
分の大工場を中心にして立派な模範の村を作り、一時、非常な  
評判になって、見に行く人が多くありました、上流の人、資  
本家の人、オーエンの理想を好みませぬ、せつかくの理想が  
妨げられる、そこで、オーエンは、これは上流社会や資本家を  
相手にしては駄目だ、働く人だけで自由な社会を作らなけ  
ればならぬと言って、それには周囲のうるさい土地ではいけな  
い、新しい天地で、さしさわりなく腕ふるの揮えるところでなけれ  
ばいけないといつて、イギリスの自分の土地や工場を、すつか  
り売払って、アメリカへ渡りました、アメリカの、インデアナ

州というところへ土地を買い、思いきつて理想の社会を作つてみました。失敗してしまいました」

「もう少しくわしく、その人のことを話してみても下さい」

「いや、話せば長くなるです、およそ自分の理想の新社会を作ろうとして、その実行に取りかかつて、失敗しなかつたものは一人もありません、みな失敗です、駒井さん、あなたの理想も、事業も、その轍<sup>とつ</sup>を踏むにきまっています、失敗しますよ」

異人氏は、駒井の事業慾に対して、三斗の冷水を注ぐようなことを言いました。せつかくのことに成功を祈るとは言わず、失敗が当然だということと言いました。聞きようによれば、不吉千万の言い分でありますけれど、駒井は深く気にかけません。「失敗とか、成功とかいうことは、ただ仕事の成績だけ見て言うことじゃありませんよ、成功と信じて、ねつからツマらない

こともあり、失敗だ、失敗だと言われることが、かえって大きな時代の推進力をつとめることもあるものだ、今のそのオーエンという人が、どういう失敗に終わったか知らないが、そういう勇氣と実行力を持ち得る人は、尊敬すべきものだ、信ずることを、ドコまでもやってみようという勇氣を私は取ります。オーエンは失敗したけれども、イギリスからアメリカに渡って、このアメリカの土台を築き上げた人は失敗ではないだろう、成敗を以て事を論ずるのは末だ」

「そうです、何が成功で、何が失敗かということとは、見る人の批判だけではわかりません」

異人氏は、深く議論をする気はなく、その辺で辞退しましたから、駒井甚三郎も、それを送って外へ出ました。

過ぐる夜に、月影を踏んで歩いた砂浜のあたりを、異人氏を

送りながら歩いて行く駒井甚三郎は、異人氏が、どうしてもこの島を立退かなければならないならば、古舟を修理なさらずとも、こちらのバツテイラを貸して上げようと言いますと、異人氏は、それを辞退して、それには及びません、舟は手慣れたのがよろしい、いかに小舟で大洋へ乗り出しても、決して覆ることはないものだ、舟には心配はない、心配がありとすれば、食糧と気候の変化だけのものだが、それは天に任せるより仕方がない、というようなことを言う。

異人氏を程よきところまで見送つてから、駒井甚三郎は、また海岸を戻りながら、いろいろと考えさせられました。

事実には、自分たちが来たために、あの異人氏を追い出したことになるのだが、異人氏は追い出されると思つてはいない。新人来れば旧人去るのきたは当然の理法だと考えている。また

それが自分の自由だと考えている。こちらは氣の毒千万とも思  
うけれども、先方は現在の旅から次の旅に移るとしか考えてい  
ない。満足から満足に向つてあさり進むとしか考えていないよ  
うだ。

のみならず、去り行く己おのれの影を哀かなしまずして、盛んなる我  
等の新植民をむしろ哀あはれなりとしている。斯か様な事業は必ず失  
敗なりと断言して憚はばらないところも、また一見識だと思いまし  
た。

その一例として挙げてくれた、何とといったかな、イギリスの、  
ロバート・オーエンと言つたかな、そういう人間の最近の失敗  
を述べたようだったが、くわしいことは聞きもらしたが、では、  
これからひとつそのオーエンなるものの伝記を研究してみよう。  
失敗とか、成功とかは論ぜず、トニカク空想を実行に移して、百

折屈せざるの先例を見出すことは愉快と言わねばならぬ。イギリスという国が大きくなるのも、そういう人間を持ち得られるからだろうなどと、駒井がその時に考えました。

五十五

ここで、話が少し後戻りをして洛北岩倉村へ帰るのでありますが、が、ん、り、き、の百蔵、宇治山田の米友、首くびつ枷かせの一幕を見せられた献上隊は、呆あっけ気けに取られて、これを追及することも忘れたのでありますが、その首つ枷の早いこと、軽便蒸汽もはだしの有様なので、みるみる姿を見失った後に、我を取戻したという有様です。

しかし、怪我もこのくらいの程度ならばまず安心、やがて彼

等は、苦笑と哄笑こうしょうとを禁ずることができません。そうして苦笑と哄笑の間に、錢拾いをはじめました。

すなわち、宇治山田の米友公が、粒蒔つぶまき、散蒔ちぢまきの曲芸を演じた名残りなごりを、或いは道草の間より、樹木の枝の股より、石の地蔵のお水凹みずくぼの蔭より掻き集め、或いは三びん氏や、三下氏の額あご、頬あご、たぶさの間から引つpegし、抜き取り、それから最後に、優あごに半分は投げ残された袋に納めきるのが一仕事であります。

この場だけの事情に於ては、この一行に相当の道理があるらしく、あえて米友の手から強奪を試みようとしたのにあるのではなく、当然自分の隊に属すべきものを、不思議な男の手に発見したものですから、当然の要求のつもりで掛合つたのが原因であります。ですから、献上隊の一行が暴行を働いたというわけではなく、かえつて、事情を呑込まぬ米友の頑強が、非に落

つる嫌いもあるにはあつたのであります。しかしまた、献上隊の方でも、もう少し事を穩かに掛合つて、少なくとも米友を首肯せしむるだけの理解を尽さなかつたという落度おちどもあるにはあるでしょう。だが、こうなつてみると、どちらも市が榮えたというもので、彼等は僅少の犠牲で原価を取戻し、こちらは少々の手わざ足芸でうまく要領を外したという取柄があるのであります。しかし献上隊の奴等は、今のあの小冠者のタンカがおかしかつたり、その手練に舌を捲いたり、その口小言が絶えないのであります。が、なんにしても、錢を拾い集めるのが一仕事です。たとえ一枚でも天下の通宝を土に委いしてはならないという護惜ごしやくも手つだつて、草の根をわけ、石の塊りを起して、收拾にかかっているところへ、夏々かつかつと馬の蹄ひづめの音をひびかせてこの場へ通りかかつたものがあります。

前のは、年の頃三十七八歳の威風ある偉丈夫、後ろのはまだ二十四五の一青年、二人ともに浪士ではなく、本格の、いずれかの藩の相当以上の利きけ者らしいのが、馬上で颯さつ爽そうとしてここへ現われて来ましたが、献上隊の一行が路傍草間に錢を拾っているのを見て、

「何だ、何をしているのだ」

「なに、天下の宝を路傍に拾っているのか」

「ほほう、錢が降つたと見えるな、近ごろはエエじゃないか  
天下にお札ふだが降っている、ここばかり錢が降つたか」

こんなことを言つて、二人が英氣凜々えいきりんりんとして過ぎ行く後ろ姿を見ると、二人ともに、黒のゴロウの羽織すげに菅すげの笠、いずれも丸に十の紋がついている。

献上隊の一行が、いずれも錢拾いの手を休めて、いま過ぎ去つ

た二人の武士の後ろ影を、つくづくとながめ、

「薩摩だな」

「うむ、あれは誰だか知ってるか」

「どうも、前のは薩摩の大久保市蔵らしいぜ」

「拙者も、そう思う、そうして、あとは長州の品川弥二ではな  
いか」

「そうだ、たしかにそれに違いないぞ、薩長の注意人物が相携  
えて、岩倉三位訪問と出かけるからには、一嵐ありそうだ」

「だなあ、一番、様子を見てやろうじゃないか」

「見届けて土産物みやげものにしようかなア」

こう二人が言い合わせて、また腰をかがめて錢拾いの続演。  
これと引違いに、いま問題になった馬上の二人の武士。

やつぱり、めざすところは岩倉三位邸の門でありました。

そうして玄関にかかつて言うことには、

「薩州の大久保でございます、岩倉三位は御在邸でございますか」

その時に、玄関は開かず、中庭の枝折しおりが内からあいて、

「大久保君、よく来てくれた、まあこつちからお入り——」

と面かおを現わしたのは、さきつ頃、が、ん、り、き、の百が垣根越しに一眼見て、危なくこの威光にカツ飛ばされようとした御本人——即ち岩倉三位その人でありましょう。綾の小袖の着流しで、手に手頃な鍬くわを持って現われたのは引続いての庭いじり、いまだに鍬が離せないものと見えます。

「今日は品川君を連れて参りました」

「あ、それは、それは」

と岩倉三位は改めて、ジロリと同行の品川弥二郎を見ました。

この空気によつて見ると、岩倉と大久保の間は入魂じっこんになつてゐるが、品川は初対面であるらしい。特に大久保が今日、品川を帯同して、岩倉に紹介がてら推参したものと思われます。

岩倉三位は鍬を杖にしたままで、まだ庭先に立つてゐる。

五十六

「天下の風雲をよそにして、菊を南山なんざんに採とるといふ趣がありま  
す、お羨うらやましい境涯です」

と大久保が、岩倉三位の手ずから丹精の小庭と、その手にせる  
鍬を見て、こう言つてお世辞を申しますと、岩倉が、

「必ずしも左様な風流沙汰ではないよ、この鍬で、今その風雲  
のとはしりを少しばかり鎮しずめたところだ、あの小山を見給え」

と指しますから、庭の一隅を二人が見ると、そこにまだ土の香の新しい土饅頭どまんじゅうが一つ築かれてあるのであります。

「何ぞお困いになりましたか」

「たつた今、ここの玄関へ怪しげな壮士体ていの者共が押しかけて、わしに献上と言って、玄関へ何か置きはなして行つた、取調べてみると、人間の片腕が一本、まだ生々しいのが、三宝に載せて置いてある、不潔千万だから、今、それをここのところへ埋めたばかりだ」

「何ですか、人間の片腕を三位のお玄関へ、それは物騒な奴があつたものです」

「生首でなくてまだ幸い——ここへ埋めて念仏をしてやつたところだ」

「何者の生腕なまうででございますか」

「千種家の賀川肇の生腕と、三宝の下に書いてあつた」

「賀川の——ともかく、時勢とは言いながら、この山里の御閑居へまで、そういうことをする奴があるのだからなあ」

大久保も感慨に耽つたが、品川の弥二が、ここで、また改めて岩倉三位の横顔をじつと見つめました。

かくて二人は岩倉三位の案内を受けて、その居間に通されるのでありますが、品川弥二郎は、大久保と岩倉の後ろ影を見ながら大いに考えさせられているようです。

やがて三人、奥の居間で密談となりました。まず、大久保から岩倉への品川の紹介があつたことでしょう。それから、長州の人傑の近況がいくさり噂に上つたことでしょう。やがて順序を得て、今日の来訪の理由の眼目に進んで密談が酣わになるほど、外間の窺知を許さないものがある。

三人の対話は極めてひそかに、また長時間に亘<sup>わた</sup>つて、容易に果つるとは思われません。洛北岩倉の秋日の昼は、閑の閑たるものであります。

この小閑を利用して、少しく時代の知識の註釈のために、慶応三年という年に、この篇に關係ある当時の相当の人物のめぼしいところの年齢調べを行つてみたいのであります。順序の不同と、一兩歳の出入りは御免蒙<sup>しょうむ</sup>つて、次に少々列举してみますと、

勝安房 四十四歳

大村益次郎 四十五歳

岩倉具視 四十二歳

西郷隆盛 三十九歳

大久保利通 三十七歳

木戸孝允 三十三歳

三条実美 三十歳

高杉晋作 二十九歳

伊藤俊輔 二十六歳

品川弥二郎 二十五歳

坂本竜馬 三十三歳

山内容堂 四十歳

徳川慶喜 三十歳

島津久光 五十歳

毛利元徳 二十八歳

鍋島閑叟 五十四歳

小栗上野 四十一歳

近藤勇 三十四歳

土方歳三

三十三歳

松平容保

三十二歳

等々。

五十七

こうして、三傑が額を鳩あつめて密談いよよたけな酢わにして、いつ果つべしとも見えない時分、次の間から、恐る恐る三太夫の声として、

「申し上げます、只今、山科の骨董商こつとうしょうが参上仕りましたが、いかが取計らいしましょうや」

「ははあ、来たそうだ、これへ通せ」

岩倉も、大久保も、諒解して、いま来訪して来たという山科の

骨董商なるものを、この密談の席へ入れるらしい。してみると、その骨董商なるものも、只者ではないことがわかります。只者であった日には、この密談の席へ通されるはずはないと思われるが、しかし、事實はかえって天下の志士でなく、郊外の骨董商であるから許されるのかも知れない。この時分、もはや密談は終つて、おのおの好むところの書画骨董の余談にうつり、その潮時に入りの骨董屋が来たというので、無むぞうさ雑作にお目通りを許されたものとも見える。まもなく、三太夫に導かれてこの席へ姿を現わした山科の骨董屋なるものを見ると、これが意外にも光仙林の不破の関守氏であらうとは……

不破の関守氏というのは、前身が相当の曲者であつてみると、さては、お銀様を説き立てて、名画名蹟の蒐集ぐらいでは芝居が仕足りない。洛北岩倉村へ集まる、この辺の役者を板にかけて、

脚本の製作をたくらんでいるとすれば、こいつも大伴おともの黒主くろぬしに近いが、果して、さほどの大望を抱いて来たのか、或いは、山科の骨董商になりきって、このお邸やしきのお出入り商人たるを以て甘んじて御用伺いに来たものか、その辺はわからない。

わからないと言え、が、んりきのようなのぼせ者を煽おだてて、この岩倉村に東西きつての大バクチがあるから行ってみると、貸元までつとめて、が、んちゃんがんちゃんが勢い込んでかけつけてみはみた、事は以上示すところの如く、馬鹿をみたようなものであった。自身、ここまで出向いて来るくらいなら、何を苦しんで、が、んりきをああまでかついだのか、はなはだ解げせないことです。

いずれにしても、不破氏は、この席へ入ると同時に、平身低頭して、出入り御贔ごひいき負の骨董屋たる腰の低いところを充分に表現いたしました。

主人側の三人の会積えしやくを見ても、これは尊王憂国の志士の変形として受取っていない。ここまで引見の特権を与えた過分の町人としての待遇に過ぎないところを見ると、それで安心した。不破氏は大伴の黒主ではない。

「骨董屋、手順はどうだ、首尾よく進行しているか」

岩倉三位からお言葉が下ると、不破氏は、頓首とんしゅ膝行しつこうの形をもう一つ低くして、

「は、御意にござります、万事お申しつけ通りに、極めて内々ないないに取計らい仕りました、今日、現品を御持参と存じましたけれども、慎重の上にも慎重と存じまして、お見本だけ、これへ持参仕りました」

「では、これへ出して見せ給え」

「はい——」

また後ろを顧みて膝行頓首をして、次の間に置据えた風呂敷を抱えて、また膝行頓首して、これを恭しく岩倉三位の前にさし置き、恐る恐る、結び目を解きにかかりました。

岩倉も、大久保も、品川も、共にその風呂敷の中を無言で見入っている。

風呂敷を解くと、中から出たものは、さのみ意外なものではありません。ただ、眼もきらびやかな大和錦やまとにしき、それから紅白の緞子どんす。一卷ずつそれを御丁寧とりそろに取揃えて、いよいよ恭しく三位の前に推し進めると、三位は座右から、あらかじめ備えられた一つの彩色図を出して、大久保に示し、「玉松たままつが作ってくれたこれが図面じゃ、よく引合わせ御覧になるがよろしい、寸法、式、模様、色合、誤りがあらば申し附けて訂正させるように」

そこで、大久保は大和錦を取り上げて、二三尺ずつ引きほごしては、下なる彩色の図面と見比べる。そこへ品川弥二郎が首を突き出して、大久保の調べのあとを追うて仔細に吟味をして見る。

不破氏は最初の姿勢で、ほとんど膝行頓首の体制のままですから、いま大久保が大和錦と引合わせている彩色の図面が何物だかわかりません。わがろうとすることが重大なる失礼でもあるかのように、恐れ慎んで面を上げないのでありますが、品川弥二郎は甚だ無遠慮で、果ては彩色の絵図面を横手に持って、大久保の繰りひろげた大和錦を片手で引張つて、押しつけるようにして較くらべて見るものですから、側面から見ると、その彩色の絵図面が何物であるかがよくわかるのであります。

つまり、それは錦の御旗みはたを描いたもので、大和錦はこの御旗

の地模様をつくり、ただ、図面と異なるのは、それに金銀の日月が打つてあるのと、ないのとの差であります。

「いや、これでよろしい、寸分相違がない、見事な出来でございます」

と大久保が保証すると、品川も頷く。三位も満足の体。その時に大久保が改めて、

「では商人、この方式によつてしかるべく頼むぞ、恐れ多き事ゆえに他言は固く無用、万一、外間に洩るる時は、その方の命はなきものと覚悟せよ。この絵図面もその方を信じて手渡す、これによつて、日月章の錦旗四旒、菊花章の紅白の旗おのおの十旒を製して薩州屋敷に納めるよう——世間へは、薩州家の重役が国への土産の女帯地を求めると申して置け」

「委細、心得ました、必ずともに御信用に反きませぬ、万一、手

ぬかりを生じましたその節は、この瘦首はなきものと、疾とうに  
覚悟をきめておりまする」

「町人にしては惜しい度胸、昔の天野屋に優るとも劣らず、で  
は、しかと申しつけたぞ」

「有難き仕合せにござりまする」

ここで、不破の関守氏はまたも頓首膝行の形で、三傑の御前  
を辞して、次の間に迂すべり出て、三太夫にまで鞠躬きつきゅうじよ如としてまか  
りさがつてしまいました。

五十八

不破氏が、ここまで食い入つて、ここまで信用を掴つかみ得たと  
いう手腕のほどは甚はなはだ驚歎すべきことでありますが、ここに於

て、東西に二つの錦旗の問題が隠見して来たことは、この小説の作意ではありません。

すなわち、上野の東叡山輪王寺御所蔵の錦旗を盗まんとする不逞ふていの徒が存在するらしいことと、ここでは岩倉三位合意の下に、玉松操たままつみさおに製作せしめた錦旗の図面によつて、薩摩と長州の傑物が二人、町人にその製作を命ぜんとしていることでありま  
す。これは作意ではなく、史実であり、明白なる記録でありま  
すが、錦旗そのものも、いまだ名分を備えざる間は、ただ一個  
の織物に過ぎませんから、誰がどう扱おうとも、さして問題に  
ならない分のことです。

さても、件くだんの密談が終つて、洛北岩倉村から、またも馬で帰  
る両士の馬上ながらの会話を聞いていると、次のようなもので  
あります。まず品川弥二郎が言いました、

「岩倉二位には恐れ入ったねえ。実を言うと、わたしは日頃あなたから、岩倉三位はエライエライと言われるものだから、よつぽどの人物と思っていましたかねえ、今日はじめて、あの中庭の柴戸から、ひよっこり姿を現わしたその人を見て、非常な幻滅を感じましたよ、あの通り、背は低いし、色は黒い——背は低く、色は黒くても、人品とか、男ぶりとか立勝たちまさつたものがあるればまだしもだが、ひよっこり着流しで、くわ鍬を下げて面かおを出したところを見て、非常な失望を感じましたよ、こんな風采の揚らない男に、いったいどれだけのエラさが隠れているのか、こんな人物を、エライエライと担たかぎ上げ、持ち上げるのは、大久保さんにも似合わないことだ、お公卿くげさんに免じてのお追従ついでだろう、本来、お公卿さんなぞに、そんなにエライ人物が有りようはずはない、位が高い、伝統が物を言うから、人があんまり持ち

上げ過ぎる、というよりは、天下の志士とかなんとか威張つて  
みても、所詮地下じげの軽輩の眼には位負けがする、そうでなければ、仕事の都合上、持ち上げて置いて利用する程度のものにしか考えられなかった、岩倉とて何ほどのことがあるかと、あの瞬間に、わしは一種の軽蔑の念をさえ持ちましたがな、あのそれ、庭に手ずから築いた土饅頭どまんじゆうを指して、今ここへ人間の生腕を埋めたところだ、誰かいたずら者めが、賀川肇の腕を切つて来て、三宝にのせて玄関へ置きばなしにして行つたから、それを今ここへ埋めたところだと、平然として談かたつているあの度胸には、実際驚きましたなあ、当時、豪傑といわれる武家の大名のうちにも、あれだけの度胸を持った奴はありますまい、刺客を前にしてあの底の知れない凶々しさを持った者は、血の雨をくぐつて来た浪士のうちにも、あんまり多くはない、お公卿さん

にも、あれだけの度胸があるものかと、僕はまずそれで参つたよ。さて、通じゅんじゅんされて密談ということになつて、三位から討幕の秘計を諄々じゅんじゅんと聞かされてみると、今度はその内容に於て、實際恐れ入つた、我々の考えている以上の周密と、思つてゐる以上の大胆と、百折不撓ひやくせつふとうの決心を持つておられるには驚いた。日本はじまつて以来の政治上の大改革を行う、この精神と、方法と、手段と、順序を、大所から細微に至るまで、ああも大胆に、且つ周到に包蔵しているあの頭は大したもので、そう思つて、僕はあの人の頭の形をつくづくと見直すと、どうもその形からして尋常人の頭ではない、あれは大したもので、お公卿さんの冠を取つた方がかえつて頭が大きくなる、あれだけの頭は今日の日本にありませんなあ。先頃せんころまで三奸さんかんの随一に数えられたが、賢の賢ゆえんたる所以も備わるが、奸の奸たる毒素も持たざるな

し、朝には公武の合体を策し、夕には薩長の志士と交るといえども、表裏反覆の娼婦の態を学ぶものではない、幕府をも、薩長をも呑んでかかっている腹がありますぜ。古来のお公卿さんは、位ばっかり高くて実力がないから、時の日和で、あつちへべつたり、こつちへべつたり、木曾が出頭すれば木曾に、義経が迫れば義経に、頼朝が怒れば頼朝に依存して、而して、その間の鞘を取って小策を弄するのが即ち公卿の身上と見てかかる、岩倉三位に於て失敗する、当時、堂上お公卿さんにも出色の人物は多いが、岩倉三位に比べると同日の談ではない、江戸に依存せずとも、薩長を操縦せずとも、立派に大業を成せる人だと僕は思いました。大久保さん、おたがいにしつかりしないと、薩摩も、長州も、岩倉三位に食われてしまいますぜ」

品川弥二郎は、はじめて会った岩倉三位に就いての印象を、

大久保市蔵に向つて右のように物語りつつ、やがて京の町に入り、薩州邸へと帰着するかと思うと、上京寺町通り裏、石薬師門外のあたりで二人の姿が消えました。これより先、が、ん、り、きの百蔵と、宇治山田の米友も、件くだんの如き首くびつ枷かせの芸当を以て京の町外れまで一散に走りましたが、そこで、米友は、が、ん、り、きの肩から下り、が、ん、り、きは脚絆きゃはんの紐ひもを結び直したけれども、二人の口頭には別になんらの人物論も起りません。

が、ん、り、きの百は、あんまりばかばかしいから、ドコぞで一杯飲んで行くと行って、米友と立別れ、米友は蹴上けあげ、日岡と来た通りの道を辿たどつて山科へ帰りました。

その夜のこと、昼さえも静かな岩倉谷の夜もいたく更け渡る頃、たつた一人の白衣びやくえの行者が、覆面をして両刀を落し差し、杖を携えて、飄々浪々ひょうひょうろうろうとしてこの岩倉谷に入り込みました。

こう書き出してくると、夜前、ああいう光景を描き出した場所柄、またもや一層の妖気魔気が影を追うて来なければならぬのですが、事がらはそれに反対で、妖気魔気どころか、氣の利きいた化け物は、面をそむけて引込むが当然なのです。

昭和十六年五月十日の東京朝日新聞の映画欄の記者でさえも、こういうことを書いている——

「が、元来、かういふ虚無的なやうな、感傷的のやうな嫌味ツたらしい浪人は、日本映画の昔から好物とするもので、現代人の心理を詰めこんだつもりで、深刻がつてゐるものの、実は、すこぶる浅薄陳腐といふべし……」

といったようなわけで、この浅薄陳腐なる嫌味つたらしい好み  
が、恥を知らない日本のうつし絵の食い物となつているも久し  
いものだ。今から三十年前、武州多摩川の上流から颯爽さつそうと現わ  
れた、これが原生動物と覺しき存在は、こんな無恥低劣な姿で  
はなかつたはず。

何の因果か、この原生動物と覺しきが、三十年の昔、姿を現  
わして以来、この形のうつしが一代の流行を極めて、出るわ、  
出るわ、頭巾をかぶせたり、五分月代ごぶがさかやきを生やさせたり、黒の紋  
附を着流させたり、朝日映画子のいわゆる浅薄陳腐な嫌味つた  
らしい化け物が、これでもか、これでもかと、凄くもない目を  
むき出し、切れもしない刀を振り廻して見得みえを切つた、その嫌  
味つたらしい浅薄陳腐な化け物が、三十年の今日、箱根以東の  
大江戸ちまたの巷から完全に姿を消してはいない。朝日のきらきらす

る市上にまで戸惑いをしている。

こいつらは、人の感情を保護するということを知らない、いわんや向上せしむることをや。模倣が程度のものであることも知らない、ひようせつ剽窃が盗賊の親類であることも知らない。どだい、こういう恥を知らぬ化け物国に、大きな精霊の生れた例がためしあるか。

伝うるところによると、机竜之助なるものは、もはや疾とうの昔に死んでいるそうだ。その生命は亡き者の数に入っているのだそうだ。彼の生命を奪ったものとしての最も有力なる嫌疑者は、暴女王のお銀様むぎんが第一に数えられる。少なくとも胆吹御殿のあの地下、無間の底につづく密室の中で、病後の竜之助なるものを完全に絞殺して、その地下底深く投げ落して秘密に葬つたという説を、まことしやかに言い触らして歩く者もある。

それにもかかわらず、その以後の活躍に、長浜の浜屋の間

の暗転もあれば、大通寺友の松の下の犬の殺陣もあるし、琵琶の湖上の一夕ぬれ場もある。それら、次から次へ展開さるるは、それはセント・エルモの戯れであつて、サブスタンスの存在ではないということを言う者もある。しかし、御当人は、左様な噂を一切見えぬ後目しりめにかけて、山科谷から、島原の色里にまで、影を追うて往年の紅燈緑酒の夢を見て帰つたという消息をもまことしやかに伝える者もある。或いはまた月光霜に氷る夜半、霜よりも寒く、薄すすきよりも穂の多い劍の林の中を、名にし負う新撰組、御陵隊が、屍しかばねの山、血の河築くその中を、腥なまぐさい風の上を、悠々閑々として、白衣の着流しで、ぶらついていたという噂を、見て来たように話す者もある。それが今晚、またも、岩倉谷に現われたといったからとて、誰も本当にする者もない代り、嘘だという者もない。

前にも言う通り、気の利いたお化けならば、とうに引込むべきはずのところを、かくも性懲りなくしょうこふらつき出すのは、他の好むと好まざるとにかかわらず、白業黒業が三世びやくくろくわうにわたつて糸を引く限り、消さんとしても消ゆるものではあるまい。大久保市蔵が岩倉谷に入ると、事実上、日本の枢軸は震動するのだが、この幽霊がここに姿を現わしたとて、もはや、草間にすだく虫けらも驚かない。

六十

夢遊病者としてもまた、虫けらを驚かすことを好まない。さりとて、岩倉三位をたずねて錦旗の製法を検究しようではなし、賀川肇の生腕をそつと掘り返して食おうというのでもなし。

岩倉三位にも、中御門中納言にも、いつこう用向きのない人、せつかくこの岩倉谷に入つて、がんだりきの百や、米友のあとを受けて、夜興行の一芝居を見せるかと思えば、何の、岩倉村はホンの素通り。

一見はやめる者のような疲れで、身を杖に持たせてホツと息をきつてみたが、未練気もなく思いきつて、すつくすつくと歩み出し、八瀬やせ大原おおはらの奥まで、まっしぐらに、或いはふらりふらりと侵入して行くものようであります。

今晚はドチラへ、はい、大原じやつこういんの寂光院に美しい尼さんがいると聞いたから、それを訪ねてみたいのです。そうか、その美しい尼さんがいたらどうする、いなかったらどうする、どうもこうもありはしない、ただ六道輪廻ろくどうりんねの道筋をたずねてみたいばかりだ、と答えれば、まず上出来の方である。

ともかくも、こうして、あつけなく岩倉村を素通りした机竜之助は、敦賀街道を北に向つて進み行くと、行手の山の峽かいから、人が一個出て来ました。万籟ばんらい静まり返った比叡と鞍馬の山ふところ、いずこからともなく、人が一個出て来た、その物音で、足をとどめてその気配に耳を傾けました。眼を以て見るのではない、耳によつて見ると、左の方、瓢箪崩れの方の谷からやつて来たものと覚しきが、近づくに従つて、その足どりの重いことと、息をせいせいきつている調子を嗅ぐと、何やら重荷を負いつつ、歩み来るものきたのようです。しかも、重き荷を負うて遠き道を来りしこの旅客は、年もはなはだ老いたる人のようであります。

竜之助は、杖にもたれて、それを待伏せしておりますと、現われたのは察しの通り、息せききつて、背に余る大きな荷物、こ

これは八升炊きの大釜でした、この大釜を縄でからげて、背中へ背負い込んで、屈かがんで歩いて来たところは、釜を負うて来るのではない、釜に押しつぶされながら、その下を這はい出して来るような形であります。しかも、案あんの定じよう、その当人は、老いぼれの瘦やせこけた、肋あばらの骨が一本一本透いて見える、髪の毛の真白なのを振りかぶり、腰巻の真ま紅かなのを一腰しめただけで、そのほかは、しなびきった裸体のまま、さながら餓鬼草紙の中から抜け出したそのままの姿で、よろめいて来るのでありました。

「はい、御免下さりませよ」

ここに人ありと見て、老婆は竜之助の前を通る時に、言葉をかけたものですから、竜之助が、

「この夜更けにドコへお行きなさる」

これは、こちらから尋ねてしかるべき言葉なのですが、重い

荷物に押しつぶされてゐる老婆は、咎とがむべき人に咎められても否やは言えない。

「やれやれ、お腹がすきました」

もう我慢がしきれないもののように、竜之助の前で前のめりに、のめつてしまいました。

「お気をつけなさい」

「どうも有難うございます、もうもう、お腹がすいて、トテも歩けませぬ」

この老婆は、荷物が重いということと言わないで、お腹がすいたことばかり言っている。八升炊きの釜の重さは、どうつぶしにかけても八貫目はあるでありましょう。この老いぼれの身で、八貫目の釜を背負い歩くということは、事そのことだけで、圧倒的の重みであらうのに、重いことは言わないで、お腹

がすいたことだけを言う。そこで前のめりにのめつて、老婆は、己おのれを圧しつぶした八升炊きの釜の下から這はい出したと見ると、その釜を立て直したが、ちょうど、そこに頃合くわんごいの大石が二つ三つ並んでいたものですから、その上へ、件くだんの大釜を仕掛けて、やがて近いところの樋との水を引いて、釜の中へ適度に流しかけたかと思うと、今度は、近いところの落葉枯枝をかき集めて、その釜の下へ火を焚きつけました。

「婆さん、お前、これから飯を炊たこうというのかい」

「はい、お腹がすいて、どうにもこうにもやりきれませんから、御飯を焚いて腹ごしらえをして、それから、また出かけようと思います」

「そうか、では、ゆっくりおやりなさい、火が焚きついたら、拙者もあたらしてもらいましょう」

「さあさあ、どうぞ」

竜之助は、この婆さんの側に立って、釜の下に手をかざしながら、つまり、アメリカの大統領と同じような炉辺閑話の形式で、問答をはじめました。

六十一

「婆さん、お前ドコから来た」

「はい、大原の寂光院から出て参りました」

「なに、大原の寂光院？」

寂光院と聞けば、美しい尼さんがいるとのことだが、いやはや、見ると聞くとは大きな相違、見るわけにはいかないが、気分でちゃんと受取れる、老いさらばえた上に、お腹がすいてい

るんでは問題にならない、と竜之助が手持無沙汰になっていると、老婆は頓着なしに、

「寂光院の水仕をつとめておりましたが、なにしろ、お腹がすきましてねえ、あなた」

ねえ、あなたもないものだ、お前のお腹がすいたかすかないか、こつちの知ったことではない。この老婆は、最初から最後までお腹がすいたことばかり言っている。まるでお腹をすかせるためにこの世に生れて来たような婆さんだと竜之助が思いました。それにもかかわらず、老婆は繰返して、

「なにしろお腹がすいてたまらないものでございますから、そんなに食べられては困ると言つて、追い出されてしまいました、よんどころなく、こうしてお釜を背負つて出て参りましたが、寂光院に限つたことではございません、ドチラへつとめまして

も、お腹がすくものでございますから」

「食べるぐらい結構だよ、年寄でそのくらいお腹がすくのは、つまり身体からだが健康な証拠だね」

竜之助も詮方なしに、慰め気分で言うのと、老婆は、

「はい、はい、そう思つて、あきらめるよりほかはございませんが、なにぶんにも、食べるとは食べるとは直ぐにお腹がすいてしまいますので、ドコにも永く勤めることができません、よんどころなく、こうしてお釜を背負つては、旅に出るのでございます」

「なんにしても、エラく大釜らしいが、いったい何升炊きだい」  
「はい、八升炊きでございますよ」

「八升炊き！ 驚いたなあ、その釜で飯を焚いて食べて、まだお腹がすくのかい」

「はい、はい、それでも直ぐにお腹がすいてしまいますが、意地にも我慢ができないのでございますよ」

斯かよう様に話をしている間に、釜の中がフツフツと沸騰をはじめて参りました。この時、竜之助がフト考えるよう、

「婆さん、釜が沸いてきたようだが、米はどうなんだい、釜ばかり仕掛けても、中へ入れるお米というものがあるのかい」

「はい、はい、お釜一つでさえ、この通り重いものでござんすから、とても、この中へ入れて炊くお米まで持つて歩くわけには参りませぬ」

「冗談を言つてはいけない、食べるためには、釜よりは米がさきだぜ、米が有つても釜がないという時には、何とか遣やりく繰りはつくだろうが、釜がこの通りグラグラ沸き出しているのに、米がないでは、食べて行けないじゃないか」

「いえいえ、お米ばかりが食物ではございません、肉というものがございます」

「肉！ 贅沢ぜいたくだなあ、米のない里はないが、肉はそう簡単には求められまいぜ。だが、婆さん、肉ならばお前、持合せがあるというのかい」

「はい、それはもう不自由は致しませぬ、肥え太った美肉というわけには参りませんが……」

と言ったかを見ると、婆さんはやにわに、腰に巻いた真紅のゆもじを引脱いで、真裸になったと覚えたが、身を躍おどらしてグラと沸騰する大釜の中へ、われとわが身を投げ込んでしまいました。この早業には、さすがの竜之助も、

「あつ！」

と言つて見えない眼を睜みはつたが、見えないはずの眼がありあり

と見える。釜の中では老婆の肉が盛んに煮えつつあるのです。なるほど、これは肥え太った美肉とは言えないが、骨附きの瘦肉やせにくではあるが、肉は肉に相違ない。肉の持合せに不自由はないと言ったが、なるほど、これはお手の物だから、携帯洩れのあるうはずはない。これ以外、別段、野菜の附合せ物を入れたりするわけでもなし、砂糖、醤油、味噌、割下わりしたといったような調味料は、いささかも加入されないが、肉そのものは、骨ごとよく煮上っている。竜之助を、あつ！と言わしめた瞬間、また以前に変らぬ老婆の声があつて、

「いかがでございます、よく煮えました、あなた様も、ひときれ一片召上れ」

いったい、ドコで物を言うのかと、見えないはずの眼をみはつて、そこらを見廻すと、婆さん、以前と同じような澄ました面かお

で、釜前に火をくべていて、片手には大串おおぐしを持って、それ釜の中の肉を突きさしては頻しきりに食べている。

「一片召上つてごらんさいませ、とても若い肉のように肥え太つてあぶらみはございませんが、噛みしめると、少しは味も出て参ります、一ついかが」

と言つて、釜の中へまたも大串を突込んで、一片の肉をつつき出して竜之助の手に持たせつつ、自分はほかの串へさしては食い、食つてはさし、その貪むさばり食うこと、全く餓鬼そのものの形相であります。老婆から授けられた一本の串を、さすがの竜之助も食い兼ねて、持扱つている間に、飢えたる老婆は早くも一釜の肉を平げてしまいました。

それと同時に、大釜の下に焚かれた焚火も、ぼつたりと消えてしまいますと、すつくと立ち上つた老婆の腹は、脹満のよう

に膨ふくれ上つておりましたが、

「やれやれ、これで当分お腹が持ちましよう、飛んだお邪魔を致しました」

と言いながら、大釜の一端に口をつけると、釜の中に残った汁を、鯨のように吸い込んでしまい、それから以前のように大釜には縄をからげて、われとわが背中へ背負い込み、そのまま、以前の通り、押しつぶされるように前屈みの姿勢で、えっちら、おっちらと歩み出し、岩倉村を経て東山の方へ姿を消してしまいました。

六十二

ここは、三千院とは対岸的存在。三千院の大伽藍だいがらんに比べる

と、極めてみすばらしい存在ではあるが、その名声を以てすると三千院にもまさる寂光院。

寂光院の塔頭たつちゆうに新たななる庵いおりを結んだ、一人の由緒ゆいしよある尼法師、人は称して、阿波あわの局つばねの後身だとも言うし、島原の太夫の身のなる果てだと言う者もあります。

この尼法師、年はもはや五十路いそじを越えているが、その容貌はつやつやしい。机に向つて写すは経文かを見ると、そうではなく、平家物語の校合きやうごうをしているのであります。

「文治元年九月ながつきの末に、かの寂光院へ入らせおはします。道すがらも四方よもの梢こずえの色々なるを、御覧じ過こごさせ給ふ程に、山陰やまかげなればにや、日もやうやう暮れかかりぬ。野寺の鐘の入相いりあひの声すごく、分くる草葉の露しげみ、いとど御袖濡れまさり、嵐烈しく、木の葉みだりがはし。空搔かきくもり、いつしか打

ちしぐれつつ、鹿の音かすかに音づれて、虫のうらみも絶え絶えなり。とにかくに取集めたる御心細さ、譬たとへ遣やるべき方もなし。浦伝ひ、島伝ひせしかども、さすがかくはなかりしものをと、思召おほしめすこそ悲しけれ。岩こけに苔こけむしてさびたるところなれば、住ままほしくぞ思召す。露むすぶ庭の荻原霜枯れて、籬まがきの菊の枯れ枯れに、うつろふ色を御覧じて、御身上とや思しけむ、仏のおん前へ参らせ給ひて、『天子しやうりやう、じやうとうしやうがく、一門亡魂、とんしよう菩提』と祈り申させ給ひけり。

いつの世にも忘れ難きは先帝の御面影、ひしと御身に添ひて、いかならむ世にも忘るべしとも思召さず。さて寂光院の傍らに、方丈なる御庵室を結んで、一間をば仏所に定め、一間をば御寝所にしつらひ、昼夜朝夕の御勤め、長時不断の御念仏、

怠ることなくして月日を送らせ給ひけり」

右の文章、平家物語灌頂かんじょうの巻のうちの一節、天子しよりよ  
う以下の仮名文字に漢字をあてはめんとして、校合の筆を進め  
ておりましたが、ふと、参考の書を求めんと、書棚に立った時  
から、この若々しい老尼の頭に魔がさしました。

というのは、参考書として、仏典の字引を求めて来るつもりのを、  
ついで、机の上に持ち来たしたところを見ると「古今著聞集ここんちよもんじゅう」。  
しかも、手に当つた丁附ちようづけのかえしが巻の第八とありましたこ  
とから起つたのです。

「ある人、大原の辺ほとりを見ありきけるに心にくき庵ありけり、立  
入つて見れば、あるじとおぼしき尼ひとただ独りあり、すまひよ  
りはじめて事におきて優にはづかしきけしきたり、しかるべ  
きさきの世のちぎりやありけん、又此人をたぶらかさんとて

魔や心に入りかはりけん、いかにもこのあるじを見すぐして立ちかへるべき心地せざりければ……」

これから平家物語が、著聞集に乗換えられてしまったのは、魔の為なすことというよりほかはありますまい。かくて心が乱れそめて、

「ちかくよりてあひしらふに、この人思はずげに想ひて、ひきしのぶを、しひて取りとどめてけり、あさましう心うげに思ひたるさま、いとことわりなり、何とすとも只今は人もなし、あたりちかく聞きおどろくべき庵もなければ、いかにすまふとてもむなしからじと思ひて、ねんごろにいひて、つひにほいとげてけり、力及ばで只したがひるたるけしき、ひとへにわがあやまりなれば、かたはらいたき事かぎりなかりけり、したしくなつて後、いよいよ心地まさりて、すべきかた

なかりければ、さてしも、やがてここにとどまるべきものならねば、よくよく拵こしらへ置きて男歸りにけり、さてまた二三日ありて尋ね来てみれば、かのすみかもかはらであるじはなし、かくれたるにやとあなぐりもとむれども、つひに見えず、さきにあひたりしところに歌をなんかきつけたりける、

世をいとふつひのすみかと思ひしに

なほうき事はおほはらのさと」

それから物ぐるわしくなつたこの若々しい老尼は、六道も灌頂も打忘れて著聞集に引かれて行くことが浅ましい。

「山に慶澄註記といふ僧有りけり、件の僧くだんの伯母をばにて侍りける女は、心すすきすすきしくて好色はなはだしかりけり、年比としごろのとこにも少しも打ちとけたるかたちをみせず、事におきて、色ふかく情ありければ、心うごかす人多かりけり、病を受け

て命をはりける時、念仏すすめければ申すに及ばず、枕なる  
さほにかけたる物をとらんとするさまにて手をあばきけるが、  
やがて息たえにけり、法性寺辺に土葬にしてけり、其後、二  
十余年経て建長五年の比、ころ改葬せんとして墓をほりたりけるに、  
すべて物なし、なほふかくほるに、黄色なる水のおぶらの如  
くにきらめきたるがわきいで涌出けるを、汲みほせどもひざりけり、  
その油の水を五尺ばかりほりたるになほ物なし、底に棺なら  
んと覚ゆる物、すき鋤にあたりければ、掘出さんとすれども、い  
かにもかなはざりければ、そのあたりを手を入れてさぐるに、  
頭の骨わづかに一寸ばかりわれ残つてありける、好色の道、  
罪ふかきことなれば、後までもかくぞありける、その女の母  
も同じ時に改葬しけるに、遙かに先だち死にたりける者なれ  
ども、この体かはらでつづきながらにありける」

そこへ、また一つの魔がさして来ました。今までののは、偶然がもたらした内からの魔でありましたが、今度は外からさした魔であります。

「あれ、何かさし入りました」

書卷の眼は鞠まりのように飛んで、戸締りの棧さんに向つたのは、その戸の外で、縁の近くに忍び寄つた、外からの何者かの気配があるからです。

昨晚、花尻の森から人魂ひとたまが飛んだのも、ちようどこの時刻であります。

六十三

今までは、内からさした魔であるのに、こんどのは、まさし

く外からさした魔でなければならぬ。

「あつ！」

と、総身そうみに水をかけられたように、立ち上った途端に、硯すずりの水をひっくり返してしまいました。机の上に書きさしの紙がべつとり、せつかく六道能化ろくどうのうげまで来た校合の上に、硯の海が覆くつがえつて、黒漆の崑崙こんろんが跳り出します。

あわててそれを拭き、それを取りのけ、それをあしらい、しているうちに、また机の前へ坐り直しはしたが、ぞくぞくとして寒気さむけがこうじ、肌がこんなに粟になる。

おぞけをふるうという心持。誰ぞ外へ人が来たらしい。

見廻すこの室の内、僅かに八畳の間、周囲ふすまの襖は名ある絵師に描かせた花野原。

絵に見る花野原をかきわけて、いまにも人が出そうでならぬ。

これではいけない、多年の平家物語の校合も、せつかくこの六道能化まで来たのに、あとはめちやめちや、ここでブリ返して、こんなに魔がさすようではならない。

老尼は、われと気を鎮めてみたが、魔障わが精進をさまたぐるか、と言つて躍起となる意気もないようであります。というのは、この老尼は修行のために、ここに静処を求めたのではなく、きょうげんぎ狂言綺語の閑居を楽しまんとする人であつたからでしょう。様こそ法体にこしらえてはいるが、これも仏道精進のためというよりは、世間体をのがるには、この様が最も許されやすいという身勝手から出でたもので、要するに趣味の人であつて、修道の人でないからでしょう。五十路いそじを越えて、まだこんなに水々しいところが何よりの証拠で、都にあつてぎおんしやうじや祇園精舎の鐘の声を聞くよりは、ここに閑居してさらそうじゆ沙羅双樹の花の色の衰えざる

を見ていたい。

そういう未練な仇あだし心が、この場で、内外から魔の乗ずる隙を与えた、いわば自分の造りおけるわなに、自分がかかつておびえるようなものです。

でも、外からさした魔は、それつきりで、あとは音沙汰おとさたがありません。周囲を見廻す。秋草の中に何者かがおりそうな気持は変らないが、そうかといって、外からねらわれる心配さえ解ければ、内からさして来る魔の手は、いくらでも取消しの道はつくというものです。なんにしても、今晚はめちやめちや、いやいや、昨晚もあの時間からめちやめちやでした。花尻の森ひとだまから人魂が飛んだというあの噂を聞いて、それからいい心持はしなかつた、あれを、知らず識しらず今晚まで持越したものの、こんな晩には早寝に限ると気がついたが、いま寝についても早寝に

はならぬ。とにかく、さんざんの体で、この場の校合はあきらめ、あとの補修は明日のこと——

そう思つて、書齋の次の間は寢間、そこにしつらえてある夜のものに埋もれて、今日の厄落しやくおとを終ろうと、すらりと立つて、片手には丸形の行燈あんどんを携え、秋草の襖へ手をかけると、なんとなく心が戦おのく、その気持を取直して、これもスラリと襖をひらき、誰に憚はばかることもない己おのが独自の世界の中に、一足踏み入れると……

「おや」

と言つて、その取落そうとした行燈を投げ込むようにつきつくと、侵入すべからざるところに侵入者があつて、自分の寢間の中に、しかも、こちらが宵の間にほどよく敷いて置いた夜具の中に、誰かが寝ている。

枕許には大小が置いて、その上に黒い頭巾が投げ出してある。そこで若い老尼は全く立ちすくみました。もう、あつという言葉も出ません。

ところが、この奇怪きわまる侵入者は、苦しそうな声を出して、

「御免下さい、あんまり疲れましたから、それに恥かしながら飢えに堪え兼ねて……」

と言いました。

「え、何でございますか」

無意識に若い老尼が言葉を返しますと、

「お腹がすいたので」

こいつ、あの餓鬼草紙の二の舞をやっている。餓鬼草紙から脱け出した老婆は、大釜を背負い込んでいたが、この餓鬼は釜

の代りに大小を持つている。

「それは、お困りでございませうがなあ」

「疲れはしたし、お腹はすいたし」

どうも、さもない。お腹がすいた、お腹がすいたと、あまり繰返さないがよろしい。武士は食わねど高楊枝とも言い、腹がへつてもひもじうないと言う。それだのに……

この物騒な侵入者は、物騒なわりに気が弱過ぎる。

作り声ではない、ほんとうに疲れきつてもいるし、飢えきつ

てもいるし、或いは疲労以上の、飢餓以上の、瀕死ひんしの境にいる

のではないかとさえ見られるのですから、老尼にも一点、憐憫れんびん

の心が起つてみると、恐怖心の大半が逃げました。その逃げた

あとへ、若干の勇氣というものが取戻されたものですから、や

や本心にも返つたし、本来、こうして、この年で、水気みずけたつぷ

りな侘住居わびずまいをしていくくらいですから、心臓の方も、さのみ老いてはいなかつたのでしよう。

「それはお気の毒な、まあ、ちよつとお起きあそばせ、おぶ漬を一つ差上げましょう、何ぞ粗末な有合せで」

「そうですか、それはかたじけないです、では、御免を蒙つて」と、寝ていた弱気の侵入者は起き直りましたが、ほんとうにこれはこの世の人ではない、病みほうけ、疲れきつて、その様、全く哀れげに見えるものですから、老尼はいよいよ気になりました。

侵入者は、起き直つたとはいうものの、立つて挨拶をしようではありません。蒲団ふとんの上に突伏つつぶすように坐り込んだなりで、物を考えているよりは、哀れみを乞うているに似たこの姿がいじらしい。

侵入者をいじらしがるわけもないものだが、老尼は、もうこつちのものだと思いました。傷ついた虎は吠える犬にもかなわないう、という見極めがすっかりつきましました。

六十四

それからしばらく、侵入者は、さっぱりとした取合せのよいお膳について、箸はしを与えられました。その傍らにお給仕役をつとめながらの若い老尼が、あやなすように話しかける。

「あなたは、どちらからおいでになりましたの」

「関の大谷風呂に暫く逗留しておりました」

「お国はドチラですの」

「東国の方ですがね、諸所方々をフラつきましたよ」

「お目がお悪い御様子ですが」

「はい、目がつぶれてしましましてね、つまり天罰というやつなんですよ」

「どうして、そういう目におあいになりましたの」

「十津川の騒動の時にやられました」

「ああ、あの天誅組てんちゆうぐみの騒動に、あなたもお出になりましたか」

「はい、十津川では天誅組の方へ加わりました、中山卿だの、それから松本奎堂まつもとけいどう、藤本鉄石なんていう方へ加わりました」

「まあ、それは頼もしい、天朝方でございますね」

「なあに、頼もしく入ったんじゃないやありませんよ、頼まれたもんですからツイね、つまり、人生意気に感ずというわけなんですよ」

「その前は、どちらに」

「その前は壬生みぶにおりました」

「まあ、壬生浪みぶろう……」

「恐れるには当りませんよ、これもふとした縁でしてね、好んで新撰組に加わったわけじゃありません」

「では、あなたはずいぶん、お手が利きいていらつしやるのね」

「剣術が少し出来るんでね、まあ、それで身を持崩したようなものです」

「よくまあ、でも、その御不自由なお身体からだでねえ」

「こんな不自由な身で生きていくというのが不思議なんです、いいや、不思議なんて、そんな洒落しやれたことではないです、恥さらしなんです、業さらしなんです、まあ普通の良心を持つている奴なら、とつくに、どうかしてるんですがね、こんな奴は、天がなかなか殺さないんです、つまり、なぶり殺しなんです、ね、

あつさりと殺してしまふには、あんまり罪が深い」

「そんなことはありませんよ、自暴やけにおなりになつてはいけません、あなたなんぞは、お若いに、これからが花ですよ」

「ふーん、これから花が咲くかなあ」

「咲かなくつて、あなた、どうするもんですか、わたしなんぞごらんなさい、ことし、幾つだと思召おぼしめす」

「左様、女の年というものは、若く言つて叱られる、老ふけて言うと恨まれる、当らんものだなア」

「当ててごらんなさいよ、あなたはお目が見えないから、皺しわがわからないので、それで有難いのよ」

「ふん、当ててみましょうか」

「当ててごらんなさいましょ、御遠慮なく、お世辞でなく、正直な判断を聞かせて頂戴」

「ふーん、鬼頭天王のおばさんと、ほぼ同格かな、あれより少し若いかな」

「鬼頭天王のおばさんというのは、どなた？」

「うん、いや——拙者の伯母おばなんだが」

「その伯母さん、お幾つ？」

「そうさなあ、四十……」

「それで、わたしは？」

「それより、若いかなあ」

「有難う」

「何でお礼を言います」

「有難う」

「年を言つて、お礼を言われるはずはないのだが」

「言つてみましょうか、わたしの本当の年を」

「おつしやつてみて下さい」

「酉とりの五十三——七月生れよ」

「ははあ、五十三」

「いいお婆さんでしょう、四十幾つかに見られて嬉しい、ついでに、わたしの人柄を言っごらん下さい」

「人柄とは？」

「どんな衣裳をつけて、そうして、何を商売にしていますか、それを当ててみてごらん下さい」

「拙者うらないはトを稽古して置かなかつた。だが、お一人暮しですか、こんな淋さびしいところに」

「それでお察しなさいよ——わたしは尼さんなのよ」

「ははあ、尼さんですか、寂光院には美しい尼さんがいるという話だが、それが、あなたなのでしたか」

「美しいかどうか、そこは保証ができません、昔は美しかったかも知れませんが、なにしろ五十三ではねえ」

「尼さんにしては、粹いきな尼さんですね、砕けた尼さん」

「今は尼さんですけど、前身は何だと思召すの」

「また、はじまつたな、八卦人相見はつげにんそうみに頼まれて来たようだ」

「では、そういう話はやめて、あなたの一代記を伺いましょう」

「長いからなあ」

「夜が明けてもかまいません」

「後刻、ゆっくりお聞かせ致しましょう、今晚は疲れておりますから、寝やすませて下さい」

「そうそう、わたしとしたことが、自分ばかりいい気になって、では、お寝みなさい」

「いいですか、泊めてもらっても、あなたのお迷惑にはなりま

せんか」

「なりませんとも。なるくらいならばお泊め申しは致しません」  
「あなた御自身はいいとしても、周囲がうるさいようなことは  
ありませんか」

「ありませんとも。ありましたとしても、そこが世捨人の強味と  
いうものでしょう、周囲などには驚きませんが、内から魔がさ  
すのがいちばん怖いことです。あなたは、魔だと思いましたが、  
本当は思い違い、かわいいそうなさすらい人ですから、それで大  
切にして上げますのよ。それはそうと、ごゆつくりお寝み下さ  
い」

「では御免蒙りまして。飢えが満たされると睡眠の慾が昂上し  
て来ました、もう、意地も遠慮もありません、休ませていただ  
きます」

「さあ、どうぞ」

そこで、侵入者は、以前の蒲団ふとんの中へ案内されると、忽ちたちまに、死せるもののように眠りに落ちてしまいました。

六十五

その翌朝、昨夜の侵入者と、この庵いおりの主あるじなる若い老尼とは、お取膳で御飯を食べました。

初茸はつたけの四寸、鮭さけのはらら子、生椎茸なましいたけ、茄子なす、胡麻味噌などを

取りそろえて、老尼がお給仕に立つと、侵入者が言いました、

「何から何までのおもてなし、恐縮千万に存じます、それに、今になって気がつくのと、昨晚、あなたはお寝みになりませんよう  
で」

尼さんが答えて、

「はい、寝みませんでした」

「どうも、重ね重ねお気の毒なことをしたと感じています。実は昨晚、寝ませていただく時に、それと覚らないでもありませんでした。一人が寝れば一人が寝めない清浄な庵室住居を犯して、お気の毒千万とは思いましたけれども、意地にも、我慢にも、眠いものでしたから、御遠慮を申し上げる礼儀のなかつたことを、お詫<sup>わ</sup>び申し上げます」

「いやにお固いのね、一晚ぐらいあなた、寝まなくつたって何ですか、おかげで昨夜はすつかり、為<sup>な</sup>すべき仕事を為し終えて、気がせいせいしているところですよ」

「ははあ、為すべき仕事とは何ですか、隠遁生活にも内職があるものですかねえ」

「ありますとも、長い間の書物の校合を、昨晚すっかり済ませ  
てしまいました」

「書物の校合——では、あなたは女学者なのですね」

「女学者はいいわね」

「でも、書物の校合などは、相当の学力がなければ出来ること  
ではないでしょう。いつたい、何の書物ですか」

「平家物語」

「平家物語をね——平家物語の校合を、ここで一人でなすつて  
いらつしやるのですか」

「はい、静かでよろしうござんすからね、それにところがとこ  
ろでしょう、気が乗りましたね、どうかすると自分までが書物  
の中の人となつてしまいます」

「それは風流な御生活ですな、世を捨てたとは言い条、文字を

もてあそ  
弄ぶようでは、まだ本物ではありませんね」

「おなぶりになつてはいけません。本来、わたしは出家する気でこの姿になつたのではございませんから、あなたのおつしやる文字を弄ぶ方が本職で、お勤めは附けたりのようなものなのです」

「そうですか、いや、それはどちらでも拙者の利害にはなりませんよ。いやどうも、御馳走さまになりました、おかげさまで飢えを満たし、雨露をしのぎ、温かな一夜を恵まれ、これで生き返つた心持です、この感謝の心の消えないうちに、お暇いとまいたしましょう」

「まあ、お待ち下さいませ、左様にお急ぎにならずともよろしいでしょう。そうして、あなたは、これからドチラへお帰りになりますの」

「左様、関の清水か——山科谷へ」

「そこへお帰りにならねばならぬ義理がおありなのですか」

「義理で帰るといふわけではないのです、その辺へ落着くより仕方がないじゃありませんか、いまさら壬生<sup>みぶ</sup>へは行けないし、そうかといつて十津川入りもできまいから」

「帰らなければならぬ義理がおありにならないならば、そうして、ドコにおいでになつても、お宅で皆様が御心配にならない限り、ここにおいでになつてはいかがでございますか」

「それはまことに御念の入つた御親切です、拙者のような浮浪人に、いつまでもここにおれとおっしゃるのですか」

「あなたの方でおさしつかえのない限り」

「夢ではないでしょうかなあ、こんな静かなところに、しばしなりとも、このうらぶれの身を休ませていただき得れば、夢に

もまさる幸福なんですが、それで、あなたは後悔をなさるようなことはございませんか」

「懺悔ざんげをしきつた者には、後悔はないはずでございます、どうかお心置なく」

「はてな」

「何を考えていらつしやいます、あなたは、夜具が一組しかないところへ居候いそうろうに来ては気の毒だと、そんなことを考えていらつしやるのでしよう、それは御心配御無用よ——ちやあんと融通の道はありますから」

「でも、危ないですよ」

「何があぶないものですか、あなたこそ、目も見えないくせに、足元があぶないとは、こつちから言つて上げたいことなのです」  
「では、お言葉に甘えましょうかな」

「そうして下さい、あなたに不自由をおさせ申しは致しません、その代り、わたしの仕事もお手つだいをして下さい」

「拙者の身で叶<sup>かな</sup>うことならば何なりとも」

「まあ、雨が降り出してきましたよ、これこそ本当にやらずの雨、今日は一日、あなたのお身の上話を承りましょう、お望みならば、わたしの前身……鬼でも蛇でもございませぬが、お話し申し上げれば西鶴の種本になるかも知れませぬ」

「しからば——」

侵入者は、ついに客人としても扱われることになりました。無制限の逗留と、無条件の寄食を許されて……

神尾主膳は、このたびの新しい使命の下に、いよいよ京都へ行くことにきめて、その暫時の名残りのような意味で、江戸の市中を一通り見て置こうと思いました。

そもそも、主膳がこのたびの使命というのは、前にしるしたように、全く無任所として、京都の鷹ヶ峰に住っておればいいということだけです。そうして遊びたいだけ遊んで、その見たところと、聞いたところと、感じたままを、江戸のある方面へ知らせればいいというだけの役目であります。つまり情報部とか、かくしめつけ隠目附とかいうような意味、悪く言えば一種の高等スパイのようなものらしいが、当人はそうは思いません。

まあ、昔の石川丈山という男の役どころをつとめると思えばいい。それに主膳はいささか気をよくしているのですが、この丈山は詩は作れない、歌は詠よめないけれど、風流の道は心得て

いる、この風流というのが、御承知の通りの悪風流である分のことです。この男の使命を、なぜ石川丈山にたとえたかということ、当人にもまだよくはわからず、これに囑する人もくわしくは説明しませんでした。スパイである、諜者である、という名よりは、詩仙堂の隠者になぞらえる方が聞きよくもあるし、当人の気持もいいというものです。

そういう意味で、しばらくはまた江戸の地を離れなければならぬ。長州征伐に行く軍人と違って、これは必ずしも生還を期せずという出征ではないから、これが江戸の見納めという意味にはならないが、それでも風向きの都合上、しばらくは帰れないと思わなければならぬ。よって神尾は、江戸の市中を一通り見学して置きたいという気になったものでしょう。

江戸に生れて、江戸を見ない人はいくらもあるものです。江

戸も、本場を知って場末を知らない人もあれば、場末にいて盛り場を知らない人も、いくらもあるものであります。

神尾主膳も、祖先以来の江戸っ子でありながら、江戸というものの地理の多分を知りません。あるところは知り過ぎているが、知らないところは、他国の人の知らないよりも知らない、そういう意味に於て、江戸の市中の再吟味ということが大切だと思いました。たとえば今日、洋行する人が、あわてて日本の内地の名所見物をして置いて出かけるというのと、同じような筋合いになるではありません。

このたびの就職から、新しく雇い入れた渡り者の年寄の仲間ちゆうげんを一人従えて、市中見物の門出に、根岸から、広小路の方へ出て見ると、しよくしやうしんみちおびただ食傷新道に夥しい人の行列がありました。無数の人が長蛇の列をなして、町並の軒下に立って、三丁も五丁もつな

がつている。

「何だい、あれは」

「どんだん焼を買いに出たのでございます」

「どんだん焼？」

神尾が立ちどまって注視しました。どんだん焼を買うべく、この早朝から、この人出。タカがどんだん焼ではないか、神尾には何の意味だかわからない。それを渡り者の老仲間<sup>に</sup>心得がある<sup>と</sup>覚えて、語り聞かせることには、

「近ごろは、ああして、どんだん焼が御大相に売れるんでございます、朝早く行きませんかと売切れになつちまうんでございまして、それであの通り行列がつづきます」

「このどんだん焼はそれほど名物なのか、特別に旨い<sup>うま</sup>のか」

「いいえ、べつだん旨いというわけでもございせんし、近頃

の新店で、べつだん名物というわけでもございませぬが、変な風説が起りました、近ごろは、ああやって飲食の前へ人立ちをするのが流行り出しました」

「変な風説というのは、いったい何だ」

「なあに、つかまえどころがあるわけではございませぬが、つまり、関東と、関西と、近いうちに大合戦がはじまる、いつ、薩摩や長州が、江戸へ攻め込んで来ないものでもない、そう致しますと、食糧がひつぱくになる、軍の方の兵糧には困りませぬが、一般市民が食うに困る、米も出廻らなくなるし、麦も来なくなる、そういうわけで、どんどん焼が急に売れ出すようになりました」

「ふーむ」

と神尾主膳は、まだその行列をながめて突立っている。

神尾が動かないから、渡り者の老仲間も動くわけにはゆかない。テレきつてお傍についていたが、やがて、

「一つ買つて参りましょうか」

「馬鹿！」

と、眼の玉の飛び出すほど、渡り者の老仲間が叱り飛ばされました。

渡り者の老仲間は、せつかく親切ごころで言ったのに、頭ごなしにやられたので、何がお気に召さなかつたのか、それがわかりません。見れば神尾は三ツ眼で、行列を睨にらんだまま、怒気と、軽蔑を満面に漲みなぎらせている。

馬鹿！ 時勢が険悪だと言つたところで、天から矢玉が一つ降つて来たわけではないぞ、地から薩長が湧いて来たわけではないぞ、それに今から食糧の心配をして、どんどん焼を食いた

さに、こうして早朝に時間をつぶし、仕事をつぶして、行列を作るとは何たる醜態だ！　これが江戸っ子の仕業か！　武士は食わねど高楊枝も古いものだが、およそ江戸っ子の全部が武士でないまでも、江戸っ子は江戸っ子としての恥を知らなければなるまい。こいつら、江戸っ子の皮をかぶった江戸っ子ではあるまい、他所よそから流れ込んだ江戸っ子の居候共だろう。山猿や、百姓共が、ガツガツしてこのザマなんだ、少なくとも、二代、三代、江戸の水を飲んだ奴に、こんな恥を知らぬ奴はないはずだ。面つらを見てくれよう、面を見ればわかる、江戸っ子の面よごしめ！

神尾主膳は、こう思うと、ズカズカ近寄って、その行列の面つらを二つ三つ、つかまえて調べてみました、

「御安直な面あしてやがる、大方、四国猿か、篠熊さくくまの親類筋だ

ろう」

こう言つて、悪態をつき、唾を吐いて歩き出したのですから、渡り者の老仲間ろうちゆうげんも、これに続きました。

歩きながらも、怒気どきふんぶん忿々たる神尾は、繰返して胸の中で、

「江戸っ子も下落したもんだなあ、だが、この恥知らずは、江戸っ子ばかりの罪じゃねえぞ、政治が悪いんだ、まだ、天から矢玉が降つて来たわけじゃアなし、西国の又者が攻め込んで来たわけでもなし、天保の飢饉がブリ返して来たというわけでもないのに、もう食物でガツガツしてこのザマだ、一つには江戸っ子の下落、一つには政治向の墮落、江戸の台閣には人間がいねえのかなあ」

こういう余憤に駆られながら、神尾主膳主従は、昌平橋高札場のところまで来て見ると、橋のたもとから引廻し蕎麦に至るまで、また、人だかり、人騒ぎが穏かではありません。

今度は、広小路の時のように一列は作らないが、無数の人がかたまつて、押し合い、へし合い、後なるは前なるを引戻し、横から来るのは突きのけ押し倒し、襟髪を引っばるもの、足もとをさらおうとする者、前なるは必死で、しがみついて放すまいとする、その事の体が平常ではありませんから、神尾が立ちどまつて、篤と見定めると、彼等が押し合い、へし合いしている中央に、一台の馬車があるのであります。

その一台の馬車を中心にして、これらの群集が、押し合い、へし合い、なぐり合いをしているのだということがわかりまし

た。つまり我勝ちにあの馬車に乗ろうとして、押し合い、へし合い、もみ立てているのだということがわかりました。

馬車といつても、バスといつても、その頃はまだ珍しいものでありました。その当時に於ては、まだ、バスというものも、馬車というものもなかったから、神尾主膳には、バスも馬車もわからない。なんでみんなが、あれを取りまいてこんなに騒いでいるのか、それがわからない。ことに、さいぜん食傷新道で見た行列は、おさんどんや、山猿連のようだが、これは見ていると、しかるべき身上の奴が多い。町人では大<sup>だいじん</sup>尽<sup>かぶ</sup>株、一党の頭株といったような連中までが、あの通り、血<sup>ちまなこ</sup>眼になつて取つつき引つついている、見られた図ではない。

それをまた、世間知りの渡り仲間が説明してくれました。

つまり、このごろ「馬車」というものを流行<sup>はや</sup>らせた奴がある、

やつぱり毛唐かぶれで、あつちから見て来たやつの猿真似なん  
でがんしようが、ごらんの通り、大八車の上へ四本柱を押立て、  
ズックで屋根を仕かけ、中へ棧敷を立て込んで、早く言ってみれ  
ばそれ、船に屋形船というのがありまさあ、あの伝を馬で行つ  
ただけのもので、屋形車といったもんでがんしよう、それを馬  
で引かせてトット、トットと走らせ、一人前おいくら、先様お代せんさま  
りという仕組みで席料を取る、それが面白いと言つて、流行物はやりもの  
になり、われ乗り遅れじと、あの通りの大繁昌。

ちえッ！ これは食い物とは違うが、先を争つてガツガツの  
醜態は甲乙なし！

かく正面から、乗り遅れまじの血眼の大手のほかに、ひそかに  
裏へ廻つて、御者に袖の下をつかつて、早くも席に納まり返つ  
ている奴がある、あいつらの得意げな面つらを見ろ、ふんぞり返つ

て幅を取つて、親類の奴や、おべつかの奴を引立てて、納まり込んでゐるあいつらの面を見ろ、どんどん焼の場合と違つて、こいつらが、みな相当身分のありげな奴だけに一層あさましい、こいつら、やっぱり場違いの江戸っ子だろう、いかに下落したからといつて、本場の江戸っ子に、あんな奴がありつこはない。時勢は、どうか知らないが、お膝元のこの醜態はどうだ。神尾主膳の面は、赤怒から白怒に變つて行くものようであります。

六十八

昌平橋を渡つて姫ひめいなり稻荷のところへ来ると、そこにまた人だかりがあります。見ると願人がんにんぼうず坊主がチヨボクレをうたつてゐる。

本来、願人坊主はチョボクレを語るべきものではない。これは東叡山の配下で、寒い朝でも赤裸で、とうとうと言つて人の門かどに立って銭貫ぜにもらいをするのだが、無芸と無頼とを以て聞えてゐる。どうかすると謎々なぞなぞのようなものを持つて来るのもある。一文人形を並べて、これはこれでも王子の稲荷の大明神、色は白くも黒助稲荷なぞと出鱈目でたらめを言つて、一文人形を二三十も並べて、いちいち名前をくつつけて銭貫いをすることなんぞは、芸ある方のうちだが、この願人坊主は、能弁にチョボクレを唱えてゐるところを見ると、願人坊主としては知能のある方だと思つて、暫く耳を傾けていたが、その文句に何ぞ思い当ることがあると覺しく、一くさり終ると、渡り仲間を使にやつて、そのチョボクレの願人坊主を附近の繩のれんに招き寄せました。

神尾主膳は、件くだんの願人坊主を繩のれんへ連れ込んで、これに

一杯飲ませ、

「さて、只今、その方が姫稲荷で唄ったチヨボクレを、もう一遍ここで唄ってくれ、いくら長くてもかまわん、初端しよつぽなから終りまで唄って聞かせてくれ」

「お耳みみざわりで恐れ入りました、どうか悪あしからず御勘弁なすつていただきてえもんでござんす」

「勘弁はあるまい、その方も商売で唄っているのだろう、それが商売で、つまり食うと食わぬの境だから、それで唄っているのだろう」

「御意ごいの通りにございます、しがねえ商売でございませうが、これも意気地なしの身過ぎ世過ぎ、致し方あございません」

「お前を叱しかっているのじゃないぞ、後学のために一つ聞いて置きたいのだ、さいぜんの立聞きで、よつぽど面白いと思つたが、

忙がしくて追いかけてきれない、ここで改めてゆつくり一つ聞かせてもらいたいのだ」

「唄えとおっしゃられると、これが商売でござんすから、唄わねえとは申し上げませんが、なにぶん作が作でございますから」

「誰の作だ」

「ええ、その作者てえのがわからねえんでげすよ、奥坊主のうち  
に作者があるんだそうでげすが、その奥坊主の中の誰の作でござんすか、わつしどもにや、ちつともわからねえんでげす、ただ、当時、こういうのが流行はやっているから唄え、受けるぜ、儲もうかるぜ、と仲間が伝えてくれるもんでげすから、その口真似をやっているだけのもんでげす、文句がよく出来ておりましたからって賞ほめていただかなくてようがすが、もしまた誤あやつて穩まかならねえところがございまして、わしの罪ではございせん」

「それはわかつている、なにも貴様の口占くちうらを引いて、罪に落そうなんぞというのじゃない、ただ、そういう唄を聞いていると、最も正直な時代の声が聞えるというわけだ、おべつかや、おてんたらと違って、言わんとするところを忌憚きたんなく正直に言っているから、それで時代の風向きもわかるし、政治向の参考にもなるというものだ、ただ、一つの学問として聞いて置きたいのだから、正直に唄え」

「左様な思召おぼしめしでござんすなら、一番、腮あごに撚よりをかけてお聞きに入れやしようかな」

願人坊主はようやく酔いも廻つて、いい気になり、ことにこの殿様は、話がわかつてらつしやる、気前もよろしくてらつしやる、お聞咎ききとがめでお調べの筋と来るんじやなし、学問のために聞いて置きてえとおつしやるんだから、ここは一番、願人坊主の

腮の見せどころ、いや咽喉の聞かせどころと舌なめずり、咳払  
いよろしくあつて、樽床たるしやうぎ几を宙に浮かせて――

お聞きに入れます「当世よくばり武士」チヨボクレ始まりさ  
よ……

そもそもこのたび

京都の騒動

聞いてもくんねえ

長州征伐咽喉のどもと元過ぎれば

熱さを忘れたたわけの青公家あおくげ

歌舞伎芝居のとつたりめかして

攘夷攘夷とお先まつくら

おのが身を焼く火攻めの辛苦も

とんぼの鉢巻、向うが見えない

山やま気でやらかす王政復古も

天下の諸侯に綸旨りんじのなンのと

勿体ないぞえ

神にひとしき尊いお方の

勅書を名にして

言いいたい三昧さんまい

我が田へ水引く阿曲あきよくの小人

トドの詰りは首がないぞえ

それへつらに諂へつらう末社の奴原やつぼら

得手えてに帆揚げる四藩の奸物かんぶつ

隅の方からソロソロ這はい出し

濡手で粟取るあわてた根性

眉に八の字、青筋出<sup>いだ</sup>して

向う鉢巻、すりこ木かかえて

威張つたとツても

天下の諸侯はなかなか服さぬ

足元あかるいうちこそ幸い

お国土産の芋でもくらつて

屁<sup>へ</sup>でもこき出しひツたらよかろう

おらが親分お気が好過ぎる

自分の政事を一から十まで

取り上げられても黙っているのか

おめえはそれでもいいかは知らぬが

冥途<sup>めいど</sup>にいなさる神祖に対して

なんと言いわけしなさるつもりだ

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

二百余年の社稷しゃしよくの大業

人手に渡して済むか済まぬか

わからぬながらも積つてみなさい

一朝一夕、骨も折らずに

取ったか見たかの天下じゃないぞえ

七ツの歳から駿河するがの人質

数年の辛苦も臣下の忠義に

ようようお家にお帰りなされると

門徒の争乱

大高城内、兵糧運びの

三方ヶ原みかたはらには一騎の脱走

武田北条、左右に引受け

孤立の接戦、数ヶ度の敗軍

つくづく思えば涙がこぼれる

小牧山なり、関ヶ原なり

大阪御陣も、眉に火のつく火急の接戦

夏は炎天

兜かぶとの上から照りつけられても

水も呑めない

冬は寒気が肌はだえを通して

霜をいたただき兜の緒を締め

昼夜を分たぬ艱難辛苦と

共に積ツつた七十有余の歳になつても

肉さえ食くらわらず

麁食そしいに水呑み

昔を忘れず

肱ひじを枕まくらに山野やまのに起きおき臥ふし

それに従したがう臣下しんげも同様

こんな憂目うれをなされた天下てんかを

いかに気楽きらくなお人ひとだとツても

熨斗のしをはりつけ進上しんじやう申すと

渡す間ま抜けが唐からにもあろうか

これも奸賊けんぞく四藩しはんの為ためすこと

腕うでを捲まくッてやつきと気を張たくり

ピシピシしやらかせ、しつかりしなせえ

馬うまに鞍くら置き、鞭むちを加えて

ノンノン出かける

譜代恩顧の諸侯もあるぞえ

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

安芸あきのおじさん、どうしたものだよ

お前は当家のお聾むこじゃないかえ

いわば一門同様なお方が

長州なんどのお先に使われ

狐になるとは呆あきれたものだよ

四十二万のお高はどうした

妾めかけにばっかり入れあげたのか

譜代恩顧の郎党励まし

一手に引受け長州討つたら

少しは先祖へ言いわけ立つべイ

加賀さん、どうした

お前もやつぱりお聳じやないかえ

今は息子のお代といえども

しツかりしなさい

百万以上の大きなお高を掌握しながら

豆でも食くらった鳩ではあるまい

隅にばつかりかがんでおつては

根ツから詰らぬ

大名の頭かしらか、芋の頭か

なんだかかんだか少しもわからぬ

今度は天下の安危かかに関わる

肝心かなめの大事のところだ  
腕を捲つてふんばつしなさい

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

仙台、南部や津軽の爺さん

ムクムクしないで何とか言いねえ

たとえお国は山の中でも

これまで度々たびたびお江戸へ参観さんきん

少しは世間が知れたであるべイ

天下の大事は御家の大事だ

それとも西国奸徒の野郎に

頭を叩かれあやまる所存か

グニヤグニヤ、グニヤつく蒟蒻野郎だこんにやくやろう

ことに仙台

お前のお家の先祖は高名

二百余年の静かに治まる

天下泰平の先祖は政宗

天下の諸侯を一手に引受け

いくさを致すといわれた度胸に

皆々屈服したではないかえ

それに何ぞや今の始末は

あんまり手ぬるい

万石以上の四十八館しじゅうはったて

槍先揃そろえて中国征伐

一手に引受けふんぱつしなさい

金はなくとも米はたくさん

蒸汽でどんどん積出すものなら

国は忽ち天下有福

これからふんぱつ、一旗揚げれば

天下に敵する諸侯はあるまい

徳川中古の回復諸侯と

あつぱれ言われろ

しッかりしなさい

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

次には会津の蠟燭親方

お前はほんとに忠義なお人だ

四五年このかたふんぱつ勉強

二十余万の僅かなお高で

かくまでするのは感心感心

今に奸徒が鎮静したらば

百万石には請合いなるぞえ

なおなおこの上しツかりやらかせ

因備いんびの腰抜け、呆あきれたものだよ

お前は眼前、今の君にはまことの兄弟

それに何ぞや、奸徒に一味と世間の風聞

不忠不義のお人であるぞえ

家来不足で処置ができぬか

僅か一国、二国に過ぎない

国の政事が行き届かぬとは

生きて甲斐かなき間抜けの親玉

いッそ、死んだが何よりましたよ

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

阿波の野呂麻のろまも、やつぱりそうだよ

土佐の奸徒にブルブルふるえて

へいへいあやまり

奴同様にやつこどうよさるるはなにごと

お前のお家は立派な生え抜き

尻をはしよつて、やつきとやらかせ

福井の坊ちゃん、何していなさる

ことに一旦、政事を執つたる

肩書御所持の御身じやないかえ

今の騒動はお前がべらボウ

諸侯の奥方、国もと住居すまいと

やらせたことから起つたことだよ

お前は元来立派な御家門

何はさて置き出でずばなるまい

向う鉢巻、七ツ道具をしつかり背負つて

腕も砕ける奮撃突戦

矢玉を冒おかして進まにやなるまい

それができぬは、やつぱり腰抜け

グズグズなさると首が飛びます

天下の人民、挙こぞつてにくむぞ

肥前の御隠居、昼寝をなさるか

天下は累卵るいらん、危うくなつたよ

出かけて騒動鎮めて下さい

今まで尽した忠義の廉々かどかど

ここでたゆむと水の泡だよ

会津に劣らぬ文武のお人だ

なにぶんお頼み申すとあるぞえ

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

肥後の親玉、これも同様

惜しいことだが砲術開けぬ

しかし日和ひよりを見ていぢやいけない

今度の争議を治めて下さい

黒田の親方、グズグズしないで

早く出ないか、五十二万の高禄貪りむさぼ

何していなさる

まごまごなさると

腰抜け仲間と人が言います

長崎警固も厳しくしなさい

薩摩に渡すと笑われ草だよ

雲州と姫路は何しておいでだ

お二人さんとも立派な御家門

中国山陰、押えの大名

しつかりしないと切腹ものだよ

中国西海平定したらば

何とか御処置をせねばなるまい

まことに気の毒、笑止の限りだ

松山ふんぱつ、感心感心

早くに加勢にやるのがよかろう

福山どうした、銘酒を飲み過ぎ

酔つてはならない

砲術開いて先手を勤めろ

井伊や高田は先にも懲りこずに

少しは鉄砲開くもよかろう

戦地に臨んで青菜に塩では困ったものだよ

先祖の武功も水の泡だよ

錆さびた刀や、へら弓ばかりじゃ叶わぬ世の中

主家の大変、何と思うぞ

ばかげた野郎だ

こいつも、やつぱり死んだがよからう

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

藤堂とうどの爺おつさん、早く出ないか

慶長頃まで五万の小祿

当家に仕えて三十余万の

国主といえども御譜代同様

国の異名いみようにひとしき親方

貰うばかりが能でもあるまい

関西諸侯の旗かしらの頭かしらが

聞いて呆あきれて物が言えねえ

讃岐さぬきの高松、大和の甲斐さん

枝も鳴らさぬ泰平の浮世に

十万余石の高禄貪り

家来に文武の世話もなさずに

飲み食いばかりに世の中送るは

虫けら同然

高を差出す仲間の頭だ

そんな心じゃ腹も切れまい

縄をたよりに首でも縊くつて

死んだがよかろう

上杉親方、お前は感心

譜代恩顧の人とは違つて

大きなお高を取られたお前が

先年以來の忠義はなかなか

諸人の及ばぬところでござるぞ

佐竹の親方、お前もやつぱり

高を取られた仲間の者だが

今度の大変、非常の場合だ

恨みをさし置き勤めて下さい

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

尾張の太郎さん

大きなべらボウ

神祖以来の三家の頭と

言われるおん身が

先年以來の御処置はなにごと

宮のおやまの瘡毒そうどく身に染み  
癩病らいびょうや病みとはなんともかんとも

たとえ様なき家来の奴ねぐらばら  
塹ねぐらに離れた烏じゃあるまい

うろろうまごつき

カアカア言つても仕方がないぞえ  
寝惚ねぼけなさんすな

お附の御家老

紀伊さんなんぞは感服者だよ

一同いっそう挙つて兵隊こさえて

天下に忠義を尽していなさる

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

水戸の甚六じんろく、困つたものだよ

副將軍と言われるお人が

一国さて置き

半国ばかりの政事ができぬか

家来は不服で四方に分散

お前もまことに摺古木野郎すりこぎやろうだ

高を差出し

十万余りの賄まかない貰つて

引込み思案が相当だんべエ

チャカポコ　チャカポコ

チャカポコ　チャカポコ

それはさして置きゾロゾロいなさる

閣老参政その他の役人

分別ついたか

因循いんじゆんこそく姑息も時によります

歌舞伎芝居の上使の壺岐さん

田舎いなかざむらい、役には立たねえ

ちんぷんかんぷん、お臍へそで茶が沸く

先年、長州先手の総督

九州大名指揮するなんぞと

出かけたところはべら棒によけれど

知恵がなくなつて了りようけん簡なくなつて

お尻が早くて長崎なんぞへ

かけおちなどとはまことに呆れる

江南小児の遼来遼来どころか

それとはかわつてあかん弁慶

屁へでも景清、外道げどうの大將

天下の人民、拳つて笑うぞ

唐からの真卿しんけい、杲卿こうげが忠勇

画像を拝した張巡ちやうじゆん見なせえ

皆これ天下の英傑だんべエ

これこそ天下の將帥しやうすいと言われる

それに何ぞや賊の旗の手

見るか見えぬにブルブルふるえて

兵士を振り捨て一人かけおちで欠落

馬鹿と言おうか臆病と言おうか

めくらめつぼう 文盲滅法、かつば 河童の屁のよな

腐った根性、たと 譬え様なき

摺古木野郎だ、首でも縊くつて

死んだがよからう

スチャラカ チヤカポコ

スチャラカ チヤカポコ

困る佐賀さん、あき 呆れた縫ぬいちゃん

下からへのぼ 経上る平山図書さん

浅野の御隠居川勝先生

これらもやつぱり学者の生酔い

漢語交りの言葉を用いて

書附なンぞはよしてもくんねえ  
机に向うて詩文の研究

山ほど書いても役には立たない

あつぱれ立派な物識ものしりめかして

事務策なンぞも無暗にやらかし

一ツひと廉かど天下の議論を述べても

社稷しゃしよくを助ける知恵がなければ

腐れ儒者だと孔明が言わずや

春秋左伝に通鑑つがんこうもく綱目

史記や漢書や元明げんみんしりやく史略を

百たび見たとて千たび見たとて

生れついでとの馬鹿は直らぬ

鉄砲かついで。パイパイドンドン

やつたがましだろ

武侯の中流呉起ごきが立策

七十余城を一時に落した楽毅がつきが行い

よくよく目をつけ考えみなせえ

野呂間のろまじゃ天下の助けはできない

ナポレオンでもワシントンでも

天下を治める技倆は格別

なかなか及ばぬ、勉強しなせえ

スチャラカ チヤカポコ

チヤカポコ スチャラカ

稲葉ひょうろくの兵六どうしたもんだよ

腰抜け仲間のよぼよぼおやし親爺い

海軍総督、聞いて呆れる

敗軍相当な臆病だましい

船に乗ったら嘔吐へどでもするより

ほかにはナンにも働き出来まい

まだある、淀さん、川越親方

グズグズしてるとお江戸が危ねえ

四五年かかって、ようよう仕上げた

歩兵はお暇いとま

儉約なンぞとお為ごかしに

旗本苦しめ金納はんだかなんぞと

でかした揚句はんだかに半高取上げ

融通にしたるは何のためだエ

今が今まで兵士も出来ねえ

金が有つても兵士がなければ  
軍は儲置いくさきさておきなんにもできまい

かくの如くとしようの斗と筭しやうの小人

集まりこぞ挙こぞつて政治を執る奴

内憂外患一時に起つて

今にも知れねえ天下の累卵

これから俄にわかにガヤガヤ騒いで

太鼓が廻ふれつて触ふれが廻ふれつて

兵士がはいつて小隊前へと

号令かけても何が何やら

わからぬ歩兵を催し散らして

出かける騒動、馬鹿と言おうか

たわけと言おうか、耳はあつても木耳きくらげ同様

まなこはあツても節穴ふしあな同然

木偶でくの坊ぼうとはこれらのことだよ

いまに見なせえ

中国西国激浪みなぎ漲る天下の騒動

お江戸は灰燼かいじん、その時どうする

ガラガラ崩れて地べたへ転げて

鼻血よだれと涎よだれを流したとツても

六日の菖蒲あやめに十日の菊酒きくざけ

あとの祭りでおさまり附かない

チャカポコ　チャカポコ

スチャラカ　チャカポコ

スチャスチャ　チャカチャカ

スチャチャカ　ポコポコ

譜代恩顧の小禄大名

やっぱり間抜けで仕方もなければど

これらは天下の米喰虫にて

論に足らない度外の奴原

何はともあれ肝腎かんじんかなめの

天下の権老、こんなことではまことに困った

神祖以来の尊き大業

賊徒の馬蹄にかけるは歎息

数も知らない旗本御家人

多くの中には一人や半分

忠義なお人が有りそなものだよ

三千以上のお高を貪むさぼり

情弱な奴原、役には立たない

かかる危急の場合にのぞんで

やっぱり寝惚ねぼけて

半高なんぞと

己おのれに水引き小言を言いおる

主家が亡びて己れが俸禄

万々年まで保つの所存か

お先真暗、足許見えぬも程があります

間抜けで腑抜けで奥詰銃隊

藁人形わらにんぎょうにも劣つた人物

遊撃隊にも困つたものだよ

槍術剣術、役には立たない

これこれ旗本、しつかりしなせえ

今の時節はなんと思うぞ

一同こぞ挙つて京都へ詰め寄せ

愁訴と出かける覚悟はないかえ

さりとは困つた腰ぞろ抜け揃いだ

鳶とびの人足、土方といえども

頭かしらがやられりや皆々出かける

中間ちゅうげん小者に劣つた了簡りょうけん

引つこみ思案は泰平な時だよ

これほど励まし、わけがわからにや

虫ともなんとも言いがござらぬ

残らず揃つて両国橋から

身でも投なげるか

豆腐あたまで天窓を叩き壊して

いッそ死んだが何よりましだろ

スチャラカ チヤカポコ

スチャラカ チヤカポコ

大関兄さん、お前が頼みだ

ピンピンやらかせ

あとの奴等は頼むに足らない

玄蕃げんぱの水汲み読書よみかきが足りない

漢字ばかりじゃ叶かなわぬ世の中

翻訳本でも見たらばよかろう

平岡丹州、石川、京極、立花

なんぞは蛆虫うじむし同様

外夷に笑われ京都はしくじる

金がなくなる、世の中乱れる

お口はすくなる

ここらで一ト口、湯でも呑むべイ

スチャラカ チヤカポコ

チャカポコ スチャラカ

スチャスチャ チヤカチャカ

チャカポコ チヤカポコ

スチャラカ チヤカポコ

チヨボクレとなり、チヨンガレとなり、阿房陀羅經あほだらぎようとなつて、あいの手には木魚をあしらい、願人坊主即ち浮かれ坊主となつて、この長物を喰い済ました方も済ましたものだが、聞く方もよく聞いたものだ。聞き終つてから主膳は妙に気が滅入めいりまし

た。

それは、チヨボクレとして文句が練れない、言葉が野卑に過ぐる、そのくせ、学者ぶつたところが鼻につくものがある、天下の諸侯に八ツ当り、罵詈ばりざんぼう謔を極めたそれを不快に思うのはありません。痛快に罵倒を試みたことに、無限の哀愁がある。それはこのざれ歌を作った奴が、罵のしらんがために罵つたのではない、火のつくような徳川の天下の危急を見て、救いの手を絶叫している、その声だとしか聞かれなかつたからであります。そうして、かような罵倒の声に事寄せて、祖先の恩顧人心の義侠に訴えて、この時局の火消し勢に加勢を求むる悲鳴絶叫としか聞けないからであります。皆さん、お蔵くらに火がついて焼死にますから早く来て助けて下さいようと、哀鳴号泣することの代りに、こんな歌が飛び出したものであると、それを感じたか

ら不快になり、もう、今日はこれまで、江戸見学の第一日程はこれで終る、今日は立帰って、明日また出直しということ、願人坊主には若干の祝儀を取らせて、その日の帰路に就きました。

六十九

さてその翌日、改めて出直した神尾主膳の江戸再吟味日程第二日。今日は、芝の増上寺へ参詣を志しました。

御成門まで来ると、一隊の練兵がしゆくしゆく肅々と練つて来る。主膳も勢い、道を避けて通さなければならぬ。

「菜っぱ隊にしては出来がいい方だ」

いずれも見上げるような体格。幕府もエライものだ、いつのまに、こんな立派な歩兵をこしらえた——感心して見ていると、

渡り仲間ちゆうげんが言う、

「あれが名代の六尺豊かの歩兵さんでござんすよ」

なるほど、六尺豊かの歩兵さんとはよく言った、名実相叶う  
ている、よくもこう大兵だいひょうばかり揃そろえたものだ、この点、また少々  
感心ものだと見ていると、

「もとはみんなお陸尺ろくしやくのが、えん者なんです、ああして見ると  
立派な兵隊さんでござんすねえ、馬子にも衣裳とはよく言った  
もので——」

言わないことか、六尺と陸尺との混線だ、すなわちこれは、こ  
のごろ江戸の市中に溢れていた諸国諸大名の陸尺、即ち籠舁かごかきの  
人足の転向だ。

諸大名お抱えの陸尺は、体格拔群のものを選えりに選り、各大  
名屋敷が自慢で養つて置いたが、このごろ、諸大名の参観交代さんきんこうたい

が御免になつて、奥方を初め、江戸住居を引上げて国へ帰れるようになつてから、この陸尺が失業した、アブれてみるとロクなことはしない、盛り場をユスつたり、見世物をコワしたり、良家へ因縁をつけてみたり、手に負えないところを幕府の陸軍頭が買込んで、浜から千人、こちらから千人、それに洋服を着せて<sup>だんぷくろ</sup>団袋をはかせてみると、見かけはこの通り堂々たる国家の干城<sup>かんじょう</sup>、これを称して六尺豊かの兵隊さんとは誰が洒落<sup>しやれ</sup>た。

それを見送つた神尾は、なるほど、見かけだけは立派に六尺豊かの兵隊さんだが、渡り者の寄集め、いざという時、役に立てばいいが、と冷笑して、さて、増上寺の参詣も無事に済ませて、山門を出て見ると、今度は赤羽橋の方から息を切つて飛んで来る裸男<sup>ふんどし</sup>。禪<sup>ぜん</sup>一つで木刀を一本、その真中に状箱<sup>じやうわ</sup>を結いつけたのを肩にかついでいる。そのせかせかとする息の合間に、時々大

声でわめいて来る。主膳とすれ違つた時に、耳を澄ましてみると、

ここから江戸まで三百里、裸で道中になるものか、なるかならぬか、やつて来た、一貫占めたか、セイゴどん、しゃか、しゃか

何のことだかわからない。すれちがつてしまつてから、また振返ると、

ここから江戸まで三百里、裸で道中になるものか、なるかならぬか、やつてきた、一貫占めたか、セイゴどん、しゃか、しゃか

「何だい、あれは」

「薩摩飛脚でござんしょう」

ナニ、薩摩、その薩摩がどうした、憎い奴だ。

このごろ、江戸の市中の火附強盗の帳元は、皆その薩摩の為す業だと言っている。この増上寺に近いところに、その市中の山賊強盗の巢、薩摩屋敷があるはずだ、よし、ひとつ、その巢を見届けてくれよう。

神尾は、直ちに爪先を四国町の方へと向けました。なにかと面憎い薩摩屋敷へ、仕返しに行くのではない、見届けに行くのだ。

まもなく、その三田の四国町、薩州邸の表門を横目で睨んで神尾主膳——

「薯の奴め、蔓を延ばしたものだ、もとのこの屋敷のこつち側は土佐の屋敷だったんだが、それを薩摩が併合しちまやがった、そうして、今やこの邸が江戸攪乱の策源地となっている、退治しなけりゃいかん、公然たる強盗の巢窟を將軍の膝元で見過して

置く法はない」

こう思つて睨みつけてはみたが、神尾の力で、今どうしようというわけにもいかない。いまに見ろ、眼に物見せてやる時が来るぞ。

薩摩という奴、怪しからぬ奴だ。松平薩摩守で、徳川御一家待遇にあるのみならず、將軍とは切つても切れぬ縁組みの間柄であるのに、幕府を軽蔑しきつてゐる。薩摩が増長してゐるといふよりも、幕府の役人共に意気地がないからだ。幕府の上役共、何か大事が起ると、自分の力で決断し兼ねて、薩摩へ持込む。薩摩守がこうだと言へば、大抵はその方に事がきまる。齒痒はがゆい。というの、老中共が三家あたりへ押しが利きかない、そういう時は、薩摩守も同意でござる、と言うと、三家も屈伏するといふていたらく。だからいよいよ薩摩を増長させる。このごろの

増長ぶりでは、どうやら徳川家を倒して、次の天下を乗取ろうとは言語道断。いずれはこの邸からブツつぶしてかからぬことには、天下の見せしめにならぬわい。

そういうことを、神尾が心肝にこたえつつ、そこを引返して品川へ出ると、海岸の茶屋で、蛤はまぐりを焼かせて一杯飲みながら、海を見ると、さすがに気がせいせいするが、お台場を見ると、また癩しやくだ。いったい、このお台場を外様とこさまの大名に任せたということが、すでに徳川の名折れだ。瘦やせたりとも、枯れたりとも、徳川の手で造り、直参の旗で固めなけりやならん、と我々も若い時にがんばったものだが、幕府の力が足りない。この台場なんぞも、薩摩の力を借りてやり上げたものだ。

これが出来上った時に、薩摩守が、ぜひひとつ、老中の阿部伊勢守に見てもらいたいとのことで、伊勢守が大目附あたりを

しかるべく召しつれて見に来た時には、薩摩の太守が門の表まで出迎えて、ていねいな挨拶だが、伊勢守は頭を下げない、ただ会釈ばかりで玄関へ通った。何といつても、まだ天下の徳川の老中だ。世間では、薩摩の太守、薩摩の太守とあがめ奉るが、見受けるところ、老中に対してはあの通りだ。老中もまたあれだけの権式を保ち得られたものだが、僅かの間にもそれもガタ落ち、薩摩の藩邸が江戸荒しの山賊の策源地と公認されながら、それに一指を加うることができないとは……

神尾は憤りいきどおを含みつつ、小酌を傾けました。

七十

さてその次の夜は、またおぼろ月の大原の里。

おぼろ月というのは、春に限ったものだが、ここ大原の里には、秋も月がおぼろに出ると、それに浮かれて二つの蝶が寂光院の塔頭たつちゆうから舞い出でました。

蝶というには少しと、うが立ち過ぎている嫌いはあるが、雌蝶であり、雄蝶であり、それが月に浮かれて庵いおりを立ち出でたことは間違いがありません。

「大原へ来たら、美しい尼さんでも出て来るか、そうでなければ、阿波あわの局つぼねの後身にでも見参ができるかと、それを樂しみにして来たら、餓鬼草紙から抜け出したような婆さんが出て、因果経のおさらいをして見せたには、一時いつときうんざりしましたが、こうして、苦勞人の昔の美しい人と一緒に歩いてみると、悪い心持は致しません」

と言つたのは、とうの立つた雄蝶でありまして、昨夜以来、無

条件の逗留を許された盲目のさすらい人の声であります。

見れば、今までのように、コケ嚇おどしの覆面びやくえや、白衣はかなぐり捨てて、さつぱりした豎縞たてじまの袷あわせの筋目も正しいのを一着に及んで、帯も博多の角なのをキュツと締め込み、刀もなく、脇差もない代りに、手には時ならぬ団扇うちわを携えて、はたはたと路傍の草花を薙伏なぎふせながら先に立つて、そぞろ歩きをしています。

若々しい老尼もまた、いい気なもので、すらりとした尼さんの姿ではあるが、この尼さんは、袈裟けさもなく、法衣ころももなく、数珠ずずさえも手にしていない代り、前の人と対つひな団扇を持って、はたはたと路傍の花を撫でながら、

「花尻の森へ行きましようよ、忍踊しのびおどりを見に行きましようよ」

「何ですか、そこは……花尻の森というのは」

「源太夫の屋敷あとなのです」

「その源太夫と申しますのは？」

「松田源太夫のことでございますよ」

「松田源太夫——あんまり聞いたことのない名じゃ」

「源頼朝公から、建礼門院様お目附のために差しつかわされた鎌倉の御家人ごけにんの名でございます、それがあの森に屋敷を構えていて、建礼門院様のお目附をしていました」

「それは古い昔のことだなあ、そこに今晚お祭りがあるのですか」

「森の中に竜王明神の祠ほくらがございましてね、今晚はそこで忍踊りがございます」

「なるほど、唄が聞えますな」

「さあ、しばらく、そのまま、あの唄を聞いていらつしやい」  
「節ふしは聞えるが、詞ことばはわかりません」

「森へ着くまでの間に、唄のおさらいをして上げますから、お聞き下さい、あちらの調子に合わせて、わたくしが唄って上げますから」

森の中で起る節を伴奏にして、水々しい尼さんは、こちらの耳にもはつきりわかるように、忍踊りの歌詞うたを唄い出しました。

わが恋は、小倉おぐらの里のひる霞

つもりつもりて、はれやらぬ

忍踊りを一踊り

われが身は、君を思うて浮かるるも

行くもかえるもうつつなや

忍踊りを一踊り

忍び行く、のべの川瀬は浅かれよ

君の契ちぎりは深かれよ

忍踊りを一踊り

君様に、ここに一つのたとえあり

清滝川も濁りそろ

なにとて君様つれなさよ

忍踊りを一踊り

君様を、思いかけたる庭の花

うらの妻戸を忍び入る

忍踊りを一踊り

忍び入り、君の枕に手をかけて

ここでこの夜を明かせかや

忍踊りを一踊り

今ははや、思いし恋いしがかのてそろ

枕屏風まくらびょうぶにかたよけて

物語りは限りなや

忍踊りを一踊り

若々しい老尼は、忍踊りの声を逐ちくいち一、遠音の伴奏に合わせてうたい出したが、やがて手をさし、足をのべて、おのれも踊りながら歩いて行く。

「手ぶりなら、こちらへきてござんせえな、トトさんも、カカさんも、ニイも、ネエも、ボーも、マーも、みんな踊つてござんすわいなあ」

やれやれよういな

声が欲しいわいな

「ちよいとこなあ」

よう立つ声が

声で人をや、迷わすは

しよんがいな

これや名代なだいの大原女おはらめ、木綿小紋に黒掛襟の着物、昔ゆかしい

御所染の細帯、物を載せた頭に房手拭、かいがいしくからげた裾の下から白腰巻、黒の手甲に前合せ脛巾はばきも賤いやしからず、

「薪たきぎ、買わしゃんせんかいな」

の姿は、以前の時によく見かけた。姿よりはその健康な肉体に魅せられたものだが、その踊りというのはまだ見参しない。早くそれを見たいものだ。

年はよれども

まだ気がわこて

若いあねごのそばがよい

水々しい老尼は、自分を唄っているのかひとごとか、手ぶり、足ぶり、歌の声までも浮き立って、さして行方は花の大原、花

尻の森の忍びの踊り。

森の中には、踊り疲れる人ばかりではない。竜王明神のほこらには、烈しい嫉妬の神が待っていることを知るや、知らずや。この年老いて、そうして省かえりみることを知らぬ水々しい雌蝶と、老いたりというにはあらねど、生きたりというにはあまりに瘦やせた雄蝶とは、年甲斐もなく、浮かれ浮かれて、花尻の森、源太夫の屋敷あと、且つは嫉妬の神の隠れた竜王明神の祭りの庭の赤い火に向って行くのが危ない。

七十一

その夜、大原三千院らいぞういんの来迎院の一室で、声明学しょうみょうがくの博士が、  
すえまろしゆうざい季磨秀才を前に置いて物語りをしておりましたが、

「こんな話をする、君たちは、なにを子供だましのと思うか知らんが、だまされる子供が幸いで、だまされない現代人が不幸であることを思わなければなりませんよ」

この秀才は、子供のように素直なところのある青年でありましたから、博士の言う意味がよく呑込めました。且つまた、この季麿秀才は、年に似合わぬ博学多才で、能文達識で、品行が方正で、ことに人の悪口などを言うことが最も嫌いな好学の青年でありましたから、それに張合いのある博士は言葉をつづけて言う様は、

「この世界は一つの寓話ぐうわに過ぎないので、釈尊は最も譬諭ひゆをよく用いました、おそらく釈尊ほど卓越した修辞家はありま  
すまい、また、古来のあらゆる作家よりも優れた作家は即ち釈迦です、ドコの国に、あれほど優秀な譬諭の創作者と、使用者と

がありましたか。譬喩は即ち寓話です、寓話は即ち子供だま  
です、およそ四諦したいじゅうにんねん十二因縁しにんげんのわからぬものにも譬喩はわかりま  
す、阿含華嚴あこんげげんの哲学に盲目なものも、寓話の手裏剣には胸を貫  
かれるのです。今まで私が話した話、これから私が語り出でよ  
うとする長物語を、君たちが空くうに聞き流さないことを望みます」  
と言いますと、季麿秀才は、それに敬意ある諒解を以てつけ加  
えました、

「左様でございます、哲学者が訴え得られる範囲は、少数の特  
志家の頭脳だけにしか過ぎませんが、詩人というものは、大多  
数の人にも、後代の人にも、了解される特権がございます、そ  
れをことさらに縄張りをして、大衆の文学だの、少数の芸術だ  
のと、差別なきところに差別を設ける彼等の術策を憫あわれまなけれ  
ばなりません、また、左様な術策にひつかかるおめでたき民衆

を憫まなければなりません。世に優れたる詩人の空想ほど確実性を持つものはございません、科学などはそれに比べると全くお伽噺とぎばなしのようなものです。アミエルは、ミゼラブルの雄大なる構想を支配する中心思想を知ろうと思つて、三千五百頁のあの大冊を幾度も繰返して読んだ後に、こういうことを言いました、ヴィクトル・ユーゴーは、効果を以てその美学論の中心としてゐるから、作がこれによつて煩わされている、然しかしヴィクトル・ユーゴーは何という驚くべき言語学的・文学的能力の所有者か——地上及び地下に於ける驚異すべきものを彼は悉ことごとく知っている、知つてゐるだけではない、それと親密になつてゐる、たとえば巴里パリの都のことに就いても、あの町々を幾度も幾度も、裏返し、表返して、ちようど人が自分のポケットの中身をよく知つてゐるように巴里を知つてゐる、彼は夢みる人であると同時に、

その夢を支配することを知っている、彼は巧みに阿片や硫酸から生ずる魔力をよび出しはするが、その術中に陥つたためしがない彼は発狂をも自分のならした獣の一匹として取扱うことを知っている、ペガサスでも、夢魔でも、ヒポクリッフでも、キミイラでも、同じような冷静な手綱たづなを以て乗り廻している、一種の心理的現象としても彼ほど興味ある存在はあまりない、ヴィクトル・ユーゴーは硫酸を以て絵画を描き、電光を以てこれを照らしている、彼は読者を魅惑し、説得するといふよりは、これを聳そりせしめ、これを盲せしめ、そうして幻惑せしめている、力もここまで進んで来れば、これは一種の魔力である、要するに彼の嗜好しこうは壮大ということにあり、彼の瑕瑾かきんは過度ということにある——アミエルはこういうようなことを言っているのです、私には、大菩薩峠の著者に就いてはなお以上のことが

言えると思うのです」

「それは私の知らないことだ、わたしは大菩薩峠なるものを読んでいない」

声明学しょうみやうがくの博士は、季磨秀才の感情に走るを制するかのようになり、その論鋒をおさえて、

「私にこういう経験があるのです、私が若い頃、宮中に勤める身でありまして、ここの上人しょうにんに就いて声明学を研究しようと思つて、京都の今出川から、毎日毎夜、ここへ通いました。声明に就いて、私は絶大なる趣味と研究心を持つていたのですから、ことに若い時分の情熱も加わつて、ほとんど隙ひまさえ見出せば老師のお邪魔をしたものです。ある時のこと、これへ参向して、上人のおいでになる扉の外で、こういうことを考えたです、こうして、うるさく上人におつきまといして研究はいいが、自分も

宮中に微職を奉ずる身を以て、かく大原の僧院まで毎日参学することは、職務に対しての聞えもいかがであり、且つまた上人に対して、かくばかりうるさくおつきまとうことのお煩わしさを考えると、一本調子ではいけない、少しは遠慮というものがないことには、自他のために重大な迷惑となる、では明日から断念して参学を控えよう、今後は、上人をお訪ね申すことをやめよう、こう思つて、上人の前へ出ますと、私が何も言わない先に、上人が、これ秀才、お前の考えていることは人情だが、わしの方はかまわない、その道のために、いくらお前がわしに付きまとも苦しくない、かように亡き上人が仰せられましたので、はつとしました。扉一つを隔てて、私の思うところ、これから述べようとする意志が、すっかり上人に予知されてしまつたのです。私がいよいよ真剣に声明の学に精進することになつ

たのは、それからのことで、同時に声明は即ち無声なり、無声の声を聞かざれば、声明の神しんに通ずること能あたわずと悟つたのもそれからのことです。それまでは、趣味としての声明、科学としての音律の研究にうき身をやつしたのでありますが、それではいけないことをさとりました」

「無声の声は、禪家ぜんけのいわゆる隻手せきしゅの音声おんじようといったようなものでございますか」

「いや、それとは少しく違います、声明家は禪家のような独断論法を嫌います、信仰者でなければならぬが、同時に、科学者でなければならぬのは一つの資格といえるでしょう。人間の声にも、有位有聲と、有位無聲とがありますが、前者を十一位に分つと後者が四位、これを宮商角徵羽きゆうしやうかくちゆうに分けてすべての音を十五位に分類する、これを律呂りつりよという、十五位は十五声に

して一声、一声にして全声なるものです。御承知でしょう、この外を流れる川に、呂の川と、律の川とがあります、この律と呂の川をさかのぼ溯つて行きますと、そこに音なしの滝というのがあります、百声万音は律呂に帰し、律呂は即ち音なしに帰するというのが声明の極意なのです、そうして日本に於ける声明の総本山は即ちこの寺なのです、大日本の魚山ぎよさんはこの大原のほかにありません」

「ギョサンですか、ギョサンとは、どういう字を書きますか」

「魚という字です、サカナという字です、魚の山と書きまして、天竺てんじく、即ち印度インドでは靈鷲山りょうじゆせんの乾いぬいの方にあり、支那では天台山の乾の方、日本ではこの比叡山の乾、即ち当山、大原来迎院を即ち魚山というのです、慈覚大師直伝じきでん、智証大師相承ちじょうの日本の声明の総本山なのです」

声明の博士が、季磨青年を相手に諄々<sup>じゆんじゆん</sup>として、こういうことを語り聞かせ、おたがいに夜の更くるを知らない時分に、不意に戸を叩く音がありました。

「御免下さりませ」

「どなたですか」

「はい、わたくしは、東国安房<sup>あわ</sup>の清澄山から出て参りました、弁信と申す小坊主でございます」

博士と、秀才と、二人の談論<sup>たけな</sup>酣<sup>しやべ</sup>わにして倦<sup>う</sup>むことを知らないこの場へ、さしもの広長舌のお喋り坊主が一枚加わったのでは、その舌端<sup>ほとぼし</sup>を迸<sup>たきつせ</sup>る滝津瀬の奔流が、律呂の相場を狂わずに相違あるまいと、知る人は色を変えるだろうが、幸いに内なる二人は、弁信の何者であるかをまだ知りませんでした。

魚山の来迎院に、声明の博士と、季磨秀才とを驚かした弁信法師は、座に招ぜられると、案外に慎しみ深く、簡単に来意を述べました。

ごらんの通りの盲目の身、東夷東条の安房の国、清澄の山を出でてより幾年月、世を渡るたつきとしては一面の琵琶、覚束ない音締ねじめに今日まで通して来たが、琵琶は最後の思い出に竹生島の明神へ奉納し、わが身は山科の光仙林にしばらく杖をとどめていたが、山科よりは程遠からぬところ、ここは大日本の魚山として聞えたる大原の来迎院こそは声明の根本道場と聞くからに、ここで修行をさせていただきたい、奥義おうぎというもおこがましいが、見えぬ世界を見んとする不具者の欣求心ごんぐしんに御憐憫ごれんびんを

下されたい、入門の儀、ひたすらに御紹介を頼み入ると、これは例のほしいままなる広長舌を弄ろうすることなく、極めて簡單明瞭に來意の要領を、まず声明しょうみやうの博士に向つて披瀝ひれきしますと、博士はその志を諒なりとして、院主上人に向つてその希望を通じましたところ、院主上人は、また弁信の志を憐んで、これに對面して次のように申しました。

「金剛語菩薩こんごうごぼさつ即ち無言語菩薩むごんごぼさつ、声明の奥義を極めんとならば、まず声なきの声を聞くべし、幸いにこの律呂りつりよの川の上に音なしの滝がある、音なしの滝に籠こもつて、無音底の音を聞く気はないか」  
かように申されました時、弁信は、一議に及ばず、これこそ望むところとあつて、直ちに翌日の明星をいただいて坊を出で、音なしの滝に詣まりました。

その日より、滝のほとりに、ささやかな安居あんごの地を求めて、そ

こへ飛花落葉を積み重ね、正身の座しょうじんを構えると共に、心神をすまして音なしの音を聞かんとすることが、この法師の早天曉の欠かさぬつとめ、世間は暫く彼の広長舌から免れるの自由を得ました。

七十三

有野村の与八が、この春から勸化かんげをして歩いたことの一つに、荒地の開拓と、ハト麦の栽培、ジャガタラ薯いもの増産等がありました。

与八は、その時、こう言つて村々に勧誘をして廻りました——皆さん、何が怖ろしいといつて、戦争と饑饉ほど怖ろしいものはこの世にございません。地震だの、雷だの、火事だのとい

うものも怖ろしいには違いありませんけれど、その災難の程度を比べると、戦争や饑饉と比べものにはなりませんよ。戦争はどうかすると一国の人を殺してしまい、一つの国を亡ぼしてしまふことがございます。饑饉もまた国中の人が、のたれ死をしてしまうこともございます。戦争のことは人間のすることですから、わしらにはわからねえですが、饑饉は天道様てんとさまのお仕置だから、わしも少しは知っています。なんしろ、人間が食えないで死ぬんでございますから、こんな悲惨なことはあるもんじゃあございません。でも、人間の力で、日頃の心がけがよければ、逃れられないはずはねえとこう思うんですが、それに就いて皆さん、なるべく荒地を開いて、それに、ハト麦と、ジャガタラ薯とお植えなさいまし。ハト麦は、世間並みの大麦や小麦と違って、肥料こやしがいりません。そうして、蒔まいて僅かの間に入

れができます。その上に取穀とりこくが多いし、味がよろしいし、食べて薬用にもなるものでございます。種子はわしのところにたくさんございますから、分けてお上げ致しますよ。

与八は、電劍先生から聞き覚えたハト麦の栽培法を、村人に伝授を致しました。それから、ジャガタラ薯も、まだ作り方を知らない人に教えてやりました。村人のうちには、ハイハイと聞いてはいるが、実行しない人も多くありました。与八は、それに頓着なしに、ハト麦の効能を説きながら、その種子を配り歩いていきます。

饑饉うごというものは怖ろしいものですよ。わしらも子供の時に見ました。野原にちつとも青いものがありませんでな。みんな人間が摘つんで食べてしまうからです。それでも足りないで飢かえ死ぬ人が多くありまして、わしらが見ても、街道筋にゴロゴロ

行倒れが毎日のように倒れました。わしの大先生おおせんせいは心がけのいい人ですから、そういう時の用心がちゃあんと出来てましたから、わしらはいくら饑饉でも、ちつともひもじい思いをしたことはございませんでした。世間には、明日食うものがない、今日食うものがない、二三日食わない、なんていう人がザラにありました。

天保の年は、四年と七年と二度も続いて饑饉がございましたが、七年の方が殊ことにひどうござんした。その年は春の初めから引続いて、季候が不順でございまして、梅雨つゆから土用まで降りつづいた上に、時候がたいそう寒うございまして、日々毎日、陰気に曇つてばつかり、晴れたかと思えば曇り、曇つたかと思えば雨が降る、といったような陰気な年でございました。その時のことです、相模の国の二宮金次郎という先生が、その年の

季候をたいそう心配しておいでなさいましたが、土用にさしかかると、もう空の気色がなんとなく秋めいて来て、草木に当る風あたりが、気味の悪いほどヒヤヒヤしていましたが、ある時しんなす新茄子をよそから持って来てくれたものですから、その茄子をぬかみそ糠味噌へつけさせて食べてみますと、どうしても秋茄子の味でございますから、これは只事ではねえぞ、さあ村の人たちよ、饑饉年が来るから用心なさいと言つて、その晩、夜どおし触書ふれがきをつくつて諸方へ廻して、皆の者に勧めることには、明地あきちや空地くうちは勿論のこと、木棉わたを植えた畑をつぶしてもいいから、作さくをつくりなさい、蕎麦そば、大根、蕪菁かぶら、にんじんなどをたくさんお作りなさい、粟あわ、稗ひえ、大豆などは勿論のこと、すべて食料になるものは念を入れてお作りなさいとすすめ、御自分では、穀物の売物があると聞くと、なんでもかまわず、ドシドシ買入れ、お

金が尽きた時は、貸金の証文までも抵当に入れてお金を借入れ、それで穀物を買ひ、人にもそのようにおすすめになりましたが、なにをそんなに二宮様がおあわてなさる、と本気にしなかつたものもあるでございましたが、先生を信仰する人は、おつしやる通りにやって、大助かりに助かつたそうでございます。

なかには二宮先生の、そのお触書を見て、直ぐに馬に乗つて先生をおたずねして、その仕方を丹念に聞き取つてから、村々をお諭しさとになつて、木棉畑をつぶし、お堂やお寺の庭までも、

蕎麦や大根をお作らせなさいましたお奉行様もありましたが、

下野しもつけの国の真岡もうか近在は、真岡木綿の出るところですから、木棉

畑がうんとある、せつかくのその畑をつぶして、ほかの作物を作ることをイヤがる人が多いには、先生も困つたそうでございますが、その時に先生が、それではあきらめのために、木棉畑

のいいところを少し残して置いてみなと、所々へ一反ぐらいつ木棉畑を残させてみますと、秋になつて棉実が一つも結ばないのでなるほどと、はじめて感心したそうでございます。

すべて、大偉人の言うことは、聞いて置かなけりやなりません。わしらは、二宮先生のような大偉人ではございませんが、用心をしてしそこないということとはございませんから、皆さん、何をさし置いても饑饉の御用心をしてお置きなさいませよ。

それには、ハト麦なんぞは至極よろしいでございます。種子が入用ならば、わしんとおよろこばしいでございませぬ。蒔き方がわからなければ、わしが教えて上げますよ。もし人手が足りなければ、わしが行つて手助けをして上げますからね。

それからもう一つ、ジャガタラ薯いもというのがござんすが、あれは近ごろ南蛮から来たのだそうですが、結構たくさん取れて

穀類の代りになります、あれをお植えなさい。

そうして、用心をして置いて、いざ饑饉という時には、その貯えを大切に、控え目にして食べるです。そうすれば、悪食あくじきをしないでも次の実りまで、きつと凌しのげるものでござんすよ。でござんすから二宮先生は、饑饉の年でも決して、草の根や木の皮を食えとはおつしやいませんでした。心がけさえして置けば、どんな饑饉にでも五穀を食いのばして行けるものでござんす。饑饉の時は、なんでも食べられます、食べなければならぬ場合もあるでござんすが、少しの間はいいが、長くなると病気になるります。

こういう説教を与八が試みました時に、慢心和尚が来合わせて、次のようなあいづちを打ちました。

そうとも、そうとも、与八の言うことと、二宮尊徳の言うこ

とは間違ひはないぞ、饑饉は怖いぞ、用心して五穀を貯えろよ、草根木皮は食うなよ。天保の饑饉の時、わしは江戸で見たがな、なにしろ作の本場の百姓でさえ、食う物がなくて餓え死ぬ世の中だから、町家ときては目も当てられなかつたよ。その時の窮策でな、赤土一升を水一升で溶いてな、それを布の上に厚く敷いて、天日てんびに曝さらして乾かしてから生麩なまぶの粉などを入れてな、それで団子を作つて食つたものもあつたぞ、それから松の枝を剥いでするめ鯛のようにして食い出した者もあつたぞ。わしも食つてみたよ。わしなんぞは腹が出来ているから、何を食つても、あんまり当りさわりということはないが、普通の人間は、たとえ食おうだんえば黄疸おうだんのような顔色になつて、やがて病氣だ。この間も「救荒草木」という本を、わしがところへ持つて来て見せた人がある。その本には、野生の草木で食えるものの種類を三十種も挙

げて、その料理方などを書いてあつたが、わしはああいうことはあんまり賛成をせんのだ。わしなんぞは腹が出来ている上に、口がこの通り大きいから、なにを投げ込んでもたいていは当りさわりなく消化するようなものだが、人間並みの人間は、人間並みの食物を食うがよい。なんにせよ、天照大神、神農帝以来、人間が選りに選り出して来た今日の五穀蔬菜というものは、人間の養いには最上無類のものさ。野草雑草も食つて食えないこととはないが、食わずに済めば食わずに済ますことだよ。誰も食いたくて食うわけではないが、そこだ、日頃の心がけというやつがそこにあるのだ。丹精して人間らしい作をつくり、それを丹念して<sup>かこいしく</sup>圀穀にして置くことだ。それが最上唯一の饑饉救済策というものだ。よくよく与八大明神の御託宣を聞いて置くがいぞ。

それから、若い者は天保の饑饉は知っているが、天明の饑饉時代を知る者は少なからう、おれはそれを実地に見せられてよく知っているぞ。この村で食えなくなつたものが、隊を成して次の村へと流れ込んだ、流れ込んでみたところで、次の村にだつて、他村に食わす貯穀があるはずはない。そこで、流れ流れて毎日毎日、千人、二千人というものが、かたまつて、飢死している、そうすると、先に飢えて死んだものの肉を、あとのが切り取つて食つたものもあつたぞ。食うや食わぬの境になると、人間が鬼になる浅ましき、おれはこの眼でよく見て来たぞ。そのくらいだから、盗賊が横行する、いや、人間という人間がみんな盗賊になつてしまふ、浅ましいものじゃ。大名の米でさえも、警護が薄いと途中で飢えたる民が襲いかかつて奪つてしまふ、それだから、一台か二台の車に積んで運ぶ扶持米ふちまいでさえ、さむ

らい共が四五十人して守つて引かせたものだ。村々町々でめぼしい家屋敷はブチこわしがはじまる、ブチこわされる方も、はじめのうちには辛抱していたが、今度はその方で組合を作つて、竹槍を構えて待ちかけ、皆殺しにしてくれるという有様だから、全く、餓鬼道修羅地獄さ。食い物がなくなると、政治も奉行もあつたものではないじゃ。

だから、百姓は、平生丹精してよく作り、丹念してそれを貯えて置くことじゃ。近ごろ、節食節食と言つて、なるべく少し食えということと言つて歩く奴もあるが、わしらがよ様なものは、小食でもさしつかえないじゃ。わしらがよ様な坊主とか、役人とか、学者とかいうやからは、そう大した体力の骨折り仕事というのにはせんでも済むじゃから、そういうやからは、いわばお百姓様の食客いそくらう同様なものだから、なるべく遠慮して、少な

く食つてもらいたい。ことにわしらがよな坊主は、少々の間は、食わず飲まずでも平気でいられるくらいに慣らして置かなければならぬじゃ。それで決して身体のさわりになるものじゃないのじゃ。一日一食で済まして、それで達者で長寿をした坊主もいくらかもあるじゃ。東叡山寛永寺の天海和尚というのは、百三十三歳まで生きたが、これも一日一食じゃ。播州の書写山の性空上人しょうくうしやうにんというのが、これも一日一食で九十八まで生きたじゃ。真宗の親鸞上人しんらんしやうにんは九十まで生きたが、これも一日一食。伊勢の月僊和尚げっせんおしやうというのが八十九、鳥羽僧正が八十八、一休和尚が同年というよなわけで、こういう坊主は、いずれも一日一食同然の節食をして、それで達者で長寿をしたものだが、それは坊主だからできるので、やっぱりお百姓さんの居候であることには変りはない。お百姓というやつは、節食をしてはならない、

節食をしては働けないから、うんと食うがよい。大きな口を  
いて飯を食う権利のあるのは、百姓だけの役徳だと思ふがいい。  
うんと食つて、うんと働き、うんと生産をして、坊主をはじめ、  
役人だの、学者だの、この世の寄生虫に食わしてやつてもらわ  
なけりやならぬ。饑饉の時は、今も言う通り、悪食あくじきをせず、そ  
の時は節食をして、一日にお粥かゆ一ぱいだけでも食つて、静かに  
寝て体力を養つているがいい、死なない程度に生きているがい  
い、そのうちには凶年という年ばかりではないからな。

こういふようなことを言つて慢心和尚が、与八の勧誘に補足  
をして村人を説得しているところへ、一人の風来人がやつて来  
ました。

その風来人というのは、五十がらみ、小肥りに太った、笠を  
かぶつて、もんぺを穿はいた旅の者らしい一人の男であります。

「わしは、武州芻村はねむらというところの百姓弥之助と申しますが、諸国廻歴の途中、はからずもこのところへ立寄りまして、只今のお話を聞かせていただき、まことに結構に存じて、いたく共鳴つかまつを仕りました。わしが諸国廻歴の目的も、只今の、お若衆さんと御出家さんのおつしやつたと同じ趣意の下に出発いたしましたんでござりますが、なにぶん、徳が足りないものでござんすから、せつかくの志が通らず、わしが本心が通らぬのみか、到るところでばかにされて、どうもなりません。ところで、只今のお話を伺ってみますと、世間にはまだ同じ志の者がある、捨てたものではない、と頼もしき限りがございません。まあお笑い下さい、わしどもはこういう帳面こしらを拵えて諸国廻歴を致しております」

と言つて、腰にブラ下げていた一冊の部厚の帳簿を解いて、慢

心和尚と与八の前へ差出しましたから、

「それはそれは、御奇特なことだ」

と答えながら慢心和尚が、その帳面を手にとって見ますと、

「百姓大腹帳」

と書いてあります。二つ折長綴ながとじの部厚の帳面で、俗に「大福帳」型の帳面でありましたが、大福帳をここには「大腹帳」と書いたところに趣意がありそうなのです。果して武州芻村の百姓弥之助と名乗る男は、その「大腹」の字面を指してから次のように語りました。

「只今もおつしやる通り、近ごろは戦争や饑饉の心配から、ドコへ行つても食を控もつぱえろ、食物を食べ過ぎるな、節食をしろ、節米をしろと、専もつぱらこのように申し触らされておりますが、わしはそれと違ひまして、百姓は物をうんと食え、そうして腹を

充分にこしらえろ、非常の災難が来る時こそ、腹をこしらえて、度胸を据えなければならぬ、腹が減つては戦いくさができない道理、ですから、ウンと食べて、ウンと働きなさいと、こういう勸化かんげのために、この通り百姓大腹帳おほはらぢやうというのをこしらえて、宣伝を致して歩くのでございますが、相手にされないで困っている人でございます。つまりが、わしが百姓だから、ばかにする者が多いというわけなんでしてね。わしが、こんなぶつきらぼうの百姓でなく、黄門様のお微行しのびであるとか、お大名の名代みやうだいらい、聖堂の先生とでもいった経歴がありますと、みんな感心して聞くんでございますが、なあに、あいつは百姓だ、百姓が何を言つと、頭から取合つてくれません。そこで、わしは考えました、百姓に百姓の心得を説いて聞かすには、まず『百姓』という文字の意義から説いて聞かせなければならぬと。このごろでは、もつ

ばら、百姓の名の起りから説いて聞かせているというような次第なんです、これをまあひとつお読み下さいまし」

と言つて、武州芻村の百姓弥之助と名乗る男が、大腹帳の開巻第一を開いて、慢心和尚の前に示しました。

和尚が受取つて、それを読んでみると、

「そもそも『百姓』といふは、支那四千年の古典『書経』並びに『詩経』等に見ゆるを最初とすべし。『百姓』とは、あまねく『人民』といふ意味にして、これを農耕者に限りたる約束は更になし。されば天子以外のものは皆百姓なり。

日本に於ても、古代はこれと典故を同じうしたれば、歴代の天皇、皆直接<sup>六</sup>に人民を呼ぶに『百姓』の語を以てし給ふ。愚、ひそかに数へ上げ奉るに、日本書紀三十巻の中に於て、天子おんみづから『百姓』の語を以て呼びかけ給へるところ七十

四ヶ所に及ぶ。殊に、第十六代仁徳天皇に於かれては、

『君ハ百姓ヲ以テ本トナス』

『百姓貧シキハ則チ朕すなはノ貧シキナリ、百姓ノ富メルハ則チ朕ちんノ富メルナリ』

とまで仰せらる。

まことに、日本は天皇の国にして百姓の国也なり。天皇は親にし

て百姓は子也。関白、將軍、国主、郡司、諸々の門閥は皆後もろもろ

世この百姓の間より出でて、或は國家に功あり、或は國家に

害を為すな。功あるは即ち天皇と百姓の間を助くるなり。害あ

るは則ち天皇と百姓の間を紊みだすなり。

中世以後に漸く『百姓』の名を農耕者に限るやうになり行く

と共に、これに下賤輕蔑の色を附与したるは、まさしく中間

勢力の横暴の致すところなれば、日本の政治の革新は、天皇

と百姓の間を、古いにしへの美風に帰すことなり。

かく、百姓は即ち万民の意味にして、農耕業者に限りたる約束は更になしといへども、百姓の基本業が則ち農耕に存すること、万世かほ渝ることあるべからざる也。

それ、如何いかに世態變化するとも、人は衣食住なくして生くること能あたはざるなり。而して衣食住の生産は農業を待ち、これを為すより外にその道あるべからず。政治は即ちこの生産を助長するの道にして、商工は即ちこの生産を融通するの道也。

根幹を侮りて、枝葉のみを繁茂せしむる国は危し。

されば日本の百姓たるものは、自らが天皇の大御宝おほみたらたること

を畏かしこみ、専もっぱらこの道をつとめ、国に三年の蓄へあり、人に三年の糧かてあり、而して後に四方経営を隆さかんにすべきなり。而して後に通商貿易を盛んになすべきなり。本を忘れて末に走る

ことあるべからず。

近代は国難内外に起りて、志士東西に奔走すといへども、国本培養に心を注ぐの士、極めて乏しきは慨すべく歎ずべし。故に良き百姓は、世上の空言虚語に惑はされず、大いに食ひて大いに働き、自ら三年の糧を貯ふると共に、国に三年の糧を捧ぐることを本意と心得べきなり。百姓大腹なれば国富みて兵強く、百姓空腹ならば国貧にして兵弱し。つとめざる可けんや」

これを読み了つたおわ慢心和尚は大いに感心して、

「なるほど、なるほど——その通り、これに違いない、百姓の本分を知らせるには、『百姓』の文字から説いて聞かすが本筋じゃ、自分が百姓のくせに、百姓百姓と人を軽蔑する奴から退治せにやいかん、天皇様と百姓の間をさまたげる、もろもろの

寄生害虫から退治せにや、国は治まるものではござらぬ、百姓大腹ナレバ国富ミテ兵強ク、百姓空腹ナラバ国貧ニシテ兵弱シ、ツトメザル可ケンヤ——大賛成！」

慢心和尚がもろて双手を挙げて賛成したものですから、百姓弥之助も大いによろこびました。

## 七十四

その前後、京都の二条城で勝麟太郎の受爵の式が行われまして。

夢酔道人の丹精むなしからず、あつぱれ幕府旗下の麒麟きりんじとして、徳川の興亡を肩にかけて起つ人となり、ここに、受爵の恩命が伝わることに偶然ならずと言わなければなりません。これ

より先、受爵の内命が伝わった時、勝は考えました、

「さて、受爵には何の国を所望したものか、願わくば日本一の小国を願いたい」

そこで、安房守があわのかみ選ばれました。大国を名乗ったところで大

国の主となるわけではなく、小国を冒したからとて器量が小さくなるわけではないのだが、勝がさらに小国を所望したのは、この人特有の皮肉がさせる業らしい。この人は、後年、功成り名遂げて、維新の功臣の中に加えられ、ここに再び明治政府の下に受爵の恩命が行われるの際、子爵に叙せらるるの風聞を伝え聞いて、

今までは人並なりと思ひしに

五尺に足らぬ四尺なりけり

と歌をよんで、さてこそ伯爵に叙せられたという伝説のあるく

らいの人ですから、そういう人を食った性癖が、おのずから小国を好んで所望することになったらしい。

それはさて置き、当時、叙爵の儀が済んでから、控室に於て、諸士を相手の気焰の中に次のようなのがありました、

「政治家の秘訣ひけつはなにもないよ、ただ誠心誠意の四字ばかりだよ——内政のことにしろ、この秘訣を知らないから、どうもしやくしじょうぎ杓子定規で、さつぱり妙味というものが無い。徳川氏のやり方は、いま言った四字の秘訣を体認して、よく民を親しんで、實地に適應する政治をやったものだ、その重んずるところは人にあつて、法にあるのではない、八代將軍の時に諸法度しよほつとの類もやつと出来上ったくらいだが、それにしても北条時代の式目が土台しになっている、あの貞永式目じようえいしきむくというのが深く人心に染み込んであるものであり、なにもわざわざアクドイ新体制を作つて民を

惑わすがものはない、この辺をよく注意したものさ」

「東照宮の如きも、駿府に隠居をされた後でも、ただ、じーつとして城内に引籠ひきこもつていられたわけではない、駿府の近傍の庄屋とか、古老とかいうのを集めては、碁の会を催して、輪番にそれらの人々の家へ碁を打ちに行かれたものだ。あの辺の旧家には、東照宮が来て碁を打たれた座敷だというのがいまだに残っているよ。道楽で碁を打つんじゃない、ああしているうちに、偽らざる民情が聞けるからだ」

「日本国中で民政のよく行届いたところは、まず甲州と、尾州と、小田原の三カ所だろうよ、信玄や、信長や、早雲の遺徳はまだこの三カ所の人民に慕われているらしい」

「信長という男は、さすがに天下に大望を持っていただけあつて、民政のことには深く意を用いて、租税を軽くし、民力を養

い、大いに武を天下に用うるの実力を蓄えたと見える、今日、尾州に行つてよく吟味してみなさい、当時の善政良法が、今なお歴々として残つているから」

「信玄がただの武将でなかつたことは、ひとたび甲州に行けばわかる、見なさい、彼地の人は信玄を神様として信仰しているのだ、これは当時民政がよく行届いて、人民がよく心服していた証拠ではないか。その兵法の如きも、規律あり、節制ある当今の西洋流と少しも違わない、近頃まで八王子に、信玄当時の槍法が残つていて、毎年二度、その槍法の調練をすることになつていたが、その槍を使うのを見ると、近頃のように、お面お胴というふうな、個人的の勝負ではなくて、大勢の人が一様に槍先を揃えて、えい、えい、えい、と声をかけながら、初めは緩やかに、次第次第に急になり、漸く敵に近づくと、一斉に槍先を

揃えて敵陣へ突貫するのだ、ちよつと見たところでは甚だ迂闊うかつのようだが、おれは後で西洋の操練を習つてから、はじめてこの法のすこぶる実用に叶かなつて知っていることを知つた」

「北条早雲という男も、なかなかの傑物であつたに相違ない、赤手空拳でもつて、関八州を横領し、うまく人心を収攬しゅうらんしたのはなかなかの手腕家だ。当時、関八州は管領の所領であつて、万事京都風で、小むずかしいことばかりであつた、ちようど今ははやりの繁文縟はんぶんじよくれい礼であつたのだ、そこへ早雲が来て、この繁文縟礼の弊風を一掃してしまい、また苛税を免じて民力の休養をはかつた、つまりこれで、うまく治めたのだ。徳川時代には、小田原附近から関八州へかけてが、全国中でいちばん地租の安いところであつたが、これは全くの早雲の余沢よたくだ」

「それで、北条の亡んだ後に、徳川氏が駿遠参の故土から、この

関八州へ移封されたのだが、もともと租税の安いところであったから、徳川氏の方では非常に迷惑だったのだ。太閤という男は、なかなかの狡猾者こウかつもので、よくこの事情を承知しておりながら、いわゆる、その名を与えてその実を奪うの政策に出でたのだ。しかし、そこはさすがに徳川氏だ、少しも早雲の遺法くずを崩さず、従来の仕来りしきたに従って、これを治めたのだ」

「天下の富を以てして、天下の経済に困るといふ理窟はないはずだ、いにしえの英雄はみな経済のために苦心したよ。織田信長は経済上の着眼が周密であったから、六雄八将かしらに頭となり得たのさ。南朝の政治も、北朝の細川頼之の経済のために倒れたのだ」

「おれがはじめてアメリカへ行って帰った時に、御老中から、『其方そのほうは一種の眼光そなを具えた人物であるから、さだめて異国へ

渡つてから、何か眼をつけたことがあるだろう、それを詳らかに申し述べよ』とのことであつたから、おれは、『人間のすることは、ドコへ行つたつて、そう変わるものじゃありません、アメリカだつて御同様ですよ』と言つたが、再三再四、問われるから、『左様、アメリカでは、政府でも、民間でも、すべて人の上に立つ者は、みんな相当り、こうでございませぬ、この点ばかりが、日本と反対のように入得ませぬ』と言つたら御老中が眼を円くして、『この無礼者め、控えおろし』と叱つたつて、ハハハハハハ……』

「支那人は、いったい気分が大きい、支那人は、天子が代ろうが、戦争に負けようが、ほとんど馬耳東風で、はあ、天子が代つたのか、はあ、ドコが勝つたのか、など言つて平気である。ソレもそのはずき、一つ帝室が亡んで、他の皇帝が代ろうが、国

が亡んで他の領分になろうが、全体の社会は依然として旧態を存しているのだからノー」

七十五

かように天下有事、幕政維持か、王政復古かの瀬戸際——それに外国の難題が、攘夷じょういか開国かで、怪奇ではないが、複雑を極めた間にあつて、一步あやまれば、社稷しゃしよくが取返しつかないことになる。志士仁人が往来し、一般人心がおびえているうちに、広い世間には極めて暢気のんきせんぼん千万な奴もあればあるもので、道庵十八文の如きその一人。

且つまた、媚態百出、風向きのいい方へ便乗びんじようしようとして、色目びたごうの使い通しな不都合な奴もあればあるもので、鏗公びたごうの如きがそ

の一人。

さても、山城の国、綴喜つづきの郡、田辺たなべの里に逗留の道庵先生は、健齋老の取持ちで、何もございませんがと云つて、上方名物のよき酒に、薪納豆たきぎなつとうを添えて振舞われたものですから、大いによろこびました。これは酬恩庵名物の一休禅師伝来、薪納豆というものだと聞かされて、道庵がなつと、うしました。

道庵は、この機会に、一休禅師の研究をはじめることになりました。道庵は、一休は話せる男だと思ひ、一休の方では、道庵は知らないと言つてゐる。いずれにしても、酔眼に人なき道庵も、一休禅師には一目いちもくぐらいは置いてゐるらしい。これから大阪へ行つて、ひとつ親類のお墓参りもしてやらねばなるまいと、酒の間に口走つたところを見ると、大阪あたりに親類などはなかるべきはずの道庵が、変なことを言うと思つて、問いた

だしてみると、大阪に永富独嘯庵ながとみどくしゅうあんの墓があるから、それをひとつ訪ねてやろうと思ってるんだよ、と言う。してみると、永富独嘯庵なるものは、道庵の親類筋に当るのかも知れない。

それはトニカクとして、この機会に道庵は酬恩庵をおとずれて、古蹟をたずね、筆蹟を見て、しきりに慈姑頭くわいあたまを振り立てました。山陽の書を見てくれの、華山かざんの画を鑑定しろのと申込んで来る茶人もいたが、そんなのは一切、道庵の眼中になく、一休禅師の筆蹟だけは相当丹念に見ました。一休自筆の「狂雲集」というやつも見て、しきりに首をひねったり、その末期まつごの書だというのをひろげると、

須弥南畔

誰会我禅

虚堂来也

不直半銭

東海純一休

と書いてある。同行の者がちよつと読みなやんでいるのを、道庵はスラスラと読んでしまいました、

須弥南畔しゆみなんはん

誰力我が禅ヲ会スヤゑ

虚堂来也きどうらいや

半銭二直セズあたひ

東海純一休

て、スラスラと読んでしまつてから、慈姑頭を更に一倍振り立て

「諸方に一休の書と称せられるものが相当あるにはあるがね、あんまり感心しないよう。ところで、こいつはいいぜ、こりや、

たしかに一休の書だよ。一休という奴あ、こういう字を書かな  
けりやならねえ奴なんだ。これやいいよ、句もなかなかいいよ。  
ただ、虚堂来也——素人しろうとはこれをキヨドウと読みたがるが、い  
けねえよ、キドウと読まなくちやいけねえ、ただこの虚堂来也  
がねえ、ちつとばかり小せえよ、道庵に言わせると、仏祖来也  
といきてえところなんだが、それはそれとして、この辞世の文  
句にもはじめてお目にかかるよ、一休名所図会（一休諸国物語  
の誤りならん）にも、辞世の句というのがいくつも出ているが、  
この文句は無ねえ、名所図会のがニセ物で、これがホン物だ」  
と言いました。道庵が多少ともに物を賞ほめるといふことは、極  
めて少ない中のこれもその一つでございました。

そうしているうちにも、お雪ちゃんの容体を見てやる親切は  
変わりません。脈をとることになると忠実なもので、商売柄、健

齋老を啓発することも少なくはありません。それから、健齋老が道庵に感心していることの一つは、そのふざけた中に、まじめな研究心が少しも衰えていないということですよ。見るもの、聞くもの、みんな箸はしをつけずには置かない、箸をつければ、みんな食つてしまわなければ置かない、という知識どんしよくの貪食どんしよくぶりは、遠近四方、敬服せざるを得ませんでした。

しかし、うっかり敬服ばかりしていると、その次があぶない。一夕いつせき、道庵の声名を聞いて、京から名酒を取寄せて贈り越したものがあつて、

「この地は、お茶にかけては日本一ですが、お酒の方はそうはゆきませんが、ここらあたりは少し飲めるかも知れません」

道庵がその尾について、

「なるほど、お茶は、この界限が宇治茶の本場だが、酒もどう

して、なかなかばかにできねえ、いつたい、上方は酒がよろしい、日本一のお茶も結構だが、日本一の酒は飲みてえな」

それを言うと、土地の人が、

「では、近いうち、その日本一の酒というのを飲ませて進ぜましよう」

「そいつは耳よりだぜ、いつたい、池田、伊丹いたみなんぞと、大ざっぱに名乗りは聞くが、さあ、どれが日本一だと聞かれたら上方でも困るだろう、道庵も人に聞かれて、その点、常にいささかテレている、今度という今度は、ひとつ、京大阪の酒という酒を飲み抜いて、道庵先生御推賞、日本一という極きわめをつけて帰ってえものだ」

「いや、それは先生を煩わすことなく、もう出来ておりますよ、日本一の酒という極めつきは……」

「おやおや、道庵の承認なしに酒の日本一をきめるなんて、不屈な話だ、万一、道庵が不服を唱えたら、どうするつもりだろう、一番そいつの再検討をしてみてえ、その日本一の極めつきの酒というのは、いったい、なんという酒で、ドコから出ますねえ」

「これより少々南の方、河内の国の天野酒、これが日本一という定評きわめになっております」

「うむ——河内の国の天野酒、聞いたことのある名だ、これはひとつ、道庵が再吟味をする必要がある」

と言って、その翌日、飄々ひょうひょうとして出かけて帰らないところを見ると、河内の国までのしたのかも知れません。

さて、江戸の方面に於ける軟派、鏝びたは鏝びたで、このごろ少し憂鬱ゆううつになつてゐる。

鏝びたとしては、せつかくのヒットたる芸娼院の方も、開店休業の姿だから、なんとかせねばなるまいが、いやはや、手をつけると、そのややこしいこと、それで少々気を腐らせているという次第です。

芸娼の芸娼たる所以ゆえんのものを説いて聞かせても、世間はなかかわかつてくれない。とりあえず鏝びたの方へ持ちこまれた苦情のうちの一つに――

いやしくも芸と名のつく以上、なぜ役者を入れない、芸人の王たる役者を入れないとはなにごとだ――と力んで来た！

それから、芸事の芸事たるめききというものは、その道のものがないければならない、金茶や木口の輩やからが、御右筆ごゆうひつの下つぱ

のおつちよこちよいを相手に、人選をするとは怪しからん。

と言つて、膝詰めで来たものもあれば、ビタちゃんのお袖にすがつて、ぜつぴ、お刺身のツマになりともありつきたい、と歎願に及んで来た奴もある。

その辺は、ビタちゃんだつて心得たものなんだが、何を言うにもそれ、役者の方から言つてみるてえと、愚左衛門を入れれば、轟ごうしろう四郎が納まらないし、毒五郎をのけて戸団次に戸惑いさせせるわけにもいかねえ、そうなるにまた、土右衛門つちえもんや貉むじな之助のすけの方のひいきが承知しない。トカク、これは難物だから、後廻し、後廻し。

絵かきの方は、昔から相場附けがほぼきまつているから、これはわりあいしなに手なずけやす易いが、文書ぶんかきの方はトカク店が新ししないだけに、品しながややこしくていけねえ。

絵かきが五十八人もいるのに、文書きが十人じゃあ、あ、た、じ、け、ねえ、とムクれる奴には、刺身のツマとしてお下りさがをあてがつて置いたが、このごろ、木口勘兵衛尉源丁馬と、金茶金十郎とを入れろ、ぜつぴと言つて推薦して来た奴があるが、こいつは鏝も買えねえよ。

金茶や木口は、武芸もやつぱり芸のうちだから芸娼院へ入れろ、刺身のツマでもいいから入れろ、と捻ねじ込んで来ているのだが、どうも、さしも悪食あくじきのビタにも、こいつはちつと買えねえよ。

なるほど、武芸も芸には違いないが、あいつらの芸は下町の芸で、デモ倉流盛んな時はデモ倉流、プロ亀派が景氣のいい時はプロ亀派、勤王がよければ勤王、佐幕がよければ佐幕で、風向き次第、どっちでも御用をつとめる大道武芸者だから、本当の芸

人の中へは加えられねえ、大道芸人の方では、あいつらが大御所面で納まつているけれども、公儀には柳生流というお留流儀とめりゆうぎもあれば、実力第一小野派一刀流という、れつきとしたのがある、木口や金茶の大御所流を入れることは、三下奴さんしたやつこならば知らぬこと、ビタちゃんとしてはいささか気がさすねえ、なあに、御祐筆ごゆうひつの方へ申し込めば、御祐筆はみんなお人よしぞろいだから、ビタちゃんの言うなりにはなるがね、ビタちゃんの眼鏡の貫禄として、そう安売りはできねえ。

鏢びたは、とつ、おいつ、こんなことを言つて、自宅にくすぶつて気を腐らせていると、溝板どぶいたを荒々しく蹴鳴らして、

「鏢公、いるか」

その声は、まさしく木口勘兵衛尉源丁馬。

「来たな」

と鏝は思いました。

ガラリと腰高障子を引きあげた木口勘兵衛尉源丁馬は、朱鞘しゆざやの大小の、ことにイカついのを差しおろし、高山彦九郎もどきの大きな包を背負い込んで、割鍋を叩くような大昔を振立て、

「鏝、いたな、今日はひとつ、てめえに膝詰談判に来たんだが、このお爺さんとうをひとつ、芸娼院の人別に入れてくんな、これは木曾の藤兄ふじあにいといつて、姪めいを孕はらませて子まで産ませて追ん出した上に、それを板下はんしたに書いて売出した当代の甘いおやじさんだ、文書きの方では古顔なんだが、近ごろ拙者の子分同様になりやんした、よろしく頼む」

高飛車に出られたので、鏝もあつけに取られていると、

「さあ、お爺さんとう、こつちへ来て、芸娼院の人別に入れてもらいねえよ、これがお安いところの鏝公というおつちよこちよい

だ、お見知り置きなせえ」

と言うから、鏝が木口の後ろを見ると、いかにも人のよさそうな老爺おやじが一人、なべーんとした面かおをして、しよんぼりと控えている。その姿を見て、鏝が、なるほど姪を孕まして、板下に書いて売出しそうなおやじだ、至極お人よしだなと思いました。だが、いい年をして、木口あたりの手下になつて、頭を下げて来る、老爺の人のよい姿を見ると、鏝も物の哀れを感じないわけにはゆきません。

木口の後ろには、まだ、これを親分と頼むイカモノが多分に控えている。これらを押並べて、

「さあ、面つらが揃そろつたら、ひとつここでパチリとやってくんな」

当時、舶来の珍しいはやどり機械を据えた三下奴——

「爺とつつあん、お前めえも下つぱの方へ坐りな」

信州から来た木曾の藤爺ふじじいさんを、下つぱに押据えて、木口勘兵衛尉源丁馬ごうぜんが傲然として正座に構えたところを見ると、さすがの鏢も悲鳴をあげ、

「トテモ受けきれねえ」

と言つて、逃げ出してしまいました。

下駄をひつ提さげて、溝板のところをほうほうていの体で逃げ出した鏢助——

「どうもはや、木口勘兵衛ときては、さしもの鏢も受けきれねえよ、あいつ、イカモノ作りの四国猿のくせに、いやにアブクそで銭したなでぎりりゆうの錢廻りがいいもんだから、トカク銭の力で、八方袖の下撫斬流そでと来るから受けきれねえ」

勝安房守が二条城で任官して後のこと、近藤勇と、土方歳三の二人が、慷慨淋漓こうがいりんりとして、二条城の天主台の上に立つて、洛中洛外の大観を見澄ましておりましたが、やがて近藤が言うことには、

「どうだ、土方、おれに十万石を与えれば、ここにいて天下を定めてしまおうが、あつたら城に主がないなあ」

そうすると、土方がこれに答えて、

「あえて十万石とは言わない、五千の兵を与えれば、イヤ、五千とも望むまい、二千の精兵を与えれば、天下のことを定めて見せるがなあ」

と言つて、両士は相顧みて慥然ぶぜんたるものがありました。

今、京中に於て、近藤勇の名は鬼の名と等しい。その実力は

ほぼ諸侯と等しいものがあるが、何を言うにも、二人は武州の一塊の土民の出であつて、譜代があるわけではない、羽翼があるわけではない、会津を背景にして、その配下僅かに二百人足らず、やがて会津が百万石になれば、近藤も十万石だ、などとのし上げるのは、取るに足らぬ沙すなの上の功名話で、会津どころか、徳川宗家そのものがあぶない今日、彼等とても、百万石や十万石の夢を見ながら請負仕事をしているわけではない。近藤勇としても、功名利禄以外に、やむにやまれぬ慷慨を感じているものがあるのです。

「織田信長もいけないよ、これほどの城を信忠に預けて、市中の本能寺あたりへ手ぶらで泊るといふことがあるものか、この城へ納まつてさえいれば、明智如きに齒が立つものではない、名将といえども運の尽くる時はぜひのないものだ、まして、名将

に非あらざる凡將に於てをや」

近藤がこう言いますと、土方がそれを受けついで、

「慶喜公も、ドツシリとここに納まって動かなければいいに、や  
やもすれば動きたがつて腰が据らない、悲しいかな、今の徳川  
に、この二条城へ坐りきれぬ人がいないのだ」

かくて二人は、しきりに天主台の上から、飽かずに洛中洛外  
の風景と、二条城の規模を見渡しておりましたが、

「京都に於ける二条の城と、江戸に於ける東叡山とは、形式が  
違つて立場は同じだ、この二条城を守りきれぬや否やで、京都  
に於ける徳川の勢力が決する、東に於ては、よし江戸の城が落  
つるとも、東叡山に於て徳川旗下の意気の死活が示されるのだ」  
と言いました。二人の慷慨の語気で察すると、この城を二人に  
任せる限り、幕府の社稷を死守してみせる意気込みは充分だけ

れども、その貫禄の備わらざることにじ、だんだを踏んでいるようにも見られます。且つまた、これだけの備えがあつて、人がないことを、三百年の徳川のためにも大息しているかのようにも見られます。

無名島に上陸した無名丸の乗組のうちに、書き漏らもされた存在として、柳田平治と、金椎キンツイとがあります。

柳田は、最初から駒井船長が、虫の好かない唯一の存在でありましたから、つとめてこれに近づこうとしない。そのくらいだから船中の誰もに親しみを持たないし、船中の誰もがまたどうも山出しのブッキラボウな青年で、且つ好んで長い刀をひねくり廻したりなどするものですから、気味を悪がつてのけ者あつかいにしている。ただ一人田山白雲にだけは親しみを持つも

のですから、田山と二人が、別棟をこしらえて、植民地に住むというような有様です。しかし、柳田は田山ほどに世界を知らないし、また超世間の美術に没頭するという術すべを持たないから、田山のために写生旅行の助手をつとめようという気にもならず、黙々として働くだけを働き、その合間には、長い刀を振り廻して、居合の独り稽古ひとをしているだけのものです。

柳田がすっぱ抜きをしているところへ、白雲が通りかかると、それに引き入れられて、同じように居合を試みてみたり、それが嵩こずると、真剣で型を使ってみたりするのでありますが、また時としては真剣や白刃を取らずに、素手でやわらの乱取りらんどを試むることなどがあります。ちょうどその場へ七兵衛が来合わせた時などは、非常な興味を以てながめていることもありすが、武術にかけてはさしもの田山白雲も、この青年をあしらい

兼ねているのであります。

そこで、七兵衛が思いつきました。今後、一週に二三回ぐら  
いずつ、この青年を指南役として、島の人のすべてに武芸を仕  
込んで置けば、なにかの役に立つ。そう思つて、そのことを田  
山白雲に相談すると、白雲は直ちに同意し、柳田平治も、好き  
な道であり、自分も練習になるから、異議なくこれを引受けて、  
早くもこの島に、一箇の武術道場が出来上るといふことになり  
ました。

今日は大へん暑いものですから、田山白雲と、柳田平治は、一  
番、泳ごうではないかと言つて、海へ飛び込みました。二人と  
も、水練は達者です。さんざんに泳いで陸へ上り、裸のまま  
砂ツパに寝ころんで話をはじめました。

「田山先生、日本はこれからどうなるのです」

「そうさなあ、今頃はどうなってるかなあ、西と東にわかれて、戦争でもおっぱじめていはしなかなあ、わからんなあ」

「日本で東西が争うとなると、どっちが勝つのですかねえ」

「それもわからんなあ、日本にいとそういうことにすてきに気がもめたが、こうして大海へ乗り出して来てみると、そんな気がカラリとしてしまうのは不思議だね」

「田山先生、あなたはもう日本へ帰らないのですか、帰りたく思いませんか」

「帰らないと断言はできないねえ。しかし、ここまで乗り出して来た以上は、こつちで相当成功して、向うの妻子をこつちへ呼び寄せたいという希望の方が先だねえ。だから、この無人島が永住の地だとも思っていないよ、ここへ足がかりが出来たら、この先の方には大陸があつて、そこには日本よりも何倍も開け

た国があるのだから、そつちへ行つて、第二の山田長政となることも愉快だと思つてゐる」

「僕も、そういうことを考えています、僕はそんな開けた国よりも野蛮人のウンといるところへ行つて、そいつらをみんな征服して、王になりたいです、こんな無人島では物足りないです」  
こんな話をしていたが、やがて、むつくりと跳び起き、裸のまま二人は椰子林の中を歩き、己おのれの小屋へと帰りに向つたが、椰子の林の中のとある木蔭に、小さな人影が一つ、うずくまつてゐるのを見ました。

「ああ、金椎だ」

と言つて、二人は遠のいて避けて通るようになしましたけれども、避けなかつたところで、相手は気がつくはずもなかつたのです。  
「相変らず、イエス・キリストを信じてゐるよ」

と田山白雲が言いますと、柳田平治が、  
「ちえッ、キリシタン！」  
と、嘸<sup>か</sup>んで吐き出すように言いました。

## 後註

- 一 「こちら」は底本では「これら」
- 二 「画像」は底本では「面像」
- 三 「親方」は底本では「親分」
- 四 「ど」は底本では「で」
- 五 「それに、」は底本では「それに」
- 六 「直接」は底本では「直後」

大菩薩峠 椰子林の巻

底本：「大菩薩峠 20」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 9 月 24 日第 1 刷発行

2002（平成 14）年 2 月 20 日第 2 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 十二」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※疑問点の確認にあたっては、「中里介山全集第十二巻」1971（昭和 46）年 7 月 30 日発行を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2004 年 5 月 20 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。